

発行能楽の友社

名古屋市千種区千種2丁目18-18

(郵便番号 464-0858)

電話 (052) 731-7984

FAX (052) 733-2837

振替口座 00800-6-36393

購読料 1年 1100円

郵送の場合 1年 1800円

一部 100円

NHK放送予定(平成20年1月~2月)

◆NHK-FMラジオ能楽鑑賞(毎週日曜日7時15分~8時)

- 1月27日 野村又三郎さんをしのんで
2月3日 素謡「蘆刈」(観世流)山本順之ほか
2月10日 素謡「百万」(宝生流)三川淳雄ほか
2月17日 素謡「屋島」(観世流)岡久広ほか
2月24日 素謡「郎那」ほか(再放送)(宝生流)
當山孝道ほか

◆NHK教育テレビ

- 1月27日(午後3時~5時)
能「芭蕉・蕉鹿」(金春流)

演能カレンダー

名古屋能楽堂

(能・狂言演能関係)
(Tel 052-231-0088)

- [平成20年1月]
27日(日) 名古屋宝生会定式能 (有料)
[2月]
2日(土) 青陽会定式能(番組②面)(有料)
10日(日・休) 名古屋観世会定例公演(番組②面)(有料)
11日(月・祝) 富 耀 会 (無料)
[3月]
15日(土) 壺 泉 会 大 会 (無料)

能楽の友



能楽協会名古屋支部による平成20年度の演能予定は次のとおりである。
○名古屋能楽堂定例公演
「尾張の殿様が見た能」演じた

定例公演・若鯨能など
能楽協会名古屋支部主催
平成20年の演能予定

新年謡初式

能楽協会名古屋支部(梅田邦久支部長)は一月三日午前十時半から恒例の新年謡初式を名古屋能楽堂で開催、梅田支部長の発声につづいて「四海波」を同吟し、平成20年の門出を祝した。
ひきつづいて、同能楽堂会議室で新年臨時総会を開き、平成十九年の事業、会計報告を行い、さらに平成20年度の事業、演能予定について審議が行われ、提案どおり決定した。

能楽協会名古屋支部

- 6月5日(木) 午後6時半開演
7月6日(日) 午後2時開演
9月7日(日) 初秋能・2部制
第1部 午前10時開演
第2部 午後2時開演
10月31日(金) 午後6時半開演
12月7日(日) 午前10時半開演
1月3日(土) 午後2時開演
3月7日(土) 午後2時開演
○中学生能楽鑑賞会
●名古屋能楽堂
7月2日(水)・3日(木)
午前9時半と午後1時半始
●豊田能楽堂
7月30日(水)・31日(木)
宝生流▽8月1日(金) 観世流▽
8月5日(火)・6日(水) 喜多
流▽8月7日(木) 観世流
○若鯨能(能楽後継者育成会および協会の若手の研究会)
6月14日(土) 午前・午後の2部制

謹賀新年

名古屋観世会

能「道成寺」(シテ井戸良祐、ワキ福王茂十郎、ワキツレ喜多雅人、永留浩史、笛・赤井啓三、小鼓・清水皓祐、大鼓・山本哲也、太鼓・上田悟、間・善竹忠一郎、善竹隆平、後見・梅若吉之丞ほか。地謡・大西智久、梅若善高、上野朝義、大西礼久、水田雄皓、

大阪

観世流シテ方・故井戸良造師の二十三回忌追善会として、今春4月20日(日)、能「道成寺」が大坂能楽会館で公演される。主催/井戸和男氏、後援/梅春会、協力/梅猶会。

井戸良造師23回忌追善
能「道成寺」上演
4月20日 大阪能楽会館

○小牧市新能(第4回)
9月14日(日)
○親子能楽教室
8月5日(火)・6日(水)
主な予定は以上のようなものであるが詳細は例年のように決定していく予定。

加賀宝生の名品選Ⅲ

金沢能楽美術館特別展

金沢能楽美術館(金沢市広坂1-2-25)は、同館特別展として、「加賀宝生の名品展Ⅲ」を1月16日から4月20日まで開催している。同企画は「名品展Ⅱ」につづくもので、金沢能楽美術館のコレクションから「加賀宝生」と名高い金沢ならではの優れた能面・能装束が展示される。

謹賀新年

観世清和

幽謳会
片山九郎右衛門
清司

大槻清韻会
大槻文蔵

鳳鳴会
武田友志
武田志房

幽花会
片山慶次郎
伸吾

名古屋観衛会

山本勝一
山本博通

大西智久

梅猶会
梅若吉之丞

名古屋観世九皇会
観世喜之
観世喜正

壺泉会
泉嘉夫

怡楽会
山階彌右衛門

観芳会
観世芳伸

邦謡会
梅田邦久
清田一
須田政久
本田嘉美
今田和宏

〒466-0033 名古屋市昭和区台町二丁目十六番五
電話(052)841-1463

青陽会定式能(第52期)

二月二日(土) 十一時開演
名古屋能楽堂

能組

狂言 蛸 牛 鹿島 俊裕 今枝 郁雄 友彦 後見 井上菊次郎

能 千手 前野 郁子 高安 勝久 寛原 龍一 大野 誠

能 通小町 八神 孝充 久田 勘助 相元 正樹 後藤 嘉津幸 藤田 六郎兵衛

能 葵 三村 徑布 久田 三津子 杉江 元 河村 総一郎 船戸 昭弘 鬼頭 義命

能 仕舞 兼平 西王母 黒田 博 清沢 一政 梅田 邦久 地謡 松山 幸親 祖父 江修一 梅田 嘉宏

能 雲林院 雲林 院 七 加賀 敏彦 地謡 梅田 嘉宏

能 附祝言 後見 前野 郁子 地謡 星野 路子 加賀 敏彦 須部 孝充 古橋 正邦 武田 大志 祖父 江修一

〔有料〕当日券三〇〇〇円 学生一五〇〇円 入場券はチケットぴあ(0570)019999 (Pコード七八五〇五〇)、及び各出演者宅 問合せは名古屋名東区一社三の六一二 久田 勘助 方 〇五二七〇五一五八五

名古屋観世会定例公演能

二月十日(日) 十二時半始
名古屋能楽堂

能 葛城 親世 清和 福王 知登 河村 眞之介 助川 治 大和舞 喜多 雅人 大倉 源次郎 藤田 六郎兵衛

能 神歌 親世 芳伸 千歳 武田 大志 地謡 梅田 嘉宏 小島 一英 梅田 邦久 久田 勘助

素謡 神歌 親世 芳伸 千歳 武田 大志 地謡 梅田 嘉宏 小島 一英 梅田 邦久 久田 勘助

主催 壺 泉 会

狂言 鶯

後見 武田 邦弘 地謡 八神 孝充 古橋 正邦 片山 清司 加賀 敏彦 山階 彌右衛門 清沢 一政 久田 勘助

能 景清 高安 勝久 河村 総一郎 竹市 学 福井 四郎兵衛

能 附祝言 後見 小島 一英 山階 彌右衛門 地謡 須部 孝充 祖父 江修一 武田 大志 片山 清司 梅田 邦久

主催 名古屋観世会 (終演四時半頃) 事務所は名古屋市昭和区台町2-116-15 TEL/FAX 052-841-4632 (枚数制限あり、売り切れになることもあり)

富 耀 会

二月十一日(月・祝) 午前十時三十分始
名古屋能楽堂

舞囃子「高砂」ほか二十番、連調、居囃子など

主催 富 耀 会 柳 原 富 司 忠 連絡 電話 052-832-1031

壺 泉 会 大 会

三月十五日(土) 午前九時三十分
名古屋能楽堂

素謡 神歌 泉 嘉夫 千歳 黒田 博 地謡 泉 泰孝ほか

能 竹生島 加藤 春枝 旭 杉江 元 河村 眞之介 加藤 洋輝 高安 勝久 梅田 邦久 柳原 富司 藤田 六郎兵衛

素謡 藤戸・鸚鵡小町・安宅ほか 舞囃子 養老水波之伝・采女・融ほか

主催 壺 泉 会 名古屋市昭和区山手通三-181-2 瑞光ハイウツ三〇六 電話 〇五二一八三二一三五



井上 嘉介
井上 裕久

〒603-8175 京都市北区紫野下鳥田町六

藤井 徳三

大垣 浦声会

稽古場 大垣市伝馬町大垣別院 電話(〇五八四)七三三三六二

〒606-0804 京都市左京区下鴨芝本町五八 電話(〇七五七)八一七三〇

久田 観正会

久田 勘助 松月 会 久田 舜一郎 松月 会 前野 郁子 松月 会 松野 幸路 子親

〒465-0083 名古屋市中東区一社3-162 電話(〇五二七)〇五一五八五

梅若修一

名古屋修諷会

梅春会 井戸 良祐男

〒545-0004 大阪市阿倍野区文の里3-16-17 電話(〇六)六六二二-二二一九

春 鶯 会 梅若善高

〒560-0084 豊中市新千里南町三丁目18-12 電話(〇六)六八三一-七八五四 東京都杉並区高円寺南4-27-7 903 電話(〇三)三三三三-二一〇五七〇

松音会 泉 泰孝

〒168-0081 東京都杉並区宮前四-19-14 電話(〇三)三三三三-二八八〇番

下田 雄三

豊中市曾根東町四-11-12

泉 雅一郎

〒201-0002 東京都狛江市東野川四-16-18 電話(〇三)三四八八-四八五番

雄諷会中部地区連合会 名古屋和 岐阜花 会 会 会

名古屋淡交会 橋岡 慈観

三 交 会 久田 三津子

〒465-0083 名古屋市中東区一社3-162 電話(〇五二七)〇五一五八五

武田 諷楽会 武田 邦弘 武田 欣司 武田 大志

財団法人 鎌倉能舞台 中森 貫太 中森 晶三

初陽会 武田 宗和

〒162-0067 東京都新宿区富久町40-4 電話(〇三)三三三三-五九二七八三

橋岡会 橋岡 久太郎

坪内 芘路之 荒木 友三郎 島田 岸 山岸 下 小宮 出年 塚田 田 吉田 重章 松原 章 半澤 美 宮内 健 山岸 登

栄能楽舞台

名古屋市中区栄五-16-14 電話(二六)二二-一八三番

彰 諷 閣

名古屋市中区植田西二-18-02-12 電話(〇五二)八〇五-1330-1 連絡先 安城市三河安城東町1-7-3 グレイシヤスピラ安城 電話(〇五六)七七八三-四一



故野村又三郎氏告別式場

狂言和泉流

野村又三郎氏逝く

12月14日告別式執行

和泉流狂言方・野村又三郎氏は十二月十二日、脳腫瘍のため逝去、享年八十六。通夜は十四日、告別式は十五日に名古屋千種区千種町のいぢやなぎ中央斎場で執り行われ、能・狂言関係はじめ各界から多数の会葬で盛儀であった。喪主は長男・野村小三郎氏。故野村又三郎氏は一九二二年(大正十年)十一世野村又三郎信英の三男として東京に生まれる。本名・信廣。野村派野村家は、江戸

に貢献した。昭和三十九年から東西の名手を招いて催す狂言会「狂言やるまい会」を催し、名古屋で50回、東京で20余回開催して新風をもたらした。晩年は狂言の「毘沙門風流」、「狸腹鼓」などの復曲上演にも取り組み、初孫とともに「三代狂言鞍轡」を上演、情熱をこめた枯淡の芸風が親しまれ、子弟の育成にも力を尽くした。昭和五十七年度芸術祭で優秀賞受賞、昭和四二年から重要無形文化財総合指定、平成四年勲五等双光旭日章受章、平成十二年法政大学による催花賞受賞、本紙「能楽の友」の創刊(昭和四一年)以来、編集同人として刊行に尽力された。謹んでご冥福をお祈りする。

戦後名古屋能楽史

〔第十九章〕

竹尾 邦太郎

昭和四十年(一九六五)

一回金春会を催し、一切の世話をす。生活費は、造船所事務員として月給をうける。そのような取りまごめをしてから二人で京都へ出た。京都祇園の武智さんの別宅に行くと、出て来た婦人を見て私はびびりた。二月ほど前、「角田川」のあった夜、宴会があり、京都から藝妓が四、五人来ていた。そのうちの一人が現われたのだから「武智さんの手廻しのいいのには感嘆した。」(道雄自伝抄、十一より抜粋、以後の稿も同様)

私達一家が京都に着いたのは昭和二十年三月十八日であった。片山九郎右衛門さんと茂山千五郎(現・千作)さんが探してくれた家に行く、もう荷物が着いていた。驚いたことには近所は空襲ばかりになっていた。東京につづいて大阪が空襲され、今度は京都だと京都の人達はおびえて、どんどん山の方へ疎開していた。私も京都着早々におびやかされ、武智さんと相談して、家族達を奈良の大宇陀の松山町に疎開させることにした。武智さんの奥さん、お嬢さん方も一緒に藤井という家に同居した。

助さん、金春光太郎ファンの武智鐵二さん、二人が別々に催しをしてきた。戦時中は二つが対立したかたちで何ともまじりかた。しかし、東京から優れた囃子、ワキを呼んで良い能を観たいという考えの点では共通していた。私は光太郎さんの能の一切を世話をするという事で武智さんから生活費の支給を受けていたが、金太郎の世話にも当らなくてはならない。どっちにしても、まずワキ、囃子方を京都へ来てもらうよう交渉することが必要であった。松本謙三君は富山の井波というところに兄さんがいるので、そこへ疎開していた。桜間金太郎は軽井沢にいたので、手紙で打合わせして熊谷の駅で会って、京都へ来てくれるように頼んだ。幸祥光さんも軽井沢にいたので、金太郎の方から交渉してもらった。

承前 桜間道雄(二八九七―一九八三) 四月(昭和十九年)になって武智鐵二さんの主催で、家元の金春光太郎(八条)さんの「角田川」をやるから加勢に来てくれと三宅襄を通じて話が合った。武智さん、片山九郎右衛門さん、坂東寅助(現・三津五郎)さん、それに鴻池の次男坊、四人の集りの断絃会が主体という話であった。このときの「角田川」がたいへん評判が良かった。武智さんがすっかり気に入って、光太郎氏の後援者となつたわけである。光太郎を奈良に引込ませておくのは惜しい。何とかして京都で毎月能を舞わせたいという武智さんの希望で、私に縁の下の力持ちになって家元のために働いてくれなにかという相談があった。



昭和十九年の七月に大阪の北浜にある武智造船所の事務所を尋ねて、最終的相談が出来た。私は一家を引き連れて京都に住み、毎月



- 笙月会 中川 雅章
賀水会 桑名賀水会 名鉄百貨店友の会 加賀敏彦
松盛会 小松勝憲
松舞台 松舞台 三重県桑名市西別所一〇六一の五 TEL・FAX(〇五九四)三三四五八二
洗心会 奥村 富久子
観修会 祖父江 修一
猶惠会 熊沢 惠美子
幸謡会 近藤 幸江
千早会 八神 孝充
恵謡会 三村 徑布
桜月会 加藤 春枝
宝生流 宝生 英照
近藤乾之助
名古屋巽会 豊橋 巽会
辰巳満次郎
佐野 由於
倉本 雅
恵美寿会
衣斐正宜
衣斐正宜後援会
松野恭憲能の会
松野 恭憲
宇高 通成
金剛流 名古屋周星会 岐阜周星会 吉川 周子
廣田鑑賞会 廣田 陸一 廣田 幸稔
菊之会 菊田 泰三 廣田 泰能
豊嶋能の会 豊嶋 三千春
廣田鑑賞会 廣田 陸一 廣田 幸稔
金剛流 名古屋周星会 岐阜周星会 吉川 周子
松野恭憲能の会 松野 恭憲
宇高 通成
金剛流 名古屋周星会 岐阜周星会 吉川 周子

(3)面よりつづき
 分ぐらい。二十軒ほどの村があつて、亀井君はそのうちの軒にいた。この日、亀井君一家は大喜びで歓迎してくれ、一泊、翌日同行して京都へ帰った。
 戦争中に、このメンバーで、三回能を催したように覚えていゝる。能が終つた夜、空襲警報があり、皆が宿を出て加茂川の河原で心配そうに空をあおいだこともあつた。
 私が村上栄之助さんに出会つたのは、昭和十三年頃で、金剛会のは、昭和十三年頃で、金剛会のは、あとで金太郎と二人料理と呼ばれた、それからの縁であつた。大変な金太郎ファンで、どのようにでも援助するから、金太郎の能の催しをしてくれという話であつた。ところが話が乗り過ぎて、中国に行つて能をやるから私にも来いと云われて決心しかね、この話を蹴つたので、その後まもなくしてしまつた。
 昭和二十年に武智さんに呼ばれて京都住まいになつてから、村上さんに会つたが、早速、金太郎の能の相談をうけた。そんなことで武智さんの催しと並行して金剛会ができた。もちろん、三役(ワキ、囃子、狂言)のメンバーも東京一流を希望されたので費用も高くついたが、村上さんは御機嫌だつた。戦時中、二つの会が続いたのを拙いと思つて、いろいろ考えた末、握手してもらつて金春会一本槍にするがよいとおもひ、両氏に相談すると、すんなり承諾された。光太郎家元と金太郎と二番の能を組むことで握手が出来たわけである。
 二十一年になると、金春信高(現・家元)さんも桜間龍馬(現・金太郎)も復員して帰つて来たので催したいへん楽になつた。
 武智造船所も終戦前に三菱かどこかに買取られ、私は九月になつて京都に下宿して来た。十一月に家族達が京都へ出て来たので、紫竹西南町、大徳寺の裏に家を持つたが、間もなく村上さんに誘われ、五条の村上商店の離れ家に移つた。
 戦時から終戦にかけて、能の催しは全国的にどこでも出来ない状態であつた。それを押しつけて京都だけ続けたのは、武智、村上両氏の徳である。殊に武智さんは能楽師を援助しつづけた。戦時中、武智造船所には十数人の能楽師が、会社員として手当を受けていた。
 武智さんが呼んだなかでも大物は川崎九淵さんで、ぜひ京都へ呼ばりたいという意向であつたので、私は川崎さん(そのとき秋田に疎開して居た)を説きつけて、東京へ出るか秋田に長くいるか迷つて居たのを、京都へ呼ぶことに成功した。川崎さんには、木屋町の大きな家の二階十畳二間が提供された。もちろん、武智さんの持ち家で、同じ下の室は山城少掾が住んで居た。「二階に川崎さんという人がいるそうだが、どういう方だ」と尋ねた。川崎さんは「下に山城というのがあるそうだが、何をやる人だね」と私に尋ねたことがある。これが半年も同家に住んだあとの話であるから、武智さんと大笑いをした。(自伝抄・十三)

金春光太郎さんが「関寺小町」を舞われたのは、二十二年十月十七日であつた。大部分の費用を武智さんが出された。会には喜多實、野口兼資、梅若實、同じく六郎さんが来られ、金剛殿さんの「翁」が九時始めなので、私と三宅義とは前の晩に金剛さんに泊り込んで朝六時起きで準備した。番組は次のとおりである。
 翁付キ
 高砂 金剛殿(先代)
 田村 梅若實
 関寺小町 金春光太郎
 通小町 野口兼資
 鷲 喜多實
 石橋 赤 桜間道雄
 白 桜間金太郎
 この能会は、終戦後はじめての大催しで、東京から観に来た人も多かつたようである。「関寺小町」の地頭を桜間金太郎が勤めたので、私も地頭に加わつた。(自伝抄・十四)「能・捨心の藝術」桜間道雄著 昭和四十七年五月二十日 朝日新聞社刊

「どうも利吉なんといふ名は酒屋の小僧みたいでいかんが、大伯父がつけてくれた名だから今まで大事にして来たんだが……もう変へてもよからう……」と、再起を期し、上洛をしほに九淵と改めたのでした。「父の言葉」より「一名大事に」
 京都に居りましたのは、昭和二十一年八月から二十五年九月まで、数年七十三歳から七十七歳までの四年間でした。
 京都での初役は先代の殿さんと「女郎花」の一調でした。この日の出がけに、当時階下に住んで居られた古親(豊竹山城少掾・一七八一―一九六七)さんの奥様が、わざわざ玄関まで出て来られて、父の肩のあたりでサツと切り火を打ち、「あんじようお勤めやして……」と見送つて下さいました。父は面はゆいやうな、嬉しいやうな顔をして、「ええ、ええ」と会釈し、表へ出て「向ふの方ではあ、いふことをするのだらうかね、翁なみだね」と、サツサツと歩いてゆくのでした。「父の言葉」より「切り火」
 俳句「秋田にて」のうちより
 うらなりの南風似たる鼓鼓哉
 立冬の雨に留守居やつくねんと
 嗟嘆野雪にうづもれ人まれなり
 「京都にて」のうちより
 七条の八百屋まで往く師走哉
 仁和寺の山門雨の八重哉
 調子牙えず卯の花腐し大つみ
 「俳句は旧作以外は秋田疎開以後のもので、十数句づつまとめて高浜さんに添削して頂きました。秋田では寒いと申して髯をはやして居りましたので、俳句は或る時は髯鼓、或る時は鼓髯として居りました」あとがきより。「おもかげ九淵閑話」川崎勝子編著 昭和三十六年十二月十八日 私家版

ちよつと東京からもお人を呼ばれたりして、古典芸能をいろいろやつたんですが、ほとんど費用も出されたんですから、あの時分武智さんがおられんなら、なにもでけしまへんでした。武智さんのお家はたしか淡路島の素封家だつたと伺つて居りますが、鉄工所や造船所をして居られて、桜間道雄さんもその造船所の事務かなにかしつて居られたのちがいますか。川崎九淵さんを京都に呼ばれたのも武智さんです。戦時中は、京都・大阪だけでなく、東京の方も武智さんにはえらうお世話になつたはず。『狂言85年 茂山千作』昭和五十九年四月二十七日 淡交社刊
 茂山千五郎(のちに四世千作・一九一九)
 武智さんは、戦中から戦後にかけて「断絃会」を催され、古典芸能の名人たちの芸を守つて居られた方です。御自分でも善竹弥五郎(當時は茂山)さんに狂言を習つておられ、狂言についても、なかなか詳しく居たのです。その頃は、扇雀さんや富十郎(當時鶴之助)さんなどを指導して「武智歌舞伎」をやつておられたので、狂言はまだ手がけておられませんでした。それで、大いに意欲を燃やされたのでしよう。飯沢さんに断つて、台本(「濯ぎ川」)に手を入れ、すっかり狂言風に直されました。何度もお稽古をしても居りました。何が、言い回しも動きも、昔からの狂言の演技でよろしい、新作をやると思ひやるな、ということでした。「千五郎狂言咄」茂山千五郎著 昭和五十八年三月一日 講談社刊

田鍋惣太郎(一八八四―一九七九)
 忘れもせぬ昭和二十年三月十八日の夜の空襲で私共の精魂こもつた殿堂である布池能楽堂は灰燼に帰し、同時に袋町と広小路にあつた私の家も二軒共焼失して終つた。東京の私の家は既に二月に罹災し、これ等三軒に分散してあつた楽器類、数百丁の小鼓・大鼓・太鼓・琴・三味線の類も悉く鳥有に帰してしまいました。茫然自失なす所もなく私は二十五日に中島郡勝幡に疎開いたしました。四月三日には京都金剛の舞台を勤める事になつていたので漸く氣を取り直して京都へ向いました。此時は喜多六平太氏が「田村」を勤める筈でしたが、列車延着の為不参で、金剛殿氏(先代)が代動せられ、私がお相手をいたしました。私は能に出演して居る間は、名古屋の焼けた事も、自分の家のなくなつた事もすべてを忘れて、芸の世界に没入する事が出来たのであります。京都の人々も私に深く同情してくれ、気晴しに毎月京都に来る様に云われ、それから毎月一週間か十日間京都に行く事になつたのであります。京都は空襲を受けなかつたので、能は二十年になつても休みなく上演され、見所はいつも満員だつたと当時の心覚えに書留めてあります。ただ汽車の切符を入手するのが困難で、当時武智鉄二氏が鉄工業をやつて居られたので、そのお世話でようやく切符を入手する事が出来たのであります。
 当時の京都へはワキの松本謙三、大鼓の亀井俊雄両氏が疎開しておられたので、私はこの方々と御一緒に出演しておりました。
 以下次号

年 新 賀 謹

<p>金 春 信 高 金 春 安 明 〒167-0041 東京都杉並区善福寺2-27-27 電話〇三六七六五六一四四番</p>	<p>本 田 光 洋 〒164-0002 東京都中野区上高田2-25-25 電話〇三三三八六二六四一番</p>	<p>春 敲 会 名古屋春楽会 金 春 穂 高 廣 瀬 瑞 弘 廣 瀬 雅 弘</p>	<p>伊勢金春会 宇 仁 田 吉 邦 〒516-0066 伊勢市八日市場町5-16 電話〇五九六〇五二九八</p>	<p>長 田 驍 後 援 会 〒514-2211 津市高野尾町三三五一-四六 電話〇五九二〇〇〇六九七番</p>	<p>喜多流 和 楽 会 和 谷 衡 市 〒516-0066 伊勢市中島二丁目26-12 電話〇五九二〇〇一五九番</p>	<p>喜多流 二 井 会 二 井 英 世 〒515-0073 松阪市殿町一四二二-三 電話〇五九二〇〇三三三番</p>
--	---	---	--	--	---	---

<p>福 王 茂 十 郎 知 和 登 幸 〒569-0817 高槻市桜ヶ丘北町11-25 電話〇七三六九四一五〇一七</p>	<p>高 安 勝 久 〒569-0817 高槻市桜ヶ丘北町11-25 電話〇七三六九四一五〇一七</p>	<p>西 村 同 門 会 飯 富 雅 介 杉 江 元 橋 本 宰 橋 本 宰</p>	<p>宝 生 欣 哉 〒569-0817 高槻市桜ヶ丘北町11-25 電話〇七三六九四一五〇一七</p>	<p>清 水 利 宣 〒569-0817 高槻市桜ヶ丘北町11-25 電話〇七三六九四一五〇一七</p>	<p>藤 田 舞 台 藤 田 六 郎 兵 衛 〒451-0041 名古屋市西区幅下2-10-9 TEL&FAX 〇五二一五七一六三四一</p>
---	--	--	--	--	--

◆昨年の舞台から(その一)◆

「名古屋 茂山狂言会」と「鳳の会」
「青陽会」「名古屋能楽堂定例公演」

竹尾邦太郎



鳳の会「墨塗」佐藤友彦・井上菊次郎
(杉浦賢次氏撮影)



鳳の会「班女」久田勤鶴
(杉浦賢次氏撮影)

「墨塗」訴訟落着いて帰国の途に就く大名シテ友彦、太郎冠者(靖雄)を伴い懇ろになつた女(菊次郎)の許へ暇乞いに行けば愁嘆場に。鬢水容れの水を付けて嘘泣きをする女に、盛大に貰い泣きする大名である。女の様子を見答め注意する太郎冠者に一顧だにしない大名も、水を墨に替えられて気が付かぬ女を見れば、流石に呆気に取られて太郎冠者と共謀、赤っ恥を掻かず魂胆から形見に「朝夕手馴れた鏡ぢや」とて鏡を手渡す段になつて後が怖くなり、互いに譲り合う辺りは笑つてばかりも居られない心理状態。男の純情を踏み

の欲を尽くしたあとの散会の寂しきは再び侘びの世界へ。
千作の「庵梅」は千五郎時代の平成四年九月十六日(73歳)、日本芸術院会員認定記念の特別狂言会に演じられ、その節は面(比丘尼)を掛けたと思うが、この度は米寿翁の直面、まこと直面も面のうち、と言わしめるに充分な曲趣に相応しい和やかな福相。直面は表情が自由な点、ともすれば俗に墮ちて卑しかりがちになると思うが、流石は伊達でない芸叡、素晴

が欲しかった。
後場はワキが従者(ワキツレ正樹)を伴い都へ帰る途次、野上ノ宿までの道行は省く。既に上洛してワキを尋ね、神々に祈誓し、狂奔するシテ、逸り、苛立ち、そして失意、の姿をみせるカケリは、へあら恨めしの人心や、でシヤルと、神に祈る胸のうちは真否の有り様をいうサシ・下歌・上歌を省き、放浪するシテを見答めるワキツレとの問答になる。「例の班女の扇は候」とワキツレに後生大事の扇の事を冷やかされ、ば、思ひ出されるは古歌に詠まれた秋扇のこと、正中、下居に独寝の淋しさは、閨の月を眺めん、と右上方に目を遣る孤愁。独寝の繰り返す述べるクリ・サシを省くと、此の度も直ぐ男心のつれなき、不誠実を語るクセ、へ我が夫の、と立

ち、へ欄干に立ち尽して、シテ柱に寄り添い、へ其方の空よ、と右手の扇を抱きか、える様に胸に当て、左へ遠く脇柱上を眺めると、ころ如何にも追慕の切なさ。へ音信を、とシヤルと上ケ端、へ(形見の扇)手に触れて、と扇を開き、へ団雪の扇も、で扇面に見入るところ(写真は扇への愛着も一入。その扇見たい、とのワキの申し出に、へ扇取る間も惜しきものを、と扇を懐中した上に、取られまいの心か、両手で胸を抱き締めるのも然もあんなを思わせた。(1時間7分)



鳳の会「花子」井上靖浩・佐藤融
(杉浦賢次氏撮影)

柱に縛る様に掴まり見送る感傷的なトメが胸に沁みだ。
重習と言ひ、氣取らず平明な舞台は千作の持味の自由闊達さ。力を付けた孫達との共演に満ち足りた温顔が印象的だった。(35分)

「三人かたは」有徳人(正義)が求人(正義)を募集すれば、博突で素寒貧になった一癖ありげな三人、それへ座頭(あきら)・覽(正邦)・唾(シテ七三三)に身を賣して応募、無事採用されれば留守居に各人は軽物蔵・酒蔵・鳥目蔵を預けられる。固より気心知った博突仲間(悪巧み)の酒の後は一勝負と早速酒蔵を開け、例によつて、つわもの交わりはへ頼みある仲の酒宴、も酣となる。倉に謡い舞う小舞、七三三・あきらの芸達者に伍して正邦が健闘。有徳人の帰宅に不意を衝かれて狼狽、役を取り違え右往左往する辺り、鬼ごっここの趣の稚氣、チームワークのよさである。(41分・9月28日・名古屋・茂山狂言会)

素つ恍けた千五郎がよい味。(21分)

新 年 賀 謹

幸友会 涛華能 福井良治 福井四郎兵衛	桂 後藤孝一 嘉津幸	富耀会 柳原富司 船戸昭弘 小鼓教室 名古屋市中区栄 朝日神社内 (丸善前)	飯島六之佐 〒920-0801 金沢市香林坊2-8-17 電話(〇七六)二二六-一四三四〇	大倉源次郎	河村総一郎 河村眞之介 〒466-0821 名古屋市昭和区前山町一丁目二三 電話(〇五二)七六一-四八八三	河村大 〒603-8303 京都市北区紫野下柏野町五九-一 電話(〇七五)四六二-四二一五	亀井俊一 保忠雄 実雄
------------------------------	------------------	--	---	-------	--	---	-------------------

呉竹会 寛 鋤一	谷口正喜 〒602-0915 京都市上京区中立売通室町西入 室町スカイハイツ610号	谷口有辞 〒520-0221 大津市緑町二四-二〇	青春流太鼓 青耀会 上田 悟 〒594-1133 和泉市青葉台2-17-25 電話(〇七二五)八五二-一 名古屋市中区栄5-6-4 栄能楽堂 電話(〇五二)二二六-一一八三	長生会 鬼頭義命 〒490-1333 愛知県稲沢市平和町城西137 電話(〇五六七)四一九六〇番	大蔵狂言会 大蔵 彌太郎 千太郎 基 誠 〒215-0027 神奈川県川崎市麻生区岡上438-1 TEL(〇四四)九八七-一一八七	茂山 千五郎 千三郎 千五郎 七五三
-------------	--	------------------------------	---	---	--	-----------------------------

(花子つづき)

歌に托して反芻するシテ、戻って座禪衾の下が山の神とは露知らず、こゝを先途とのろけにのろけ、拳句は言わでもの山の神の悪口雑言。浮気の非はシテにあるものの何故か痛快でも、調子に乗り過ぎた竹篋返しは直ぐ後、呆然と口を開け立ち尽すシテ(写真、靖浩、元氣一杯に勤め上々の披キ。既に披キの済んだ融機微心得た妻、初役ながら劇的な味を持ち味

の郁雄の緊張した一面をみせた太郎冠者、三者の調和のとれた好舞台だった。(1時間18分・10月14日・第四六回鳳の会)

【田村】シテ路子。前場、清水寺に仕える花守の童子が印象的。旅僧(ワキ正樹)の頼みに寺の来歴を語るシテ語も確りと、春宵一刻値千金、のワキとの連吟もよく、あらあら面白の、と自慢の桜を見てからおうとワキを誘(いざなう)ところ(写真、小柄な体付きもあって、見て、見て、と言

い出しかねないような無邪気で可憐な童子だった。(1時間16分)

【松風】亡き行平への執心は報われることのない恋慕の情。シテ松風・郁子、クセ中、上ヶ端あと、行平の残した形見の烏帽子・狩衣(舞台)では長紐を手にして、捨て、も置かれず、と捨て場所を探し倦ねるかに長紐を引きずり、スミへ行き掛つて、取れば面影に

立ち増り、でハッと思い留まるように愛しげに長紐を抱きか、えるところ、纏綿たる情緒に濃やかな心理描写、素晴らしい。物着あとは、松に行平の幻影を見たシテが、嬉しや、と駆け寄らんばかりの気配に、浅ましや、とツレ村雨・徑布に押し止められるところも(写真、シテの逸る気持とツレの惻隱の情がよく出ていた。(1時間40分)

【茶壺】梅尾で仕入れた茶が詰まる壺の荷縄の一方に肩を入れた

男が答えるその俣を復誦するスツバの抜け目なさ。一呼吸遅ればしても巧妙に立ち廻るスツバに母が明かず、所属の定まらない物は第三者が奪ってしまえ、とばかりに目代が奪ってしまえ、とばかりに分、恍惚した味の郁雄がよい。(26分・10月20日・青陽会)

【千鳥】酒代を溜めている主(アド融)、無神経にも太郎冠者(シテ靖浩)をまた酒屋(菊次郎)へ使いにやる。「嘘も手くろく手くろく、人を誑かすこと一度や二度

度は利きますが」と抗弁するシテも、御神事に酒は付きもの、と納得して出掛ければ、案の定、手こわい酒屋の嫌味。そこを口八丁手八丁のシテ、鮮やかに潜り抜けてまんまと相手を見せて得物を奪取する。涙ぐましい奮闘ぶりとは傍目には見えるが、なかに本人はゲーム感覚、といった印象、同情されるべき酒屋が等閑視され、糾弾されるべき太郎冠者が喝采される不条理、シテの個性が物を言った。(40分)

【松風・見留】シテ松風・邦久、ツレ村雨・修一、しっとりした連吟の雰囲気は、初回(邦弘・勘助ら)へ影恥かしき我が姿、と面を伏せ羞じらいをみせ、二ノ同(寄せては、とスツツと前へ、へ帰るかたを波、と小さく退り波の表情をみせ、へ芦辺の田鶴こそは、と右へ面使ヒ、へ更け行く月、を眺めるところ、など、そぞ

【訂正】本紙前号「NHKテレビ放送案内」のうち、1月26日能「芭蕉」とあるのは、1月27日の誤りでした。お詫びして訂正します。



青陽会「松風」前野郁子 青陽会「田村」星野路子・梶元正樹 (杉浦賢次氏撮影)

ま、道に酔臥の男(アド融)、よき得物と許りにスツバ(シテ郁雄)は、もう一方の荷縄に肩を入れ、茶壺の所有権を主張して譲らない。目代(友彦)が中に入つて裁こうとするが、目代の問いに



名古屋能楽堂定例公演「松風」梅田邦久 (杉浦賢次氏撮影)

見詰める姿(写真)が美しい。物着の前、烏帽子・長紐がシテの手に渡る際スムーズでなかったのは残念だが、舞は端麗、小書で破ノ舞のトメに一ノ松へ抜け、勾欄に寄ると左手の扇を翳して松を見込み、地で戻ると、我が跡弔ひて、と正中下居ワキに合掌、へ暇申して帰る波の音、を六ツ拍子に踏み、地のうちに一ノ松へ抜ける

と左袖返して再び松を見込み、地を残り幕へ入るを、ワキ僧・雅介は常座へ出て見送り、松へ向き返るとと拍子を踏まないでトメになった。(1時間41分・10月26日・名古屋能楽堂定例公演)

名古屋能楽堂10周年記念 愛好者社中会が熱演 30グループが参加盛会

市民、愛好者の熱意ある要望が実現し、平成9年に名古屋能楽堂が完成してから開館十周年を迎え、一般の能楽愛好者を対象に、昨年12月14日、15日の2日間にわたり「名古屋能楽堂開館10周年記念・市民能楽大会」が開催された。主催は、能楽協会名古屋支部、名古屋文化振興事業団(名古屋能楽堂、名古屋市)。出演は、朝日カルチャーセンター、壺泉会、みどり野会、橋北公民館、松韻会、和楽会、翠謡会、楽誦会、葵会、輝謡会、名古屋和謡会、岐阜花謡会、拍悠会、犬山城敬道能楽会、犬山市立犬山中学校、誠誦会、犬山土木会、恵謡会、幸謡会、長袖会、中日文化センター、幸友会、名古屋秀麗会、伝統文化子とも能楽教室、呉竹会、七彩会、玉兎会、聚楽会、菱宝会、トヨタ自動車謡曲部の各会、グループ。舞囃子、素謡、仕舞、連吟、独吟、独調、連調など日頃の精進の成果を披露して能楽堂の十周年を飾った。

お出かけワイクシヨツプ

名古屋文化振興事業団、能楽協会名古屋支部主催による「名古屋能楽堂(能楽)お出かけワイクシヨツプ」が守山・北文化小劇場で開催される。能面をつけて歩いたり、笛・小鼓・大鼓・太鼓に触って音を出したり、謡や仕舞の演習も行われ、装束、能面、作り物のミニチュアの展示もある。ワークショップの最後には、能楽師の先生による実演があり、金婚式や銀婚式を迎えられる地元の方(開催区に住む夫婦5組、別途募集)を招いてお祝がなされる。家族や友達同士で誘い合わせ、参加を歓迎している。

とき 2月16日(土) 13:00、15:30 守山文化小劇場
2月17日(日) 13:00、15:30 北文化小劇場
講師 能楽協会名古屋支部会員 定員 各100名
参加費 500円(白の靴下を1足持参)
申込み ハガキかFAXで参加を希望する文化小劇場へ(抽選)1月25日(金)締切(消印有効)
守山文化小劇場 守山区小幡南1-24-10 TEL052-796-1821 FAX052-796-1822
北文化小劇場 北区志賀町4-60-31 TEL052-910-3366 FAX052-910-3367



愛好者による素謡の上演

【訂正】本紙前号「NHKテレビ放送案内」のうち、1月26日能「芭蕉」とあるのは、1月27日の誤りでした。お詫びして訂正します。

【訂正】本紙前号「NHKテレビ放送案内」のうち、1月26日能「芭蕉」とあるのは、1月27日の誤りでした。お詫びして訂正します。

年 新 賀 謹

<p>茂山忠三郎 茂山良暢</p> <p>千606-805 京都市左京区北白川東小倉町28 電話075(770)2111 FAX075(770)2113</p>	<p>狂言共同社</p> <p>井上菊次郎 佐藤友彦 大野弘之 佐藤野 井上藤 今上靖 今枝郁雄 今島俊政 鹿島政行</p> <p>千466-088 名古屋市中区昭和区滝川町54 サンハウス滝川3D 井上芳 電話052-8334-8607 FAX052-8334-8607</p>	<p>鳳の会</p> <p>林和利 井上菊次郎 佐藤友彦</p>	<p>朝日カルチャーセンター 囃子教室</p> <p>小鼓 後藤孝一郎 丸栄スカイル10階</p>	<p>ウシマド写真工房</p> <p>牛窓正勝 雅之</p> <p>千602-881 京都市上京区北野上七軒 TEL075(461)1341 TEL075(461)1341 FAX075(461)1341</p>
--	--	--	---	--

<p>能楽の友社</p> <p>楽 調 庵 舞 台</p> <p>ご連絡は 名古屋市中区川名山町一〇五 電話(八三三)三四九一番</p>	<p>喪中につき 年賀欠礼いたします</p> <p>上田観正会 能楽堂 上田観正会 TEL078-691-1544 六九一-1544</p>	<p>大 公 拓 貴 弘 介 威 司 弘</p>	<p>野村小三郎</p> <p>野村小三郎</p>	<p>松田高義 野口隆行 奥津健太郎</p> <p>千490-001 名古屋市中区平和一〇二-14 電話052(350)7971 FAX052(350)7972</p>
--	--	------------------------------	---------------------------	--

株 大阪能楽会館
千530-005 大阪市北区中崎西2-3-17

発行能楽の友社

名古屋市千種区千種2丁目18-18
(郵便番号 464-0858)
電話 (052) 731-7984
FAX (052) 733-2837
振替口座 00800-6-36393

購読料 1年 1100円
郵送の場合 1年 1800円
一 部 100円

能楽の友

NHK放送予定(平成20年2月~3月)

- NHK-FMラジオ能楽鑑賞(毎週日曜日7時15分~8時)
2月24日 素謡「邯鄲」ほか(再放送)(宝生流)
3月2日 素謡「隅田川」(親世流)
3月9日 素謡「忠度」(金春流)
3月16日 素謡「藤戸」(金剛流)
3月23日 素謡「野宮」(再放送)(宝生流)
3月30日 狂言「昆布売」(和泉流)野村小三郎ほか
狂言「犬山伏」(和泉流)井上菊次郎ほか

演能カレンダー

名古屋能楽堂

(能・狂言演能関係)
(TEL 052-231-0088)

- [3月]
8日(土) 名古屋能楽堂定例公演 (番組①面)(有料)
9日(日) さわってみよう能の世界
11日(火) 野村萬斎・野村小三郎 二人狂言の会
15日(土) 壺泉会大会 (番組①面)(無料)
16日(日) 名古屋宝生会定式能 先代宗家追善能
23日(日) 幸謡会 (番組②面)(無料)
[4月]
6日(日) 邦謡会桜能 (有料)

豊田市能楽堂開館10周年記念公演

源氏物語の世界

4月13日 能「葵上」と語り

産業文化交流都市をめざす文化の新しい殿堂として、「豊田市能楽堂」が平成10年に誕生してから十周年を迎え、きたる四月十三日(日)開館十周年記念公演、能と朗読・語りによる「源氏物語の世界」(原典と能と)が上演される。午後2時開演(午後1時30分開場)

春季菊之会

3月9日 金剛能楽堂

番組は、第一部は平野啓子氏による、源氏物語「葵」の解説と原文との語り。当日はプログラムに原文と人物の相関図などを掲載。第二部は能(金春流「葵上」)シテ金春安明、ツレ鬼頭尚久、ワキ福王茂十郎、ワキツレ福王知登、アイ野村小三郎、笛・竹市学、小鼓・後藤嘉津幸、大鼓・河村真之介、太鼓・鬼頭義命

故宝生英雄宗家しのぶ 名古屋宝生会追善能 3月16日、能3番上演

名古屋宝生会は、三月十六日(日)、宝生会定式能にあたり「宝生流十八代宝生英雄宗家十三回追善能」として上演する。演能は、能「清経」(シテ宝生)

里の斑鳩ロマン 能桜祭 4月6日能「雪」上演

能楽金剛流發祥の地・斑鳩では「太子ロマン」の斑鳩の里「桜祭能」が平成10年から催され、今年一回目をむかえ、きたる四月六日(日)斑鳩町・いかるがホールで「桜祭能」が催される。主催は斑鳩町観光協会・奈良金剛会。

名古屋能楽堂演能案内

名古屋能楽堂定例公演

三月八日(土) 午後二時始
名古屋能楽堂
(尾張の殿様が観た能 十四代・徳川慶勝)

狂言 腰折 祖父傳 井上菊次郎 山伏 佐藤友彦 太郎冠者 鹿島俊裕
(和泉流)

能 融 久田勘助 高安勝久 河村真之介 鬼頭義命 柳原富司忠 藤田六郎兵衛
(親世流)

入場料:前売一般 三五〇〇円(当日四〇〇〇円)
学生前売 二〇〇〇円(当日二五〇〇円)
取り扱い所:名古屋能楽堂(052-231-0088)
チケットぴあ 0570-02-9999
市内プレイガイド、ナディアパーク8階P.G. (052-265-2015)

野村萬斎・野村小三郎 狂言の会

三月十一日(火) 午後一時始
名古屋能楽堂

対談「過去・現在・未来」 二世 野村萬斎 四世 野村小三郎
狂言 隠狸 太郎冠者 野村萬斎 主 高野和意 後見 野村小三郎
挨拶 国際ソロプチミスト名古屋会長 江崎恵子

素謡子 水波之伝 大鼓 河村真之介 太鼓 加藤洋輝 小鼓 後藤嘉津幸 笛 竹市学
狂言 金岡 巨勢金岡 野村小三郎 妻 佐藤融 後見 伴野俊彦 地謡 野口隆行 藤波徹 奥津健太郎

「チャリティー公演につき 臨時会員券六千円」
問い合わせ先 052-841-2692 (終了予定 午後三時頃)

壺泉会大会

三月十五日(土) 午前九時半始
名古屋能楽堂

素謡 神歌 泉 嘉夫 千才黒田 博

能 竹生島 ツレ 加藤春枝 杉江元 河村真之介 加藤洋輝 シテ 吉沢 杉江元 柳原富司忠 藤田六郎兵衛 後見 大槻文蔵 地謡 黒田正泰 泉雅一郎 赤松禎友 鶴八神孝博 齋藤信隆 克彦 山本邦久 正人

仕舞 弱法師 泉 嘉夫 大槻文蔵 大坪由紀子 藤戸 泉 嘉夫 大槻文蔵 大坪由紀子 伊藤洋子 黒田正泰

素謡 弱法師 乾 昌博 大坪由紀子 藤戸 長谷川惇雄 伊藤洋子 黒田正泰

仕舞 玉之段 不破麻佑子 高橋典子 笠之段 高橋典子 養老 内藤悦子 河村真之介 柳原富司忠 藤田六郎兵衛 加藤洋輝 巻 水波之伝 加藤華絵 河村真之介 後藤孝一郎 鹿取希世

素謡 鉢木 高橋典子 古在由邦 中川真澄 杉浦まり 倉田一郎 内藤悦子

仕舞 難波 橋進 西行桜ヶ 峯ゆき 采女 大坪由紀子 河村真之介 後藤孝一郎 鹿取希世 融 石川晴子 後藤孝一郎 鹿取希世

素謡 鸚鵡小町 嶋田都彌子 八神孝充

仕舞 源氏供養 下川勢津子 花月 杉浦まり

舞囃子 船弁慶 寛一 菊慈童 黒田正泰 寛一 黒田正泰 寛一 黒田正泰 寛一 黒田正泰

仕舞 安宅 泉 泰孝 泉 泰孝 泉 泰孝 泉 泰孝

舞囃子 船弁慶 寛一 菊慈童 黒田正泰 寛一 黒田正泰 寛一 黒田正泰 寛一 黒田正泰

仕舞 安宅 泉 泰孝 泉 泰孝 泉 泰孝 泉 泰孝

舞囃子 船弁慶 寛一 菊慈童 黒田正泰 寛一 黒田正泰 寛一 黒田正泰 寛一 黒田正泰

仕舞 安宅 泉 泰孝 泉 泰孝 泉 泰孝 泉 泰孝

舞囃子 船弁慶 寛一 菊慈童 黒田正泰 寛一 黒田正泰 寛一 黒田正泰 寛一 黒田正泰

仕舞 安宅 泉 泰孝 泉 泰孝 泉 泰孝 泉 泰孝

舞囃子 船弁慶 寛一 菊慈童 黒田正泰 寛一 黒田正泰 寛一 黒田正泰 寛一 黒田正泰

仕舞 安宅 泉 泰孝 泉 泰孝 泉 泰孝 泉 泰孝

舞囃子 船弁慶 寛一 菊慈童 黒田正泰 寛一 黒田正泰 寛一 黒田正泰 寛一 黒田正泰

仕舞 安宅 泉 泰孝 泉 泰孝 泉 泰孝 泉 泰孝

「御来場歓迎」

朋の会「鉄輪」

第9回五色の会上演

朋の会（金剛流シテ方・羽多野良子師主宰）は、「五色の会」能を観る「タイトル」で、毎年花朋会歌舞台（岡崎市大西町奥長入47の4）で演能を行っているが、昨年12月23日（日・祝）第9回公演として能「鉄輪」が上演され、会場いっぱい熱心な観能者がつづられた。



「写真」能「鉄輪」羽多野良子師（撮影・杉浦賢次氏）

演能は、仕舞「藤戸」（シテ宇高通成）、狂言「口真似」（シテ野村小三郎）
能「鉄輪」（シテ羽多野良子、ワキ高安勝久、ワキツレ相元正樹、間・野村小三郎、後見・廣田幸稔ほか、地謡・宇高通成、宇高竜成、竹市幸司ほか）
後援：岡崎市教育委員会

保存会結成40周年
一色神社 奉納能
例 3月16日 一色町保存会
伊勢 昭和33年に伊勢市無形民俗文化財に指定された一色能、そして保存会が平成9年11月に文部大臣から地域文化功

労者表彰を受賞した一色町能楽保存会は、きたる3月16日（日）午前11時から一色神社例祭奉納能を開催する。
本年の演能は、保存会結成40周年、平成19年度三重県文化振興基金活用事業として催される。
後援は三重県、三重県教育委員会、伊勢市、三重県文化振興事業団、伊勢商工会議所など。
能組は次のとおり。
「翁」翁・石原進、面箱・喜多敬、神楽・浜口富三、三番叟・喜多芳夫
狂言「磁石」シテ喜多芳夫
半能「巴」シテ石原進、ワキ松原正明、笛・菊川満子、小鼓・村瀬恒史、大鼓・山田洋之
舞囃子「吉野静」シテ莊司たづ子、「鱗形」シテ中川久子
能「鶴」シテ石原慎一、ワキ吉川貞夫、間・藤波徹、笛・菊川満子、小鼓・後藤嘉津幸、大鼓・石原隆明、太鼓・鬼頭義明
ほか連吟、仕舞、独吟、独調、独鼓など30数番
終了予定午後五時三十分。

会場／一色町公民館仮設能舞台、「問い合わせ先」／一色町能楽保存会事務局（土谷喜八郎会長）
伊勢市一色町一六七番地
電話0596・22・1720

第14回 秀麗会能

3月16日 国立能楽堂
金春流・本田光洋師主宰の「秀麗会」は、3月16日（日）東京・国立能楽堂で「第14回 秀麗会能」を開催する。午後一時開演。
能組は、能「実盛」（シテ本田光洋、ワキ宝生園）、狂言「寝音曲」（シテ野村万作、アド野村万之介）
能「紅葉狩」（シテ本田布由樹、ワキ村瀬純）ほか仕舞
指定席八〇〇〇円、自由席六〇〇〇円
チケットの問い合わせ／本田光洋後援会（東京都中野区上高田2-25-12、TEL03・3386・2641）

戦後名古屋能楽史

〔第十九章〕 竹尾 邦太郎

昭和四十年（一九六五）

承前—
昭和二十年四月二十八日には金剛舞台で「鉢木」桜間道雄、五月十九日には「柏崎・大返」金春光太郎（現・八条）を勤め、六月二日には「檀風」金春殿（先代）で谷口喜代三氏の大鼓、松本謙三、宝生弥一両氏のワキ方で出演いたしました。
この時、道行の謡を松本氏が非常に珍しい謡方をしたので、私があとでたづねたところ、この謡方は「檀風」一番だけであると宝生新先生が言われたと答えられました。それ程この曲はワキ方の重い曲で囃子の方でも早鼓が二度あって難かしい曲と思います。
六月三日には「安宅」片山九郎

右衛門、を勤めましたが、この時の同山は関西の錚々たる方々で勸進帳を同吟されました。こういう事も異例の事と思います。（註・因に催主は幽花会、所は金剛能楽堂。ワキ富樫は松本謙三、判官は片山元三郎、同山は林喜右衛門・浦田保清・大西信彦・山本博之・吉井司郎・大西信久。囃子方は春日又三郎、田鍋惣太郎・谷口幸治郎）
六月五日には「俊寛」金春光太郎（現・八条）と「道成寺」桜間金太郎（故・弓川）を勤めましたが、この朝三十五機の空襲が阪神地区にあったため、小鼓の大倉六蔵氏が来られなかったため、私はつづいて二曲を打ちましたが、「道成寺」の前に「俊寛」を打つという様なことは今から思えば一寸出来ない事でしょう。この時がおそらく桜間金太郎氏（故・弓川）の最後の「道成寺」であったでしょう。金太郎氏は其後健康を害されて三十二年春他界された事は誠に惜しい事です。
七月七日には「松風・灘返」桜間道雄、同八日「清経・恋音取」金春光太郎（現・八条）、同九日「景清・小返」片山九郎右衛門、を大江舞台で勤めましたが、この時は「景清」これを見ての所で空襲となり、一時中止致し解除後続演してキリに「融」桜間金太郎（故・弓川）を勤めました。この翌月十五日、終戦の大詔を拝し進する決意を新にした次第であります。十一月四日には再び京都にゆき「野宮」桜間金太郎（故・弓川）を勤めました。
昭和二十一年一月二十七日には京都観世会で「舟弁慶・重前後替」橋岡久太郎を勤め、二月十一日には京都金剛会で囃子「梅」を

宝生流十八代宗家 宝生英雄十三回忌追善能 名古屋宝生会定式能（第52期） 三月十六日（日）正午始 名古屋能楽堂	番組 敦 盛 鬼頭 京子 三 山 衣斐 愛 玉 葛 佐藤 耕司 是 界 和久 莊太郎	能 清 經 内藤 飛能 宝生 和英 後見 水上 輝和 佐藤 耕司 高安 勝久 福村總一郎 河村總一郎 村上 智幸 石森 高人 大森 道夫 玉井 辰巳 大二郎	仕舞 源氏供養クセ 融 竹内 澄子 玉井 博祐 衣斐 正宜 水上 輝和 和久 莊太郎	能 半 部 倉本 雅 飯富 雅介 佐藤 友彦 後見 石黒 孝 和久 莊太郎 地謡 神谷 勝英 柴田 勲 加賀山 憲治 久野 幸三 内藤 飛能	狂言 悪太郎 アド 井上 菊次郎 シテ 井上 靖浩 アド 佐藤 融 後見 今枝 郁雄	仕舞 通小町 誓願寺キリ 後見 辰巳 満次郎 佐野 萌 和久 莊太郎 水上 輝和 佐藤 耕司 内藤 飛能	能 海 人 子方 坂口 信 衣斐 正宜 懐中之舞 後見 辰巳 満次郎 内藤 飛能 地謡 平田 正文 竹内 良伯 織田 哲哉 柴田 賢治 和久 莊太郎
---	--	---	---	--	--	---	--

幸 謡 会 三月二十三日（日）午前十時半始 名古屋能楽堂	番組 巴 山下 須美子 熊 野 宇野 順子 芝崎 恭子 田中 米子 瓜生 恭子	連吟 薪之段 荒木 悦子 荒木 毅	素謡 砧 吉房 徳二 鈴木 壽太郎 高取 良昌	仕舞 兼 平 野 宮 瓜生 恭子 蝉 丸 山下 須美子 江 口 芝崎 恭子	舞囃子 高 砂 三浦 美由紀 後藤 嘉津幸 河村 眞之介 竹市 洋輝	舞囃子 通小町 小林 俊雄 後藤 嘉津幸 河村 眞之介 竹市 洋輝	舞囃子 鞍馬天狗 近藤 幸子 後藤 嘉津幸 河村 眞之介 竹市 洋輝	素謡 姨 捨 石川 晴子 泉 嘉夫	舞囃子 難 波 吉房 徳二 後藤 嘉津幸 河村 眞之介 竹市 洋輝	仕舞 殺生石 笠之段 高取 良昌	雲林院 鈴木 壽太郎 石川 晴子	能 隅田川 谷川 優奈 村井 邦子 飯富 雅介 橋本 幸 河村 眞之介 福井 四郎 兵衛 藤田 六郎 兵衛	番外仕舞 嵐 山 近藤 幸江	幸 謡 会 岡崎 市 鳴田 本町 十一 TEL (0564) 2112529
------------------------------------	--	-------------------------	----------------------------------	--	--	---	--	-------------------------	---	------------------------	------------------------	--	-------------------	--

②面よりつづき
月八日には「鶴鶴小町」梅若六郎を勤めましたが、これは私の初演でした。「鶴鶴小町」は老女物の中でも特に長い能で、この時は二時間三十分かかりました。「小鼓芸話」田鍋惣太郎著 昭和三十三年六月二十日 わんや刊(註・因に催主は断絃会、ところは金剛能楽堂か。ワキは西村弘敬、囃子方は杉市太郎、田鍋惣太郎、谷口喜代三)

以上、広く芸能界に偉大な足跡を残してきた武智鐵二の人間性を、堂本正樹・坂東三津五郎・桜間道雄・川崎九洲・茂山千作・茂山千五郎・田鍋惣太郎各氏の著述・発言などから四回に亘って述べてみた。さて本論に戻り六月十日、木曜日、名古屋梅猶会素謡会(当年度第一回)。週日の午後五時半始という珍しい夜の催しが愛知県文化会館の集会所で行われる。素謡は三番、「通小町」梅若盛義・ツレ梅若善高・ワキ梅若修一、「杜若」梅若猶義・ワキ岡田朗詠、「天鼓」梅若猶義・ワキ井戸良造。

六月十三日、青陽会第九期第一回。舞囃子「高砂」久田秀雄、仕舞四番「竹生島」祖父江修一、「経正」福田幸市、「楊貴妃」石谷初蔵、「巻絹」竹内六郎、能「鉢木」河村鉦二・高安滋郎、仕舞三番「融」佐藤太俊・蟬丸・塚本秀雄「春日龍神」梅田邦久、能「百万」法楽之舞「武田太加志」西村弘敬、仕舞二番「清経」吉井順一「野守」杉浦元三郎、狂言「胸突」井上松次郎、能「石橋」大獅子「柴田初太郎」加藤丈太郎・柴田取武、西村欽也。

六月二十日、名古屋観世会定式能・第三回。素謡「草子洗小町」高野瀬透、仕舞三番「吉野天人」石谷初蔵「蟬丸」竹内六郎「歌古」河村鉦二、能「俊寛」柴田初太郎・西村弘敬、狂言「悪太郎」井上礼之助、能「松風」見留「親世元昭」野村四郎、高安滋郎、仕舞四番「籠」藤井徳三「花月」奥善助「女郎花」高橋静夫「山姥」藤井久雄、能「車僧」橋岡久弥・西村欽也。他に下田雄三、大鼓の亀井忠雄が来演。

お買物はご便利... 名鉄 三河の海 知多の海 名鉄電車

田鍋惣一郎・河村総一郎、「名取川カケリ入」和泉保之、河村丘造、「茶壺」山本則寿(スッパ)、山本則直、高井則安(目代)。(なお山本三兄弟、則寿・則直・則安は前年昭和三十三年に芸術祭奨励賞を受賞)。狂言小舞五番「暁」石田喜樹「小鼓」山本光次郎(既出)「柳ノ下」大野弘之「七ツ子」井上祐一「海人」和泉保之、「止動方角」井上松次郎、佐藤秀雄(主)、井上礼之助(伯父)、井上義次(馬)。

七月三十日、狂言をこよなく愛し、三世茂山千作に小舞謡「ささめ雪」を贈り、「月と狂言師」の著作もある文豪谷崎潤一郎が死去、享年七十九歳。なお、この二日前には江戸川乱歩も七十歳で此の世を去っている。

八月十日、第九期第三回の名古屋宝生会定式能は素謡会。週日の火曜日午後五時半始で会場は名古屋相互銀行九階ホール。当時、熱田神宮能楽殿は空調設備が無かつた。番組は「忠度」辰巳孝、内藤藤二、「花月」倉本雅・村瀬澄子、「砧」宝生九郎・馬淵富四夫(ツレ)、辰巳孝(ワキ)。

八月十八日は名古屋梅猶会第二回素謡会、木曜日午後五時半始で愛知県文化会館集会所。「小督」岡田朗詠・梅若善高(ツレ)、井戸良造、「松風」梅若猶義・梅若盛義(ツレ)、梅若善高、「葵上」梅若修一・井戸良造(ツレ)、梅若盛義。

八月二十二日、恒例になった愛知県文化会館講堂(一般に愛知文化講堂)特設舞台を会場とする大衆能は第六回で五流能。舞囃子「養老」桜間龍馬(金春)、能「巴」大塚一二(金剛)、舞囃子

「巻絹」観世喜之、仕舞三番「西王母」加藤良久、「鶴之段」辰巳孝「玉之段」柴田初太郎、能「放下僧」内藤藤二(宝生)、狂言「犬山伏」井上礼之助、井上松次郎(僧)、舞囃子「融」和泉富太郎(喜多)、能「紅葉狩」柴田取武(観世)。

九月十二日、梅田邦久の主宰する邦謡会の創立十周年、当地にも活躍の場を拓いた名古屋邦謡会も一周年となり、去る五月三日には社中会を催したが、此の度は能の普及発展を目指す謡曲仕舞教室の第三回に片山一門の来演を得ての能楽鑑賞会、入場整理券を必要とするが無料公演。番組は素謡「小督」小野朗、能「熊野・村雨留」柴田取武、狂言「狐塚」井上松次郎、仕舞三番「笠之段」浅井宏丞、「玉之段」鷲尾周三、「雨之段」柴田初太郎、能「天鼓」弄鼓「梅田邦久」。

九月十六日、第十五回西ベルリソフェスティバルに参加のため、野村狂言団(团长・野村万蔵)の一員として野村又三郎が渡欧。彼地ほかで九月十九日から十月十三日まで「靉猿」「止動方角」「くさびら」を勤める。

九月十九日、観世会定式能・第四回は素謡会。仕舞三番「老松」有賀滋子、「半部」加藤良久、「小鍛冶」福井道子、連吟「駒之段」服部紗枝・芥川秀子・飯田新子、素謡四番「忠度」観世静夫・山口幸徳、「野宮」林矩玄、観世静夫、「安宅」勸進帳「大西信久」大西信彦、山口幸徳(判官)、杉村竹翠ほか(同山)、「殺生石」大

西信彦・林矩玄、仕舞五番「賀茂」観世静夫「土車」大西信久「井筒」林矩玄「鐘之段」山口幸徳「谷行」大西信彦、舞囃子「菊慈童」柴田初太郎。

十月九日、河村鉦二が主宰する河村一謡会舞台拾周年記念の社中会。初めに番外仕舞七番「難波」有賀滋子、「蟬丸」祖父江修一、「東北」佐藤太俊、「葛城キリ」久田秀雄、「葵上キリ」加藤丈太郎、「松虫」殿島修二、「嵐山キリ」竹内六郎、と番外独吟三番「竹生島」後藤契雪、「駒之段」芥川秀子、「鶴之段」林甲子夫、終りに番外一調「橋弁慶」河村総一郎・武田太加志(謡)と番外仕舞三番「隅田川」柴田初太郎、「殺生石」泉嘉夫、「高砂」河村鉦二。

十月十五日、名古屋市営地下鉄南北線の一部、市役所から栄の一・村竹翠ほか(同山)、「殺生石」大

十月十七日、名古屋淡交会・故橋岡久太郎三回忌追善能。番組は「神歌・法会之式」鬼頭五郎・谷本正鉦(千歳)、連吟「当麻」増田十草・六車真三・飯田賢・尾関健太郎、仕舞四番「養老」稲生芳雄、「田村ケセ」石谷初蔵、「葛城キリ」竹内六郎、「葵上」塚本秀雄、連吟「車之段」服部紗枝・飯田新子・芥川秀子、仕舞四番「花月」有賀滋子、「東北キリ」福井道子、「善知鳥」加藤良久、「山姥」藤井千鶴子、連吟「通小町」犬飼末吉・林甲子夫、後藤契雲、仕舞四番「松虫キリ」丹下三義、「敦盛キリ」太田重次郎、「西王母」加藤総兵衛、「昭君」河村鉦二、連吟「誓願寺」真柄米次・増田一雄、高野瀬透、小謡「賀茂」中野寛兵衛、能「安宅」勸進帳「瀧流之伝」橋岡久共・高安滋郎(富樫)、和泉保之(能力)、舞囃子「海士」柴田初太郎、狂言「伯母ケ酒」野村又三郎、佐藤卯三郎、仕舞「雲林院」大槻秀夫、能「羽衣」和合之舞「高橋静夫」西村欽也、一調「西行桜」観世元信・武田太加志(謡)、能「隅田川」彩色「観世元正」岡田朗詠右衛門、仕舞三番「難波」谷村一太郎、「放下僧」小歌「藤井徳三」善界「山本順之、狂言「吃り」和泉保之、舞囃子「熊坂」観世元昭、能「天鼓」弄鼓之舞「下田雄三(前)、奥善助(後)、西村弘敬。名古屋観世会々員総出演、当地三役のほか大鼓・渡辺晴義が来演。

十月十五日、名古屋市営地下鉄南北線の一部、市役所から栄の一・村竹翠ほか(同山)、「殺生石」大

つてしまいが、声に元気が無かつたのは、今にして思えば病の祖父・十二世又三郎との共演が成らなかつたせいであつたらう。既報の通り十二世は一ヶ月半のちに逝去、心より御冥福をお祈りする。

「若和布」和泉流専有曲。と同工異曲だが狂言ではなく出家狂言。当地で上演記録が見られない程の稀曲。寺の修復が成つて檀家をもてなすため、住持(アド高義)は着のワカメを求めてくるよう新発意(シテ小三郎)を都へ使いに遣るが、ワカメが何物かも分らない新発意、スッパ(小アド健太郎)に捕まり、ワカメとは若女の巧言にたぶらかされ、スッパに言い含められてワカメに成り済ました女(小アド隆行)を連れて来る、無智な新発意に住持は忿懣やる方なく席を蹴つてしまふが、残る新発意は都へ戻すつもりで女と此処に至つて心が通い合えば、女も「妾がともかくもして養ひませう」「俗は成仏せぬものでござるか」などと還俗をそのかす。庫裏から持ち出した酒で、契りの盆事になれば後は一湯千里、女が「一気に盆を干し、「地主の桜」を誦い出すと、女の身体にじろく視線を這わす新発意の好色。女の勧めで「十七八は」と「細布」を舞う新発意が「そなたも一さし」と促せば、「尼崎から舞が来るやら、と女が必え、調子に乗る新発意は「お方は何処へ」播磨の明石へ(蝶(に)し)踏みこぞりそく、こゝまで禁(から)げて恥しや」と継ぎ、宴も猥雑な印象。騒ぎを聞きつけ住持、「寺中は酒は禁制」と激怒すれば、厚顔にも「愛しの人や、ちやとござれ」と新発意を急ぎ立てる女。曲趣に少々品を欠くが、初演の意気込み充分見て取れ、上々の艶笑譚になった。(10月27日・第6回狂言三の会)

「西王母」仁君穆王(ワキ)勝久(に)拜謁。三千年に一度咲く桃を献上する仙女(前シテ徳高、面小面・襟白二・金菊菱文摺着付・紅入唐織)。不審する穆王に下居の仙女は「宿るか袖の月の影、と右袖に視線をや、肩衣の上までその恵み、と静かに右上を眺めるところ、王の広大無辺の仁徳を沁々思ふ風情がみられて佳。後シテは素姓明かした西王母(面増・天冠)・襟ト着付同断・緋大口・鳳凰ノ丸文白舞衣垂折・飾太刀)、浮きやかな下り端の囃子(六郎兵衛・孝一郎、眞之介・洋輝)に乗り、桃実盤を捧げる侍女(子方・金春嘉織)を従えて出るところ、大和絵の画幅を見る様。伸びやかな中之舞には師父・故見実の面影の大きさが見えて嬉しく、可憐な子方の立居佇まいには、奈良金春の長い伝統に培われた気品が身についた幼女が居るのだ、と感じ入つた。(1時間9分)

◆昨年の舞台から(その二)◆

「第六回 狂言三の会」と「第二十八回 名古屋金春会」「観世会」「豊田お洒落狂言会」「名古屋宝生会」

竹尾邦太郎

「蝸牛」和泉流・野村又三郎家の演出が異色。シテ山伏・小三郎に絡むのが主と太

める子方に蝸牛とみなされた山伏は、興が成つて成り済ますと子方に囃子物を教え、右肩に抱え上げる「とんでんくむしく」と合の手を入れ囃したてる。面白がる子方は正に遊んで貰つて居る気持ちである。一方、父親は、「作をたばかつて連れて行く」「己れは人買じやの」などと大騒ぎ。大嶺の雲の凌ぎ、と呪文を唱えだす山伏を、「さてく憎い奴の」と殴り掛かる父親に「最早許させられい」と哀願する子方。犬張子文様肩衣の、頭は無信明が舞台を覆り、

(3)面よりつづき
君の名残を、と面伏せるところ、哀憐の情がよくでた。物着は後見座、梨子打鳥帽子を自身で脱ぐが、唐織は脱がされて白白衣を着せられ、太刀は持ち、笠を渡された。(1時間13分)

「俊寛」 シテ光洋、煤けた様な面・黒頭・襟茶・茶系小格子着付・黒水衣、右手に杉水桶を提げ一ノ松の一セイ。もはや冥途の境涯に流人の不遇を喟つ俊寛僧都、甕れた容色も憐れなら、肺腑から搾り出す様な陰々滅々たる語調にも心情が窺える。落つる木の葉の盆、は小腰を屈めて桶の中を覗くと、谷水の流る、も、と桶底に左手を添え、此処に至る水上(源)は自身の過去との思い、過去を辿る心は左から右へ面使ヒすると、万事休すとはかりに膝をつき、桶を捨てて双シラリ、俊寛の内面描写が見事。

赦免状の段は、康頼のあと俊寛、開いた俣を受け取って直ると、気持ち鎮めるかに一呼吸、紙面に目をやると「さては筆者の誤りか」と、あらわな怒りをくつと飲み込み、シヤルと「こは如何に、と赦免便に反問する気力も萎えた趣にクドキ。この程は三人一所に在りつるだに、と無意識に赦免状を畳み、波の藻屑の、でほとりと手放すのが、いかにも置き去りにされる象徴に思えるが、クセ中、諦めきれず再び手に取られる赦免状。夢ならば覚めよ、と投げ捨てられたのを、船に向かう康頼が拾い上げて懐中するの面白く、キリは別れの余情、殊更の哀愁だった。ワキ雅介、ツレ布由樹・登、調和のとれた好舞台。(1時間4分・11月4日・第28回名古屋金春会)



観世会 「融」 観世鏡之丞



豊田御酒落狂言会
①「鶏聲」井上靖浩・井上菊次郎
②「棒縛」小笠原匡・山本豪一・中本義幸
③「靱猿」佐藤融・佐藤友彦・小西彦輝

(杉浦賢次氏撮影)
山仕事に出掛けよ
うとしない太郎シテ
うとする仲間アド菊次郎を前
に、太郎は腹を切ると大見得を切
るが、止める
所か却って職
ける妻、仲裁
人が居ては面
倒とばかりに
仲間人を引ッ
立てて行って
しまふ。残つ
た太郎は痛く
ない工夫を
様々凝らす
(写真)が矢張
り怖い。大仰
な怖がり様は
満面に稚氣。
(22分)

鐘之段になつて地(山階弥右衛門・武田邦弘ら)との掛合は、嬉しさに昂ぶる気持ちも活々と好調。鐘の音、と撞木綱を取る高々と上げ(写真)、我も五障の雲、と手繰つた綱の下をすりりと潜つて綱を手放すところ、如何にも雲晴れた趣が感じられた。(1時間30分)

「鎌腹」 うとしない太郎シテ
うとする仲間アド菊次郎を前
に、太郎は腹を切ると大見得を切
るが、止める
所か却って職
ける妻、仲裁
人が居ては面
倒とばかりに
仲間人を引ッ
立てて行って
しまふ。残つ
た太郎は痛く
ない工夫を
様々凝らす
(写真)が矢張
り怖い。大仰
な怖がり様は
満面に稚氣。
(22分)

後シテは融大臣の英姿、白の直衣に淡い赤の模様大口の色どりが如何にも大臣の気品。小書は早舞五段を舞返す由だがバリエーションも、颯爽とした舞ぶりは奔放闊達、目まぐるしく舞来り舞去る姿を追い、あれよくと唯みとれるだけ。早舞は流シで舞台へ戻り、身を沈めなどあつて急之舞に直り二ノ松へ、扇を両手に捧げ一ノ松で舞上げる、と、あら面目の、と地(清司・邦久ら)になり、以下も強靱な腰に物を言わせて型所をきびくと極め、キリは「この光陰に、と左袖巻き上げたまま地を残して幕へ入りワキ留、爽やかな美しい舞台だった。(1時間25分)

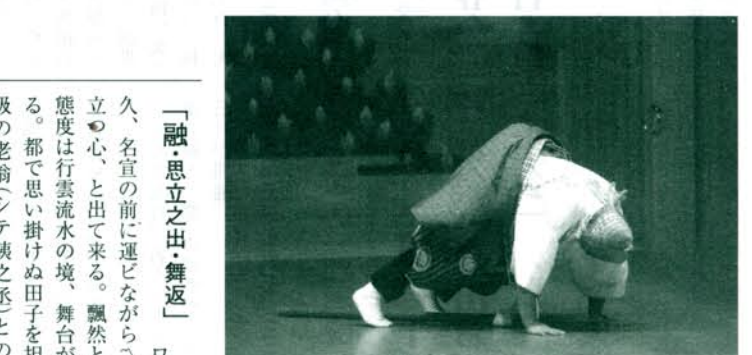


名古屋宝生会「生田敦盛」佐藤耕司・佐藤健太郎

「六浦」 玉井博祐 (写真・宝生会提供)



名古屋観世会 「融・思立之出・舞返」 観世鏡之丞 「三井寺」 観世芳伸 (撮影・杉浦賢次氏)



「鎌腹」 井上靖浩 (撮影・杉浦賢次氏)

久、名宣の前に運びながら「思ひ立」心、と出て来る。飄然とした態度は行雲流水の境、舞台が緊まる。都で思い掛けぬ田子を抱く汐波の老翁(シテ鏡之丞)との出会い。古、融大臣の抱いた壮大な庭園の物語を、問答・掛合に淡々と展開してゆく所に深い味わいが。長物語に時を忘れ、汐を汲むところは正面框に出て外から左、右と汲み、汲めば月をも、と田子の中を交互に眺めて退く時、背後に田子を静かに下ろし、天秤棒を捨てて、騒がしい音を立てず鮮やかな手際。

「鶏聲」 土鳥帽子に正装の入経験があるかと教え手・弘之に罽入作法を教示願えば、人聞きが悪い、とむつとする教え手、「再々行くは見舞といふもの」と釈明はするが腹の虫が収まらな。腹癒せに当世の作法は鶏の鳴く真似、蹴合う真似をすること、と途轍も無いことを教え、土鳥帽子を鶏冠に似る烏帽子に替えさせ。罽入先で、男アド菊次郎は太郎冠者・郁雄と顔見合わせて大笑いするが、「罽の恥は男の恥」と同装して鶏合せ(写真)を。興至って上機嫌の男、これが真の目度度い祝事であろう。(26分)

「成上り」 清水観音に参籠
中、主アド高義の
太刀をスッパ智行に竹杖と摩り替
えられてしまった太郎冠者シテ小
三郎、その言い訳が山芋が鱈に成
つたなど出任せの場当り、口舌
の徒の勢い小三郎活々とみせる。
(12分)

「靱猿」 大名シテ融の気紛
れの狂気は、偶々出
会った猿引の小猿の皮を剥いで靱
にした、と太郎冠者アド俊裕に
命じて猿引・小アド友彦へ交渉に

「生田敦盛」 者ワキ雅介、敦
盛ノ遺児(子方・健太郎)を先立
てると、名宣から僧体の遺児に纏
わる此れ迄の事情を坦々と語り、
加茂明神の霊夢を得て生田へ赴
き、そこで草庵を認めて立寄るま
で、ワキが情景を確り描写する。
子方がワキとの問答に懸命に応え
る健気さも微笑ましい。敦盛ノ亡
霊(シテ耕司)を認めると、遺児は
傍に駆け寄り、「なう敦盛とは我
が父かと、取り纏らんばかり、
シテ共にシヤルところ(写真)が
よい。クセの「花鳥風月の、と
立つて藁屋を出ると、身を捨て
た合戦譚は語る由も無いが、仮
初の親子の出会いには名残尽き

ぬ、と舞う短い中之舞、また、運
参を閻魔王の怒りに触れ突如修羅
の巷で敵と戦うところ、少々元氣
が無かったが、祖父と孫との共演
は何がなししつぱりした雰囲気
醸し、子方は愛らしかった。(45分)

山々に魁けて色深
く美しく紅葉した六
浦名寺境内の楓、為相脚の歌に
詠まれたのを徳とし、以後、紅葉
するのを止めたのは、功成り名遂
げたら身を退くのが天の道、の格
言を知った故という寓話。シテ博
祐、前は里女、面曲見・襟白浅黄
・白地撫子文摺着付・紺黄段無
紅唐織、旅僧ワキ勝久は従僧ワキ
ツレ元・正樹を伴い、何れも大口
僧の重み。呼掛で現われたシテと
の問答しつくりと、中入地雅ほ
か全員女性に消えて行くところ
ろ、冷えびえとした風情が感じら
れる。後シテは楓ノ精、浅黄大口
に萌黄唐草文長絹が紅葉しない様
を象徴し、クセの舞、序ノ舞も慎
ましやかに楚々として美しく、キ
リの「吹きしをり、く、のハネ
扇が手綺麗だった。(1時間23分
・11月18日・名古屋宝生会)

NHK放送予定(平成20年3月~4月)

Table listing NHK FM radio program schedules for 'Noh Kyogen Kaigi' from March to April, including dates, program names, and hosts.

能 楽 の 友

発行能楽の友社

名古屋市中種区千種2丁目18-18 (郵便番号 464-0858)
電話 (052) 731-7984
FAX (052) 733-2837
振替口座 00800-6-36393
購読料 1年 1100円
郵送の場合 1年 1800円

豊田市能楽堂開館10周年

能実盛 狂言呼声

5月24日 「五月能」公演

豊田市能楽堂は、平成10年に開館して今年十周年を迎え、記念公演を催しているが、この一環として来たる5月24日(土)「五月能」を開催する。

能組は、観世流能「実盛」と大藏流狂言「呼声」。当日は午後1時30分開場、午後2時開演。

解説 相山女学園大学准教授 飯塚 忠理人氏

Table listing cast members for 'May Noh' performance, including roles like 'Shite' and 'Utae' and actor names like 'Shigeaki Matsuyama'.

能に見る 源氏物語

'08大槻能楽堂自主公演能

大槻能楽堂では、2008年大槻能楽堂自主公演能「能の魅力を探るシリーズ」を企画、源氏物語千年を記念して「能に見る源氏物語」のテーマで、3月から毎月公演を行う。

「能に見る源氏物語」
3月22日(土) 午後2時開演
お話し「源氏物語と死」梅原 猛
能「源氏供養」語入(シテ)観世

4月26日(土) 午後2時開演
お話し「つゆ忘れたまはず」宿世の母と子」村瀬 和子

能「夕顔」山端之出・法味之伝(シテ)山本順之、ワキ福王茂十郎、間・善竹隆司、地謡・観世鏡之丞、羽多野晋ほか
能「玉鬘」(シテ)多久島利之、ワキ殿田謙吉、間・善竹隆平、地謡・大槻文蔵、松浦信一郎ほか

5月31日(土) 午後2時開演
お話し「光源氏のモデルは？」大森 尚亮
能「融」酌之舞(シテ)泉嘉夫、ワキ福王和幸、間・茂山童司、地謡・大槻文蔵、斎藤信隆ほか

入場料(自由席・税込) 一般四二〇〇円、当日四七〇〇円、学生(前売・当日とも)二〇〇〇円。入場料発売所 大槻能楽堂(電話06・6761・8055、大阪府中央区上町A番7号)。ローンチケット(レコード56078)、電子チケットぴあ(Pコード3811985)

観世華雪 追善能 鏡仙会特別公演

東京

観世華雪五十回忌、観世栄夫一周忌にちなみ、鏡仙会では3月30日(日)東京松涛の観世能楽堂で特別公演として追善能を上演する。午後一時半開演。上演は次のとおり。

連吟「隅田川」
舞踊子「敦盛」(観世淳夫)
仕舞「弱法師」(若松健史)
「井筒」(浅見真州)
「梅枝」(野村四郎)
「山姥」(山本順之)
狂言「無布施経」(シテ)野村

アツ野村万蔵
舞踊子「海士」(観世清和)
仕舞「西行桜」(観世喜之)
仕舞「碓」前(梅若万三郎)
能「求塚」(シテ)観世鏡之丞、ツレ長山桂三、谷本健吾、ワキ宝生閑、ワキツレ高井松男、御厨誠吾、アイ野村万蔵、笛・一噌仙幸、小鼓・大倉源次郎、大鼓・亀井忠雄、太鼓・小寺佐七
入場料 Ⅱ席二〇〇〇円、A席一〇〇〇円、B席八〇〇円、C席六〇〇円。
申込み・問い合わせ 鏡仙会/東京都港区南青山4-21-29、電話03-3401-2285(平日10時~17時)

演能案内

幸 謡 会

三月二十三日(日) 午前十時半始
名古屋能楽堂

Table listing cast members for 'Sai Ryo Kai' performance, including roles like 'Utae' and actor names like 'Shigeaki Matsuyama'.

Table listing cast members for 'Shin no Senda' performance, including roles like 'Utae' and actor names like 'Shigeaki Matsuyama'.

Table listing cast members for 'Tsuetsuki' performance, including roles like 'Utae' and actor names like 'Shigeaki Matsuyama'.

Table listing cast members for 'Tsuetsuki' performance, including roles like 'Utae' and actor names like 'Shigeaki Matsuyama'.

Table listing cast members for 'Tsuetsuki' performance, including roles like 'Utae' and actor names like 'Shigeaki Matsuyama'.

Table listing cast members for 'Tsuetsuki' performance, including roles like 'Utae' and actor names like 'Shigeaki Matsuyama'.

Table listing cast members for 'Tsuetsuki' performance, including roles like 'Utae' and actor names like 'Shigeaki Matsuyama'.

第30回邦謡会 桜能

四月六日(日) 十二時三十分開演
名古屋能楽堂

Table listing cast members for 'Sakura Noh' performance, including roles like 'Utae' and actor names like 'Shigeaki Matsuyama'.

Table listing cast members for 'Sakura Noh' performance, including roles like 'Utae' and actor names like 'Shigeaki Matsuyama'.

Table listing cast members for 'Sakura Noh' performance, including roles like 'Utae' and actor names like 'Shigeaki Matsuyama'.

Table listing cast members for 'Sakura Noh' performance, including roles like 'Utae' and actor names like 'Shigeaki Matsuyama'.

Table listing cast members for 'Sakura Noh' performance, including roles like 'Utae' and actor names like 'Shigeaki Matsuyama'.

Table listing cast members for 'Sakura Noh' performance, including roles like 'Utae' and actor names like 'Shigeaki Matsuyama'.

名古屋観世会定例公演

四月十三日(日) 十二時半開演
名古屋能楽堂

Table listing cast members for 'Nagoya Kansei Kai' performance, including roles like 'Utae' and actor names like 'Shigeaki Matsuyama'.

4月のたちまち能

山本能楽堂定期能

山本能楽堂定期能「4月のたちまち能」は、四月五日(土)、中央区徳井町の山本能楽堂で開催される。

主催/財団法人山本能楽会
後援/大阪府、大阪市、大阪府教育委員会、大阪21世紀協会など。

入場券 一般券五五〇〇円、学生券三〇〇〇円、綴り割引券(3回分)一般券一五〇〇〇円
能組は次のとおり。

能「通盛」(前・後シテ河村栄重、ツレ前田和子、ワキ中村宜成、ワキツレ永留浩史、アイ山口耕道)。

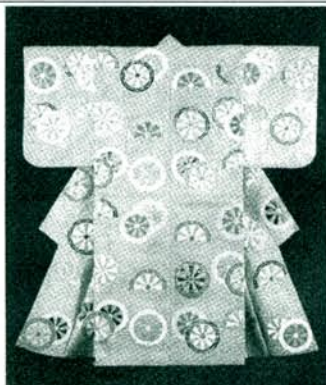
益田市室町文化フェスティバル

能の雅、狂言の妙

国立能楽堂コレクション展 島根県石見美術館

国立能楽堂はこのたび開場二十五周年記念として「国立能楽堂コレクション」展を開催する。この展覧会は、所蔵の装束・面を中地方での初公開を企画、4月19日(土)から5月26日(月)まで島根県立石見美術館(島根県芸術文化センター・グラントウ内)で開催される。

わが国の伝統芸能である能楽(能と狂言)は、室町時代初期の成立から六百年以上の歴史を誇る貴重な無形文化財である。2001年にはユネスコの「世界無形遺産」に傑作として宣言された。今回の展示は、国立能楽堂所蔵の能・狂言面、能・狂言装束、楽



①能装束・茶地青海波源氏車模様厚板
②能面・小面、③狂言面・猿



器、謡本、絵画資料の展示により、日本の美意識の結晶ともいえる能楽の文化と歴史を紹介するものである。「幽玄」(ゆうげん)という言葉で表される優雅な能の世界と、「笑い」を基調とした狂言の世界とをあわせて観賞することで、日本文化の奥深さを実感していただける。会期中に展示の入れ替えが行われる。(前期・4月19日(土)〜5月12日(月)、後期・5月14日(水)〜5月26日(月))

主催 島根県立石見美術館、NHK松江放送局、NHKちゅうごくソフトプラン

「観覧料」当日券一般千円、大学

笛・貞光義明、小鼓・柳原富司、大鼓・辻雅之、太鼓・上田悟、後見・松浦信一郎、森本哲郎、地謡・山本順之、波多野晋ほか

狂言「土筆」(シテ茂山忠三郎、アド茂山良暢)

仕舞「嵐山」(今村一夫、「采女」山本順之、「善知鳥」波多野晋)

能「熊野」(シテ森本哲郎、ツレ林本大、ワキ福王和登、ワキツレ山本順三)、笛・左鴻雅義、小鼓・成田達志、大鼓・河村総一郎、後見・山本勝一、山本博通

地謡・山本章弘、波多野晋ほか。午後一時始

なお山本能楽会では、山本能楽堂80周年記念大会を五月三十一日(土)に開催する。能組は次のとおり。

能「翁」山本章弘
舞囃子「高砂」山本順之
能「二人静」波多野晋、松浦信一郎
狂言「鬼瓦」善竹忠一郎
能「狸々乱」梅若六郎、山本博通

問合わせ 島根県立石見美術館、TEL 0856・31・1860、<http://www.gradi.jp>

金春会別会能

西御門金春会・春栄会

西御門金春会・春栄会では、七十七世家元金春栄治郎三十三回忌・金春晃實七回忌追善の別会能を三月二十三日(日)奈良県新公会堂能楽ホールで上演する。十二時半開演。入場料 全席自由席一般一万円、学生五千円。

能楽は次のとおり。

能「初雪」(シテ金春飛翔)
狂言「無布施経」(シテ茂山千之丞)

仕舞「清経」(廣瀬雅弘)
「角田川」(山本章弘)
能「安宅」(シテ金春穂高、ワキ清水利宣)

仕舞「田村」キリ(本田光洋)
「芭蕉」キリ(高橋 汎)
「融」(金春欣三)

能「石橋」古式(シテ金春安明、ツレ金春憲和、ワキ高安勝久)(終演予定午後五時頃)

桃山・江戸 絵画の美

徳川美術館春季特別展

徳川美術館では、四月十二日

狂言	伯母ヶ酒	井上 靖浩	井上菊次郎	後見	武田 大志	山本 博通	吉沢 旭	清沢 一政
仕舞	田村	山本 博通	小島 一英	地謡	梅田 嘉宏	加藤 洋輝	河村 幸親	久田 勘助
能	上	飯富 雅介	柳原富司忠	藤田 六郎兵衛	梅田 嘉宏	加藤 洋輝	河村 幸親	久田 勘助
附祝言	梅田 大志	飯富 雅介	柳原富司忠	藤田 六郎兵衛	梅田 嘉宏	加藤 洋輝	河村 幸親	久田 勘助

豊水会春季大会

五月三日(祝) 午前十時始 名古屋能楽堂

狂言	孫 聳	太郎冠者 佐藤 友彦	主人 井上 靖浩	通行人 井上 靖浩	後見 今枝 郁雄
狂言	真 奪	太郎冠者 佐藤 友彦	主人 井上 靖浩	通行人 井上 靖浩	後見 今枝 郁雄
狂言	鶏 猫	形部三郎 佐藤 友彦	国主 佐藤 友彦	太郎冠者 今枝 郁雄	次郎冠者 今枝 郁雄

狂言鳳の会 第四十八回公演

五月十一日(日) 午後一時三十分開演 名古屋能楽堂

狂言	孫 聳	太郎冠者 佐藤 友彦	主人 井上 靖浩	通行人 井上 靖浩	後見 今枝 郁雄
狂言	真 奪	太郎冠者 佐藤 友彦	主人 井上 靖浩	通行人 井上 靖浩	後見 今枝 郁雄
狂言	鶏 猫	形部三郎 佐藤 友彦	国主 佐藤 友彦	太郎冠者 今枝 郁雄	次郎冠者 今枝 郁雄

「入場料」(全席指定)
A席五〇〇〇円、B席三三〇〇円、学生二〇〇〇円
チケット取扱
名古屋能楽堂 (052・231・0088)
名古屋文化振興事業団 (052・265・2015)
井上菊次郎宅 (FAX 052・834・8607)

戦後名古屋能楽史

〔第十九章〕

竹尾 邦太郎

昭和四十年(一九六五)

—承前—
十月二十一日、朝永振一郎(一九〇六一—一九七五)ノーベル物理学賞受賞。

十月二十四日、第五十回記念名匠鑑賞能。舞囃子「賀茂」柴田初太郎、能「放下僧」大江又三郎、観世武雄、福玉輝幸、舞囃子「三笑」永島誠二、小島芳雄、五木田武計、能「三輪」金春信高、福玉茂十郎、狂言「子盗人」和泉保之、一調「小督」田鍋惣太郎、本田秀男、能「道成寺」

観世喜之(63)、ワキ福王茂十郎(56)、アヒ佐藤卯三郎(74)、佐藤秀雄(53)、藤田六郎兵衛(57)、後藤孝一郎(34)、山本敬一郎(67)、前川善雄(50)、地頭五木田武計(44)、後見観世武雄(30)、鐘後見永島誠二(55)、小鼓の後藤孝一郎は披き、師・田鍋惣太郎(81)の主催する名匠鑑賞能での晴れ舞台、感慨も一入であったろう。著名な能楽評論家・沼津雨は番組に「観世と金春の能」と題する次のような稿を寄せている。

観世と金春の、二つの流儀の組み合わせられた能が見られるのは、名古屋ならばこそであります。五流の中で最も華麗な、そして繊細巧緻な観世流の最高メンバーの一人である観世喜之氏の「道成寺」であり、金春流宗家信高氏の「三輪」であることは「名匠鑑賞

能」の名にふさわしいばかりでなく、五十回の記念にあたっての企画は記録されるべきものがあります。

観世流は「道成寺」の外に今一番「放下僧」が出ていますが、一—中略—京都の大江又三郎氏に、東京の観世武雄氏という組み合わせは、恐らくは初めてのものではないでしょう、それだけでも異色の能ということが出来ます。

金春流の宗家の「三輪」は、大和に縁の深い、能最古の流儀の宗家が演じる「三輪」には何か神秘なつながりを覚えるものがあります。

昔の本に「三輪は道成寺以後」という言葉があります。三輪の伝説が蛇性を扱っているからという説もありますが、「道成寺」を舞い得た人でないと動められない程位どりがむつかしい、という意味に解する人もあるようです。どちらにしても、脇僧のものと比べると、後の前シテの女性の物さみしい風情、後の神体の崇厳さから神楽など、位の高さに金春宗家の身についた品格を知ることが出来ることと思えます。



田鍋惣太郎氏(昭和41年、謡初式にて)『小鼓藝話・増補版』より転載

観世喜之氏の「道成寺」は、何よりも小書なしというのが珍しいことです。大家の場合は殆んど「赤頭」とか、「ひょうしなしのくづれ」等になるのですが、敢て本格のものを教本的に演じるとい

うことは、大役の小鼓を披く後藤孝一郎氏へのはなむけとして喜之氏が選んだのではなからうかと想像します。後略— また、「お願い」として

催主・田鍋惣太郎は次のように述べている。「金春流の三輪は当地では初めてです。此度孝一郎に道成寺を披かせますに就き、喜之氏の御好意にてお相手頂き、脇王、笛、藤田、大、大阪の山本、太、京都、前川各師、思わぬ御立派な方々に、本人まことに仕合せに御座居ます。お引立の思召しにて御来場をお願い申し上げます。

十一月三十一日は柴田初太郎の主宰する掬水会の中会。番外に仕舞二番「藤戸」柴田初太郎「熊坂」柴田収武。同日、倉本雅の主宰する榎雲会が第四回を迎え、大名古屋ビル内の「香取」で中会を催す。番外に仕舞三番「二人静」倉本雅・戸田和子「三山」内藤泰二「藤戸」辰巳孝。

十一月一日、東海道新幹線ひかり東京・新大阪間三時間十分に運転開始、これにより東西からの能楽師の来名が更に便利になる。

十一月三日、熱田神宮能楽殿十周年を迎え、シテ方五流から宗家・名手らが来演、記念能が華々しく催される。番組に「十周年祝賀の能」として大阪の沼津雨、東京の佐藤芳彦の両氏が次の祝辞を寄せる。

熱田神宮の神苑に、能楽殿が出来て、その余りの立派さに驚き、匂うばかりの檜の香りが、まだ頭に残っているよにさえ思っているのに、早十周年を迎えたことと、心から祝意を表します。

い上げます。敬具
番組は番囃子「翁」金春信高・金春欣三(千歳)、能「高砂」金剛殿・豊嶋三千春、高安滋郎、舞囃子「田村」本田秀男、仕舞二番「鶴之段」柴田初太郎「野守」観世武雄、狂言「素袍落」和泉保之、能「蟬丸」観世元正・武田太加志、宝生弥一、舞囃子「養老」山本博之、能「小袖曾我」梅若六郎・観世喜之、舞囃子「船弁慶」喜多節世、狂言「釣針」井上松次郎、能「葵上・梓之出」宝生英雄・内藤泰二、宝生弥一、他にシテ方では豊嶋弥左衛門・今井幾三郎、大槻秀夫、野口禄久、囃子方では寺井政数、亀井俊雄、金春惣右衛門の来演がある。この日、文化の日、能楽界に於ける長年の功績に対して田鍋惣太郎に勲五等旭日双光章が授与される。舞台十周年記念能と共に此の慶事を寿ぎ、日本能楽会々長・宝生九郎、能楽協会理事長・喜多實の祝辞を

携えて折柄来演中の宝生英雄が、終演後の祝賀パーティ席上で披露する。

祝辞
熱田能楽殿が創建以来十周年を迎え、本日、文化の日をトシ記念能を開催致しますことは御同慶の至りに存じます。

この十年間の関係者の御苦心に對して深く敬意を表します。この能楽殿が、中京能楽界の隆盛に貢献した役割の絶大なことは贅言を要しません。今後ともこの能楽殿を中心とした発展興隆することを祈ってやみません。この佳日に重ねて田鍋惣太郎氏が輝く叙勲の栄誉をうけられましたことはひとりの名譽と存じます。

昭和四十年十一月三日
社団法人 日本能楽会々長 宝生九郎

社団法人 能楽協会理事長 喜多 実

惜に堪えぬ折柄この名古屋能楽界の大恩人日本能楽界の偉大な功労者を偲ぶがごとく致し度會員各位の熱誠な演技をせめてもの御手向けと存じまして左の番組を御披露致します」と九草会本部理事長・観世喜之の挨拶にある通り、黄山岡谷惣助への手向けの社中会。番外に舞囃子「海士」観世武雄がある。

十一月十四日、名古屋梅猶会。素謡「弱法師」岡田朗詠・前田行夫、仕舞五番「敦盛」河村鉦二、「放下僧」殿島修二、「松風」杉村竹翠、「井筒」佐藤太後、「鉄輪」加藤文太郎、独吟「葵上」飯田賢、能「清経・替之型」梅若盛義・梅若修一、西村欽也、能「定家」観世鏡之丞・西村弘敬、狂言「石神」佐藤卯三郎、能「山姥・白頭・長杖」梅若猶義・梅若善高、高安滋郎。

以下次号—

法被(袖折込)・襷。御前に出る場合は、大床さして見渡せば、と己れを鼓舞するかに薙刀一ツ強く突くと地(修)・光之助らの中にスミへ、横縫の千切れたる、と再び薙刀を突くと、文字通り「悪びれたる気色もなく、意気軒昂、「見忘れてあるか」と問われ恐懼退るのも大仰にうろたえること無く、坂東武者の硬骨ぶりを遺憾なく發揮、御教書を賜わるところ、恭順の心持ちも立派だった。(一時間35分)

「柑子」 菓果て戻るさ、太郎冠者シテ忠三郎に何やら預けたと主アト良暢、酒飲みの通弊は夜前のことなど忘却の彼方。それが珍しい三つ生りの柑子だっただけに思い出す太郎冠者へ、早く出せと催促する主。そこは太郎冠者のこと、帰路、当然酔い覚ましには冷たい柑子、腹中に納まってしまつては弁解これ努めるしかない。持ち前の機知で、悪怯れるどころか後寛僧都流離まで引き合いに洒落めし、少々悪ぶだけの過ぎる勢い。叱り留にはなるが、温順な主が歯痒

(4)面へつづく

◆去年今年(ごぞことし)師走から新春の舞台◆

「梅猶会納会」「金剛定期能納会」と「名古屋能楽堂正月特別公演」

竹尾邦太郎

旅僧 (後二最明寺入道) ワキ金治郎、雪の深さに足元確め終始うつむき加減に出ると、へ行方定めぬ道、ふと立ち止まり、名宣から道行、墨の衣の確水川、を右前方に笠に手をやり眺めれば、墨染の粗衣も身に沁む風情。佐野の渡りに着けば、「あら笑止や」とまた降り来る雪に途方に暮れ、宿を借るところへ、と雪の僻村の状景を的確に描写する。主人・佐野源左衛門常世シテ善高の不在とあつて妻女ツレ香寿子の立場弁えた親身な応対も味深い。

シテの「あ、降つたる雪かな」は三ノ松、「如何に世にある人

の」と述懐しつつ、運ブのが慨嘆に非ず自嘲に思え、気分の晴れない苛立ちは、宿を断るワキとの問答、また、気の毒なワキを旨く執り成したい思いのツレへの応答に反映し、その場の一寸硬い雰囲気巧まずみせる。ワキを呼び戻す所は、「袖なる雪をうち払ひうち払ひ」をシテが左袖軽く捌いてみせ、ワキに追い付き改めて宿を勧めめる所は、「見苦しく候へど、と背後から両手で押し止めれば、ワキは左手を笠に掛けシテ向き合ひ黙礼、見交わす顔に温かい心が通い合う。笠を脱いだワキを先立って舞台へ入る手前、シテ柱際でへ

テの心情も察せられて胸に迫る。盆裁の作物は切戸から出す(流是か)がシテの秘蔵のもの、本幕の方が有難味いや増すのでは。火を焚きワキをもてなす所は、「今更新になすべし」と、作物前、膝を強くつき、「家核切りくべて、と激しい勢いで突き掛かるのが己れの気持ち奮い立たせる心、きっぱりみせる。

ワキの問いに素性を明かし、「さて合戦始まらば、以下の意気込みは、敵と寄り合ひ、と強々と踏む二ツ拍子にみせて、今の保なら徒らに死ぬ命、なんぼう無念の事、と悲憤慷慨を打合せ安座から、頭を垂れ憐肉の嘆をかこつて、力が入る。ロングでシテ・ツレとワキの掛合に名残りを惜しみ別れる場はしみりと余情、「御沙汰捨てさせ給ふなど、ワキがシテへ左手指すとこは既にシテ・ツレに最明寺入道の風格も窺え、シテは神妙に面を伏せる。シテ、ツレ中人あと、作物を退くが雪綿一片落ちて残つたのは気掛り。

後ワキは金入沙門帽子・白大口・紫衣。後シテは小書で鎌倉鳥帽子ニ赤調度掛・白大口・黄地



金剛会「朝長」金剛永謙



(原田七寛氏撮影)

③面よりつづき
い。自由闊達な忠三郎に精彩。(13分)
【船弁慶・重き前後替】 和男、シテ前は静御前、面若女・襟白赤・くすんだ白地摺箔着付・白地楡垣地紋扇面二菊文唐織。弁慶ワキ茂十郎に帰京を促され、判官(子方・梅若英之)の本意に非ずと顔そむける心に右ウケ、「直に御返事を申し候べし」と応えれば、むっとする気持ちを抑え、「それはともかくもにて候」とワキ、緊迫するこの場が惹きつける。君の御説とわかり恥入るシテに「苦しからず」とワキ、この辺りも劇的で面白い。門出に一さし勧められ、物着に金色烏帽子をつけると小書でイロエを省き、舞は序之舞。一ノ松へ抜けて判官を見込み、勾欄に寄ると判官に背を向ける様に後退り、右膝つき右手シラルところ、惜別の情を禁じ得ない心をみせる。舞上げ、(やがて御代に)出船の、では判官の前に膝をつき、いつか世に出ることを祈念する思いを伝え、立って脇正へ、舟子どもはやれと、と幕へ月ノ扇をする。
後場、海上は船中、禁句を吐い

た判官ノ従者ワキツレ浩史に嘸みつく船頭アヒ良暢の場面を省くのは物足りない。後シテは半幕で床几の姿を見せ、(声をしるるべに、一旦幕が下りると早笛で三ノ松に。斜に構え凄むや再び颯々と幕へ退き、間髪を入れず幕が上がる)と助走をつけた勢いは、一ノ松へ走り出る辺り、鬱勃たる闘志が漲る。面三日月(か・鉄型黒頭・毘沙門亀甲文灰色厚板着付・紺地波頭文半切・白地立湧文狩衣(衣紋・袖折込)・太刀・薙刀、の姿。舞働キに流し足、一ノ松へ抜け、薙刀頭上に振りかざすと判官へ肉薄するがワキの祈りに二ノ松まで後退、勾欄に寄りかた頭取って判官を見込み、氣力奮い起たせ再度迫るが空しく、また引く沙に、敵わじと地(猶義・基徳ら)のうちに幕へ走り込む。悲壯感漂う残り留の余韻だった。(1時間23分・12月2日・梅猶会納会、大観能楽堂)
【朝長】 シテ水蓮。前シテは美濃国青墓宿で自害の源朝長を看取った宿の長、命日の暮参に赴き、其処で嘗て朝長の守役だったという旅僧ワキ和幸、従僧ワキツレ和夫・正彦の一行に出会う。幕前、朝長の最期の様子を詳しくとせがむワキに、そ

【舟船】 太郎冠者シテ千之丞に命じる主アド千吉、シテが「ふなやーい」と呼び立てれば、ふねと呼べとたしなめるアドに、何を知ったことか、とばかりに古歌を引用して譲らないシテ。ならば、とアドも一つ覚えの歌で反駁すれば、シテに次々古歌の知識をひけらかされ、苦し紛れの小細工。「こなたの分て古歌を直させられる事はなますまい」とまで言われ、話を知るまいと吟ずれば、そこにも「ふな」が。勝ち誇り小馬鹿にした様な口吻が小面憎い程の千之丞、面子を潰された口惜しさは、「やい太郎冠者、

の一部始終を情感豊かにしつとりと丁寧語るシテ語が味わい深く、素晴らしい。へかくて夕陽、と面テラシ右ウケルのは、黄昏の迫る寂寥に重ね、朝長の最期を傷み天を仰ぐ長嘆の心を思わせ、返シ句に立つ姿はすつきりと美しく気品。
アヒは宿の長ノ身内ノ者・正邦、再び朝長の最期を訊ねるワキに「委しくは存せず候へども」とは言い、口跡爽やか懇切に語るが、先のシテ語と重複のきらい無きにも。
後シテは朝長ノ亡霊。自害の因となった大崩で、膝の口を籠深に射させて、とや、前傾の姿勢に扇左膝にぐっと突き立てる烈しさ、膝頭を貫通した矢が馬の太腹まで射付け、(馬は頻りに跳び上がれば、と右足で二ツ拍子激しく踏むなど、具象の克明な床凡の型が鮮やか。キリで、雑兵の手に掛かるよりはと、(腹一文字に掻き切つて写真、)も力が入った。(1時間50分)



名古屋能楽堂正月特別公演

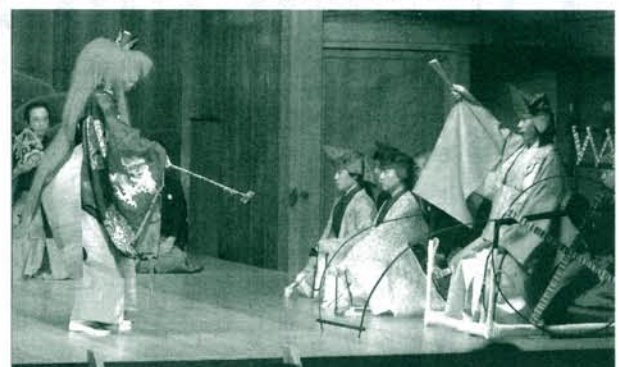


「高砂」武田邦弘 (杉浦賢次氏撮影)

【車僧】 シテ龍。前シテは、その存在が気懸りな車僧ワキ大の様子を窺い、山伏に身を窺す愛宕の犬太郎坊、車を停め四辺を眺め寛ぐワキへ呼掛て出る、早速禅問答を挑み掛かる。氣負った感じの若さが、茶系の装束つか、る辺り、清新な印象。所謂アウエイ(敵地)では函が立たず、素性明かすと己ののホーム(本拠地)へ(御入りあれや、とワキへ指シ(写真、)促し誘うところ、真剣み眉宇に漲る。
前シテが退いた後は太郎坊に仕える溝越天狗アイ薫。面登籠・毛頭巾・襟紺・段替厚板着付・括袴・水衣の姿で杖を突き出ると、名宣



金剛会「車僧」金剛龍謙



金剛会「車僧」金剛龍謙・原大 (原田七寛氏撮影)

折々は主には負けてをけの言辭にも現われ生真面目な千吉、両者の持ち味がうまく出る。(11分)
【翁】 シテ慶次郎、ゆつたりから現われた仔細はシテの命でフエイント(相手を感かせ牽制するための動作)を掛けるため、と意気込み、滔々と立シヤベリ。ワキをくすぐり出すが、ワキは一向に笑う気配もなく空回り。敵わぬとみて一ノ松から胸杖に太郎坊を呼び出すと、後シテは真の犬太郎、善悪両道の行力くらへは牛を繋ぐぬ車を動かせるか否か。アヒを差し向けてワキの注意力を逸らさせ、その隙に付け込もうのシテの目算は外れ、ワキは動ずる気色もない。はきははしたシテとワキの禪問答は、熱くなるシテと冷めたワキが好対照。ワキに汝が鞭では「打つとも行かじ」と極め付けられ、ば、「さて御僧の打たば行くべきか」と気色ばむシテに、「なか／＼のこと」と軽く受け、(拂子を上げて虚空を打てば、のどこ



名古屋能楽堂正月特別公演「翁」片山慶次郎

【高砂】 翁・脇能・脇狂言と続く式能の定番。シテ邦弘・ツレ嘉宏、ワキ勝久。ワキ・ワキツレ元・正樹の登場案が真ノ次第でなく音取置鼓(学・富司忠)で如何にも莊重な雰囲気。クセは上ゲ端あと、(掻けども落葉の尽きせぬは、で左へ二度、取り直し右へ一度、入念に竹把を使う(写真)。中人は、袖の開き加減か、風を一杯に孕み順風満帆と言おうには見えなかったが。



「末広」左から奥津健太郎・野村小三郎 (杉浦賢次氏撮影)

【末広】 先に触れたが服装なのだろう、「時代」と一言で片付けられてよいものと思えないが、平常の会ならいざ知らず、正月の翁付の会であれば。果報者シテ小三郎の言い付けで都に赴き、其処でスツバ高義に末広だと古傘を掴まされてくる太郎冠者アド健太郎。その間、笛前に独り居たシテは、戻ったアドを叱責、弁明これ努めるアドを「あち

能山春日能

能2番上演

春日神社能舞台

兵庫県篠山市にある春日神社能舞台は文久元年(1861)に建てられ、当時は箱根より西では最も立派な能舞台といわれたが、その

春日神社での「能山春日能」は篠山能実行委員会、篠山市の主催で毎年催されて、地元をはじめ愛好者に親しまれている。

ことしの能山春日能は三十五回を迎え、四月二日(土)に開催、能二番、狂言一番が上演される。

午前十一時開場、午後一時開始。演目は次のとおり。

能「百万」(梅若万三郎)
狂言「蝸牛」(野村小三郎)
能「殺生石」替装束(大槻文蔵)
観能料(自由席・解説書つき)
当日券/一般四五〇〇円、中高生二〇〇〇円

お問い合わせ 篠山能実行委員会事務局(篠山市教育委員会地域文化課) 電話079・552・1111(チケット予約受付)

NHK放送予定(平成20年4月~5月)

NHK-FMラジオ能楽鑑賞(毎週日曜日7時15分~8時)
4月27日 素謡「求塚」(再放送)(親世流)
5月4日 独吟「鸚鵡小町」(親世流)
5月11日 素謡「海人」(金春流)
5月18日 素謡「養老」(親世流)
5月25日 「夜討曾我」(再放送)(宝生流)前田晴啓ほか

能 楽 の 友

発行能楽の友社

名古屋市千種区千種2丁目18-18
(郵便番号 464-0858)
電話 (052) 731-7984
FAX (052) 733-2837
振替口座 00800-6-36393
購読料 1年 1100円
郵送の場合 1年 1800円

尾張の殿様が観た能・演じた能

名古屋能楽堂 定例公演新タイトル

名古屋市文化振興事業団(名古屋能楽堂)、能楽協会名古屋支部主催の名古屋能楽堂定例公演は、「尾張の殿様が観た能」として、これまで尾張の殿様が公の場での演能を中心に演目が構成されてきたが、きたる6月から行われる能楽堂定例公演からタイトルが「尾張の殿様が観た能・演じた能」と変わり、少しプライベートな時間のなかで、殿様と能との関わりを深めていく演出で組立てられることになり、新しい関心をよぶものと期待されている。

新宗家 宝生和英氏

シテ方宝生流の宗家継承

シテ方宝生流宗家継承についてこのほど宝生和英氏は「宗家宝生英照、家元職遂行困難により、流儀職分の賛同をいただき、四月一日をもちまして宗家を継承させていただくことになった」と関係各方面に挨拶した。宗家継承について、宝生流職分一同として、次のように挨拶、案内している。
拝啓 時下益々御清祥の事と拝察申し上げます。このたびのシテ方宝生流宗家継承に賛同し、宝生流職分一同、新宗家を中心に、宝生流のなご一層の発展のため、鋭意努力致す所存でございます。何卒宜しくご指導ご鞭撻のほどお願い申し上げます。
平成二十年四月吉日
宝生流職分代表 今井 泰男
三川 泉
佐野 萌
近藤乾之助
高橋 章

能「鱗形」上演

第10回記念 廣田鑑賞会能

金剛流・廣田鑑賞会は、5月11日(日)午後一時半から京都・金剛能楽堂で「第10回記念廣田鑑賞会能」を開催する。今回は、京都で舞台にあがるのは六十数年ぶりという「鱗形」を上演。
狂言「竹生島詣」茂山茂、佐々木千吉、後見・松本薫
一調「杜若」観世元伯、謡・金剛永謙。
ごあんない 大阪大学・天野文雄教授
能「鱗形」シテ廣田幸稔、ワキ高安勝久
入場料 一般八〇〇円、会員七五〇円、学生三〇〇円。会場/金剛能楽堂(京都市上京区烏丸通一条下ル龍前町590-1、電話075-441-7222)

追善能

金剛流・豊春会では、きたる5月18日(日)「豊嶋弥左衛門師三十年祭・追善能」を京都・金剛能楽堂で開催する。能組は、連吟「奈良八景」「融」、狂言「二千石」(茂山七五三)、能「朝長」(シテ豊嶋三千春、ワキ福王茂十郎)仕舞七番。入場料六千円、学生券三千円。申込みは、FAX076-541-8987、豊春会(京都市東山区知恩院山内林下町455)

大槻能楽堂 自主公演能

大槻能楽堂自主公演能ナイトシアターは、5月9日・6月20日、大槻能楽堂で開催される。
▽5月9日(金)午後7時30分始
狂言「文荷」(シテ茂山千五郎)
能「景清」(シテ大槻文蔵、ワキ宝生閑)
▽6月20日(金)午後7時30分始
狂言「伯養」(勾当・茂山忠三郎、伯養・茂山良暢)
能「俊寛」(シテ野村四郎、ワキ福王茂十郎)
大槻能楽堂/電話06-6761-8055

第三回 西村同門会 研究能

五月五日(祝)午後一時半開演 名古屋能楽堂

伝統文化こども能楽教室 おけいこ発表

和谷式 翁より 神楽 和谷栄太郎 後見 和谷 衡市
ツレ勝手 園田 光樹
ツレ木守 園田安耶弥
ツレ木守 松井 俊介
喜多流 シテ 長田 駿
能 嵐山 橋本 幸 陸 船戸 昭弘 鬼頭 義命
後見 加藤 誠子 地謡 伊藤 英一 栗谷 浩之
平塚 昭子 和谷栄太郎 和谷 衡市
後見 加藤 誠子 地謡 伊藤 英一 栗谷 浩之
竹生島 濱田 沙希
田村キリ 杉岡 典子
胡蝶 濱田さおり
雲雀山 竹内麻奈美
野原 明美

狂言 鳳の会 第四十八回公演

五月十一日(日)午後一時三十分開演
名古屋能楽堂
解説 名古屋女子大学教授 林 和利

狂言 孫 聲

狂言 真 奪

祖父 井上菊次郎
男 大野 弘之
太郎冠者 今枝 郁雄
後見 井上 靖浩
後見 鹿島 俊裕
太郎冠者 佐藤 友彦
主人 井上 靖浩
通行人 井上菊次郎
後見 今枝 郁雄

装束の着付実演

狂言 鶏 猫

形部三郎 佐藤 友彦
国主 佐藤 友彦
太郎冠者 鹿島 俊裕
次郎冠者 今枝 郁雄
子 長田 朝人
後見 井上菊次郎

第51回 狂言やるまい会 名古屋公演

生業さまざま
五月十八日(日)午後一時半開演
名古屋能楽堂

昆布売 昆布売 井上菊次郎 大名 佐藤 友彦
井杭 井杭 野村 信明 何 某 松田 高義
磁石 すっぱ 野村 萬 田舎者 野村 万蔵
茶屋 野村 扇丞
苞山伏 山伏 野村小三郎 通りの者 奥津健太郎

名古屋観衛会

五月二十五日(日)午前十一時始
名古屋能楽堂
番外仕舞 三輪 山下 麻乃
小鍛冶 前田 和子
舞囃子 養老 秦野 淳代 寛 敏一
草子洗小町 駒形賀津子 福井四郎兵衛 寛 敏一
大野 洋輝

現代能・狂言面作家展

早稲田大学演劇博物館

早稲田大学坪内博士記念演劇博物館主催、現代能狂言面作家展世話人会の協力による「現代能・狂言面作家展」が4月1日から21日まで、早稲田大学演劇博物館で、日本能楽会、能楽協会が協賛して開催された。

出展の能・狂言面作家は、安倍和子、新井達矢、石原良子、伊藤通彦、井上朗、岩崎久人、梅原如山、大月光勲、臥牛氏郷、北沢一念、北澤三次郎、北澤秀太、黒蕨孝子、桑田能忍、高津絃一、田島満春、谷口明子、豊田伯水、中村光江、羽生生善、福山元誠、堀安右衛門、保田紹雲(敬称略)

美術工芸品にみる能のデザイン

金沢能楽美術館

金沢能楽美術館では、春季特別展として「美術工芸品にみる能のデザイン」(中村記念美術館のコレクションから)を4月25日から6月1日まで開催している。(毎週月曜日休館)



現代能・狂言面作家展

戦後名古屋能楽史

(第十九章)

竹尾 邦太郎

昭和四十年(一九六五)

十一月二十日、第五回 名古屋和泉会。素囃子「神舞」、狂言四番「鉢叩」和泉保之(導師)、井上松次郎(狂打)、野村又三郎、佐藤秀雄(鉦打)、大野弘之、井上義次、井上祐一、佐藤友彦、井上礼之助。

に独立させたもの。明治維新以降これまで百余年、当地に上演記録は見当らず、「輪蔵」も亦同じ。「見物左衛門」も今回ようやく陽の目を見たという超稀曲。

おもしろ体験講座
お能ってなに？
「高砂」を語ってみよう。
お能の動きってむづかしい？
お囃子ってすごいな！
面にはどんな力がある？

番外仕舞	番囃子	舞囃子	仕舞	須磨源氏
井筒	山中 節子	郡 融	桜 川	榎原 和美
順之	山本 博通	老 松	川七	福井四郎兵衛
藤田六郎兵衛	柳原富司忠	雲林院	正子	大野 誠
神野勝之助	藤田六郎兵衛	猿々	河村眞之介	加藤 洋輝
河村眞之介	加藤 洋輝	高砂	河村眞之介	大野 誠
後藤嘉津幸	竹市 学	山本 博通	河村眞之介	大野 誠
藤田六郎兵衛	竹市 学	河村眞之介	河村眞之介	大野 誠
加藤 洋輝	竹市 学	河村眞之介	河村眞之介	大野 誠
竹市 学	竹市 学	河村眞之介	河村眞之介	大野 誠
竹市 学	竹市 学	河村眞之介	河村眞之介	大野 誠

第十六回 恵美寿会

第一日 五月三十一日(土) 十時始
第二日 六月一日(日) 十時始
名古屋能楽堂

一日目	善知鳥	源氏供養	葵上	高砂	須磨源氏	紅葉狩	忠度	源氏供養	自然居士	熊野	仕舞	加茂	天鼓
ツレ小山 皓司	ツレ大鹿 暢子	ツレ竹内 孝成	ツレ東松ソノエ 暢子	山田あき子	中川 泰美	山本あけみ	天野 元成	竹内 淳一	ツレ星野 猛	ツレ飯富 雅介	大江山	鬼頭 京子	門脇 達祐
河田 直悦	江口しげ子	久野 幸三	川出 琴子	河村眞之介	後藤嘉津幸	河村眞之介	後藤嘉津幸	住駒 幸英	山田あき子	河村眞之介	高野物狂道行	後藤嘉津幸	後藤嘉津幸
早川 照子	金子 澄子	柴田 賢治	山本 洋子	後藤嘉津幸	後藤嘉津幸	河村眞之介	後藤嘉津幸	住駒 幸英	山田あき子	河村眞之介	吉房 瞳	加藤 洋輝	加藤 洋輝
寺田 澄子	平岡 一子	宇於崎千尋	野村 澄子	後藤嘉津幸	後藤嘉津幸	河村眞之介	後藤嘉津幸	住駒 幸英	山田あき子	河村眞之介	竹内 良伯	加藤 洋輝	加藤 洋輝
長尾 幸子	弓削 静子	河田 直悦	山本 洋子	後藤嘉津幸	後藤嘉津幸	河村眞之介	後藤嘉津幸	住駒 幸英	山田あき子	河村眞之介	中村 武史	加藤 洋輝	加藤 洋輝

二日目	乱	玉葛	松風	野宮	芦刈	養老	実盛	頼政	羅生門	江口	仕舞	加茂	天鼓
飯富 雅介	近藤乾之助	シテ中村しきぶ	橋本 幸	シテ酒井 文夫	ツレ田中 洋子	竹内 孝成	大島田鶴江	関上喜代枝	ツレ中村 泰美	ツレ山田あき子	高野物狂道行	加藤 洋輝	加藤 洋輝
河村眞之介	近藤乾之助	松村七雅子	後藤嘉津幸	寺部 良樹	成瀬 敏明	後藤嘉津幸	河村眞之介	河村眞之介	山田あき子	河村眞之介	高野物狂道行	加藤 洋輝	加藤 洋輝
福井四郎兵衛	衣斐 正宜	中村喜代枝	後藤嘉津幸	中村計一郎	中島 暉夫	後藤嘉津幸	河村眞之介	河村眞之介	山田あき子	河村眞之介	吉房 瞳	加藤 洋輝	加藤 洋輝
鹿取 希世	地謡 常盤 昭雄	関山 径子	後藤嘉津幸	北原 寿久	中野 暉夫	後藤嘉津幸	河村眞之介	河村眞之介	山田あき子	河村眞之介	竹内 良伯	加藤 洋輝	加藤 洋輝
加藤 洋輝	星野 猛	山本あけみ	後藤嘉津幸	門脇 達祐	星野 猛	後藤嘉津幸	河村眞之介	河村眞之介	山田あき子	河村眞之介	中野 暉夫	加藤 洋輝	加藤 洋輝



(戦後名古屋能楽史つづき)
 番、舞囃子五、仕舞二十二、素謡一、独調一、狂言一、番外に祝言仕舞「高砂」観世喜之がある。
 十一月二十八日、青陽会第九期第二回。素謡「敦盛」石谷初蔵・竹内六郎、仕舞四番「屋島」祖父江修一「蟬丸」加賀敏彦「花月」高橋暎一「岩船」福田幸市、能「放下僧」観世元昭・柴田収武、高安滋郎、舞囃子「玄象」加藤丈太郎、仕舞「野宮」柴田初太郎、能「班女」久田秀雄・西村弘敬、仕舞三番「実盛」河村鉦二「花籃」塚本秀雄「殺生石」山中義滋、狂言「萩大名」井上松次郎、能「邯鄲」佐藤太俊・西村欽也。月が替り十二月四日は第七回やると東京大学助教授・小山弘志の講演がある。番組は「萩大名」野村万作・万之丞・佐藤卯三郎、素囃子「神楽」寛三男・田鍋惣一郎、寛三男「釣狐」野村又三郎・井上礼之助、「二人袴」野村悟郎・万之丞・万作・井上松次郎。
 同日、戦後、能楽協会を全国的に組織化するために奔走、多大な貢献を為し、書記長に就いた三宅襄(一九九一・一九六五)が死去。著名な能楽家や啓蒙家でもあった氏には「能演出の研究」昭和二十三年三月一日・能楽書林刊、「能」昭和二十三年十月三十日、大日本雄辯會講談社刊などの名著があり、斯界を裨益する。当時、能楽協会名古屋支部長であった田鍋惣太郎は自著「小鼓芸話」「故人の想い出」の中で次のように言う。「この人がみえなかつたら、能楽協会は、その設立がずつと遅

れたことでしょう。妻君もよく手伝われて、それこそ一家を挙げて能楽界につくされた恩人であります。名古屋支部設立について、同氏が来られた時には、私が二つ返事で承諾しまして、大へん喜んで居られました。名古屋支部は早くつたですよ。」
 なお三宅襄は本名・石田金市、鳥根県生れ。松野奏風(一九九九・一九六三)、能楽家にして随筆家)は「能演出の研究」の「巻末」に寄せてそのペンネームの由来を次のように明かしている。
 本書は三宅襄君が單獨の名で梓に上す最初のものである。その處女出版に際して著者から跋を書けと言はれた私と同君とのいはれを先づ述べる。
 三宅君と始めて挨拶を交はしたのは焼けた喜多舞台の二階食堂であった。君は故坂元雪鳥先生と一つの食卓で相對してゐた。フト二階に上つた私は坂元先生に詞をかけたついでに、先生から君を紹介された。但し其時先生は三宅とも裏とも教へたのではない。私に告げられたのは全然別の名であったが、それをここに洩らす必要はない。實は三宅襄といふ名はまだ世に生れてゐなかつたのである。
 あとから大きくと君は既に地方新聞に能評を寄稿したりしてゐたさうだが、能楽に對する興味が漸く昂まつてゐた時分、何か大いに書いて見たいのであつた。そこで世を忍ぶ假の名が必要になつた。そして私も相談に與つて出来たのが三宅襄の三字である。何故此の三字が撰ばれたかといふと、君は當時麹町三宅坂を上つた所に居た。即ち三宅のほるである。のほるを上と

以下略
 十二月五日、名古屋梅若会公演は芸術院会員梅若實七回忌追善能。能「二人静」梅若泰之・梅若景英、西村欽也、連吟「半部」林甲子夫・六車真三・真柄米次、仕舞三番「誓願寺」加藤兵衛「松風」殿島修二「小鍛冶」河村鉦二、能「姑」梓之出「梅若六郎」観世武雄、高安滋郎、狂言「無布施経」野村又三郎・井上礼之助、連吟「通小町」塚本秀雄・鬼頭五郎・増田一雄、仕舞二番「隅田川」柴田初太郎「実盛」山本博之、舞囃子「頼政」山本博之、能「安達原」白頭「梅若六郎」高安滋郎、笛の田中一次、大鼓の佐伯実を帯同。
 十二月九日、愛知文化講堂集會室で名古屋梅若会第三回素謡集が催される。素謡三番「菊慈童」梅若修一・岡田朗詠、「井筒」梅若盛義・梅若善高、「安宅」梅若猶詠・井戸良造、松久保博章。
 十二月十一日、熊澤恵美子準師範披露能、第一部の社中会と第二部は一調「葛城」大嶽賢次郎(謡)池田茂、仕舞四番「難波」柴田初太郎「三輪」井戸良造「巻網」岡田朗詠「邯鄲」梅若修一、能「杜若」熊澤恵美子・西村欽也、狂言「福の神」佐藤卯三郎、舞囃子二番「田村」梅若盛義「松虫」梅若万三郎、能「菊慈童」梅若猶義・高安滋郎。
 十二月十二日は第九期第四回名古屋生会定式能。素謡「鞍馬天狗」辰巳孝・馬富富四夫、仕舞三番「経政」戸田秀雄「杜若」吉田俊彦「善知鳥」内藤泰二、能「龍田」倉本雅・西村欽也、狂言「文山賊」井上松次郎・佐藤卯三郎、能「高野物狂」野口禄久・高安滋郎。

十二月十七日、名古屋にもお馴染の大蔵流長老・人間国宝・善竹弥五郎(一八八三・一九六五)死去、享年八三歳。本名・久治、記録では名古屋初演は昭和六年五月二十二日、四十八歳、前月二十五日に舞台披露成ったばかりの布池・名古屋能楽堂に於ける名古屋能楽会の催能で「入間川」の次アト入間何某と「不聞座頭」のシテ太郎冠者を勤める。当日は能が三番あり、「弱法師」橋岡久太郎(47)、「恋重荷」観世左近(36)、「小鍛冶」白頭「大槻十三(41)」と東西から名手が来演する。
 昭和十六年十二月、久治は金春流七世光太郎より弥五郎の名を贈られ改名、更に昭和三十八年十一月、七九世信高より善竹の姓を贈られて一家を挙げ改姓する。当地晩年の舞台は昭和三十九年十一月三日、井上家追善の第四回・名古屋和泉会の小舞「御田」の地頭(シテは十一世茂山千五郎)と小舞「楽阿弥」、そして同年同月十四日の第二回中日名人狂言会(二部制)での「釣狐」アト眞師(シテは十一世茂山千五郎)と「茶室」シテすっぱ、が最後の勤めとなる。円転滑脱、融通無碍とでも言うか、おどかか懐の深い芸は忘れられない。
 十二月十九日は年忘れの楽師会乱能である。舞囃子「高砂」福井啓次郎、能「小袖曾我」鬼頭喜太郎・助川龍夫・池田茂(母)、狂言「芥川」佐藤太俊・小島鉄次郎、独調「蟬丸」増田一雄・鬼頭八郎(謡)、舞囃子「田村」寛三男、能「熊野」説次ノ伝、村雨留・藤行「田鍋惣太郎」田鍋洋一・藤田六郎兵衛(ワキ)、狂言「附子」高安滋郎・西村弘敬・西村欽也、一調「花籃」柴田初太郎・田鍋惣一郎(謡)、舞囃子「玄象」河村総一郎、狂言「仁王」戸田秀雄・内藤泰二ほか宝生会の方々六名、能「狸々」西尾孫太郎・後藤孝一郎、伝統的に中京能楽界の根幹をなす三役の充実ぶりが窺い知れる。
 十二月二十八日、笛方藤田流の金森準三が死去する。大正末から昭和の三分の二を活躍。初舞台は大正十二年三月十一日・呉服町舞台の保能会「竹生鳥」シテ山田良平。

年十月五日・金剛殿・田鍋惣太郎主催能で「道成寺」シテ豊嶋一(のち弥左衛門)小鼓は青木恒治。昭和三十一年九月二十三日・熱田神宮能楽殿の名古屋清韻会能で「卒都婆小町」一度之次第シテ大槻十三、などを披く。最後の舞台は二週間前の十二月十一日の舞囃子「田村」シテ梅若盛義。
 師走も押し詰った二十九日、日本楽壇の大御所であり且つ大先覚者の山田耕筰(一八八六・一九六五)死去、享年七十九歳。
 同日、ロシア文学の大家・米川正夫(一九〇一・一九六五)死去、享年七十四歳。氏は知る人ぞ知る狂言愛好家で「日本古典文学大系狂言集・上」の月報に「私と狂言」と題する好随筆がある。次に一部を抜粋する。
 それから十年ほどたって、謡をやりはじめてから、能や狂言も少し

ばしば見るようになり、先代山本東次郎などの名技に感心しながらも、能の観客の常として、狂言を見ないのが通のすることだ、といったふうの習慣を身につけてしまった。で、自分が狂言を舞台で演じようなどとは、夢にも思っていなかったのは当然である。それを私に実行させたのは、三宅藤九郎氏である。私を藤九郎氏と近づきにしたのは、妹の文子である。妹は客好きで、何かの名目をつけては、しじゅう芸界の名士を招待していたので、私たち二人は妹の家で何度も顔を合わせ、歌ったり踊ったりした。そうした縁で、藤九郎氏は幾度か拙宅へも遊びに来られた。以下略。因に妹文子とは昭和四十一年四月二十五日、近藤乾三・松本謙三と同時に重要無形文化財各個指定(いわゆる人間国宝)の認定を受けた筆曲の米川文子である。

◆初春の舞台から◆

「第47回 井上菊次郎舞台六十年記念 鳳の会」「豊田市能楽堂開館十周年記念 新春能」「第10回 万作を観る会」「名古屋生会定式能」

竹尾邦太郎

「鬼瓦」 訴訟の片が付いたのも日頃から信心する因幡業師のお蔭、と婦人に際し太郎冠者・融を伴いお礼参りの大名シテ弘之、国元へも御堂を建立、お業師を勧請したいとて限々までよく見て置くようアドにも命じ、自身も「見へぬ処までこまかい細工」と感嘆するうち、不図目に留まるは「屋根の上の黒い物は」の疑問、鬼瓦とアドに教えられ、思い当たるは国の妻女。よく似ていると同意するもの困惑気味のアドに、「生き写しぢやわい」と懐しさに落涙するシテ。世に痘痕も笑窪とは言い条、鬼瓦と妻女の面相、比較対照の凄まじさは正に人三化七だが、愛の前では全てが美、朴直且つ善良な大名像

を巧まずみせる弘之の滋味。(15分)

「節分」 たま〜く出雲へ年の家を訪ねた蓬萊の島の鬼シテ友彦に、声はすれど姿は見えぬ訪客を訝る女・靖浩。それと察して隠れ糞・隠れ笠を脱ぐ鬼の正体に驚く女だが、一目惚れの鬼は女の気を惹こうと懸命に島で流行りの小歌を次々に披露、調子づいて小舞謡「狐草」に浮かれ、更に囃に乗る。「この杖の先をちよつと紙つて」などと卑猥な言辞を弄し、杖からの連想は長物尽しの小舞謡「忍ぶその夜」の意味深長。人妻に言い寄る無体も分らず、謡い舞う裡、歓心を買えば何れは靡くであらうの自己暗示も恋に盲目なだ



鳳の会「節分」左より佐藤友彦・井上靖浩 (杉浦賢次氏撮影)

「庵梅」 正先に紅梅の立木、大小前に引廻シを掛けた藁屋、中からへ世に遠く逃れ果てぬる宿りにも、と隠栖の老尼シテ菊次郎、春だに來れば梅の花人待ち顔に咲くからに昔に還る心かな、と艶のある小歌節に独居の気安さ、心境を洩らす聞きつけ、「申し申し尼御前様」と住吉在の女達が観梅に押し掛ける。「よそから見給へまし」とは言うもの折角の来訪、「否と申せば事がまし」とへ道生の小屋の憂戚も花に賑はぬ人心に、の地謡(小三郎)のうちに引廻シが取られ、「心静かに庵の梅を眺めて下され」と老尼、

「妾もゆる〜と遊びませう」とは勿論、相手が和歌の神とされる住吉大社お膝元の女達ならば作歌。さしずめ当世なら短歌のサークル活動に観梅の吟行、旧師を囲む気色。老尼は女達の歌を披露、「とてもこの事にこれに枝に付けさせられ」と短冊を掛けさせると「梅が一入見事に見へます」と満足気。女達が持参

素謡 鞍馬天狗 子方田住喜久雄
 竹内 鏡治 吉田 忠良
 松原 彰雄 中島 暉夫
 渡辺 興作 平田 正文
 常盤 昭雄 石川 達祐
 徳勢 正昭 門脇 善祐
 寺部 良樹 星野 善猛
 仕舞 葛 城キリ
 森 峯子
 歌 占キリ 中林 幸子
 能 羽衣 松村七雅子
 後見 近藤乾之助
 衣斐 正宜
 東川 光夫
 内藤 飛能
 松村 晋也 水上 優
 中村計一郎 金森 秀祥
 酒井 文夫 水戸 輝和
 中村 武史 佐野 登
 北原 寿久 東川 尚史
 河村眞之介 加藤 洋輝
 後藤嘉津幸 竹市 学
 主催 衣斐美寿宜会 (終演五時十分頃)
 名古屋昭和区御器所3-23-19
 御器所パークマンション802
 TEL 052-882-5600
 FAX 052-882-5600

「入場無料」
 附祝言 五雲
 素謡 鞍馬天狗
 仕舞 葛
 歌 占キリ
 能 羽衣
 松村七雅子
 後見 近藤乾之助
 衣斐 正宜
 東川 光夫
 内藤 飛能
 松村 晋也 水上 優
 中村計一郎 金森 秀祥
 酒井 文夫 水戸 輝和
 中村 武史 佐野 登
 北原 寿久 東川 尚史
 河村眞之介 加藤 洋輝
 後藤嘉津幸 竹市 学
 主催 衣斐美寿宜会 (終演五時十分頃)
 名古屋昭和区御器所3-23-19
 御器所パークマンション802
 TEL 052-882-5600
 FAX 052-882-5600



豊田市能楽堂新春能
⑤「翁」金剛永謹 ⑥「三番叟」井上菊次郎



(杉浦賢次氏撮影)



豊田市能楽堂新春能
①新作「拳母之風流」シテ野村小三郎（左端）
②半能「嵐山」左より豊嶋三春・豊嶋晃嗣・豊嶋幸洋
(杉浦賢次氏撮影)

袖被き扇を面に当てる型(写真)も大きい。喜びの舞なれば、一舞まおう萬歳楽、と両袖胸に重ね、軽く頭を垂れる神への恭謙の心、神妙に舞上げると三番叟の舞、菊次郎、一週間のうちに二度動めるのは珍しい。採之段、鳥飛は低く割に長く飛び、鈴之段は千歳が正中へ、三番叟が其処へ出向き鈴を受け取る。賑やかに舞い納め幕へ退くと、面箱は後見が持ち切戸へ、地も切戸へ退き、下り端の登場楽で新作の「拳母の風流」である。

練の賜物に他ならない。舞上げて面と鈴を納め、直垂ノ露を取って立ち、橋懸へ入って露をさりげなくはらりと放つ型の綺麗さ、淡々としていて憎い。千歳は悠樹。(35分)

「二人大名」 体裁を構う博治とアド和憲、通り掛った使いの者・小アド万之介に太刀を持つて貰いたさ、最初は慇懃に持てたす約束を取り付けたつもりで、そんなつもりでは、と持ち洗る小アドだが太刀で嚇され、ば観念せざるを得ない。しかし、考える迄もなく太刀はこちらの手中、俄然小アドは逆襲に転じる。二人の持ち物を取り上げた上、犬の噛み合い、鶏の蹴合い、果ては起き上がり小法師の真似までさせる。これらを繰り返して演じられるうち、喜々として興じてくる二人大名の、苛められて喜ぶ被虐性、息の合った博治と和憲、二人を巧みに操る万之介が舞台を締める。(29分)

「業平餅」 賑々しく行列を三神の一へ詣る業平シテ萬斎、空腹に耐えかね門前の茶屋(アド幸雄)で餅にありつけると思いきや、高貴な殿上人とお足などといった俗世間の通貨を持ち合わせず、目の前の餅に手が出せない。餅の代りに歌を、と申し出て、餅がカチンと言われる故事を語るが、固より商人にカチンは歌賃の洒落、通じる訳も無く受け容れて貰えない。 牧村史陽編・講談社学術文庫

の竹筒(ささえ)酒壺を開けば、いける口の老尼、「どれくも妾はそれへ参つてささをたませう」と庵を出る。お定まりは舞い謡う酒宴の肴、勧められて「許しておくりやれ」とは言うも「妾も心が浮かれる。一つ舞ふてもみませうか」と色気を出し、よろしく立つ腰の曲つた老尼は一見してメタボリック症候群風、へいと物細き御腰に、と貴人の夜這の様を謡う「柴垣」を舞う可哀さ(写真)。

「翁」 健太郎は狂言方、下懸の金剛流では面箱を兼務。シテ方の千歳の舞の直線的な印象と異なり、柔らかな印象を受け。前後するが、冒頭からのシテと地(恭憲・清隆ら)との掛合の間、千歳と三番叟(菊次郎)共に面を伏せ畏まるふうになつたのが珍しい。へ坐して居たれども、で翁と三番叟は同時に立ち対面、三番叟は狂言座へ退き、翁は大小前へ、両手大きく掲げへちはやふる、と舞に。太夫芸の鷹揚はその風格に見え、三ツ拍子を踏むいゆる天地人の三拍子は「人」、左

趣、肌理細かな演出が冴え、先代が未派の三老曲の一を、当代菊次郎立派に抜く。因に立頭アド靖浩、立衆は融・靖雄・郁雄・俊裕(写真右から)、共同社単独で大勢物が出る充実ぶりが嬉しい。(49分・1月6日・井上菊次郎舞台六十年記念 第47回風の会)

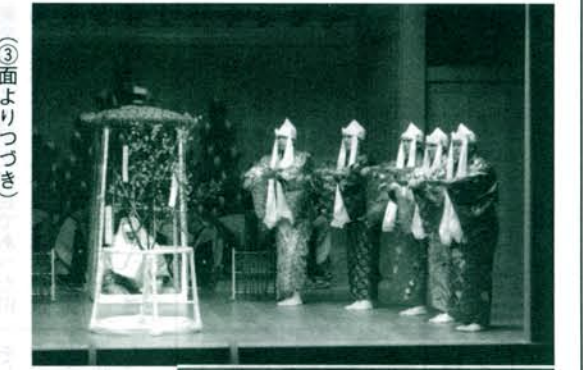
「嵐山」 半能で、まだ風流の子守大明神の残像が脳裏から消えぬ間に下り端で子守明神ツレ晃嗣が勝手明神ツレ幸洋と桜枝を携えて登場とくれば、付き過ぎの感強い印象を与えるとは逆に印象を散漫にし、蔵王権現シテ三千春も力を削がれたのでは、と思わぬでもなかった。(34分) ところで正月の祝能、それも翁付とあれば神事の場に不浄なもの侵入を禁ずる印として張る注連縄の舞台、新設の名古屋能楽堂・豊田市能楽堂ではそれを見ないが、新しい建材に少しも傷を付けたくないという管理者側の姑息な考えなのだろうか。注連縄の張りめぐらされた瑞気漲る清々しい舞台、常とは異なる肅然とした雰囲気の中で、神聖な翁を拝見したものである。(1月12日・豊田市能楽堂 新春能)

「三番叟」 近年は古希を過ぎても何々翁の呼称が活字になつたものを減多に見ない。さしずめ昭和六年六月生の万作は喜寿翁、元氣に益々芸に深みをみせる。体力を甚だしく消耗する三番叟、力溢れるというよりはパネの利いた柔らかな運動の鳥飛の瞬発力、低く二ツ、や、高く一ツ綺麗に飛んでぶれることには無い。腰にきつい鈴之段も、難く鍛えた修

「西王母」 シテ耕司。前は女、三千年に一度咲き実をつける桃花を時の移王(ワキ元)に献じ、君の仁徳を讃え、素性明かすと、へ花の実をも頭さん、と約して中入。後は仙女・西王母、子方ツレ侍女・健太郎に桃実盆を持たせ、へ色々の捧物、の地(正宜・満次郎ら)の返しに「ノ松から運出し、へ西王母の冠を、と舞台に入り、へ農櫻の冠を、と舞指すと(写真)子方から盆を受け取り、それをワキに渡すと大小前へ、達拝掛中之舞。舞上げて一寸

「業平餅」 賑々しく行列を三神の一へ詣る業平シテ萬斎、空腹に耐えかね門前の茶屋(アド幸雄)で餅にありつけると思いきや、高貴な殿上人とお足などといった俗世間の通貨を持ち合わせず、目の前の餅に手が出せない。餅の代りに歌を、と申し出て、餅がカチンと言われる故事を語るが、固より商人にカチンは歌賃の洒落、通じる訳も無く受け容れて貰えない。 牧村史陽編・講談社学術文庫

「西王母」 シテ耕司。前は女、三千年に一度咲き実をつける桃花を時の移王(ワキ元)に献じ、君の仁徳を讃え、素性明かすと、へ花の実をも頭さん、と約して中入。後は仙女・西王母、子方ツレ侍女・健太郎に桃実盆を持たせ、へ色々の捧物、の地(正宜・満次郎ら)の返しに「ノ松から運出し、へ西王母の冠を、と舞台に入り、へ農櫻の冠を、と舞指すと(写真)子方から盆を受け取り、それをワキに渡すと大小前へ、達拝掛中之舞。舞上げて一寸



風の会「庵梅」
①井上松次郎・井上靖浩ほか
②井上松次郎 (杉浦賢次氏撮影)

「二人大名」 体裁を構う博治とアド和憲、通り掛った使いの者・小アド万之介に太刀を持つて貰いたさ、最初は慇懃に持てたす約束を取り付けたつもりで、そんなつもりでは、と持ち洗る小アドだが太刀で嚇され、ば観念せざるを得ない。しかし、考える迄もなく太刀はこちらの手中、俄然小アドは逆襲に転じる。二人の持ち物を取り上げた上、犬の噛み合い、鶏の蹴合い、果ては起き上がり小法師の真似までさせる。これらを繰り返して演じられるうち、喜々として興じてくる二人大名の、苛められて喜ぶ被虐性、息の合った博治と和憲、二人を巧みに操る万之介が舞台を締める。(29分)

「業平餅」 賑々しく行列を三神の一へ詣る業平シテ萬斎、空腹に耐えかね門前の茶屋(アド幸雄)で餅にありつけると思いきや、高貴な殿上人とお足などといった俗世間の通貨を持ち合わせず、目の前の餅に手が出せない。餅の代りに歌を、と申し出て、餅がカチンと言われる故事を語るが、固より商人にカチンは歌賃の洒落、通じる訳も無く受け容れて貰えない。 牧村史陽編・講談社学術文庫

「西王母」 シテ耕司。前は女、三千年に一度咲き実をつける桃花を時の移王(ワキ元)に献じ、君の仁徳を讃え、素性明かすと、へ花の実をも頭さん、と約して中入。後は仙女・西王母、子方ツレ侍女・健太郎に桃実盆を持たせ、へ色々の捧物、の地(正宜・満次郎ら)の返しに「ノ松から運出し、へ西王母の冠を、と舞台に入り、へ農櫻の冠を、と舞指すと(写真)子方から盆を受け取り、それをワキに渡すと大小前へ、達拝掛中之舞。舞上げて一寸

「業平餅」 賑々しく行列を三神の一へ詣る業平シテ萬斎、空腹に耐えかね門前の茶屋(アド幸雄)で餅にありつけると思いきや、高貴な殿上人とお足などといった俗世間の通貨を持ち合わせず、目の前の餅に手が出せない。餅の代りに歌を、と申し出て、餅がカチンと言われる故事を語るが、固より商人にカチンは歌賃の洒落、通じる訳も無く受け容れて貰えない。 牧村史陽編・講談社学術文庫

「西王母」 シテ耕司。前は女、三千年に一度咲き実をつける桃花を時の移王(ワキ元)に献じ、君の仁徳を讃え、素性明かすと、へ花の実をも頭さん、と約して中入。後は仙女・西王母、子方ツレ侍女・健太郎に桃実盆を持たせ、へ色々の捧物、の地(正宜・満次郎ら)の返しに「ノ松から運出し、へ西王母の冠を、と舞台に入り、へ農櫻の冠を、と舞指すと(写真)子方から盆を受け取り、それをワキに渡すと大小前へ、達拝掛中之舞。舞上げて一寸

宝生会①「西王母」左より佐藤耕司・佐藤健太郎
②「蟬丸」左より衣斐愛・和久莊太郎 (宝生会提供)

NHK放送予定(平成20年5月~6月)

Table with NHK-FMラジオ能楽鑑賞(毎週日曜日7時15分~8時) and program details for May and June.

能 楽 の 友

発行能楽の友社

名古屋千種区千種2丁目18-18 (郵便番号 464-0858) 電話 (052) 731-7984

Subscription rates table for 1 year and 1 month for different delivery methods.

演能カレンダー

名古屋能楽堂

Calendar of performances from May 25 to June 29, listing dates, times, and performers.

日本芸術院賞に 一噌 仙幸氏

日本芸術院(三浦朱門院長)は、二〇〇七年度日本芸術院賞受賞者を発表、能楽界から笛方一噌流の一噌仙幸氏が受賞した。

名古屋能楽堂 定例公演番組 平成20年度6公演

平成二十年度の名古屋能楽堂定例公演の上演番組がこのほど明年三月上演まで全六回行われることになり、次のとおり決定された。

金剛能楽堂開館五周年記念公演 金剛能楽堂では開館五周年を迎え、きたる六月二十九日(日)記念公演を開催する。

- 「観世流」能「野守」(黒頭)久田勘助(観世流)、狂言「宗八」今枝郁雄(和泉流)
「6月公演」(初代・義直)
6月5日(木)開演午後6時30分

名古屋観世会定例公演

六月八日(日)十二時半開演 名古屋能楽堂

名古屋能楽堂六月定例公演 六月五日(木)午後六時半開演 名古屋能楽堂

能楽後継者育成研修発表会(第16回) 六月十四日(土)午前九時半始 名古屋能楽堂

若鯨能(第2回) 六月十四日(土)午後一時始 名古屋能楽堂

清経 観世 喜之 武田 大志 後藤 喜之 河村 孝一郎

龍田 番組 六月十四日(土)午後一時始 名古屋能楽堂

京都新能

6月1、2日 平安神宮

「第五十九回 京都新能」は、六月一日、二日の両日、平安神宮で行われる。午後五時半始。

【第一日】能「浮舟・彩色」前シテ塚本和雄、後シテ前田保親、ワキ小林努▽源氏物語千年記念能「紅葉賀」(制作京都能楽会)シテ金剛水蓮、片山清司▽狂言「萩大名」茂山忠三郎▽能「須磨源氏」

藤田六郎兵衛コンサート

6月11日 名古屋能楽堂

能楽笛方 藤田流十一世家元・藤田六郎兵衛氏は、悠久の能管と現代音楽とのコラボレーションを奏でる「藤田六郎兵衛コンサート」をきたる六月十一日(水)、名古屋能楽堂で開催する。このコンサートは、東京公演として5月13日に東京・赤坂のサントリホールでの開催につづき名古屋能楽堂で催されるもので、笛方藤田流宗家に四百年以上受け継がれてきた能管「万歳楽」(まんざいらく)の気品と歌声の音楽的融合により独自の世界が繰り広げられる演奏会。

戦後名古屋能楽史

〔第二十章〕 竹尾 邦太郎

昭和四十一年(一九六六)

一月六日、大鼓方石井流の長老、西尾孫太郎が死去、明治十六年(一八八三)生で享年八十三歳。二日、恒例の田鍋惣太郎宅での打初には囃子「胡蝶」を勤め、三日の能楽協会名古屋支部の新年謡初めには元気な姿を見せたというが(「狂言」紙・第八十六号「狂言人語」)急逝、翌四日の加藤良久が主宰する社中の藤門会で舞囃子四番の役が付いていたが、どうだったろうか。



西尾孫太郎氏

さて、記録に拠る西尾孫太郎の舞台初見得は明治四十三年(一九一〇)一月十六日の第十一回、四音会での囃子「小督」(地謡は宝生流)。四音会は前年の四十二年に発足したらしく、会の名の通り四音は四拍子、笛・小鼓・大鼓・太鼓の囃子方の研修錬成会、装束納の時期に当る盛夏八月を除く各月、毎回概ね十乃至十二・三番の囃子組で行なわれており、催会場所は当時、呉服町能楽倶楽部舞台

(1)面若鏡能番組つづき

〔入場料〕千円(当日も同じ) 出演者・名古屋能楽堂にて販売

〔附祝言〕

〔和泉〕 狂言 仏師 野村小三郎 松田 高義 後見 伴野 俊彦

〔金春〕 舞囃子 小 督 鬼頭 尚久 河村総一郎 大野 誠 柳原富司忠 加藤 英昭 本田 芳樹 小島 芳樹 前田 登樹

〔金剛〕 能 羽衣 鈴村 昌美 高安 勝久 河村真之介 加藤 洋輝 後藤嘉津幸 鹿取 希世 佃 陽子 西脇 和子 大川 陽美 伊藤 雅子 熊谷真知子 加藤かおる 田中 春奈 羽多野良子

〔梅枝〕 竹内 澄子 飯富 雅介 河村真之介 大野 誠 間 鹿島 俊裕 福井四郎兵衛

名古屋宝生会定式能(第52期)

六月十五日(日) 午後一時始

〔入場料〕千円(当日も同じ) 出演者・名古屋能楽堂にて販売

〔附祝言〕

〔和泉〕 狂言 仏師 野村小三郎 松田 高義 後見 伴野 俊彦

〔金春〕 舞囃子 小 督 鬼頭 尚久 河村総一郎 大野 誠 柳原富司忠 加藤 英昭 本田 芳樹 小島 芳樹 前田 登樹

〔金剛〕 能 羽衣 鈴村 昌美 高安 勝久 河村真之介 加藤 洋輝 後藤嘉津幸 鹿取 希世 佃 陽子 西脇 和子 大川 陽美 伊藤 雅子 熊谷真知子 加藤かおる 田中 春奈 羽多野良子

〔梅枝〕 竹内 澄子 飯富 雅介 河村真之介 大野 誠 間 鹿島 俊裕 福井四郎兵衛

梅猶会 名古屋能楽公演

六月二十一日(土) 午後一時始

〔入場券料〕 正会員券年4回5枚綴り 19000円(内、同伴券一枚) 鑑賞券5000円 学生券2000円

お問い合わせは出演能楽師、または左記へ
名古屋宝生会・佐藤耕司方
名古屋市中区島田2-13-10
島田橋住宅211310
電話 052-803-7372
FAX 052-803-7372

〔有料〕 会員券 五千円(全館自由席)

〔二人静〕 梅若 猶義 梅若吉之丞 高安 勝久 河村総一郎 藤田六郎兵衛 立出ノ一声 佐藤 融

〔清経〕 鷺野未千代 小松 勝憲 飯富 雅介 寛 鉦一 後藤嘉津幸 竹市 学 後見 岡田 見一 地謡 小川 晴子 梅若 基徳 梅若 善高 地謡 井戸 良祐 梅若 善久 池内光之助

〔狂言 呂連〕 曾 井上菊次郎 茶屋 佐藤 友彦 妻 井上 靖浩

〔仕舞 通小町〕 岡田 見一 小川 晴子 梅若 基徳 錦 求木 井戸 祐一 地謡 井戸 和男 梅若 修一 池内光之助

幸謡会 能

六月二十二日(日) 午後二時始

〔入場料〕 前売券五〇〇〇円(当日券六〇〇〇円) 申し込みは出演能楽師・公演会場 問い合わせは梅猶会定期連絡所 小松勝憲方(〒511-0851) 桑名市大字西別所106115 電話 0594-23-4582

〔仕舞 三輪正〕 加藤 春枝 久田三津子 前野 郁子 共地 井筒 前野 郁子 共地 葵上 今沢 美和 三村 経布 山姥 三村 経布 仕 蕉 泉 嘉夫 大槻 文蔵 地謡 八神 孝充 山本 正人 齊藤 信隆 清沢 一政

〔卒都婆小町〕 福王 和幸 柳原富司忠 藤田六郎兵衛 後見 赤松 植英 地謡 黒田 博 武富 康之 泉 嘉夫 大槻 文蔵 地謡 八神 孝充 山本 正人 齊藤 信隆 清沢 一政

〔有料〕 会員券 五千円(全館自由席)

TEL (〇五六四) 二二二五二九 岡崎市鶴田本町十一三

第12回公演 関西観世花の会

六月二十九日(日) 開演午後一時

〔仕舞 通小町〕 岡田 見一 小川 晴子 梅若 基徳 錦 求木 井戸 祐一 地謡 井戸 和男 梅若 修一 池内光之助

〔二人静〕 梅若 猶義 梅若吉之丞 高安 勝久 河村総一郎 藤田六郎兵衛 立出ノ一声 佐藤 融

〔清経〕 鷺野未千代 小松 勝憲 飯富 雅介 寛 鉦一 後藤嘉津幸 竹市 学 後見 岡田 見一 地謡 小川 晴子 梅若 基徳 梅若 善高 地謡 井戸 良祐 梅若 善久 池内光之助

〔狂言 呂連〕 曾 井上菊次郎 茶屋 佐藤 友彦 妻 井上 靖浩

〔仕舞 通小町〕 岡田 見一 小川 晴子 梅若 基徳 錦 求木 井戸 祐一 地謡 井戸 和男 梅若 修一 池内光之助

〔二人静〕 梅若 猶義 梅若吉之丞 高安 勝久 河村総一郎 藤田六郎兵衛 立出ノ一声 佐藤 融

(2)面よりつづき

町舞台での名古屋能楽会主催能、仕舞「笠之段」が眺めか。能は大正十四年十月十八日、金春流後援会主催の桜間左陣・桜間金記追善能での「唐船」のシテで二十六歳。この時はほかに桜間金太郎(のちに弓川、一八九九―一九五七)高瀬寿美之輔(のちに寿美之、一八九四―一九六七)金春栄治郎(一八九五―一九七七)桜間道雄(一八九七―一九八三)梅村平史朗(一九〇六―一九七九)が来演。なお、これに先立つ同年三月二十一日、二の両日、田鍋惣太郎が主宰する霞会の一〇〇回記念に観世喜之(初世)の歌声が協賛の能で、金春流からも初日にシテ桜間金太郎ツレ本田秀男で「蟬丸」が出た。

二月二十八日、金春流の重鎮・本田秀男(一八九九―一九六六)死去、享年六十七歳。当地にも度々来演、囃子に精通し、装束付け、いわゆる物着せの上手は夙に知られてをり、観世流柴田初太郎(一八八九―一九八七)は私家版の自著「帰童閑談」中「私は若い頃、金春流の本田秀男とは非常に仲がよく、能の着付、金春の秘伝などについて教えていただきました」と述べている。

三月六日、名古屋観世九草会、先代観世喜之二十七回忌追善の春季社中会、番外に舞囃子「百万」観世武雄、仕舞二番「葛城」有賀滋子、「放下僧」小歌「塚本秀雄、独吟「鐘之段」増田一雄がある。三月十三日は名古屋謡曲仕舞教室(梅田邦久)の主催する第四回鑑賞会。始め「能の鑑賞」の題で能評家・西田三好(一九〇一―一九八五)の講演があり、能「鶴亀」片山慶次郎・実川紀(鶴)、橋晏久

三月四日、国文学者にして「謡曲大観」全七巻(明治書院刊)の著者である能楽研究者・佐成謙太郎(一八九〇―一九六六)死去、享年七十六歳。三月二十日、第五十一回名匠鑑賞会春の恒例宝生大会。能「盛久」宝生九郎・高安滋郎、能「熊野」宝生英雄・内藤泰二・西村弘敬、狂言「花盗人」佐藤三郎、能「小鍛冶」白頭「野口緑久(前)、辰巳孝後、西村欽也。解説文に、流友で「宝生流節の図解」「宝生流地拍子叢書」「九段下より・正統」などの著書があるわんや書店の佐藤芳彦は、「番組の立て方と配役のうまさ」は、名匠

三月二十日、第五十一回名匠鑑賞会春の恒例宝生大会。能「盛久」宝生九郎・高安滋郎、能「熊野」宝生英雄・内藤泰二・西村弘敬、狂言「花盗人」佐藤三郎、能「小鍛冶」白頭「野口緑久(前)、辰巳孝後、西村欽也。解説文に、流友で「宝生流節の図解」「宝生流地拍子叢書」「九段下より・正統」などの著書があるわんや書店の佐藤芳彦は、「番組の立て方と配役のうまさ」は、名匠

三月二十日、第五十一回名匠鑑賞会春の恒例宝生大会。能「盛久」宝生九郎・高安滋郎、能「熊野」宝生英雄・内藤泰二・西村弘敬、狂言「花盗人」佐藤三郎、能「小鍛冶」白頭「野口緑久(前)、辰巳孝後、西村欽也。解説文に、流友で「宝生流節の図解」「宝生流地拍子叢書」「九段下より・正統」などの著書があるわんや書店の佐藤芳彦は、「番組の立て方と配役のうまさ」は、名匠

三月二十日、第五十一回名匠鑑賞会春の恒例宝生大会。能「盛久」宝生九郎・高安滋郎、能「熊野」宝生英雄・内藤泰二・西村弘敬、狂言「花盗人」佐藤三郎、能「小鍛冶」白頭「野口緑久(前)、辰巳孝後、西村欽也。解説文に、流友で「宝生流節の図解」「宝生流地拍子叢書」「九段下より・正統」などの著書があるわんや書店の佐藤芳彦は、「番組の立て方と配役のうまさ」は、名匠

好評の謡曲・仕舞教室... 発表会と能楽鑑賞会... 謡曲・仕舞教室の案内

鑑賞会でなくては見られないと確信をもつていえます」と。なお当地三役のほかに大鼓の飯島佐六が金沢から来演する。三月二十七日、青陽会第九期第三回。番組は仕舞四番「竹生鳥」高橋瞭、「胡蝶」福田幸市、「網之段」加賀敏彦、「小鍛冶」祖父江修一、能「吉野天」塚本秀雄・西村弘敬、仕舞二番「嵐山」石谷初蔵、「雲林院」竹内六郎、舞囃子「養老」佐藤泰俊、仕舞三番「田村」河村鉦二、「桜川」加藤丈太郎、「熊坂」久田秀雄、能「隅田川」観世武雄・高安滋郎、仕舞「葵上」柴田初太郎、狂言「空腕」野村又三郎、能「天鼓」柴田武武・西村欽也。四月三日、名古屋山本観世会大。番外に仕舞「昭君」山本真義、舞囃子「給馬」山本博之・山本勝一(天細女)、山本順之(刀神)。

四月十四日、笛方森田流・森田光風(一八九二―一九六六)死去、享年七十四歳。当地との縁の初めは大正九年(一九二〇)二月二十二日、呉服町舞台での名古屋能楽会主催能での金剛流「老松」と「内外語」の能二番、シテは共に初世金剛蔵。その後、暫く来演はなかつたが昭和六年から十年まで一度宛宛名、順に記すと六年四月二十五・六の両日、布池の名古屋能楽堂舞台抜きの初日「羽衣・盤渉」シテ金剛蔵ワキ宝生新、二日目「石橋・大獅子」シテ観世鏡之丞清実(華雪)、ツレ観世織雄(のちに鏡之丞清房、雅雪)ワキ宝生新。七年三月二十一日、藤田清兵衛重孝追善能で二調一管「江口」森田光風・田鍋惣太郎(小鼓)、金剛蔵(謡)、田鍋惣太郎の自著「小鼓芸話」には「江口」でなく「班女」とある。八年九月二十日、「安宅・延年之舞」シテ金剛蔵ワキ豊嶋要之助、朝日新聞社事業団主催の第一回能楽鑑賞会。舞台は布池でなく市公会堂。九年九月二十二日同所で朝日新聞・名古屋能楽会の共催で「望月」市E.T宝生重英ワキ豊嶋要之助、十年十一月二十六日朝日と能楽会の共催で「翁」金剛蔵(翁)、茂山忠三郎(千歳)、茂山久治(三番三)、場所は広小路・朝日会館、

ホール仮設舞台が三度続く。十二年五月二十三日は田鍋惣太郎先考(亡父)常照院十三回忌追善能の二日目、「望月」シテ野口兼資ツレ辰巳孝一郎ワキ宝生新、十四年四月十六日は藤田六郎兵衛重政四十三回・清兵衛重孝十三回忌追善能で二管「九様乱曲」、何れも布池の能楽堂。当地最後は昭和十五年三月十日の庚辰会「木賊」シテ梅若万三郎(亀堂)ワキ新。因に昭和十三年は「心臓発作のため舞台でたおれ、翌年転地療養のため広島県宮島に移る」と「能・狂言事典」平凡社(前西芳雄)にあるので「千野の摘草」は長らく入手困難な稀観本であったが装を改め、六十二年八月、ベリカン社より復刊された。以下略

「賞茂」シテ香寿子、面増・襟白二・金地摺箔着付・黄地七宝繁文唐織にさりげなく品位をみせる里女。未知の参詣人を見答め、室明神の神職(ワキ和幸)と素姓わかれば親近の情を覚えるか。立てる白羽の矢の謂れ、問われて語るシテ語の坦々とした歯切れのよさは、処女懐胎の奇特をさらりと引き退けて神職に口を挟ませないから。後シテは別雷神、面泥大飛出・赤頭・唐冠赤地稲妻二飛雲文半切・紺地宝輪二飛雲文狩衣の姿に威厳、袖捌き鮮やかにきびくした舞動も爽快。へとろくと、の

「西行桜」西行庵の老木、清閑を築しむ隠棲の西行法師(ワキ茂十郎)、その静寂を破り花見に訪れる都人、花を愛でるところ無下に断わりならず、さりとて望ましくは無い心境は「花見んと群れつ、人の来るのみぞ可恨桜の科にはありける、の一首。西行の風姿は閑居の自儘にあらず白練着付・白大口・黒水衣・掛絡の謹重、気品をみせる。夜更けて姿を現わす夢中の翁は老松ノ精(シテ吉之丞)、面皺尉・白垂・風折烏帽子・暗緑色大口・茶地金立湧淡紅桜文半狩衣の姿、西行の一首繰り返し、桜の科と「西行との問答は骨っぽく説得力。へあた桜の、と作物を出、科の無きを申し聞か花ノ精、と改めて名乗り、西行と対面、共に下居合掌して和めばシテは心の平穏を得、舞グセは浴中浴外花の名所尽し、ケセ留へ花は大堰川、とスミから左へ低く翳してへ井堰に雪や掛かるらん、と正中

へ廻り込み、西行にアシラフの落葉、落花類りの景は即ち別れの時の迫るを伝えるかで印象的。序之舞はいかにも閑雅な趣の品のよさ、西行との去り難い思いは「待て暫し、と招き、へ白むは花の影、と戻るべき洞(ほら)は桜の老木、佯びて咲く花(作物)の頂の目をやれば、自ずから寂寥とした余情、素晴らした。 (1時間14分) 「鶴・白頭」シテ和男。鶴(ぬえ)とは得体の知れぬ人体(んてい)、前シテは丸太舟の舟人、面怪士・黒頭・襟紺・灰色中格子着付・黒練水衣、闇に融ける黒づくめと紛う奇怪な姿を旅僧ワキ和夫に不審され、答められ、鶴の亡霊と素姓を明かし、宮中を悩ませて頼政に射落された仔細を語るクセが冴える。へきと見上ぐれば、と面切つて雲中に、と心持ち面を上げ、上端へ矢取って打ち番ひ、と左膝音たて、目付柱へ矢を放つ型の、たてた音は見事に当って鶴の落ちた音鮮やかに眼



青陽会「千手・郢曲之舞」前野郁子 (杉浦賢次氏撮影)

柳に淀川を流し足に「淀みつ流れつ、と橋懸へ行き二ノ松、打杖を捨て流れ留つて、と右左膝をつくところなど、詞章にそった具象的な型が鮮やかだった。(1時間15分・1月20日梅猶会大阪能楽会館) 「千手・郢曲之舞」雨の中につれく、に、虜囚・平重衡(ツレ邦弘)に酒を勧めんと狩野介宗茂(ワキ勝久)、接待に当る千手シテ郁子は、(小書で重衡の悲境を思いやる次第・サシ・下歌・上つほ舟に押し入れられ、打杖を首

「入場料」全席自由席五〇〇円、学生二五〇円。入場券取扱いチケットぴあ(0570・02・9999) Pコード385・752) 名古屋能楽堂(052・231・0088)



青陽会「松影」左より佐藤友彦、今枝郁雄、鹿島俊裕、江元三津子、杉江久田、三浦賢次氏撮影

「通小町」雨夜之伝、夏安、伝、僧、屈ける里女、（実は小町、ノ幽霊ツレ、孝充）を不審、僧が木の説明の求め、を機に素姓を問えば、里女は僧にアシラヒヘ



青陽会「通小町・雨夜之伝」左より久田勤鶴、八神孝充（杉浦賢次氏撮影）



観世会「葛城・大和舞」観世清和（杉浦賢次氏撮影）

（写真）が、「いかい下手ぢや」と呆れ果てるアト。一所懸命なために前後が見えず、小刀も賭けてしまい、独り野に残されるシテ。キリは、鶯と化したという同名の梅若殿の故事を、己が身に引き較べて歎く語りの哀愁を、梅若殿の本歌取りの一首「初春の太刀も刀も鶯もさ、ぞ帰る本の住家」に籠め、「あ、しないたり」と翻竿を捨て、「しないたり」と入る。素つ恍けたシテに付き合うアトも亦、人の好きがみえ、息の合った出色の舞台。（30分）

歌は省く。重衡が悲運を託つ独白のうち、「ノ松、知らず今日もや、シヤルのも切ない。舞台へ入っては、出家の願ひ断たれた重衡をひたすら慰める千手の、実の籠った問答・掛合が上々。宗茂の執り成して酒宴となるところは、千手・重衡・宗茂の連吟もしつとりと、これも小書で重衡敗残の巡り合わせをいうクリ・サシ・クセを抜き、朗詠してぞ奏でける、から直ぐ肴のイロエ掛中之舞は那曲之舞。舞の途次、一ノ松へ抜けて勾欄に寄り、重衡を見込むと舞台へ背を向けて退り、膝をつきシヤルところ、千手の心情も察しられる。キリは、後朝に引き離れる、と擦れ違い、袖と袖、触れ合うと感傷に浸る間もなく、宗茂が付き随って重衡は発って往

き、千手は二人を追うように常座へ出てシヤリ、左ウケてシヤリ返し地一杯に留めた。（56分）

「蝸牛」長寿に薬効の蝸牛を取って来いと主（アド友彦、頭は黒いなど蝸牛の属性は教えられても実体を知らない太郎冠者（アド郁雄）、「卒爾乍ら其方はかたつむりでは御座らぬか」と戯に横臥する山伏（シテ俊裕）に問へば、「かたつむりを尋ねて何とする」と気色ばむ山伏。その訳を知らば破顔一笑、太郎冠者をからかって囃子物に乗せるだけ、まんまと嵌る太郎冠者の恍けた味が可笑しい。キリは遁甲（人目を晦まし身体を隠す妖術）を用い突き手の気合い、二人を倒して入る。

演者が楽しんで囃子物に浮かれるところ（写真）が味噌。（25分）

市原野辺に住む姥、と仄めかし、へ跡引ひ給へ、と詰足につきつめた思をみせる。後見座のクツロギでなく送り笛で中入するが、かき消す様に失せる心持は余り感じられなかった。

僧が立つて前へ出て下居、経を上げるところへ此度は小町としてのツレが出る。回向を喜び受戒を願う小町、へいや叶ふまじ、と深草少将（怨霊（シテ勘助））幕内からの呪詛は陰々として姿無き声の無気味。へつ、めども我も、と漸く幕は上がり返シ句に幕を放れるところは塚の中から出る心、小書で被衣は用いず一ノ松からへ止れかし、と小町を制し、招くとへ打たる、と離れじ、と何時の間にか小町に迫り、へ袂を取って、引き止める（写真）ぞつとする怖さ。

「葛城大和舞」シテ清和。前は里女、面深井・襟白・白摺箔着付・浅黄地縫箔腰巻・白練垂折。ツレ広谷和夫、喜多雅人、間・善竹隆司、笛・斎藤敦、小鼓・荒木建作、大鼓・守家由訓、太鼓・上田慎也、後見・井上和男、岡田晃一、地謡・梅若猶義、梅若基徳、梅若善久、大西礼久ほか。

全自由席、前売四五〇〇円（当日券五〇〇円）学生二五〇〇円（当日券三〇〇円）

申込み／出演能楽師、大阪能楽会館（TEL06・6373・1726）問い合わせ／梅猶会定期能連絡所（豊田市新千里南町3-18-12、梅若善高方、TEL06・6831・7854

梅猶会大能楽公演

6月7日能3番上演

梅猶会では、平成二十年度第二回の大能楽公演を六月七日（土）大阪能楽会館で上演する。十二時三十分開演（開場は十一時三十分）、能組は次のとおり。

能「頼政」シテ梅若修一、ワキ福王茂十郎、間・善竹隆平

能「左鴻雅義、小鼓・成田達志、大鼓・山本哲也、後見・梅若吉之丞、梅若猶義、地謡井上和男、赤瀬雅則、岡田晃一ほか

狂言「伯母ヶ酒」善竹隆司、上今村嘉太郎、ワキ福王和幸、ワキ

「東北」シテ池内光之助、ワキ江崎啓三、ワキツレ和田英基、松本善昭、間・善竹忠一郎

後見・梅若善高、赤瀬雅則、地謡・梅若善久、梅若基徳、大西礼久、梅若雅一ほか。

仕舞「後成忠度」梅若猶義、梅若善高、「藤戸」井戸和男、「恋重荷」梅若吉之丞。

能「善界」シテ井戸良祐、ツレ今村嘉太郎、ワキ福王和幸、ワキ



観世会「鶯」左より井上菊次郎、佐藤友彦

「景清」左より片山九郎右衛門、梅田嘉宏（杉浦賢次氏撮影）

「鶯」鶯ノ飼主アド友彦、野で囀らせていると、梅若殿ノ家来シテ菊次郎が綱竿を手に現われ、よき獲物とばかりに籠毎もち去ろうとしてアドと一閃着。他人のものとしてアドも欲しければ強奪になるであろうも、梅若殿の心は、シテが床几に凝然として居る。沈痛深刻な景清の人間像が浮かび上がる。松籟に波の音を聴くところ、へさて亦浦は、と立ち、へ寄する波も、と右の柱に両手で掴まり、面を伏せ耳を敬てるのは、これまで諸々の思いに耽けり、思いを反芻する心を反映する。

里人（ワキ勝久）に促され、人丸（ツレ嘉宏）がシテに対面の際は、父の非情を怨み、口説きシヤル娘に、父は娘の肩に手をやり、面を伏せ、へ我を怨みと思ふなよ、と許しを乞うところ（写真）、切々たる情愛をみせ素晴らしかつた。（1時間19分・2月10日・観世会定式能）

発行能楽の友社

名古屋市中種区千種2丁目18-18
(郵便番号 464-0858)
電話 (052) 731-7984
FAX (052) 733-2837
振替口座 00800-6-36393

購読料 1年 1100円
郵送の場合 1年 1800円
一部 100円

能楽の友

NHK放送予定(平成20年6月~7月)

- NHK-FMラジオ能楽鑑賞(毎週日曜日7時15分~8時)
6月29日 狂言(和泉流)「伊文字」 野村 萬ほか
「佐渡狐」 野村万蔵ほか
7月6日 素謡(親世流)「玄象」 野村四郎ほか
7月13日 独吟(宝生流)「三井寺」 今井泰男
7月20日 素謡(金剛流)「女郎花」 種田道一ほか
7月27日 素謡(親世流)「花筐」(再) 武田志房ほか

NHK教育テレビ

- 7月13日(日) (15:00~17:00)
狂言「入間川」(和泉流) 三宅右近ほか
狂言小舞「住吉」(和泉流) 野村万作
能「巴」(喜多流)
シテ・香川靖嗣、ワキ・宝生 閑
解説 金子直樹(能楽評論家)

演能カレンダー

名古屋能楽堂

(能・狂言演能関係)
(TEL 052-231-0088)

- [6月]
29日(日) 関西観世花の会 (有料)
[7月]
2日(水) 名古屋能楽堂中学生芸術鑑賞会 (関係者)
3日(木) 名古屋能楽堂中学生芸術鑑賞会 (関係者)
4日(金) 名古屋謡曲同好会 (無料)
5日(土) 喜多流長袖会能の会 (番組①面)(無料)
6日(日) 名古屋能楽堂7月定例公演(番組②面)(有料)
13日(日) 第9回御落名匠狂言会 (番組②面)(有料)
20日(日) 名古屋観世会普及公演 (番組②面)(有料)
21日(月・祝) 狂言 也留舞会発表会 (番組③面)(無料)
26日(土) 邦謡会 夏の発表会 (無料)
31日(木) まいまい狂言会 (有料)

久田勘鷗の会20回記念
能「道成寺」上演
10月19日 名古屋能楽堂

シテ方親世流・久田勘鷗師は、同師が主宰する「能・久田勘鷗の会」の公演が20回を迎え、今秋10月第二十回記念特別公演として、きたる10月19日(日)名古屋能楽堂で能「道成寺」赤頭が上演される。

豊田市能楽堂は、開館10周年記念公演として、きたる7月21日(月・祝)豊田市能楽堂で「ろうそく能」(シテ梅若六郎)、「狂言(和泉流)善知鳥」を開催する。

「善知鳥」「釣狐」上演
「釣狐」(シテ佐藤友彦)、「和泉流狂言」が上演される。(番組②面)
開場は午後5時、開演午後6時。入場料は6000円(全自由席)

豊田市能楽堂開館10周年記念公演「善知鳥」「釣狐」上演
「善知鳥」(和泉流) 梅若六郎、森 常好、河村総一郎、柳原富司忠、藤田六郎兵衛
「釣狐」(和泉流) 白藏主 佐藤 友彦、氣師 佐藤 融
大鼓 河村総一郎、笛 大野 誠、小鼓 柳原富司忠

「善知鳥」(和泉流) 梅若六郎、森 常好、河村総一郎、柳原富司忠、藤田六郎兵衛
「釣狐」(和泉流) 白藏主 佐藤 友彦、氣師 佐藤 融
大鼓 河村総一郎、笛 大野 誠、小鼓 柳原富司忠

第2回吉田城薪能
8月2日 豊橋 吉田城本丸跡

喜多流能「船弁慶」和泉流狂言「呼声」喜多流舞囃子「松風」が上演される。(番組②面)
開場は午後5時、開演午後6時。入場料は6000円(全自由席)

ろうそく能公演
七月二十一日(月・祝) 午後五時始

「釣狐」(シテ佐藤友彦) 二番組①面
午後4時30分開場、午後5時開演。
入場料/全席指定(税込)
正面席六〇〇〇円、脇・中正面席四〇〇〇円、学生半額
チケット取扱い/豊田市能楽堂・チケットぴあ(0570-02-9999) Pコード384・88

7月30・31日
ろうそく能
大槻能楽堂自主公演

大槻能楽堂では、自主公演能7月公演として、「蠟燭能」を7月30日、31日の2日間上演する。開演はいずれも午後7時30分
第一夜 7月30日(水)
狂言「空腕」(野村萬斎、石田幸雄)
能「善界」白頭(シテ上田拓司、ツレ澤幸祐、ワキ福王茂十郎、ワキツレ福王知登、喜多雅人、アイ高野和憲)

喜多流長袖会能の会
七月五日(土) 午前十時半始
名古屋能楽堂

第2回吉田城新能

八月二日(土)六時開演
豊橋公園吉田城本丸跡
(雨天:豊橋中学校体育館)

番組

ご挨拶 栗谷 明生
野村 萬斎
火入れ 野村 萬斎
舞囃子 松風 長田 曉
後藤孝一郎 大野 誠
地謡 佐藤 郷
長田 郷 栗谷 充雄
内田 成信 大島 輝久

狂言 呼声

太郎冠者 野村 萬斎
主 大野 誠
太郎冠者 高野 和憲
子方 定盛 友紀
栗谷 明生
河村真之介 加藤 洋樹
福井四郎兵衛 一噌 幸弘

船弁慶

間 則久 英志
森 常太郎
後見 狩野 了一
友枝 雄人
地謡 佐藤 陽 金子敬一郎
栗谷 浩之 長島 茂
大島 輝久 内田 成信

戦後名古屋能楽史

〔第二十章〕 竹尾 邦太郎

昭和四十一年(一九六六)

—承前—
四月十七日、観世会定式能第二回。素謡「葵上」尾関健太郎・林甲子夫、犬飼末吉(ワキ)、奥善助(地頭)、仕舞三番「田村クセ」加藤丈太郎、「安宅」丹下三義、「小鍛冶キリ」河村鉦二、能「経正」橋岡久共、西村弘敬、仕舞三番「加茂」奥善助、「雲雀山」高橋静夫、「遊行柳」柴田初太郎、能「誓願時・乏佐之翔」観世鏡之丞・高安滋郎、狂言「墨塗」和泉保之、仕舞「舟弁慶」観世静夫、能「天鼓・弄鼓之舞」武田太加志、西村弘敬、大鼓に葛野流瀬尾乃武(67)の来演。

四月二十四日は名古屋久田観正会・上田隆一17回忌追善の社中会、社中の女流吉川宇良子による同山も全員女性という珍しい「安宅・勸進帳」がある。子方は上田

夏休み親子能楽教室

8月5・6日 名古屋能楽堂

名古屋文化振興事業団、能楽協会名古屋支部では、小学校3年生から中学校3年生までの児童、生徒とその保護者を対象に、8月5日・6日の2日間、名古屋能楽堂「夏休み親子能楽教室」を開講する。
募集人員は30組60人(ただし定員を超えた場合は抽選となる)
参加費/親子1組1000円
(当日は、白足袋持参で必ず長ズボンを着用)
参加要項は次のとおり。
とき/8月5日(火)、6日(水)の2日間、午前10時~午後2時30分
会場/名古屋能楽堂 能舞台・

けい古室ほか
曲目/能「羽衣」
内容/1日目「仕舞と謡の練習」
2日目「能面体験」「能面と天女の面をつけて歩いてみよう」
能舞台での発表会
講師 観世流シテ方/梅田邦久、梅田嘉宏、武田大志
〔申込方法〕はがきに、住所、氏名(親子とも)、電話番号、学校名、学年、性別を記入のうえ、次の宛先へ郵送(ファックスも可)
申込先(〒460-0001)
名古屋市中区三の丸一丁目一
名古屋能楽堂「夏休み親子能楽教室」係
締め切り平成20年7月18日(金)必着。
問い合わせ 名古屋能楽堂(電話052-231-0088、FAX052-231-8756)

名古屋能楽堂7月定例公演

市民能楽セミナー

七月六日(日)午後二時開演
名古屋能楽堂
解説「囃子の世界」藤田六郎兵衛

因幡堂

狂言 因幡堂 男 松田 高義 妻 藤波 徹
後見 伴野 俊彦
子方 園田 光輝
長田 曉
飯富 雅介
橋本 幸
後藤孝一郎 加藤 洋樹

船弁慶

後見 平塚 昭子
加藤 誠子
地謡 加藤 領一 和谷 衡市
森田 克彦 高林 伸二
伊藤 俊介 松井 郷
英毅 長田 郷

〔有料(前売り) 指定三〇〇〇円、自由一般二五〇〇円 学生一五〇〇円(当日券は五百円増)〕
名古屋能楽堂(052-231-0088)
プレイガイド(栄プレチケ92・松坂屋ほか)
ナディアパーク7階PG(052-2665-2015)
チケットぴあ(0570-02-9999)
お問い合わせ 名古屋能楽堂(052-231-0088)

第9回御洒落名匠狂言会

七月十三日(日)午後一時三十分始 名古屋能楽堂

靱猿

(和泉流) 大名 井上菊次郎 太郎冠者 今枝 郁雄
猿 井上 靖浩 小猿 井上 蒼大
地謡 鹿島 俊裕
後見 大野 弘之
今枝 郁雄

磁石

(和泉流) 人 商人 三宅 右近
田舎人 三宅 右矩
宿屋 高沢 祐介
後見 金田 光明

物八

(大藏流) 惣八 大藏彌太郎
有徳人 大藏千太郎
出家 大藏吉次郎
後見 大藏 基誠

金岡

(和泉流) 舞囃子 羯鼓 大鼓 河村鉦一郎 笛 大野 誠
小鼓 後藤孝一郎
今枝 靖雄 井上 菊次郎 大鼓 河村鉦一郎 笛 大野 誠
今枝 郁雄 小鼓 後藤孝一郎

〔終演予定 午後四時二十分頃〕
主催 狂言 共 同 社
後援 愛知県 名古屋 市
名古屋 市 文化 振興 事業 団
中日新聞社・愛知県芸術文化協会

前売券(全席指定)
S席八〇〇〇円、A席六〇〇〇円
B席四〇〇〇円(当日券は全席一〇〇〇円増)
〔チケット取扱〕
0570-02-9999
(Pコード 386・071)
ファミリーマート、サンクス、
セブンイレブンでも扱います。
名古屋能楽堂窓口(052-231-8064)
ナディアパークプレイガイド(052-2665-2015)
●狂言共同社(052-834-8607)
●同・佐藤事務所(052-911-8784)

名古屋能楽堂定例公演能
—普及公演—
七月二十日(日)午前十一時半開場
十二時半開演
名古屋能楽堂

千鳥

狂言 千鳥 太郎冠者 佐藤 融
主人 大野 弘之
後見 今枝 郁雄

蝉丸

仕舞 蝉丸 松山 幸親
祖父江修一
地謡 八神 孝充
小島 一英 加賀 敏彦

大江山

仕舞 大江山 松山 幸親
祖父江修一
地謡 八神 孝充
小島 一英 加賀 敏彦

阿漕

前シテ 久田 勘助
後シテ 飯富 雅介
河村真之介 鬼頭 義命
後藤嘉津幸 竹市 学

〔要会員券〕
当日券五〇〇〇円(自由席)
(枚数に制限があり、売り切れになります)
主催 名古屋能楽堂
事務所 名古屋市中区昭和区台町2-16-15
(梅田邦久方)
電話 052-841-4632
FAX 052-841-4632

②面よりつづき
六郎が当地最後の舞台である。
このとき六十七歳。なお四十年代
の四度の来演のうち四十三年三月
十七日の第五十六回名匠鑑賞能で
の「高野物狂」(シテ宝生英雄)
「土蜘蛛」(野口禄久)を除けば全
中日五流能の中日劇場ホール舞台
の出勤。

四月二十九日、名古屋清韻会
能。素謡「藤戸」杉村竹翠・小林
二郎・田村勇(地頭)、独吟二番
「鐘之段」加藤総兵衛、「玉取」
岡田光敏、能「蟬丸・替之型」大
槻文蔵・殿島修二、岡治郎右衛門、
仕舞四番「難波」稲生芳雄、
「放下僧」加藤良久、「杜若」泉
康強、「龍虎」山中義滋・柴田取
武、能「卒都婆小町」一度之次
第「大槻秀夫、岡治郎右衛門、狂
言「伯母ケ酒」野村又三郎・佐藤
卯三郎、仕舞四番「雨之段」柴田
初太郎、「笠之段」田村勇、「鶴
之段」宇治正夫、「枕之段」山本
順之、「一調」山姥「鬼頭八郎・梅
若盛義(謡)、舞囃子「熊野」観世
寿夫、能「海士・懐中之舞」泉嘉
夫・西村欽也、大鼓に大倉流山本
敬一郎が来演。

五月一日は当地観世流各社中の
婦人達を糾合して結成された謡調
会が十五周年を迎えての記念能。
番外に各社中の師匠筋から仕舞六
番がある。「小鍛冶」加藤正光、
「網之段」塚本秀雄、「笹之段」
中川清、「玉之段」南條秀雄、
「笠之段」観世武雄、「枕之段」
柴田初太郎。

五月三日、漱石門の日本学士院
会員、小宮豊隆(一八八四—一九
六六)死去、享年八十二歳、東大
独文科卒・ドイツ留学・独文学者
にして演劇評論家。自著「演劇論
叢」昭和十二年二月一日・聖文閣
刊の序に次のように言う。

是は明治四十四年から大正四年
へかけての、私の演劇に関する批
評を集めたものである。その後の
ものも多少這入っているが、余が
が、然しそれは要するに余波に過
ぎない。私の演劇批評家としての
生活は、その、明治四十四年に始
まって大正四年に終ったと言っ
ていいのである。大正五年には漱石

先生がなくなった。その後の二三
年、私は私の使用し得る一切の時
間と努力を挙げて、「漱石全集」
の編纂に従事しなければならな
かった。私には芝居をなしてゐる暇
がなかった。その上私はその間
に、自分が過去にして来た仕事を
反省して見て、それが何の実績を
も挙げ得てゐない事を、悲しく認
識しなければならなかつた。自然
私は、自発的にも芝居から遠ざか
り始めた。数へて見ると、それも
もう二十年以上の昔の事である。

後略
著書はそのほかに「芭蕉の研
究」昭和八年十月五日・岩波書店
刊、「夏目漱石」昭和十三年七月、
岩波書店刊(のちに昭和二十八年
に三分冊として改訂刊行、更にこ
れが昭和六十二年に文庫化され
る)があり、また能楽にも造詣が
深く、「能と歌舞伎」昭和十年一
月・岩波書店刊、「芭蕉・世阿弥・
秘伝・勘」昭和二十二年二月・白
日書院刊がある。

五月五日、殿島修二の主宰する
社中・風韻会創立三十周年記念
能。番外に仕舞二番「加茂」大槻
文蔵「祝言・岩船」大槻秀夫。
五月十一日、経済学者・教育
家、のち慶應義塾大学塾長・小泉
信三(一八八八—一九六六)死去、
享年七十八歳。

五月十四日、名古屋猶会春季
大会。番外に独吟「放下僧」小
歌「大嶽賢次郎、舞囃子「田村」
梅若猶義。
五月十五日は鳳鳴会。番外に素
謡「鶴亀」武田小兵衛・真柄米
次、仕舞四番「屋島」丹下三義
「玉鬘」加藤丈太郎「邯鄲」松木
千冬「小鍛冶」小島一英、仕舞四
番「雨月」柴田初太郎「葛城」中
川清「松虫」岡久雄「車僧」津田
康由、舞囃子「祝言・岩船」武田
太加志。

五月十六日、観世流杉浦義朗門
の国枝照清死去。存命中は専ら地
謡を務めた。
五月十七日は梅若高秀(もと春
雄)を名乗る。前名春男、亀堂梅若
万三郎の次男。明治三十四年四月
十三日(昭和四十四年)死去、享
年五十五歳。後嗣は善高、梅猶会
に所属。

五月二十四日、名古屋梅猶会素
謡会が愛知県文化会館集会所で行
われる。素謡三番「富士太鼓」梅
若善高・岡田晴義・杉村竹翠ワ
キ、「隅田川」梅若猶義・岡田
晴義・梅若盛義ワキ、梅若修一
(ワキツレ)、「玄象」梅若猶義・
熊沢恵美子(ツレ)岡田朗詠(師長)
井戸良造(ワキ)

五月二十九日、第十一回中日五
流能は前年まで七年間使用してき
た愛知文化講堂から所を新設成つ
た中日劇場に移し、開場記念の柿
落シ公演。例により第一部・第二
部と分け自慢の小書能各三番。第
一部は能「鶴亀・曲入」宝生九郎
・高安滋郎、能「百万・法楽之
舞」観世元正・松本謙三、狂言
「ぬけがら」茂山千作・千五郎、
仕舞三番「花月」豊嶋弥左衛門、
「遊行柳」大西信久、「巴」喜多
節世、能「卒都婆小町」金春栄治
郎・久保田巨亮。第二部は能「藤
戸・蹠之伝」梅若万三郎・松本
謙三、仕舞三番「阿漕」辰巳孝、

「忠度」藤井久雄、「融」金春信
高、狂言「種酒」三宅藤九郎・
和泉保之・三宅石近、能「花筐」
舞入「後藤三三」岡治郎右衛門、
能「山姥・白頭杖之型」金剛殿・
久保田巨亮、ほかに当地を除くシ
テ方に梅若万三郎、金春欣三・金
春見実・本田光洋、馬場富四夫、
今井幾三郎・広田泰三、粟谷菊生
ら、囃子方に森田光治・森田光
春、北村一郎・曾和博朗・大倉長
右衛門、谷口勝三・亀井俊雄・齊
田喜兵衛、金春惣右衛門の来演が
ある。

道子、舞囃子「胡蝶」辰巳孝、狂
言「謀生ケ種」野村又三郎・井上
礼之助、能「小鍛冶」吉田俊彦
(前竹腰勝一)後高安滋郎。
六月七日、大戦直後は文部大
臣も務めた学習院大学院長で能楽
協会顧問の安倍能成(一八八三—
一九六六)死去、享年八十二歳。
「能楽タイムズ」紙七月号は「入
院中の五月九日、見舞のため姿を
見せた小泉信三氏がその翌日に急
逝されたのが、非常に大きな衝撃
であつたといわれる」と報じて
いる。漱石門下として師と同じ下
懸宝生流の宝生新に就き、素人の
城を脱していったという安倍能成
は、維新後の能楽の前途を案じて
進むべき道を切り拓いた池内信嘉
(一八五八—一九三三)主著に
「能楽盛衰記」上下二巻の大著。
大正十五年五月・能楽会刊があ
る)、その実弟で俳人・高浜虚子
(一八七四—一九五九)兄の影響
下、実技は勿論、「実朝」(奥の
細道)などの新作能を物し、能隨

春の舞台から(その二)

「茂山千作文化勲章受章記念・第三回千
作千之丞の会」と「名古屋能楽堂定例公
演」宝生流十八代宗家宝生英雄十三回
忌追善・名古屋宝生会定式能

竹尾邦太郎

予て太郎冠者(シ
テ千之丞)が臆病者
と知る主(アド千五
郎)、偽りの腕自慢を懲らしめる
つもりもあるが、七ツ(申の刻
・午後四時過ぎ)下り、明日の客
を持て成すためと流へ鯉を求めに
やる。なお「清水」にも主が太郎
冠者に茶の湯の水を野中に汲みに
やるのも七ツ下り。

七ツと云えば、お江戸日本橋七
ツ立ち、の童謡思い出すが、こち
らは寅の刻の払曉、午前四時頃で
ある。「狂言不審紙」笹野堅校訂
・改造文庫昭和十八年七月刊に
「淀は京より南の方三里に有。淀

の鯉は名物也」とある。コイ科の
魚は寒鰯を持ち出すまでもなく寒
くなつてからが最も美味、季節は
当然暮れ易い秋から冬、独り待ち
伏せに脅えながら往く片道三里の
街道、夏はいざ知らず、寒けに胴
震いも出ようというもの。幽霊の
正体見たり枯尾花、を地でゆく太
郎冠者の独演は、立木や杭を待ち
伏せと見間違え、馬の脊を口繩
(蛇)と錯覚、更には居もしない群
盗に主の太刀を進上して命乞い。
憶病を案じ跡を跟けた主は、「余
の者に取られては成まい」と太刀
取り戻し、「がっつきめ」と背中打
ち据えれば、斬られたと早とちり

筆の趣の「能楽遊歩」昭和十七年
六月廿日・丸岡出版社刊の著作も
ある)と同郷の伊豫松山の生ま
れ、能に好くのはその土地柄・環
境にもよるか。因みに師と慕う
漱石(一八六七—一九一六)が松山
中学へ赴任して来たのは明治二十
八年(一九九五)、安倍能成が松山
中学を卒業したのは明治三十四年
(一九〇一)、どこかで接点も。
その後、上京して東大哲学科を卒
業するが、一高在学中に巖頭詠の辞
を残して自死した友人藤村操に強
い衝撃を受け、人生如何に生くべ
きかに思索を深めていったこと、
想像に難くない。哲学者・教育家
として専門の著書多々ある中、異
色は「能楽雑叢」昭和二十三年九
月五日・齋藤書店刊である。その
「序」は示唆に富み有益、以下に
転載する。

に失心の太郎冠者、蘇生(?)して
帰り、主に武勇伝を聞かせる辺り
も然りながら、冥途の闇と観念の
うちに、徐々に己れの立場が分明
になつてくる辺りの情景描写は、
地理に知悉した千之丞には御当地
狂言の旨味、武勇譚の動きと相俟
つて益々盛んは嬉しい。「どこや
らが正直なお方」と太郎冠者に言
わしめ、組み易しと思わせて太
郎冠者の強弁を素知らぬ顔で聞く
主・千五郎、人の悪さをまた旨く
描写。(37分)

和歌の神・玉津
「業平餅」鳥明神詣の業平
(シテ七五三)、初
冠(追懸・巻纏)紫指貫・浅黄業
平委文章狩衣、供揃えして一ノ松
へ来か、ると、空腹は早くも茶屋
を見つけ、舞台へ入れば傘持(あ
きら)と太刀を持つ稚児(茂山英
を)を残し、早速、供の者を「勝手
行て休め」と追いやり、亭主(正
邦)に餅を所望するが、雲上人ゆ
えおあしが要るのが分らず、料足
(代価)を両足と勘違いの珍問答で
埒が明かない。さればと業にも絶
望の思いは、歌賃がかん(女房調・
搦飯カチイから餅の意)に通じ

るやも、の思いを託して語る餅を
かちんと言う謂れ。床几で語るそ
の一所懸命も通じないと分り、
「先づ」と立つて餅尽しの小舞を
舞い出せば、その真摯さにほださ
れ、真実無銭と分つた亭主、素姓
も在原業平と分り、餅を食わず代
りに持ち出す娘(逸平)の宮仕えの
幹旋。

餅に舌鼓を打つ業平を、遙かア
ヒ座から眺め、不貞腐れ恨めしそ
うに背を向けごろんと横臥する傘
持。この情景が惹きつける。「申
し申し業平様、もうお発ちになり
ますか」と可憐な声で呼び掛け切
戸へ退く稚児、そこへ大柄な茶屋
の娘、対照が面白い。期待が大き
かっただけに、醜女と分つたとき
の業平の狼狽、押し付けられて動
顛する老傘持、高が餅のために曝
け出された男のエゴ・浅ましき、
笑つてばかりも居られない。(35
分)

狂言 也留舞会 発表会
七月二十一日(月・海の日)
名古屋能楽堂
【第一部】午前十一時開演
末広 果報者 伴野 俊彦
茶壺 スッパ 伊藤 悦子
謀生ケ種 男 磯村 美和
狂言小舞 此の川波 平山みよ子
薩摩守 旅 伊達 義子
蝸牛 山 伏 柴田 聖子
【第二部】午後二時開演
鬼瓦 大名 太田 育子
口真似 太郎冠者 小林 義昌
雷 雷 伊達 義也
杭か人か 太郎冠者 三浦 思季
不須 太郎冠者 田端 奏衛
寝音曲 太郎冠者 吉村由紀子
鍋八撥 嶋鼓亮 伊藤 泰
【御来場歓迎】(入場無料)
(主催)也留舞会
(指導)野村小三郎
(連絡先)野村事務所
名古屋市中区平和一丁目二十番四号
TEL(052)3501797
FAX(052)3501792
武蔵野大学(武蔵野市関前)で
は、平成20年度能楽資料センター
公開講座として、「能と源氏物
語」をテーマに6月からセミナー
を開催、7月17日(木)「女君た
ちの恋の思い出」講師・法政大学
山中玲子氏▽9月25日(木)「歌
から見た源氏物語と能」歌人水原
紫苑氏。▽10月30日(木)「謡い
舞う源氏の世界」能楽師・浅見真
州氏。聴講無料、時間/午後2時
40分~4時10分。問い合わせ/武
蔵野能楽資料センター(電話04
22・52・6618)



名古屋能楽堂定例公演「融・究」シテ・久田勘鷗



(杉浦賢次氏撮影)

③面よりつづき
京辺の者と名乗る粹人(アド千之丞)が月見に。座頭の月見を訝れば、虫間の趣味人と分って意気投合、逆に座頭から歌を所望され、待ってましたと許りに詠む人口に贈った古今集は阿倍仲麻呂「天の原ふりさけみれば」の月の一首は「きりぎりす鳴くや霜夜のさむしろに」で始まる新古今集は藤原良経の歌。互に古歌をひけらかした操ったさは破顔大笑、一氣に親密度を増して酒になるところなど、巧まざる自然体の妙は八十有余年に亘るコンビの賜物。座頭に乞われ着に舞う上京ノ男の、今宵の月は隈ない月ぢやよの、と謡う「葎の葉」に座頭は聞き耳を立て、「殊の外よいお声で」は正にその通りの艶のある千之丞の美声、それを楽しむ千作の慈顔も亦うつくしい。「段々と賑やかな事で御座る、は、は、と、この度は奥に乗り勧められるま、おおう見るとよ、と杖取って立つと

「弱法師」の一節、地を千之丞に謡わせて舞う千作の迫真の舞も高輪は争えず、荒い呼吸が痛々しいが、舞上げ「無調法致しましたな」にまた一献、と今の骨折に勧められて更に「ござんざ、の連吟。強靱逞しい芸への執心・力に唯々感服。
キリは別れの後、戻った男に喧嘩を仕掛けられ、小歌機嫌が一気に冷めてしまふところの機微。酒に気分が昂揚してきた頃合い、茶目っ気のある男に萌した悪戯心は、一寸からかかってやろうといつた辺り、弱い者苛めの誘いは免れないが、人間の持つ善悪の二面性などと、それ程深刻に思えなくなっている今の印象はクサメ留メにあるのかも知れない。ともあれ千作・千之丞の、力みのない自然体の円熟の舞台が素晴らしい。
(27分・2月29日・茂山千作文化勲章受章記念第三回千作・千之丞の会・金剛能楽堂)

「腰折」が拝み難う御座る」と嘆く祖父(おおち)
「腰が屈んで日月を掛けたら、小歌機嫌が一気に冷めてしまふところの機微。酒に気分が昂揚してきた頃合い、茶目っ気のある男に萌した悪戯心は、一寸からかかってやろうといつた辺り、弱い者苛めの誘いは免れないが、人間の持つ善悪の二面性などと、それ程深刻に思えなくなっている今の印象はクサメ留メにあるのかも知れない。ともあれ千作・千之丞の、力みのない自然体の円熟の舞台が素晴らしい。
(27分・2月29日・茂山千作文化勲章受章記念第三回千作・千之丞の会・金剛能楽堂)



名古屋宝生会「清経」宝生和英 (写真=宝生会提供)

シテ菊次郎の腰を治そうと山伏(アド靖造、自慢の行力を駆使するが、伸縮自在にみえてどちらも行き過ぎ制御不能。呪文を唱え折る度にギクシャクした動きをみせる祖父は、操り人形の見せる人形振や初期ロボットに似てごちない振を巧みにみせる。太郎冠者(小アド俊裕)が慌しく突っ走り棒をするも床几から転げ落ちる祖父。「許して下され」と逃げる山伏を「捕らえてくれ」と追う祖父、過ぎたるは猶及ばざるが如し、の教訓。(25分)

「融・究」 番組に小書の記「ワキ勝久」の「思立之出」(今合返)。「思ひ立つ心ぞしるべ、と飄然旅に出る心に幕を放れると一ノ松、名宜から夕べを重ね朝毎の、の返シ句をへ朝毎の、と返シ舞台に入る。
前シテ沙汰の老翁(勘鷗)は田子を手繰らず橋懸を出ると、うら寂びた景に我が身を重ねて述懐するサシ・下歌・上歌を省き、旅僧との問答のうちに舞台へ。乞われて語る塩釜の浦を写した訓れ、名所教も坦々とした感じで孤高の人を思わせる。奥に乗じた長話に忘れの沙汰、ハタと思いつく打合から「先づいざや」と田子を取りに「一ノ松へ、手繰らず荷ない戻ると、へ汲めば月をも、と田子に目を眺め(写真)、左、右、とがり田子を投げ出すと底が上になり、起すようにもう一度汲み、田子を下ろして背後に荷竹を捨て中入するところ、両の田子の上にその荷竹がびたりと載り、田子を投げ出した時の音の大きさが帳消しになる

「半部・立花」 (ワキ雅介、能力(アヒ友彦)に立花供養を行なう旨を触れさせると、後見が立花の作物を持ち出して正先に据える。僧は立花の前で「敬って申す云々」と供養をし、能力は切戸へ退き、僧はワキ座に戻ると、里女(シテ雅)が大アキラヒで出る。「手に取れば手ぶさに穢る立てながら」と謡い(写真)、三世の仏に花奉る、と立花へ合掌、手向ける白い花を不審する僧と問答に。面増・襟白二

「清経」 清経が入水して果てた、の報を齎らし遺髪を届ける淡津三郎(ワキ勝久)、應對する妻女(ツレ飛龍)との問答が聞かせる。「なに身を投げ空しくなり給ひたるとや、の語気には失望落胆の驚き。
清経(シテ和英)が古のことも語り、妻女の怨みを鎮めたいと願う入水時の心境はクセ中、「月に嘯く気色にて、と大小前でスミへ月の扇、正面を船の軸先とみて出ると眼前に大海原を彷彿とさせ、へ腰より横笛抜き出し、と文字通り笛に擬した扇を腰から抜き出す様に前へ出し(写真)、愛用の笛を慈しむように眺めるところ、胸中去来する諸々も思われ沁々とした情趣。これからの流儀を荷う若いシテとツレ、自重して今後の活躍を大いに期待したい。(1時間3分)

「悪太郎」 予々粗暴な振舞を藤(非難)と漏れ聞く悪太郎(シテ靖造)、詠えた長刀を見せる口実に伯父を訪ね、威を奮い酒に与り、泥酔の果ては路傍に酔臥。この辺り酒の勢いを借りた無邪気な猛者(もさ)、靖造の柄に嵌まる。跡を付けた伯父、案の定とばかり悪太郎の大髭を刺り、身辺を僧形に替え、「今日よりは善心となって後生を願へ、即ち汝が名を南無阿弥陀仏と付けるぞ」と喝を入れ、ば、意識下にそれが刷込まれ、南無阿弥陀仏と聞くと機械的に反応して仕舞う。
そこへ六字の名号を唱え通り掛かる僧(小アド菊次郎)、我が名を呼ばれたと反射的に返事をし、僧にまつわりつく悪太郎こと南無阿弥陀仏。初め気味悪がついていた僧も様子判れば、「浮からかいてやらう」と踊り



名古屋宝生会「悪太郎」井上靖造・井上菊次郎 (杉浦賢次氏撮影)

「海人・懐中之舞」 宜(前は霊、後に龍女)、子方、侷(海人の遺児・房前大臣、ワキ元ワキツレ正樹・宰(房前ノ從者)、アヒ俊裕(浦人)。
眼目は玉之段、房前大臣が海底に映る月を見るのに支障がある、と海松漢を刈るよう海人に用命する從者に、昔も似たような試みがあった、と海人。龍宮に取られた名珠を取り戻すため海底に潜つたのも此処の海人、と求められてその時を再現する。小書で床几の型、へ空は一つに雲の涛、と右へ高く眺めるのはいざ潜らんとする陽の射す海中から見上げる心、へ海漫々と分け入りて、と正へ直しつづつ両手を挙げ大きく二つ掻き分けるのが潜水水中を如実にみせ、へ大悲の利剣を、詞通り剣に擬した扇を額に当て、乗込拍子に飛び入る心、へ左右へばつとぞ、と指分、へその隙に、床几を立てつ、きびくした具象の型の連続が素晴らしかった。
後シテ龍女は面橋姫、小書で経巻を懐中して舞い、舞上げた子方へ渡すと退り、へ今この経の徳用にて、と子方を指シ(写真)有難さを強調するか。(1時間27分・3月16日・宝生流十八代宗家13回忌追善能)

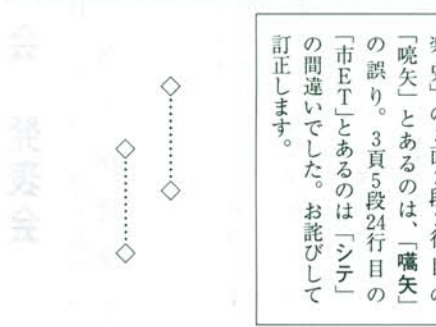
「訂正」 前号「戦後名古屋能楽史」の3面2段2行目の「呪矢」とあるのは、「嘯矢」の誤り。3頁5段24行目の「市E.T」とあるのは「シテ」の間違いでした。お詫びして訂正します。



名古屋宝生会「清経」宝生和英 (写真=宝生会提供)

「半部・立花」 (ワキ雅介、能力(アヒ友彦)に立花供養を行なう旨を触れさせると、後見が立花の作物を持ち出して正先に据える。僧は立花の前で「敬って申す云々」と供養をし、能力は切戸へ退き、僧はワキ座に戻ると、里女(シテ雅)が大アキラヒで出る。「手に取れば手ぶさに穢る立てながら」と謡い(写真)、三世の仏に花奉る、と立花へ合掌、手向ける白い花を不審する僧と問答に。面増・襟白二

「悪太郎」 予々粗暴な振舞を藤(非難)と漏れ聞く悪太郎(シテ靖造)、詠えた長刀を見せる口実に伯父を訪ね、威を奮い酒に与り、泥酔の果ては路傍に酔臥。この辺り酒の勢いを借りた無邪気な猛者(もさ)、靖造の柄に嵌まる。跡を付けた伯父、案の定とばかり悪太郎の大髭を刺り、身辺を僧形に替え、「今日よりは善心となって後生を願へ、即ち汝が名を南無阿弥陀仏と付けるぞ」と喝を入れ、ば、意識下にそれが刷込まれ、南無阿弥陀仏と聞くと機械的に反応して仕舞う。
そこへ六字の名号を唱え通り掛かる僧(小アド菊次郎)、我が名を呼ばれたと反射的に返事をし、僧にまつわりつく悪太郎こと南無阿弥陀仏。初め気味悪がついていた僧も様子判れば、「浮からかいてやらう」と踊り



名古屋宝生会「清経」宝生和英 (写真=宝生会提供)

「訂正」 前号「戦後名古屋能楽史」の3面2段2行目の「呪矢」とあるのは、「嘯矢」の誤り。3頁5段24行目の「市E.T」とあるのは「シテ」の間違いでした。お詫びして訂正します。

「訂正」 前号「戦後名古屋能楽史」の3面2段2行目の「呪矢」とあるのは、「嘯矢」の誤り。3頁5段24行目の「市E.T」とあるのは「シテ」の間違いでした。お詫びして訂正します。

NHK放送予定(平成20年7月~8月)

Table with NHK-FMラジオ能楽鑑賞 (毎週日曜日7時15分~8時) and dates from 7/20 to 8/31 with program titles and performers.

能 楽 の 友

発行能楽の友社

名古屋市中千種区千種2丁目18-18 (郵便番号 464-0858) 電話 (052) 731-7984 FAX (052) 733-2837 振替口座 00800-6-36393

演能カレンダー

名古屋能楽堂

(能・狂言演能関係) (TEL 052-231-0088)

Calendar table for July and August with dates, event names, and performer names.

第7回名駅薪能 能「松風」「熊坂」 7月27日 観世宗家来演

「第7回名古屋名駅薪能」は、7月27日(日)観世流観世清和宗家が来演して、JR名古屋駅・タワーズガーデン特別会場で開催される。

第25回てんのう能 8月23日津島市文化会館

津島市で毎年催される「天王薪能」は、ことし第25回を迎え、本年から新たに「てんのう能」として、きたる8月23日(土)津島市文化会館大ホールで開催される。

名古屋城本丸御殿復元工事着工記念事業 ゆめつくり狂言会 9月20日名古屋能楽堂

会では、近年は屋内での開催が多くなり、本来、野外でかき火を焚いて催す「薪能」の名称にそぐわなくなってきたので、室内開催のときは「てんのう能」野外開催のときは従来からの「天王薪能」とすると説明している。

「土」 「みずなみ稲津・薪能」が小里・金幣社荷機稲荷神社で催される。主催はNPO明日の稲津を築くまちづくり推進協議会、小里城山跡薪能実行委員会、後援・岐阜県、瑞浪市、瑞浪市観光協会など。午後6時半開演。

何 御 中 暑

Table listing various associations and their members, including names like 大西智久, 大槻清韻会, 片山九郎右衛門, 観世清和, 幽謳会, 梅猶会, 梅若吉之丞, 幽花会, 片山慶次郎, 山本勝一, 山本博通, 名古屋観世九皇会, 観世喜之, 高橋瞭一, 外山圭一, 井上嘉介, 井上裕久, 壺泉嘉夫, 名古屋昭和区山手通3-8-2, 電話(052)832-2326, 西宮市甲陽園目神山町三二二五 電話(079)832-2458

第4回名古屋青雲会

八月四日(月)午後二時始
名古屋能楽堂

鶴 能 舞
山小 兼東 阿三 井筒 熊井
歌 姥 北 平 山 三 阿 井
キリ 七 平 山 三 井
田口 将成 鬼頭 京子 内藤 飛能 金森 良光 東川 尚史 辰巳 孝弥 和久莊太郎 戴 克徳
河村真之介 加藤 洋輝 大野 誠 船戸 昭弘 佐藤 融 橋本 幸 後見 宝生 和英 鬼頭 京子 地謡 金森 良光 飛能 和久莊太郎 戴 克徳 内藤 飛能 東川 尚史

[入場無料]

主催 名古屋青雲会
後援 社団法人宝生会
名古屋宝生会
問い合わせ 名古屋昭和区御器所3-23-19-802
(衣斐正宜方) 電話052-882-5600

七 彩 会

八月十日(日)午前十時始
名古屋能楽堂

能 舞
三 天 高
輪 鼓 砂
舞囃子 敦盛、田村、放下僧、融、山姥
小袖曾我、羽衣、野守、松風
素謡 鶴亀、玉葛
仕舞 十数番
主催 七 竹内澄子
名古屋市名東区にしが丘3-37-1
電話 052-782-4171

青陽会定式能 (第252回)

八月十七日(日)十一時開演
名古屋能楽堂

仕舞 江口 玉 能組 近藤 幸江 久田三津子

富士太鼓

子方 富田 尚史 今沢 美和 高安 勝久 河村総一郎 船戸 昭弘 竹市 学
後見 久田三津子 地謡 三村 郁布 松山 幸親 須部 黒田 甫博 梅田 邦久 敏彦

松 風

梅田 嘉宏 清沢 一政 橋本 幸 河村真之介 鹿取 希世
後見 近藤 幸江 梅田 邦久 地謡 星野 路子 武田 邦久 大志 須部 黒田 甫博 梅田 邦久 敏彦

因幡堂

今枝 郁雄 佐藤 融 後見 井上菊次郎

附祝言

当日券三千円、出演楽師宅
チケットぴあ 0570-02-9999
(Pコード785-050)
主催 青 陽 会

第24回 衣斐正宜後援会能

八月二十四日(日)午後一時開演
名古屋能楽堂

講演 「水鳥までも我故に」 村瀬和子
仕舞 高 砂 宝生 和英 地謡 東川 光夫 寺井 良雄 澤田 宏司
内藤 飛能 東川 尚史 和久莊太郎 衣斐 正宜 森 善博 河村真之介 住駒 幸英 竹内 淳一 東川 光夫 寺井 良雄 澤田 宏司 地謡 竹内 淳一 東川 光夫 寺井 良雄 澤田 宏司

求 塚

後援会申込み・お問合わせ
〒466-0051 名古屋昭和区御器所3-23-19-802
電話 052-882-5600

暑中御見舞 申し上げます

怡 楽 会
山階彌右衛門
観 芳 会
観 世 芳 伸

藤 井 徳 三

邦 謡 会
梅 田 邦 久
清 沢 一 政
須 部 黒 田 甫 博
本 田 嘉 宏
今 沢 美 和
梅 田 嘉 宏

大垣浦声会

稽古場 大垣市伝馬町大垣別院
電話(0584)733362
〒606-0014 京都市左京区下鴨芝本町五八
電話(075)781-1730

梅 若 修 一

名古屋修 諷 会

久田観正会

大倉流小鼓 久田 舜一 郎 鶴 久田 舜一 郎
松 月 会 前 野 郁 子
松 野 山 幸 路 子
星 野 路 子
〒405-0003 名古屋市中東区一社3-102
電話(052)705-1585

松 音 会

泉 泰 孝
〒168-0001 東京都杉並区宮前四-19-14
電話(03)3333-1828

泉 雅 一 郎

〒201-0002 東京都狛江市東野川四-16-18
電話(03)3488-2485

春 鶯 会

梅 若 善 高
〒560-0084 豊中市新千里南町三丁目18-12
電話(06)6831-7854
〒166-0003 東京都杉並区高円寺南4-27-7908
電話(03)3333-1157

梅 井 戸 和 男

良 祐
〒545-0004 大阪市阿倍野区文の里3-16-17
電話(06)6621-1219

上田観正会

TEL 078-15449
上田 貴 弘
大 公 拓 介

名古屋淡交会

橋 岡 慈 観
三 交 会
久田 三津子
〒405-0003 名古屋市中東区一社3-102
電話(052)705-1585

武田謳楽会

武 田 欣 司
武 田 邦 弘
武 田 大 志

財団法人 鎌倉能舞台

中 森 貫 太

初 陽 会

武 田 宗 和
稽古場 名古屋市中種区今池四丁目15-3 浅井ビル
電話(052)733-3736

橋岡会

橋 岡 久 太 郎
坪 内 菟 路 之 亮
荒 木 友 三 郎
島 田 要 吉
山 下 年 彦
小 宮 出 功
小 宮 田 重 章
宮 内 美 美
小 原 健 一
上 岸 登

戦後名古屋能楽史

〔第二十章〕 昭和四十一年（一九六六）

竹尾 邦太郎

安倍能成は自著『能楽雑叢』の序で次のように述べている。

この『能楽雑叢』は斎藤書店主人の勧めによって世に出ることになった。これは全部今までの私の文集に出たものだが、此等の書物はこの頃の出版事情で改訂の機を得がたいのと、私が多年に亘って能楽や謡曲に寄せて居た関心の結果を一冊に纏めることも、必しも無意味でないといふ理由で、それに応ずることとした。尤もこの中の二三は代表的の意味で近く出る選集にも収めたことをここではしておく。私には道楽といふものはないが、強ひて取り上げれば、能と謡とが先づそれであらう。この頃は多忙の為に月に一度位しか能を観る機会に恵まれないが、子供の時から数へれば六十年間も見て居り、謡の稽古もその間に中断はあっても足かけ四十年になるのだから、能や謡との因縁は相当古いとだけはいへる。又ここに収録した文章中一番古いのは明治四十四年、一番新しいのは昭和十九年であり、約三十五年間に亘って居る。その間に私は世阿弥元清の十六部集に接する機会を得て、能の本質の理解について益する所が多かった。従ってこの書中に於いても世阿弥について説く所が多いが、その引いた本文については、書物を焼いたのと多忙との為に改めて精しく校合し得なかつたのを遺憾とする。

なほ世阿弥の遺書についてはその後研究が進められ、本文が新たに発見せられたりもしたが、能勢朝次君の『世阿弥十六部集詳釈』は懇切な真面目な著述であり、最近又世阿弥著述中の精粹ともいふべき『花伝書』の本文となる元次本、禪竹本、宗節本を考異校合した『花伝書研究』が、野上豊一郎

君によって出版された。私の文章を読んで能楽と世阿弥とに興味を感じられた人々の一読を勧めたい。

私が本書の校正を一読して感じたことは、私が多年能を観て居るに拘はらず、一向能楽の専門的技術（テクニク）に通じないということであった。例へば拍子のことなどには私は殆ど無知といつてよい。しかし能楽の劇や文学としての本質や性格に関する私の議論は大體正鵠を得て居ると信じて居る。たゞ世阿弥に関しては、更に精確な立ち入った本文批評及び解釈の必要があり、能楽と謡曲とのついでには、更に発生当時及びその前後の文学史、芸能史、文化史、一般歴史の研究を背景としなければならぬことを痛感する。しかし私が将来この理想と希望とを実現する機会を恐らく与へられぬであらう。 昭和二十三年七月 東京目白にて

因に『能楽雑叢』の目次は「能楽の芸術的価値」「能の力」「能楽と国民性」「謡曲に現れた道徳思想」「世阿弥の芸術観」「世阿弥のものまね論」「世阿弥雑感」「脇宝生に就いて」「新と旧」「ワキ方の凋落」である。

六月十一日、喜多流和島富太郎の主宰する和調会の社中会。番外に仕舞五番と独吟一番、「草子洗小町」新熊弘憲「羽衣」長田驍「天鼓」岡村保道「田村」栗谷菊生「八島」和島富太郎、独吟「笠之段」二井栄逸。

六月十二日、青陽会・第十期第一回。素謡「小袖曾我」加賀敏彦・高橋啓一、仕舞四番「西王母」服部知代「通盛」福田幸市「松風」竹内六郎「柏崎」石谷初蔵「自然居士」河村鉦二・高安滋郎・河村大（子方）、仕舞四番「賀茂」柴田取武「富士太鼓」加

藤丈太郎「融」佐藤太後「鞍馬天狗」殿島修二、舞囃子「山姥」塚本秀雄、能「杜若」大槻文蔵・西村欽也、仕舞「實盛」柴田初太郎、狂言「膏藥煉」佐藤卯三郎・井上礼之助、能「鉄輪」久田秀雄・西村弘敬。

△は最高潮に達する。月が替り七月一日、禪の研究者として世界的に知られる佛教学者・思想家の鈴木大拙（一八七〇—一九六六）死去、享年九十五歳。七月九日、第八回朝日狂言会。四年後の夏に空調設備が整うが当時は冷房がなく、また装束納の時期、暑熱を避けるため午後五時半始の夜の催会。「懐中髷」和泉保之・河村五造（舅）、「左近三郎」善竹圭五郎・大藏弥太郎、素囃子「羯鼓」藤田六郎兵衛、田鍋惣一郎・吉田定男、「大般若」井上松次郎・佐藤秀雄、和泉保之、「呼声」大藏弥太郎・善竹忠一郎・善竹圭五郎、小舞「芦刈」和泉保之、「六地藏」佐藤卯三郎・井上礼之助・大野弘之。

七月十日、観世流加藤丈太郎の主宰する正楽会が二五〇回の催会を記念する社中会。番外に仕舞七番「高砂」久田秀雄「屋島」佐藤太後「井筒」塚本秀雄「芦刈」河村鉦二「岩船」加藤丈太郎、「鶴之段」中川清「嵐山」柴田取武。

七月十七日、観世流六車真三方に事務所を置く颯々会の夏季練成ゆかた素謡会。番外に仕舞六番「安宅」藤井千鶴子「賀茂」奥善助「吉野夫人」下田雄三「雨月・中入前」高橋静夫「山姥キリ」飯山嘉俊「高砂」橋岡久共。

七月二十二日、名古屋学生能楽連盟・能と狂言を観る会（第二回）。仕舞「兼平」内藤泰二、狂言「蝸牛」井上松次郎、佐藤秀雄・井上礼之助、能「葵上」辰巳孝・高安滋郎。

七月二十四日、第五回・調友会。初めに「本日の囃子について」と題する片山慶次郎の解説があり、番組は舞囃子「鶴亀」内藤泰二、「胡蝶」片野東四郎、一調「威陽宮」田鍋惣太郎、辰巳孝（謡）、舞囃子「二人静」片山慶次郎、杉浦元三郎、素囃子「早舞」小島鉄次郎、後藤孝一郎・吉田定男・助川龍夫、狂言「瓜盗人」佐藤卯三郎・井上礼之助、舞囃子「船弁慶」長田驍、一調「山姥」野崎太郎・柴田初太郎、収武（謡）、能「養老・水波之伝」片山博太郎・梅田邦久・青木祥二郎（天女）高安滋郎、他に藤井徳三、

△は最高潮に達する。月が替り七月一日、禪の研究者として世界的に知られる佛教学者・思想家の鈴木大拙（一八七〇—一九六六）死去、享年九十五歳。七月九日、第八回朝日狂言会。四年後の夏に空調設備が整うが当時は冷房がなく、また装束納の時期、暑熱を避けるため午後五時半始の夜の催会。「懐中髷」和泉保之・河村五造（舅）、「左近三郎」善竹圭五郎・大藏弥太郎、素囃子「羯鼓」藤田六郎兵衛、田鍋惣一郎・吉田定男、「大般若」井上松次郎・佐藤秀雄、和泉保之、「呼声」大藏弥太郎・善竹忠一郎・善竹圭五郎、小舞「芦刈」和泉保之、「六地藏」佐藤卯三郎・井上礼之助・大野弘之。

暑中御見舞 申し上げます

- 笙月会 中川 雅章
賀水会 桑名 賀水 会
加賀 敏彦
松盛会 小松 勝憲
洗心会 奥村 富久子
観修会 祖父江 修一
猶惠会 熊沢 恵美子
幸福会 近藤 幸江
千早会 八神 孝充
恵謳会 三村 徑布
桜月会 加藤 春枝
電話（〇五七四）六四一三三〇六

宝生和英
近藤乾之助

名古屋巽会
豊橋巽会
辰巳満次郎

佐野由於
倉本雅

恵美寿会
衣斐正宜
衣斐正宜後援会

宝生流
嘉宝会
司宝会

宇高徳成
松野恭憲

金剛永龍謹
廣田鑑賞会
廣田田陛一

菊之会
廣田田泰三
廣田田泰能

- 廣田鑑賞会
廣田田陛一
廣田田幸稔
廣田田泰三
廣田田泰能
豊嶋能の会
豊嶋三千春
松野恭憲の会
松野恭憲
宇高徳成
徳成成成
金剛流
名古屋周星会
岐阜周星会
吉川周子
電話（〇五七四）六四一三三〇六

〔③面よりつづき〕
分林弘一・武田欣司の来演がある。
八月三日、能楽協会名古屋支部の主催する第十九回・楽師養成研究会は午前二時、二番「竹生鳥」高橋肇一・加賀敏彦、高安勝久、「土蜘蛛」内藤泰二・鬼頭嘉男、立石澄雄。午後は半歌仙研究会子会として支部所属の五流シテ方による囃子十八番と狂言小舞二番「海道下り」井上礼之助「鶴飼」井上松次郎。

薪能の名称に直る。主催は市と能楽協会名古屋支部、市長杉戸清が次の挨拶を寄せる。
芸術は一国の文化経済の結晶であり、世界各国の芸術は、その国民が経験した年輪のようなものがあります。
能楽は歌舞伎・人形浄瑠璃と共に三大国劇として伝承されてきたものですが、この度名古屋市の総鎮守である若宮八幡社で、第一回市民納涼能楽の夕べとして、薪能が催されますことはまことにご同慶の至りであり、薪能の盛会を心からお祈りすると共に、市民一般の広い層にわたって、またとない

能楽認識の好機会となることを心からご期待申し上げる次第であります。
私はこのようにして芸術、文化を愛する気風が育まれてゆくならば、名古屋市のために本当に喜ばしいことと思えます。
なお今回の催しについて非常なお骨折りを頂きました関係者のご尽力に感謝いたしますと共に、そのご成功を念願してやみません。
また、協会支部長・田鍋惣太郎は「薪能について」として次のように述べる。
薪能は、能楽演出法の一つである「神事能」であります。その起源は、奈良の興福寺東西両金堂での「薪の宴」とか、「献薪」に始まったといわれますが、確実なところは不明といわれています。
現在では、奈

《薪能》第一回市民の
納涼能楽の夕
昭和41年8月6日(土) (雨天順延) 午後6時49時
於 名古屋市中区若宮八幡社境内 (高橋大通り 中日シネマ会館裏)
主催 名古屋市民納涼能楽協会名古屋支部
協賛 若宮八幡社
後援 中日新聞・名古屋タイムズ・NHK CBC



薪能番組 (三つ折) 表紙

番組は、舞囃子「高砂」伊藤鉄之進、連吟「竹生鳥」芥川秀子・飯田新子、仕舞二番「籠太鼓」服部紗枝「鶴之段」前田茂穂、宮司・川瀬進による火入式のと、能「小督」梅田邦久・西村欽也、仕舞三番「笹之段」加藤丈太郎「玉之段」久田秀雄「笠之段」殿島修二、舞囃子「八鳥」辰巳孝、狂言「末広かり」井上松次郎・野村又三郎・井上礼之助(スツブ)、一調「松虫」田鍋惣太郎・野口緑久(謡)、舞囃子「絃上」長田駿、能「紅葉狩」内藤泰二・高安滋郎。

良の興福寺、春日神社、京都の平安神宮、東京では明治神宮、新宿御苑、大阪では住吉神社等で行われていますが、今回、名古屋市長を始め、各位のお骨折りで開催する運びとなり、当夜は、野天の下、薪明(タイムズ)の火で演能を行います。
青年都市、並びに芸どころ、と言われる名古屋市の面目にかけて他市にまけない立派な薪能を演出すべく、名古屋市の能楽師一同(約百名)が張り切っておりますから、どうぞご期待下さい。

八月十四日、宝生会の素謡会は名古屋相互銀行ホールで名古屋官庁実業団連合大会の社中会のと素謡二番「玉葛」倉本雅・村瀬澄子、「卒都婆小町」宝生九郎・辰巳孝。
八月二十一日は第七回・大衆能、愛知文化講堂特設舞台。番組は、能「竹生鳥」久田秀雄、(前)柴田収武、(後)西村欽也、仕舞「小袖曾我」熊沢恵美子・有賀滋子、舞囃子「花月」和島富太郎、仕舞「山姥」柴田初太郎、能「半蓮」大塚二、舞囃子「船弁慶」親世喜之、仕舞「巻絹」辰巳孝、狂言「武悪」井上松次郎・佐藤秀雄・井上礼之助(武悪)、舞囃子「融」桜間龍馬、能「土蜘蛛」内藤泰二・高安滋郎、シテ方は五流が揃う。
この月、綜合演劇雑誌「テアトロ」二七六号は「狂言を考える」の特集記事を組む。
——以下次号——

春 敲 会
名古屋春栄会
伊勢金春会
宇仁田吉邦
伊勢市八日市場町5-16
電話0596-525298

◆晩春から初夏の舞台◆
「第三十回・邦謡会」名古屋観世会定例公演と「第三回・西村同門会研究能」
「第四十八回・鳳の会」

とシテは桂枝を捨てて。キリは、ほのぼの明けて、と橋懸へ向かうシテにツレが従い、ワキが立って見送りトメ、拍子は踏まない。(1時間16分)

菊次郎に伍する好舞台、曲趣もあって爽やか。それにしても当時の庶民の教養の高さは驚き。趣味を同じくする人士に貴賤貧富の無いのは恋と同じ、を実証する。(24分)

びて興がる風情も。序之舞は小書の記載はないが杖之舞、扇と杖を持ち替える場合の手捌きの美しさは芸功の賜物を思わせ、舞に品格。舞上げれば明け初める別れの刻限、名残は、待て暫し、の招き扇、花明りの外はまだ夜、花の枕の、と杖に纏わり巧みに寝返る心の下居、夢は覚めにけり、で再び右手に杖を持ち、地の返し句に立つと、花を踏んで、と拍子二ツ、地のうちに橋懸から暮へ、ワキが留めた。シテは膝に不安がありそうだったが杖を巧みに用いて破綻をみせず、翁寂びた風姿を見事に見せてくれた。(1時間26分・4月6日・第30回邦謡会)

長田駿後援会
津市高野尾町三三五一-146
電話059-220-0697

西村同門会
飯富雅介
杉江元
橋本正樹
橋本幸

〔三山〕 大和三山は一男二女の山、の伝承があり、耳成山は桂子シテ邦久、畝傍山は桜子ツレ嘉宏。二股をかけて通う香久山の男が若い桜子に靡き、桂子は傷心のうちに入水、良忍上人ワキ雅介の弔いに現れた二人の霊は、互いの持枝で打ち合い、因果の報いはこれ迄、と和解が成る。
前場はクセ中、「我は花なき身を知らば、とシテがワキにアシラフところ、ワキに訴えかけるかの口惜しさが込み、入水の場の山

の池水の淵に、と頭を深く垂れ水面を眺める愁いの風情が惹きつけられる。
後場は花のある若さを羨やむシテに嫉妬され苛立つツレの狂乱のカケリ、それを一ノ松から見込んで拍子二ツ強く踏み、舞台へ入るとカケリの後半はシテ、双方逆上して打ち合いとなってゆくところなど一種華麗とも見える。桂枝で胸を打たれ消沈のツレに、「さて懲りや、とシテ(写真)。が、所詮わるいは男、はた目も愚かしく年甲斐もない振舞に、これ迄なり、

「八句連歌」 借金のある借手シテ菊次郎、返済延期を乞いに行くが、再度の無心を恐れた貸主は隣人と偽り居留守を使う。己むを得ず借手は折から咲きも残らず散りも始めぬ庭の花の様を見上げ(写真)、「花盛り御免あれかし松の風」と詠み、留守居に託せば、連歌好きの貸主は堪らず然りげなく姿を現わすと、それを発句として挙句まで八句、借手と貸主は心のうちを暗喩を駆使して付合(つけあい)を進めれば、借手の機智に感じ入った貸主は証文を返し、借金をチャラに。へ優しい人の心や、と感激する借手、「あ、目出度う借金の済みまして御座る」と膝をつき証文を両手に戴く姿が喜びに溢れた。融が

「西行桜」 つ、人の来るのみぞ、あたら桜の答にはありける」と、騒ぎを厭い山居に静閑を求め西行上人(ワキ勝久)の思いに、夜更けて夢の中、老桜ノ精(シテ九郎右衛門)が現われ、感情も無い花に答とは、と皮肉に、一寸物ねたかに質すところ(写真)、骨っぽいシテに精彩。(恥かしや老木の)花も少く枝朽ちて、と床几立ち作物を出るところには答の無き由を申し開く気魄が満ち、ワキへアシラフのも毅然とした印象。サシからクセへは洛中・洛外の花の名所所し、へ流つ波までも、と扇を高く翳し、スミから左へ作物前へ回り込む姿には、悠揚として頭に落花を浴

「弱法師・盲目之舞」 義言からにせよ父・高安通俊(ワキ雅介)に捨てられた俊徳丸(シテ順之)、弱法師の異名をとる盲目の乞食となって不運を叩つても闇を照らす光明を求め赴

福王茂十郎
知和幸
登幸郎

高安勝久

御 中 暑

喜多流
和谷栄太朗
和谷衡市
伊勢市中島二丁目26-12
電話056-250-1598

宝生欣閑
清水利宣
藤田舞台
藤田六郎兵衛
TEL&FAX 051-571-6341

高安勝久

〔三山〕 大和三山は一男二女の山、の伝承があり、耳成山は桂子シテ邦久、畝傍山は桜子ツレ嘉宏。二股をかけて通う香久山の男が若い桜子に靡き、桂子は傷心のうちに入水、良忍上人ワキ雅介の弔いに現れた二人の霊は、互いの持枝で打ち合い、因果の報いはこれ迄、と和解が成る。
前場はクセ中、「我は花なき身を知らば、とシテがワキにアシラフところ、ワキに訴えかけるかの口惜しさが込み、入水の場の山

の池水の淵に、と頭を深く垂れ水面を眺める愁いの風情が惹きつけられる。
後場は花のある若さを羨やむシテに嫉妬され苛立つツレの狂乱のカケリ、それを一ノ松から見込んで拍子二ツ強く踏み、舞台へ入るとカケリの後半はシテ、双方逆上して打ち合いとなってゆくところなど一種華麗とも見える。桂枝で胸を打たれ消沈のツレに、「さて懲りや、とシテ(写真)。が、所詮わるいは男、はた目も愚かしく年甲斐もない振舞に、これ迄なり、

「八句連歌」 借金のある借手シテ菊次郎、返済延期を乞いに行くが、再度の無心を恐れた貸主は隣人と偽り居留守を使う。己むを得ず借手は折から咲きも残らず散りも始めぬ庭の花の様を見上げ(写真)、「花盛り御免あれかし松の風」と詠み、留守居に託せば、連歌好きの貸主は堪らず然りげなく姿を現わすと、それを発句として挙句まで八句、借手と貸主は心のうちを暗喩を駆使して付合(つけあい)を進めれば、借手の機智に感じ入った貸主は証文を返し、借金をチャラに。へ優しい人の心や、と感激する借手、「あ、目出度う借金の済みまして御座る」と膝をつき証文を両手に戴く姿が喜びに溢れた。融が

「西行桜」 つ、人の来るのみぞ、あたら桜の答にはありける」と、騒ぎを厭い山居に静閑を求め西行上人(ワキ勝久)の思いに、夜更けて夢の中、老桜ノ精(シテ九郎右衛門)が現われ、感情も無い花に答とは、と皮肉に、一寸物ねたかに質すところ(写真)、骨っぽいシテに精彩。(恥かしや老木の)花も少く枝朽ちて、と床几立ち作物を出るところには答の無き由を申し開く気魄が満ち、ワキへアシラフのも毅然とした印象。サシからクセへは洛中・洛外の花の名所所し、へ流つ波までも、と扇を高く翳し、スミから左へ作物前へ回り込む姿には、悠揚として頭に落花を浴

「弱法師・盲目之舞」 義言からにせよ父・高安通俊(ワキ雅介)に捨てられた俊徳丸(シテ順之)、弱法師の異名をとる盲目の乞食となって不運を叩つても闇を照らす光明を求め赴

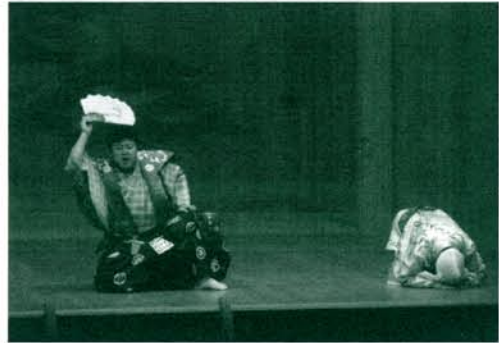
喜多流
和谷栄太朗
和谷衡市
伊勢市中島二丁目26-12
電話056-250-1598

高安勝久

天王寺の縁起を述べるクリ・サシ・クセの詞章を省き、日想観(入日に西方浄土を想う修行を拝むところは、ワキ正に膝をつき幕の方へ合掌すると、西の海、と橋懸へ向かい、入日の影も舞ふとかや、と一ノ松。(永夜の清宵何のなす所)ぞや、で拍子一ツ踏むとイロエ掛目之舞は扇を右手に杖を左手に極く静かに舞う。舞上げると心眼の目に浮かぶ難波の致景の数々、満目青山は心にあり、と柔らかに扇を胸に当てる余裕。長柄の橋のところは、前方を探りながら目付柱へ向かい(写真)強く突き当る心になちくと退ると合膝にへ転び漂ひ、の姿を鮮やかにみせる。

キリの、父と再会が分かり、意外のことに、呆れつ、右手で膝を打つ心持もよくでいた。高安通後の従者「アヒ友彦」は弱法師に施行すると直ぐ切戸へ退いてしまったので長柄の橋で突き当られる場はなかった。通後が空を仰ぎ感慨深げに暁の鐘を聞き、ユークンしてトメた。(1時間1分)

「伯母ケ酒」(アド菊次郎)を度々見舞うもついで酒にありつけない甥(シテ靖浩)、甘言を弄して追従たら



「伯母ケ酒」井上靖浩、井上菊次郎



名古屋観世会定式能「弱法師」山本順之



「葵上」梅若六郎 (杉浦賢次氏撮影)

「神楽(しんがく)」古能、即ち猿楽伊勢三座の一、和谷座に六百七十有余年伝承されて来た「和谷式(6面へつつく)

「葵上」梅若六郎、原典を徹底的に読み込み、演出に独自の創意工夫が施されているように思われる面白い異色の舞台、就中、前場が。先づ後見によつて出小袖が正先に置かれると、何事もなく臣下(ワキツレ元)が出て名宣から葵上

に悪く物怪の正体を明かす旨を述べ、一ノ松に出て居た巫女(ツレ大志)に、脇正から勾欄越しに、梓(巫術)に掛けるよう命じてワキ座に退く。巫女は正中に出ると、「天清浄地清浄...」寄り人は...とアズサの囃子で梓を掛けて地前に下居すると、後見は大小前に車を握える。一声の囃子(六郎兵衛・富司忠・総一郎)で六条御息所ノ生霊(シテ六郎)、長袴に滑るように一ノ松へ出ると、「三つの車に、と謡い出し、遣る方なきこそ悲しけれ、とシラルの、さめざめといった風情で切ない。大小アシラヒのうち舞台へ、車に入ると小書「梓之出」で梓に曳かれて現われる理由を述べる詞章(次第から上歌)が省かれ、如何にも短兵急に「梓の弓の音は何処ぞ、と右ウケて出どころを探る様子、返シ句でもどかしげに左手で柱を掴む返りは背立ちも感じられる。巫女に姿を見られ、臣下には推量されて名を問われ、床几に掛かる御息所、面泥眼・襟白二・白地金鱗文摺箔着付・緋長袴・黒地金霞二鱗散シ文舞衣重折の姿は、この世に恨むべき人もなく、悲しむべき身でもないのに、一体いつ情緒不安定になり、初めつらん、とシラルと、クドキは巫女と連吟、巫女は神憑りの心で霊を呼

伺 御 中 暑

<p>幸友会 涛華能 福井 四郎兵衛 福井 良治</p>	<p>桂 後藤 孝一 嘉津 幸郎</p>	<p>富耀会 柳原 富司忠 船戸 昭弘 小鼓教室 名古屋市中区栄 朝日神社内 (丸善前) 〒466-0806 名古屋市昭和区滝川町47-147 サザンヒル八事2-703 電話(八三三)一〇三三番</p>	<p>飯島 六之佐 〒920-0961 金沢市香林坊2-18-17 電話(〇七二)二六二一四三四〇</p>	<p>大倉源次郎</p>	<p>叶石会 河村 総一郎 河村 眞之介 〒466-0802 名古屋市昭和区前山町一丁目二三 電話(〇五二)七六一一四八八二</p>	<p>河村 大 〒603-8313 京都市北区紫野下柏野町五九-1 電話(〇七五)四六二四一五</p>	<p>亀井 俊一 保忠雄</p>	<p>呉竹会 篁 鉦一</p>	<p>谷口 正喜 〒602-0915 京都市上京区中立売通室町西入 室町スカイハイツ610号</p>	<p>谷口 有辞 〒520-0221 大津市緑町二四-二〇</p>	<p>青春流太鼓 青耀会 上田 悟 〒594-1133 和泉市青葉台2-17-25 電話(〇七二五)八五二一 名古屋市中区栄5-6-4 栄能楽堂 電話(〇五二)二六六一一八三</p>	<p>長生会 鬼頭 義命 〒490-1332 愛知県稲沢市平和町城西137 電話(〇五六七)四一九六〇番</p>	<p>大藏狂言会 大藏 彌太郎 千太郎 基 誠 〒215-0027 神奈川県川崎市麻生区岡上438-1 TEL〇四四一九八七一一一八七</p>	<p>茂山 千五郎 千三郎</p>
--	------------------------------	---	---	--------------	--	---	----------------------	---------------------	--	---------------------------------------	---	--	---	-----------------------

び、その意志を伝え告げる所謂口寄せ。盛んな昔に比べ今の衰え、へ萌え出で初めし、と嫉妬に葵上(出小袖を見詰める(写真)と、恨み晴らさんと「これまで現はれ出でたるなり、でシテは巫女に、巫女は臣下にアシラフ。沈痛な曇りがちのシテ、何を歎くぞ、と面切り、氣持の昂進は「恨みは更に尽きすまじ、の返シ句でシラルと、へあら恨めしや、と車を出たシテは、へ今は打たでは、と出小袖を睨めつける冷やかな凄味。後見が車を退き、巫女が窘めるのにシテは「いや如何に言ふとも」と左袖を巫女にアシラヒ遮る強い意志をみせる。枕之段の前後は葵上への嫉妬ゆえの己れの行為でみづから品性を落とし、矜持を失ってゆく哀しさ。沢辺の螢の影より、と扇を翳し颯々と面切るところ、強い妬心が、へ枕に立てる、と出小袖を見詰めて扇投げつける、と、緋長袴あざやかに捌き「打ち寄せ隠れ行かうよ、と二ノ松、膝つき左袖被く返シ句に立って往く中人(巫女は切戸へ)、息もつかせぬといった濃密な舞台空間の前場。

後場は下人(アヒ融)が臣下に横川小聖(ワキ雅介)を招いた旨を伝えると、兜巾の修験者姿の小聖は臣下との問答に加持祈祷の準備、ノットで後シテが萌黄地金鱗箔の被衣で一ノ松に出る。小聖の数珠「さうりさりと押し揉んで」で舞台に入るシテは、折りに被衣を脱ぎ姿を見せる。面は白般若・鱗箔着付・緋長袴の裳着胴姿、長鬘を左手に胸の前で持ち、小聖との闘争にそれを投げつけて二ノ松へ逃れると、小聖は眩惑されてシテを見失う所謂空之折、出小袖に向かつて懸命に折ルのを、シテは胸杖にきつと面切りその景を見込むところ、冷たい凄味をみせる。果ては小聖に折り伏せられ、トメは合掌留に。前後を通じ緋長袴も珍しく、その舞姿の美しさに感服。(55分・4月13日・名古屋観世会)

「葵上」梅若六郎、原典を徹底的に読み込み、演出に独自の創意工夫が施されているように思われる面白い異色の舞台、就中、前場が。先づ後見によつて出小袖が正先に置かれると、何事もなく臣下(ワキツレ元)が出て名宣から葵上

に悪く物怪の正体を明かす旨を述べ、一ノ松に出て居た巫女(ツレ大志)に、脇正から勾欄越しに、梓(巫術)に掛けるよう命じてワキ座に退く。巫女は正中に出ると、「天清浄地清浄...」寄り人は...とアズサの囃子で梓を掛けて地前に下居すると、後見は大小前に車を握える。一声の囃子(六郎兵衛・富司忠・総一郎)で六条御息所ノ生霊(シテ六郎)、長袴に滑るように一ノ松へ出ると、「三つの車に、と謡い出し、遣る方なきこそ悲しけれ、とシラルの、さめざめといった風情で切ない。大小アシラヒのうち舞台へ、車に入ると小書「梓之出」で梓に曳かれて現われる理由を述べる詞章(次第から上歌)が省かれ、如何にも短兵急に「梓の弓の音は何処ぞ、と右ウケて出どころを探る様子、返シ句でもどかしげに左手で柱を掴む返りは背立ちも感じられる。巫女に姿を見られ、臣下には推量されて名を問われ、床几に掛かる御息所、面泥眼・襟白二・白地金鱗文摺箔着付・緋長袴・黒地金霞二鱗散シ文舞衣重折の姿は、この世に恨むべき人もなく、悲しむべき身でもないのに、一体いつ情緒不安定になり、初めつらん、とシラルと、クドキは巫女と連吟、巫女は神憑りの心で霊を呼

「伯母ケ酒」(アド菊次郎)を度々見舞うもついで酒にありつけない甥(シテ靖浩)、甘言を弄して追従たら



「真奪」左より井上菊次郎、佐藤友彦、井上靖浩



「鶏猫」佐藤友彦、長田朝人、今枝郁雄、佐藤融、後・今枝靖雄

「えい、またどれやら行きをつた」と憎まれた口、「それなら祖父が目度う舞ひませう」と当てる相手もなく自棄気味、舞も祖父も諸共に相舞まうてぞ帰りける、と扇を腰に差し、へやれやれ目度やな、と自嘲、杖を突き暮へ。老いの自我ゆえ



西村同門会研究能 特別出演「神楽」和谷栄太郎



「皇帝」左より鬼頭京子、シテ衣斐愛、ワキツレ岡充、ワキ飯富雅介、子方坂口侑

「嵐山・礼脇・猿聲」は翁付小書 脇能でのワキの作法。音取置鼓（誠・昭弘）の出で、幕を放れたワキは勾欄に寄って舞台を見込み、舞台へ入っては常座先で袖アシラヒとして右膝つき拝礼、狩衣の露を取って立つと袖捌きしてワキ座へゆく。ワキ宰、長身颯爽として清爽の気を孕み謹直に勤める。

「孫聲」は翁付小書「猿聲」は替間。猿聲シテ郁雄・勇猿アド靖浩、他に眷属が四匹、何れも揚幕を上げず幕の下を潜り抜けて出て来るのが如何にも猿。猿入の酒宴ではしゃぐシテの剛軽ぶりが光る。蔵王権現の後シテ驍の豪快な拳措が舞台を引き締める。（一時間33分）

「皇帝」皇帝は玄宗ワキ雅介。シテは鍾馗・愛、古、官吏登用試験に落ちて自裁したが、贈官の上、官服で厚く葬られた恩に報おうと、皇帝の寵姫・楊貴妃（子方・侑）に取り憑いた病鬼ツレ京子を鏡に映して退治する、という素材の面白さ。七十五年ぶりの稀曲を採り上げた関係者の意欲を大いに買いたい。（54分・5月5日・第三回西村同門会研究能）

「真奪」の孤愁も一入、当代、高齢者の在り方も問われようか。（36分）

「鶏猫」の愛猫とは知らず殺してしまふ。そうとは知らず国主、探し出した者には何なりと望みを叶える、の高札を立てれば、父の仕業と知る子（長田朝人・小6）が早速訴人となり、国主は太郎・次郎両冠者（郁雄・靖雄）を捕縛に向かわせる。「俄に何としたやら胸騒ぎがする」刑部三郎、白洲へ引き出されてみれば訴人は我が子、激しく動揺するが、成敗するとう国主に「何なりと望みを叶える」という言葉を頼りに哀願する子（写真・子）の真意を漸く知る刑部三郎の喜びは、釈放されて「あら愛しの者よ、ちやんと来さしめ、ちやんと来さしめ」と昂ぶる気持のうち大団円。子方の純な力演にほだされたか、刑部三郎ついでヴァ・アクション気味の芝居掛りも、ともあれ長田朝人君の巧さが舞台を凌ぎ越したと思ひ、登場人物のアンサンブルもよく、泣かせる舞台だった。これも類曲「牛盗人」があり、同工だが実に百五年ぶりの上演。（37分・5月11日・風の会）

「皇帝」があつてはと勇アド弘之と太郎冠者・郁雄は相計り祖父を暫く遠退ける算段をする。斯様な小細工先刻承知の祖父、「太郎冠者、（猿の到着を知らさぬと仕様がござ）と脅し、一ノ松で振り向き「太郎冠者よいな」と念を押し、更に二ノ松から「弘之よいな」と男に釘を刺すところなど、如何にも老いの頑固、それに、右の口角が上った祖父（おおち）の面は如何にも意地悪そう。一旦中入となつて後場、祖父は祝いとて身形を整え、羽織を着け小刀を差す。この辺りは老いの実直。祝宴は成行き案じる男も、へも一つ召せや男殿、と勧められ盆を重ねれば、へ舞も男も諸共に相舞まうてぞ帰りける、と上機嫌に席を後に。酔い潰れ床几から落ちんばかりに前のめりの祖父は、

舞台案内

稽古用敷舞台

名古屋市中区白区植田西のマンションビル「メイン塩釜」二階の「彰風閣」は能楽専用の稽古場であるが、これは大阪の山本勝一師の社中で名古屋在住の川久保保氏氏が毎年出演していた発表会に向けて充分納得のゆく稽古をするために作ったもので、山本勝一師も名古屋の稽古場として愛用されたものである。

彰風閣

ここは山本師の援助を受けながら数々の舞台を参考に、ビル設計の段階から稽古場として作ったものであり、敷舞台そのものは正式の三間四方（寸法の詳細は熱田神宮能楽殿の舞台と同じ）であるほか、舞台の後座や見所の正

舞台案内

またこのビルの二階全部を稽古場用施設にしてあるので、使用中に部外者の出入りがなく、落着いて稽古に専念出来ることも好都合である。

彰風閣

昭和六十二年に完成して以来、川久保氏が稽古に使用したり、山本勝一師の稽古場として役割を果たして来たが、最近川久保氏の体力の都合で稽古も出来なくなり、山本勝一師の後継がれた山本博通師等極少数の先生方の稽古場として使われているのみで、月のうち二十日は使われていないのが実情である。

折角稽古専用につくった場所であるので、今後とも熱心でレベルの高い愛好家の方々に有効利用して頂ければ有難いと川久保氏は望んでいる。

鳳の会

林 和利
井上 菊次郎
佐藤 友彦

〒490-0021 名古屋市中区平和一丁目二〇番一四
野村事務所 気付
電話 0522(350)7971
FAX 0522(350)7972

狂言やるまい会

野村 小三郎
松田 高義
野口 隆行
奥津 健太郎

〒490-0021 名古屋市中区平和一丁目二〇番一四
野村事務所 気付
電話 0522(350)7971
FAX 0522(350)7972

狂言共同社

井上 菊次郎
佐藤 友彦
大野 弘之
井上 靖浩
今井 靖雄
今井 靖雄
今井 靖雄
今井 靖雄

〒490-0021 名古屋市中区平和区滝川町54
サンハウス滝川3D 井上芳
電話 0522(834)8607
FAX 0522(834)8607

朝日カルチャーセンター

雛子教室

小鼓 後藤孝一郎
丸栄スカイル10階

〒606-8265 京都市左京区北白川東小倉町28
電話 075(700)2011
FAX 075(700)2011

楽諷庵舞台

ご連絡は 名古屋市中区川名山町一〇五
電話 (八三三) 三四九一

お稽古用敷舞台

彰風閣

名古屋市中区白区植田西二丁目八〇番二
地下鉄塩釜口駅2番出口ヨリ徒歩七分
岐阜信用金庫植田支店南側向ニアル
マンションビル「メイン塩釜」二階
電話 (〇五二) 八〇五三三〇一

連絡先 豊中市緑丘五丁目一四
電話 (〇六) 六八四九一二五八
または 安城市三河安城東町一丁目七三三
グレイシヤスピラ安城内
川久保 彰 礼
電話 (〇五六六) 七七七八三四一

栄能楽舞台

名古屋市中区栄五丁目一四
電話 (二六二) 一八三番

ウシマド写真工房

牛窓正勝

〒602-8801 京都市上京区北野上七軒
TEL (〇七五) 四六二三四二
FAX (〇七五) 四六一五七七二

朝日カルチャーセンター

雛子教室

小鼓 後藤孝一郎
丸栄スカイル10階

〒606-8265 京都市左京区北白川東小倉町28
電話 075(700)2011
FAX 075(700)2011

NHK放送予定(平成20年8月~9月)

Table with NHK broadcast schedule for August and September, listing programs like '能の音楽' and '素謡'.

能楽の友

発行能楽の友社

名古屋市中千種区千種2丁目18-18 (郵便番号 464-0858)
電話 (052) 731-7984
FAX (052) 733-2837
振替口座 00800-6-36393

名古屋城本丸御殿 復元祝賀能 能面募集

名古屋城本丸御殿復元の祝賀能は、明春名古屋能楽堂で催されるが、名古屋能楽堂では、この祝賀能の能面募集要項は、

能において使用する能面を募集している。
応募期間は、20年12月10日(水)~20日(土)
本丸御殿復元祝賀能は、21年1月31日午後1時と午後5時の2部にわたって開催。

(審査員) 梅田邦久(能楽協会名古屋支部長、観世流シテ方)、衣斐正宜(宝生流シテ方)
(応募期間) 20年12月10日(水)~20日(土) 必着
(賞) 最優秀賞 1点 賞状、優秀賞 2点 賞状、佳作 6点 賞状

豊田市能楽堂開館10周年記念公演 能「松風」狂言「口真似」

10月25日午後2時開演

豊田市能楽堂では、開館十周年記念公演として、10月25日、観世流宗家・観世清和師が来演、能「松風」が上演される。狂言は、大藏流・茂山七三師による「口真似」で開館十周年を飾る。

小牧山薪能

9月14日(日)開催

小牧市、小牧市教育委員会、小牧山文化事業「小牧山薪能」実行委員会主催による「小牧山薪能」は、9月14日(日)小牧山史跡公園で行われる。

小牧山は、織田信長が永禄六年(一五六三)から4年間、居城とし、また天正十二年(一五八四)の小牧・長久手の合戦では、豊臣秀吉と徳川家康が戦った戦場でもある。小牧山薪能は、小牧市の市制50周年を祝し、能楽協会名古屋支部が協力を、市民が我がまち小牧に誇りと魅力を感じて頂ける事業として毎年継続的に実施されている。

演能カレンダー

名古屋能楽堂

(能・狂言演能関係) (TEL 052-231-0088)

Calendar table listing performances from August to September, including dates, titles, and ticket information.

梅猶会大阪 能楽公演

9月6日 大阪能楽会館

梅猶会では、9月6日午後1時半から大阪能楽会館で平成20年度第3回大阪能楽公演を開催する。

演能案内

第七回狂言三の会

九月六日(土)午後二時開演 名古屋能楽堂

Table listing performers for the 7th Kyogen San no Kai, including names like 痺, 栗焼, 棒縛.

名古屋能楽堂九月定期公演

九月七日(日)第一部午前九時三十分始 第二部午後一時三十分始 名古屋能楽堂

Table listing performers for the Nagoya Nohkaido September Regular Performance, including names like 加茂, 野宮.

能 芥刈

内藤 飛能 飯富 雅介 船戸 明宏 大河 誠

能 葵上

八神 孝充 武田 邦弘 河村 総一郎 鬼頭 義命 空之祈 杉江 元 後藤 孝一郎 鹿取 希世 井上 清浩

能 野守

久田 勘助 飯富 雅介 河村 眞之介 加藤 洋輝 黒頭 黒頭 吉沢 黒田 八神 須部 黒田 孝充 梅田 邦久 後見 武田 邦弘 地謡 松山 幸親 旭 梅田 正邦 高橋 瞭 幸親 古橋 正邦 祖父江 修一

能 千手

近藤 幸江 高安 勝久 福井 四郎兵衛 藤田 六郎兵衛 後見 加藤 春枝 地謡 吉沢 黒田 孝充 梅田 邦久 後見 前野 郁子 地謡 須部 黒田 孝充 梅田 邦久 後見 武田 邦弘 地謡 松山 幸親 旭 梅田 正邦 高橋 瞭 幸親 古橋 正邦 祖父江 修一

能 宗八

今枝 郁雄 佐藤 弘之 後見 佐藤 友彦

能 野守

飯富 雅介 河村 眞之介 加藤 洋輝 黒頭 黒頭 吉沢 黒田 孝充 梅田 邦久 後見 武田 邦弘 地謡 松山 幸親 旭 梅田 正邦 高橋 瞭 幸親 古橋 正邦 祖父江 修一

鳳鳴会大会

九月十三日(土)十二時始 名古屋能楽堂

Table listing performers for the Hōmeikai Taikai, including names like 芥刈, 葵上, 野守, 千手, 宗八, 野守.

第7回名駅薪能

能「松風」「熊坂」上演

財団法人観世文庫、名古屋名駅薪能実行委員会の主催で、JRR名古屋駅タワーズガーデンで開催される「名古屋薪能」は、ことし第7回を迎え、7月27日、名古屋市内で唯一の夏をいりどる薪能として開催され、観世流観世清和宗家の来演で多くの市民が鑑賞して盛会であった。

演能は、観世流舞踊子「花月」につづき、観世流能「松風」(シテ観世清和)、和泉流狂言「蝸牛」(シテ野村小三郎)、観世流仕舞「田村」「井筒」「善知鳥」観世流能「熊坂」(シテ久田勘助)で演じられ、連日35度を超える熱帯夜つづきの名古屋に幽玄の涼風をもたらした。

〔写真は能「松風」〕



(①面鳳鳴会番組つづき)

井筒

初同アト ロンギへ

笹山 忠 武田 友志 地謡

三村 重彦 武田 志房 武田 祥照

江口

佐川 勝貴 奥田 昌人

武田 宗典 地謡

祖父江修一 武田 志房 武田 志

松風

横田多津子 澤田 房枝

三村 重彦 武田 志房 武田 志

三村 重彦 武田 志房 武田 志

仕舞

山崎 哲生 飯富 雅介

藤田六郎兵衛 山崎 哲生 飯富 雅介

藤田六郎兵衛 山崎 哲生 飯富 雅介

能半部

後見 武田 友志

地謡 野村 昌司

野村 昌司 武田 友志

素謡 自然居士

矢野 義章 松本 千俊

武田 友志 武田 志房

武田 友志 武田 志房

融

木本 仁之 榎木 映夫

武田 友志 武田 志房

武田 友志 武田 志房

番外仕舞

阿 芭 知 芭 知

武田 友志 武田 志房

武田 友志 武田 志房

附祝言

〔入場無料 御来場歓迎〕

主催 武田 友志

主 田 友志

会 志房

その後、縁あって地元で稽古場のあった梅田邦久師の所へ行く様になりました。師匠は「家で謡って来なくても良いが、謡本を熟読して、内容を把握し、疑問点を質問出来る様にとの指導方針でした。」「面」「装束」「小節」等の宿題が多く悩んだ。その時稽古場にあつた「能楽の友」紙に触れました。熱田能楽堂で、受付の人に購読の手続を尋ねていた所、通り掛かれた高安滋郎師が、「私が手続をして上げる」と云われ、それ以来、現在に至るまで愛読しています。最初の頃は、二井栄逸師の「装束談義」西村弘敬師の「古典談話」等を切り抜いて、スクラップブックにして整理をしていました。

「能楽の友」第五〇〇号 発刊に事寄せて

平光 進

「能楽の友」第五〇〇号発刊おめでとうございます。名古屋を始め、東海地区の能楽の指針としての御努力に敬意を表します。私が謡曲に興味を持ったのは、姉の一言が切っ掛けでした。甥の

結婚披露宴に、検番の芸妓さんが「高砂」を舞って下さった時、娘時代に鼓を習った事があった姉に、「今度、身内の結婚式があれば、お前が舞ふ様になれ」と云われ、その気になったからでした。

人が集い刊行を続けてきました。この間、愛読者の温かいご愛顧、各界のご支援を賜りましたことを改めて厚くお礼申し上げます。この500号に当たり愛読者からお祝いの言葉を頂きましたので掲載させていただきます。

（編集部）

狂言 ござる乃座公演

九月十四日(日) 午後二時始
名古屋 能楽堂

鬼瓦

大名 野村 万作

太郎冠者 竹山 悠樹

野村万之介 石田 幸雄

泣尼

僧 野村 萬斎

尼 野村 万之介

野村万之介 石田 幸雄

首引

親鬼 野村 萬斎

為朝 野村 万之介

野村万之介 石田 幸雄

狂言 首引

親鬼 野村 萬斎

為朝 野村 万之介

野村万之介 石田 幸雄

狂言 泣尼

僧 野村 萬斎

尼 野村 万之介

野村万之介 石田 幸雄

狂言 鬼瓦

大名 野村 萬斎

太郎冠者 竹山 悠樹

野村万之介 石田 幸雄

狂言 首引

親鬼 野村 萬斎

為朝 野村 万之介

野村万之介 石田 幸雄

狂言 泣尼

僧 野村 萬斎

尼 野村 万之介

野村万之介 石田 幸雄

狂言 鬼瓦

大名 野村 萬斎

太郎冠者 竹山 悠樹

野村万之介 石田 幸雄

名古屋観世会定例公演

九月十五日(月・祝) 十二時半始
名古屋 能楽堂

能 通盛

梅田 嘉宏 高安 勝久

相元 正樹 久田 幸親

寛 謙一 加藤 洋輝

狂言 太子手鉢

太郎冠者 松田 高義

主 野村小三郎

後見 伴野 俊彦

仕舞 三輪

武田 邦弘

武田 宗和

武田 邦弘 武田 宗和

能 松風

武田 友志 高安 勝久

野村小三郎

河村真之介 藤田六郎兵衛

狂言 三輪

武田 邦弘

武田 宗和

武田 邦弘 武田 宗和

仕舞 通小町

武田 邦弘

武田 宗和

武田 邦弘 武田 宗和

能 松風

武田 友志 高安 勝久

野村小三郎

河村真之介 藤田六郎兵衛

附祝言

主催 名古屋観世会

主 武田 友志

会 武田 志房

〔要員券〕
当日券五〇〇円(自由席)
枚数に制限あり、売り切れになる場合があります。

事務所 名古屋昭和区台町2-16-15
電話 052-841-4632
FAX 052-841-4632

名古屋城本丸御殿復元 工事着工記念事業

ゆめつくり狂言会

九月二十日(土)
名古屋 能楽堂

〔夜の部〕 (午後一時始)

おはなし 名古屋女子大学教授 林 和利

素囃子 高砂八段之舞 大鼓 河村真之介 太鼓 加藤 洋輝

狂言 三本柱 果報者 松田 高義

狂言 鐘の音 太郎冠者 野村 萬斎

平成19年度 財団法人愛銀教育文化財団 助成作品

本丸御殿新作狂言

狂言 夢つくり 大名 佐藤 友彦

脚色 野口 久

脚色 佐藤 友彦

脚色 野口 久

脚色 佐藤 友彦

脚色 野口 久

脚色 佐藤 友彦

脚色 野口 久

脚色 佐藤 友彦

脚色 野口 久

脚色 佐藤 友彦

脚色 野口 久

脚色 佐藤 友彦

脚色 野口 久

脚色 佐藤 友彦

脚色 野口 久

脚色 佐藤 友彦

脚色 野口 久

脚色 佐藤 友彦

脚色 野口 久

脚色 佐藤 友彦

脚色 野口 久

脚色 佐藤 友彦

脚色 野口 久

脚色 佐藤 友彦

脚色 野口 久

和泉流狂言大会

(初日) 九月二十七日(土) 九月二十七日(土)
(二日目) 九月二十八日(日) 名古屋 能楽堂

狂言 組

福の神

福の神

福の神

福の神

福の神

具塚世美歌 牧 玉美 高木美枝子
(3面へつづく)

福井県池田町「能面の祭典」

新作能面公募展

10月1日(11月3日)

福井県池田町では、10月1日から11月3日まで「能面の祭典」を実施、新作能面公募展(第7回)を開催する。

この行事は、平成20年度ふくい県民総合文化祭ふれあいフェスティバル参加事業として行われるもので、10月1日開会式、表彰式(会場能面美術館)を挙行、10月1日から11月3日まで次の2会場で開催される。

新作能面展

名古屋市博物館で

第1展示会場

池田町能面美術館

受賞作品の展示、入賞、佳作、入選の作品を中心に約150面が展示される。

第2展示会場

池田町能面の歴史館

応募作品の展示、全応募作品2500面程度を展示。

開館時間 いずれも午前10時～

戦後名古屋能楽史

(第二十章)

竹尾 邦太郎

昭和四十一年(一九六六)

承前

総合演劇雑誌「テアトロ」八月号、「狂言を語る」特集記事の内容は、「狂言のころ」語る人・大蔵弥太郎・和泉保之、聞き手ふじたあさや、「狂言と時代」小山弘志、「狂言の歴史」飯沢匡、「狂言界の展望と課題」増田正造、戯曲現代の狂言「女房」ふじたあさや、編集後記に編集者Nは云う。

「今号はごらんを通り、狂言を考へる」という特集をした。べつだん、伝統演劇の再検討というつもりからではない。それならば狂言古典の詞章や笑いの意義などに及ばねばならぬし、それはそれで意味があるが、今号の特集では、現代で狂言があるがままの姿をとらえてみたかったのだ。こういう

家、他楽師も当地で初めての方々で御座います。木賊(重智大曲)はも約十年振りです。信久師は昨年春本会にて「あふむ小町」をお勧め大好評で御座いました。此度も格別の開柄にて特別にお願ひしました。其他曲目配役は本会独特折々は出ぬ大曲に付き御鑑賞下さいませ。敬白

昭和四十一年七月

昭和三十九年七月

中部能面研究社(代表磯部峯雲氏)は「第6回新作能面展」を9月9日(火)から15日(月)まで名古屋博物館3階ギャラリ1室で開催する。

入場無料、午前9時30分～午後4時45分。後援 愛知県教委、名古屋市政教、中部能面研究会事務局 名古屋瑞穂区船原町4-16 10-1102号、TEL 052-882-4310

能「翁」観世喜之・大西信彦(千歳)、和泉保之(三番叟)、井上祐一(面箱)、藤田昭彦・田鍋惣一郎(洋一・明安)・大村良二・地頭観世武雄、後見南条秀雄・平野元章、舞囃子「鶴亀」観世武雄、狂言「三人片輪」三宅藤九郎・井上松次郎・三宅右近・和泉保之、一調「花籠」狂言「幸四郎」大西信彦(通)、能「木賊」大西信久・高安滋郎、素囃子「早舞」小島鉄次郎・福井啓次郎・寛敏一・鬼頭喜太郎、能「高砂」祝言之式・井田文二・西村欽也。なお後に田鍋惣一郎は自著「小鼓芸話」の中で「九月四日 大西信久氏に木賊を頼りました。四十年五月の鶴亀小町もそうでしたが、大西氏とは浅からぬご交遊をいただきまして、連年大曲を御願ひ致し、その都度気持ちよく勤めさせて頂き有難く存じて居る次第であります」と述べる。

九月十一日は中部金剛会定式能。能「小督」金剛殿・西村弘敬、狂言「鳴子遣子」佐藤卯三郎・井上松次郎・井上礼之助、仕舞三番「笠之段」伊藤鉄之進、「実盛」大塚一、「六浦」片野東四郎、独吟「絃上」今井幾三郎、仕舞「花籠」豊嶋弥左衛門、能「船弁慶」白波之伝「豊嶋三千春」高安滋郎。

九月十八日、観世会定式能当年度第四回、仕舞三番「弓八幡」加藤良久、「六浦」有賀滋子、「小督」福井道子、独吟「屋島」芥川秀子、仕舞二番「龍田」服部紗枝、「芦刈」熊澤惠美子、独吟「鶴之段」飯田新子、素囃子三番「三輪」観世静夫・林短玄、「大原御幸」林短玄・井上嘉久(法皇)観世静夫、「山姥」大西信久・井上嘉久、仕舞四番「難波」林短玄、「巴」井上嘉久、「楊貴妃」大西信久、

「野守」観世静夫、能「景清」柴田初太郎・高安滋郎、大鼓に谷口喜代三の来演。

九月二十三日、潤水会・林恩蔵追善会。社中で番外に仕舞六番「盛久」河村鍵二、「杜若」佐藤太後、「海士」杉村竹翠、「春日龍神」中川清、「小塩」柴田初太郎、「野守」岡久雄、連吟二番「葵上」六車真三・真柄米次、「山姥」増田一雄・鬼頭五朗、舞囃子「融」武田太加志。

月が替り十月二日、杉村竹翠の主宰する竹韻会三十五年記念能楽大会。番外仕舞三番「実盛」林短玄、「通小町」大槻秀夫、「殺生石」大槻文蔵、がある。



能組は、仕舞九番「雲雀山」熊

故 河村鍵三郎氏 四十五年五月には宝生流研究会記念能を行い、近藤乾三、松本長の諸氏等をお招きしました。この宝生流研究会というのはその頃私と長谷川、長尾、永田の諸氏とで作ったもので此会では宝生家元を初め同流の大家を順次招へいしました。これ

秋風さわやかに渡りき季節となりました。今年も明治、大正、昭和と三代にかけて、梅若の能として最高の芸風をうちたてられた先代梅若三郎師の生誕百年になります。私等梅若の流れを握り三人、祖父の偉大さを知るにつけて今更ながら、私等日頃の修練の甘さが、かえりみられ慚愧の至りでございます。伝統芸能における、この貴重な文化的梅若のユニークな色香をうけつぎ充実させるま、損傷なく次代に譲るのが私等使命と任務でございます。

生誕百年に、私等三人この自覚を新たにし、流儀の発展の為、碎心の努力を誓ひ、今最も色濃くこの芸風を伝承されている私等三人の芸統の父梅若義師の御指導のもとに、猶枝会を催し、私達の道場と致すことになりました。何卒きびしき御鞭撻の程御願ひ申し上げます。

十月八日、名古屋猶枝会が発会する。その意図を同人三人、梅若盛義・梅若善高・梅若修一は次のように述べる。

十月十日、梅田邦久の主宰する邦誼会は秋の社中会、番外に舞囃子「東方朔」梅田邦久・青木祥二郎、がある。

十月十六日は名古屋宝生流研究会の五十五周年と名古屋宝生会十周年を記念する別会。能組は「乱和合」辰巳孝・内藤泰二・西村弘敬、「羽衣」野口禄久・西村欽也、狂言「望月」宝生九郎・井上礼之助、能「望月」宝生九郎・高安滋郎、囃子方に貞光義次・飯島佐六・前川善雄が来演。

因に名古屋宝生流研究会は明治四十五年(一九一二年)五月の発会、記念能が同月五日、流儀挙げて催される。能五番「蟻通」近藤乾三・西村龍六、「俊寛」松本長・宝生新、「杜若」藤野清平・和泉太郎、「蟬丸」野口政吉・宝生新、「熊坂」瀬尾要・山本金三、狂言四番「鶏籠」吉田淳次郎、「察化」河村保之助、「悪太郎」野村又三郎、「棒縛」井上鉄次郎・井上新三郎。

この会について田鍋惣太郎は昭和三十三年六月二十日わんや刊の自著「小鼓芸話」の中で次のように述べる。

十月二十三日、第五十三回を迎える名匠鑑賞能は「三三三」に因みて」と題し、能「小督」桜間龍馬・福玉輝幸、一調「三井寺」田鍋惣太郎・大江又三郎(通)、能「松風・見留」観世喜之・武雄・福王茂十郎、狂言「三人片輪」茂山千

また当地宝生流の香宿・鬼頭嘉男(大正七年七月生、昭和二十三年、名古屋宝生流研究会に入会。昭和四十一年六月、能楽協会に入会、職分は流誌「宝生」に寄稿した「幕藩時代と維新後百年の名古屋能楽界(特に宝生流)」の中、平成十三年七月号及び十一月・十二月合併号で宝生流研究会に触れる。

四十五年に田鍋惣太郎、長尾庸造、永田虎之助の協議に依って宝生流の更なる興隆を願って他地域に見ない画期的な活躍を見せた「名古屋宝生流研究会」を創立しました。本会は宗家を始める数名の師に就き高度な素謡を、限定的な会員制で稽古を戴く態勢をとり、当初野口政吉、桐谷正治、今井竹二で始まり、間もなく宗家宝生重英の年に四、五日の来名を得ました。年間十五回位の稽古日と、素謡会を年一回公開にて行い大いに励みになりました。当初の世話役は長尾庸造、亀井市治で後に服部卯助、高橋鑄三郎が交替しました。

本会は昭和十九年十月、戦況悪化に伴い休止の巴むなきに至りましたが、終戦後早くも昭和二十二年三月には再発致しました。但し長年ご指導賜りました野口先生は道を譲られて、宝生宗家・宝生英雄・野口禄久・辰巳孝の四師となられました世話方は高橋鑄三郎、鬼頭嘉男。以前に替らぬ熱心な御指導が続き、昭和四十一年十月に五十五周年を迎え名古屋宝生会十周年と共同で記念能を行いました。残念な事に昭和四十九年七月に九郎宗家の御逝去に伴い、立派な成果を挙げた本会も六十三年間の幕を閉じました。

はそれ以来中絶せず今日までも続いております。宝生流の組織としては全国的に見ても非常に独特な存在となっております。

また当地宝生流の香宿・鬼頭嘉男(大正七年七月生、昭和二十三年、名古屋宝生流研究会に入会。昭和四十一年六月、能楽協会に入会、職分は流誌「宝生」に寄稿した「幕藩時代と維新後百年の名古屋能楽界(特に宝生流)」の中、平成十三年七月号及び十一月・十二月合併号で宝生流研究会に触れる。

狐 因幡堂 塚 長 光 梶山 伏 棒 縛 重 喜 茶 壺 小舞 名取川

内 沙 汰 咲 嘩 舟 ふ な 水 掛 髻 鐘 の 音 盆 山 鬼 瓦 腰 祈 伯 母 け 酒 重 喜 蟹 山 伏 因 幡 堂 盆 山 舟 ふ な 小 舞 兎

主 人 寺 田 勝 浩 井 上 靖 浩 市 川 正 雄 大 内 啓 輝 山 崎 隆 雄 中 島 知 亮 佐 藤 融 高 野 芳 子 小 野 融 兵 藤 朝 哉

主 人 寺 田 勝 浩 井 上 靖 浩 市 川 正 雄 大 内 啓 輝 山 崎 隆 雄 中 島 知 亮 佐 藤 融 高 野 芳 子 小 野 融 兵 藤 朝 哉

主 人 寺 田 勝 浩 井 上 靖 浩 市 川 正 雄 大 内 啓 輝 山 崎 隆 雄 中 島 知 亮 佐 藤 融 高 野 芳 子 小 野 融 兵 藤 朝 哉

主 人 寺 田 勝 浩 井 上 靖 浩 市 川 正 雄 大 内 啓 輝 山 崎 隆 雄 中 島 知 亮 佐 藤 融 高 野 芳 子 小 野 融 兵 藤 朝 哉

主 人 寺 田 勝 浩 井 上 靖 浩 市 川 正 雄 大 内 啓 輝 山 崎 隆 雄 中 島 知 亮 佐 藤 融 高 野 芳 子 小 野 融 兵 藤 朝 哉

発行能楽の友社

名古屋市中千種区千種2丁目18-18
(郵便番号 464-0858)
電話 (052) 731-7984
FAX (052) 733-2837
振替口座 00800-6-36393

購読料 1年 1100円
郵送の場合 1年 1800円
一 部 100円

能楽の友

NHK放送予定(平成20年9月~10月)

Table with NHK-FMラジオ能楽鑑賞 (毎週日曜日7時15分~8時) and program details for various dates in September and October.

演能カレンダー

名古屋能楽堂

(能・狂言演能関係)
(TEL 052-231-0088)

Calendar of performances from 9/20 to 10/31, listing dates, times, and program details for various events.

ワキ方の大曲2題

15世福王茂十郎「檀風」
33回忌追善能

名古屋能楽堂「張良」
名古屋能楽堂

ワキ方の重い習いとされる「檀風」と「張良」が大阪と名古屋で上演される。

能「檀風」

10月13日大槻能楽堂

ワキ方福王流十五世福王茂十郎三十三回忌追善能は10月13日(祝)大槻能楽堂で開演。観世流・金剛流各宗家はじめ、シテ方五流、狂言方をそろえ上演される、主催・福王会。能組は次のとおり。

能「檀風」シテ大槻文蔵、ツレ大西智久、ワキ福王知登、狂言「武悪(茂山七五三)」「舞囃子(葵上)(観世清和、横川小聖、福王茂十郎)」「舞囃子(船弁慶)(金剛永護、弁慶・福王和幸)」「仕舞(柏崎)(山本勝一)」「藤戸(梅若吉之丞)」「海士(浦田保利)」「仕舞(八島)(辰巳満次郎)」「枕草(高林白牛)」「融(豊嶋三千春)」「能」檀風(シテ梅若六

郎、子方赤松裕、ワキ福王茂十郎、福王和幸、江崎敬三。主宰福王会、午後一時始、入場料/指定席A10500円(当日12600円)、指定席B8400円(当日10500円)、自由席6300円(当日8400円)、学生4200円(当日5250円)
お申込み ☎06・67661・8055 大槻能楽堂。

京都観世能

建設50周年記念
京都観世能建設五十周年記念
10月19日、26日

京都観世能建設五十周年を記念して、京都観世能の主催で「第五十回京都観世能」が10月19日(日)・10月26日(日)の2日間開催される。

「第1日目」午前10時半始
「翁」(父尉・片山清司)、「高砂」(八段之舞(シテ浦田保親)、狂言「末広かり」(茂山忠三郎)、「望風」(見留(シテ林喜右衛門)、「望月」(古式(シテ橋本三郎)ほか仕舞

「第2日目」午前10時半始
「清経」恋之首取(シテ武田邦弘)、「羽衣」彩色之伝(シテ片山伸吾、狂言「酢薑」(茂山千作)、「大原御幸」(シテ井上裕久)、「恋重荷」(シテ大江又三郎)
入場料(各日とも)S席15000円、A席11000円、学生席6000円、京都観世能館TEL 075・771・6114

能「張良」

10月31日名古屋能楽堂
名古屋能楽堂10月定例公演は、10月31日(金)名古屋能楽堂で午後6時30分開演、狂言「正動方角」能「張良」が上演される。

「張良」はシテ泉嘉夫、ツレ古橋正邦、ワキ高安勝久(番組③面掲載)

廣田鑑賞会能

10月5日能「定家」
廣田鑑賞会能(第十一回)は十月五日(日)京都金剛能楽堂で催される。

午後一時半始。番組は、狂言「伊文字」(善竹隆平、善竹隆司、善竹忠亮)能「定家」(シテ廣田幸隆、ワキ高安勝久、笛・一噌庸二、小鼓・久田舜一郎、大鼓・河村大、間・善竹忠一郎)

入場料/一般八〇〇〇円、会員七五〇〇円、学生三〇〇〇円、取扱所/金剛能楽堂 ☎075・441・7222、廣田鑑賞会 ☎075・7222・9123など。

大須観音新能

10月4日、大須ロータリークラブ記念事業
大須ロータリークラブでは、同クラブ創立25周年記念事業として、10月4日(土)名古屋市中区の大須観音で「大須観音新能」を開催する。開演は午後5時半。

入場料無料、要整理券(10月4日午後4時より大須観音境内にて配布。)※当日雨天の場合は名古屋能楽堂で開催。問い合わせは、名古屋大須ロータリークラブ事務局(Tel 052・251・0018)

東海異会大会

九月二十一日(日)午前九時始
名古屋能楽堂

素謡 求塚 玉井 道夫
隅田川 足立 知子
長崎 邦子
岩田 幸子

能 船弁慶

飯富 雅介
後藤 孝一郎
藤田六郎兵衛

番外仕舞 天鼓

辰巳満次郎
和久壯太郎
辰巳孝弥

名古屋観世九阜会

十月五日(日)午後一時始
名古屋能楽堂

解説 観世喜正・後藤嘉津幸
「巴」の見どころ、聞きどころ
巴御前の面と装束

能 巴

飯富 雅介
河村真之介
後藤嘉津幸

狂言 杭か人か

野村小三郎
松田 高義

仕舞 雨之段

駒瀬 直也
中野 宜夫
五木田三郎

能 西行楼

飯富 雅介
福井四郎兵衛
大野 洋輝

「入場料」
一般 全自由席 五千円
学生 二千円
申し込みフリーダイヤル0120・150・950(観世九阜会)
チケットぴあ0570・02・9999、
Pコード389・227

武田謡楽会秋季大会

十月十二日(日)午前九時三十分始
名古屋能楽堂

番外仕舞 清経ケケ 武田 大志

素謡 卷絹

坂 富美子
瀧美子江子
荒木 俊彦

能 高砂

小瀬古勝己
竜田 加藤 愛郎

能 船弁慶

飯富 雅介
河村真之介
藤田六郎兵衛

番外仕舞 班女

武田 邦弘

素謡 景清

吉井 順一
吉井 基晴

仕舞 花筐

小瀬古喜代子
松陰 真澄

能 山姥

市川 敦子
松風 田中 萬子

「御来場歓迎」
主催 武田謡楽会
武田 大邦 志弘

邦謡会発表会

十月十三日(祝) 九時二十分始
名古屋能楽堂

- 素謡 鶴亀 梅田 邦久 梅田 嘉宏
山姥 高橋 禮子 溝口 乙子
三井寺 富田 尚史 木村万寿豊
舞囃子 胡蝶 平松美代子 源氏供養 箕浦美智代
仕舞 杜若 橋本 恒夫 実盛キリ 三浦 謙介
素謡 隅田川 野田ちづ子 沖見 ナカ
舞囃子 三輪 森 幹子 藤 戸 三浦百合子
独吟 雨之段 横山 國枝 関寺小町 深川寿美子
素謡 大原御幸 高野千勢子 瀬辺 聡子
舞囃子 弱法師 石原 明子 定 家 西川喜代子
素謡 鸚鵡小町 半田 智子 二木 暉子
能 砧 今沢 美和 河村総一郎 上田 慎也
番外仕舞 笹之段 片山慶次郎 放下僧小歌 片山 清司
舞囃子 花筐 近藤とき子 阿 漕 森崎紀子
仕舞 籠太鼓 高野千勢子
素謡 恋重荷 加藤井知子 橋本 恒夫

戦後名古屋能楽史

〔第二十章〕 竹尾 邦太郎

昭和四十一年(一九六六)

十一月六日、名古屋観世九皇会
は秋季大会、番外に狂言「文荷」
佐藤卯三郎・井上礼之助、能「通
小町・雨夜之伝」観世喜之・西村
弘敬がある。
十一月十三日は名古屋淡交会秋
季大会。番外に「神歌」尾関健太
郎・鬼頭五朗、素謡「菊慈童」六
車真三・飯田賢、仕舞三番「田
村」飯田新子「桜川」藤井千鶴子
「昔刈」増田十草、連吟「千手」
下田雄三・奥善助・飯山嘉俊、仕
舞二番「経政」松田憲二「羽衣」
中野寛兵衛、狂言「柿山伏」佐藤
卯三郎・井上松次郎、仕舞三番

舞囃子 遊行柳 井上 苑枝 卒都婆小町 堀 みどり
舞囃子 養老 梅田 邦久
祝言
主催 邦 梅 田 謡 会
「入場無料 御来場歓迎」

鳳の会第49回公演

十月十八日(土) 午後一時三十分始
名古屋能楽堂

- 狂言 栗焼 太郎冠者 佐藤 友彦 主人 鹿島 俊裕 後見 大野 弘之
狂言 雷 雷井上菊次郎 講師 佐藤 融 地謡 今枝 靖雄 今枝 靖雄
狂言 弓矢太郎 太郎冠者 佐藤 友彦 講の業 井上 靖浩 今枝 靖雄 今枝 靖雄
★演者の語らう、Q&A
終演後会場でお客様の狂言に関する疑問・質問にお答えします
入場料 A席五〇〇〇円、B席三三〇〇円
学生二〇〇〇円
会員A席四〇〇〇円、会員B席二五〇〇円

問い合わせ先 井上菊次郎方(052・854・8607)
佐藤友彦方(052・911・8764)
名古屋能楽堂(052・231・0088)

二十回記念特別公演

能「能」久田勘助の会
十月十九日(日) 午前十一時開演
名古屋能楽堂

- 能 小鍛冶 久田勘助 杉江 元 正樹 後藤嘉津幸 藤田六郎兵衛
能 道成寺 久田勘助 高安 勝久 河村眞之介 金春 国和 藤田六郎兵衛
能 砧 三村 徳布 久田三津子 河村総一郎 鹿取 希世
狂言 鬼瓦 大名 佐藤 友彦 太郎冠者 大野 弘之 後見 鹿島 俊裕

第29回名古屋金春会能

十月二十五日(土) 午後一時三十分開演
名古屋能楽堂

- 仕舞 老松 本田布由樹 高橋 汎 鬼頭 尚久
仕舞 芭蕉 高橋 汎 鬼頭 尚久
能 柏崎 飯富 雅介 河村総一郎 鹿取 希世 後藤孝一郎 加藤 剛 高橋 安明 豊田 均 高橋 安明 廣瀬 雅弘 福井 順章

狂言 鐘の音 太郎冠者 佐藤 融 主人 佐藤 友彦 後見 井上菊次郎
仕舞 難波 金春 安明 吉場 廣明 佐藤 俊之
能 黒塚 本田 光洋 高安 勝久 井林 清一 加藤 洋輝 雷鳴の出 今枝 郁雄 後藤嘉津幸 竹市 学

三交大会

十月二十六日(日) 午前九時半開演
名古屋能楽堂

- 番外仕舞 枕之段 久田三津子
仕舞 杜若 園 さなへ 渡辺 きい 岩崎 光子
素謡 融 坂井 昭 山内 弘司
仕舞 龍松 大輪真由美 山内 弘司 小森 祐子
素謡 恋重荷 伊藤 和美 早川 功一
仕舞 鐘之段 秋田恵美子 戸松 花枝
舞囃子 亭子洗小町 武藤 明美 市川美保子
能 班女 山内満智子 飯富 雅介 上野 義雄 鹿取 希世 橋本 幸 井上菊次郎 後藤嘉津幸

- 能 隅田川 飯富 雅介 河村眞之介 藤田六郎兵衛 橋本 幸 井上菊次郎 福井四郎兵衛
舞囃子 海士 坂井田七ツ子 山田紗智子 百 萬 後藤 阿紀
子方 光松 泰志 飯富 雅介 河村眞之介 藤田六郎兵衛 橋本 幸 井上菊次郎 福井四郎兵衛
能 隅田川 飯富 雅介 河村眞之介 藤田六郎兵衛 橋本 幸 井上菊次郎 福井四郎兵衛

予告第2号 能楽の友

「能楽の友」新巻発行
去巻の注目を浴びて
各界に高まる期待の声

「能楽の友」誕生
伝説美の発展を期して

「能楽の友」新巻発行
去巻の注目を浴びて
各界に高まる期待の声

「能楽の友」誕生
伝説美の発展を期して

「能楽の友」新巻発行
去巻の注目を浴びて
各界に高まる期待の声

「能楽の友」誕生
伝説美の発展を期して

②面よりつづき
算用数字はこの時の年齢。なお観
世寿夫は昭和十九年から番組面
は清寿を名乗ってをり、昭和二四
年一月に本名の寿夫に戻って
いる。名古屋初演は恰も清寿時代
で、以後、当地の出動は、昭和二
六・七・八年、三〇年、三二年、
三五・六・七年、四八・九年を除
く年一・二度、概ね名古屋観世会
定式能である。

当地最後の舞台は昭和五三年九
月九日、鬼頭八郎喜寿・鬼頭英二
能楽協会入会祝賀の長生会社中
会、番外の舞囃子「小袖曾我」で
ある。弟・観世静夫との男舞は勇
壯闊達に程遠く、冥界からさ迷い
出た幽鬼を思わせる鬼気、凄じ
いばかりの能への執心にただただ畏
れるばかりだったのを思い出す。
世阿弥の再来とも謳われた観世寿
夫、病魔には克せず、惜しまれつ
つ此の年、二月七日、死去、享
年五三歳の若さだった。

死の翌年、昭和五四年六月一二
日、白水社より遺書とも思える著
書「心より心に伝ふる花」が上梓
される。萩原達子編の観世寿夫略

年譜に九月九日「小袖曾我」の記
載はないが、翌十日、東京は柏
会、番外の舞囃子「花笠」が舞台の最後と
なる、とある。この二日間、観世
寿夫はどのような思いで舞台上に
立って居たのであろうか、想像する
だけに胸締めつけられる思いであ
る。没後も役の付いている番組が
存在するが、代勤者などの消息は
不明。

十一月三日、故二十四世観世
左近善能。「神歌・法会之式」
鬼頭五郎・林甲子夫、連吟「誓願
時」増田十草・尾関健太郎・飯田
賢・六車真三、仕舞五番「経正ク
セ」石谷初蔵「花月クセ」殿島修
二「清経キリ」稲生芳雄「江口キ
リ」塚本秀雄「海士キリ」竹内六
郎、連吟「葛城」芥川秀子・飯田
新子、仕舞五番全てキリ「藤」熊
沢恵美子「小塩」有賀滋子「六
浦」福井道子「杜若」加藤良久
「龍田」服部紗枝、連吟「車之
段」後藤契雲・真柄米次・犬飼末
吉、仕舞五番「七騎落」丹下三義
「蟬丸」加藤総兵衛「盛久」加藤
丈太郎「舍利」河村鉦二「鶴飼」
杉村竹翠、連吟「笹之段」高野瀬

透・増田一雄、舞囃子「絵馬」武
田太加志・大槻秀夫・柴田初太
郎、能「安宅」勸進帳・延年之舞
・貝立「観世元昭(シテ)」関根祥
六・柴田取武・久田秀雄・梅田邦
久・木月行行・佐藤太俊・藤井徳
三・角寛次郎・観世武雄(以上同
山)吉田隆(子方)森茂好・和泉
保之・井上松次郎、狂言「宗八」
和泉保之・野村又三郎・井上礼之
助、能「大原御幸」観世元正・杉
浦元三郎・片山博太郎・観世喜之
助(法皇)高安滋郎・西村欽也・和
泉昭太郎・立石澄雄・高安勝久・
河村丘造、一調「胡蝶」観世元信
・山本博之(謡)、能「融」思立
之出・白式舞働之伝「観世鏡之丞
・森茂好・佐藤秀雄、名古屋観世
会々員総出の大能。他にシテ方野
村四郎、笛の寺井政教、大鼓に安
福春雄の来演。

十一月二六日、河村一謡会。番
外に主宰の河村鉦二の舞囃子「船
弁慶」がある。

十二月二日は柴田初太郎の主

宰する洵水会秋期大会、地謡に大
阪から山中義滋が来演、狂言は佐
藤卯三郎・井上礼之助の「鬼
瓦」。

師走に入り十二月四日、恒例に
なっている能楽協会名古屋支部の
主催する楽師会乱能。舞囃子五番
「吉野天人」寛範「小袖曾我」
山本敬一郎「船弁慶キリ」河村総
一郎「紅葉狩」助川龍夫「狸々」
佐藤秀雄、能二番「羽衣」鬼頭季
信・吉田定男、「葵上」梓之出・
空之祈「田鍋惣太郎」藤田六郎兵
衛、狂言二番「蟹山伏」高安滋郎
・西村欽也・西村弘敬、「引括」
戸田秀雄・竹腰勝一・鬼頭嘉男・
鈴木義久・吉田俊彦・佐藤太俊、
名古屋支部以外に「小袖曾我」の
シテを勤めた山本敬一郎(大鼓方
・大阪)、「葵上」の大鼓・和泉
保之(狂言方・東京)、小鼓・鈴
木一雄(シテ方観世流・茅ヶ
崎)、太鼓・辰巳孝(シテ方宝生
流・寝屋川)が来演。

十二月十日、梅若修一の主宰す

る名古屋修撰会大会。番外に舞囃
子二番「高砂」梅若修一、「頼
政」梅若猶義、がある。

昭和四十一年度の納会は十二月
十一日の名古屋宝生会。素謡「紅
葉狩」衣斐正宜・戸田秀雄、仕舞
三番「経政」馬塚富四夫「笹之
段」辰巳孝「難波」内藤泰二、能
「源氏供養」倉本雅・高安滋郎、
狂言「飛越」佐藤卯三郎・井上礼
之助、能「阿漕」野口緑久・西村
欽也。

前後するが、十月一日、本紙
「能楽の友」が来年(昭和四二年)
一月からの発行を目指し、その準
備も兼ねて予告号を刊行、題字は
当時の熱田神宮・篠田康雄宮司の
揮毫。次いで十二月一日には予告
第二号を出す。大方の編集方針、
紙面の輪郭が整い、あとは創刊第
一号を待つばかり。爾来昭和四二
年一月の第一号から平成二十年九
月の現在まで、四十九年九ヶ月の歳
月を経て五〇一号を数えるに至

る。これは東京の能楽書肆・能楽
書林の出す全国紙「能楽タイム
ズ」の六七八号(平成二十年九月
現在)に次ぐ。

さて、当「戦後名古屋能楽史」
も回数にして一〇三回、八年七ヶ
月に及び「能楽の友」紙発刊の年
まで漕ぎ着けた。今後、名古屋能
楽史は「能楽の友」紙歩みが歴
史そのもの、今回を以て欄筆す
る。年代により記述の精粗もあ
り、一回毎に小見出しを付けるこ
とも考えにあったが、何れも継続
上で、と思ったのが浅幕だった。
資力に加うるに時間の不足、日暮
れて道遠し、を痛感する。

御愛読下さった読者諸兄姉、愛
情をもって励まして下さった嘗て
流誌「金剛」の編集に携わられた
前西芳雄氏、来名の都度消息をお
訊ね下さる小林貴氏、そして当紙
主幹・加野昭二郎氏にお礼を申し
上げた。ありがとうございままし

〔三交會番組つづき〕

舞囃子 安宅 伊藤和美 紅葉狩 藤井一美
山姥 藤井圓隆 急之舞

能 安達原 原田千恵子 杉江元 柳原富司 加藤洋輝
間 井上正樹 柳原富司 竹市学

仕舞 高砂 菊地翔子
後見 橋岡慈観 地謡 藤井圓隆 上田公威
藤井功一 上田貴弘
船弁慶 瀬戸勝治 須部 南 笠田昭雄

舞囃子 花月 増永悦子 道明寺 早川功一
通小町 後藤弘次郎 久田勸吉郎 久田勸

番外仕舞 龍虎 久田勸吉郎

附祝言 (終了予定 五時半頃)
主 三交 久田三津子 会

〔御来場歓迎〕

狂言 止動方角 太郎冠者 佐藤友彦 主人 井上菊次郎
後見 梅田邦久 後藤藤津幸 馬今枝 郁雄 融
後見 井上靖浩

能 張良 高安勝久 河村眞之介 加藤洋輝
間 井上靖浩 後藤藤津幸 竹市学

主 名古屋文化振興事業団 (名古屋能楽堂)
能楽協会名古屋支部

〔チケット料金〕
指定席 前売四〇〇〇円(能楽堂のみ取扱い)
自由席 一般三〇〇〇円、学生二〇〇〇円(当日券各五〇〇円増)
前売券取扱い 名古屋能楽堂(052-231-0088)
プレイガイド(栄プレチケ92、松坂屋ほか)
チケットぴあ0570-022-9999
Pコード389-163

名古屋能楽堂十月定例公演
十月三十一日(金)午後六時三十分開演
名古屋能楽堂

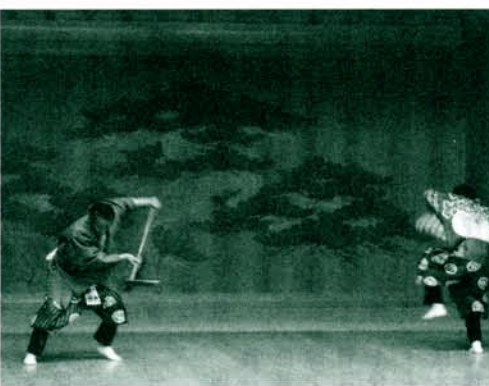


観世会定例公演 「清経・替之型」 観世喜之 (杉浦賢次氏撮影)

◆夏の舞台から(その二)◆
「名古屋観世会」「名古屋宝生会定式能」
「名古屋梅猶会」「幸謡会能」
竹尾邦太郎

夫・清経の
遺髪を齋す淡
津三郎(ワキ
勝久)に、受け取る妻(ツレ)大
志。「髪を残し置かれて候
程に」と立って恐懼のワキが「こ
れまで持ちて参りて候」と手渡せ

ば、へこれは中将殿の、と声も上
気するツレ、両人の心情的に表
われる。見る度に悲しみの種とな
る遺髪、亡夫の霊に手向け返せ
ば、それを知ってか夢枕に現われ
る清経(シテ喜之)、ツレに入水
をきつくなじられ、「何しに」と



観世会定例公演 友彦・佐藤融 (杉浦賢次氏撮影)

5分
「水掛簪」 稲作

語気強く反発するも「返させ給ふ
らん」は一種哀調、喜之の心象描
写は謡の巧さ。

小書で入水に至る前を述べるク
セは橋懸。遠く二ノ松から源氏の
白旗に紛う、白鷺の群れ、を目付
柱の方へ眺め、へ多勢かと肝を消
す、と目を逸らすかに右ウケ、踏
む二ツ拍子から暫し面を照らし
居たのが、驚きに呆然となつて
居る様に思え絶妙だった。(一時間

「水掛簪」にとつ
て水の
確保は一大事、「我田
引水」が転じ、己れの
利には他を顧みない、
の謂に使われるのも宜
なる哉、男(友彦)と婢
(融)の骨肉の争いを面
白がって居られま
い。

農具は簪が鋤、男は
鍬、着衣は兩人括袴だ
が上衣は肩衣に羽織の
差、農作業に羽織は無
用では……ともあれ
水掛けが泥掛けに(写
真)エスカレート、実の娘も嫁に
出せば味方になり得ない簪の妻
(郁雄)、男は怒りに昔は農村の一
大イベントだった祭に呼ばぬと言
い放つが、「呼ばれいでも大事な
い」と娘、男と婢の深刻な水問題
よりも、人間関係、就中、簪夫妻
のドライな現代風俗をみる思い、
古風な、朴訥とした味わいは薄
い。

尾張徳川家
能面と能装束
金沢能楽美術館で開催

金沢能楽美術館(金沢市
広坂1-2-25)は、秋季
特別展として「尾張徳川家・
能面と能装束」展を9月20日から
10月19日(日)まで開催している。
尾張徳川家は二代藩主光友が
「江口」のシテをつとめ、公的慶

事、奥向きの女性たちのための慰
能など、数多くの能が行われてき
た。現在、徳川美術館には尾張徳
川家伝来の能面、能装束および諸
道具類が総計千二百二件所蔵され
て華麗な美意識にふれることがで
きる。

主催 金沢能楽美術館、金沢芸
術創造財団。観覧料 一般・大学
生三〇〇円、六十五歳以上二〇〇
円、高校生以下無料。電話は07
6-220-2790。



観世会定例公演「舟弁慶」山階彌右衛門・富田尚史 (杉浦賢次氏撮影)

(3面よりつづき)

テ弥右衛門、それを制止するのは弁慶(ワキ勝久)の独断と思い込むが、判官の御説と分かれ、傷心を秘め健気に振るまう心根がみえる。此処で子方を動める尚史君の、時節を待てる判官の説、きつぱりと爽やかな口吻が大いに引き、以後の舞台を引き締め素晴らしい。

往々にしてみられるが、子方が下手(しよほ)と元氣のない口跡、落着きの無さ、など、だど舞台の成果は得られないこと、演出家としての立場のシテはこのことを十二分に考慮すべきだろう。余談だが平成二年、高安滋郎・西村弘敬追善能の「調伏曾我」シテ金剛殿の子方は茂山逸平(現・大蔵流狂言方、当時十一歳)、際立って巧かったのを覚えている。難しいのかも知れないが、流派・門閥・師弟・血縁に拘泥することなく、立派な舞台を見せて貰いたいのが見所の願いだである。

因に全長一三杆の当時日本最長の灌漑用愛知用水が開通したのは昭和三年、遠い昔ではない。世界に水不足の国は多々、水を大切に願うばかりである。「水掛舞」は世の中に警鐘を鳴らす教訓の狂言ではある。(18分)

「舟弁慶・前後之替」

判官 (子方) 富田尚史の西下に同行したい静(シ)

法政大学能楽セミナー開講

10月15日から全5回

法政大学大学院/野上記念法政大能楽研究所公開講座として、「第13回法政大学能楽セミナー」が10月14日から29日まで5回にわたって開講される。

今回のセミナーは、時代を切り拓いた能や狂言の本をとりあげ、それらの本が果たした役割や影響、著者の人物像など紹介される。

セミナーの日程は次のとおり

【第1日】 10月14日(火) 「もうひとつの謡本」丸岡桂の謡本改訂、講師シテ方観世流・味方健氏

【第2日】 10月21日(火) 「世子六十以後申楽談儀」吉田東伍の世阿弥発見、法政大学名誉教授・表章氏

【第3日】 10月22日(水)

退ると楽(がく)は撥で舞うが、舞の途次、撥を後見に渡し、懐中の扇を取って舞継ぐ。舞上げた後は、立ち舞ふ舞の袖、で袖を被クのを珍しく思った。(1時間32分)

「咲嘩」

連歌に不得手な主者(シテ)に都の伯父を迎へに遣れば、都へ行く嬉しさに肝腎の住所を聞きそびれ、伯父に成り済ました咲嘩の異名をもつ名高いスツバ(小アド郁雄)を連れて戻る。「頼うだお方御座りませうか、御座りますか、御座りませうか、御座りますか」と戻った挨拶も騒々しく、責を果した喜びの口吻が如何にも得意意。褒められると思いきや、別人と分った主に却って叱られ、不貞で直ぐ追返そうとすれば、「あの様な者を荒立つれば却って仇をなす」と止められ中へ入ることに。粗相があつてはと氣遣う主は、スツバと分つて腹癒せもあるか見くだす様に奔放に振舞う太郎冠者にも戦々兢兢々、間に入って居心地の悪さ落着かないスツバ郁雄が好い味をみせる。(33分)

「梅枝」 一夜、宿を借りた旅の法華僧(ワキ雅介ワキツレ正樹)部屋に不似合な太鼓と舞衣裳を不審すれば、管弦の役を争い浅間に討たれた富士の亡妻が残した形見の遺品と語る宿の主たる里女(実は亡妻の霊シテ澄子)、極く静かな展開でしんみりしたシテ語が良く、素姓詳らかにせず立ち帰る執心を消し給へ、ワキに袖アシラヒして消えるところ、寂しい雰囲気を送り笛(誠)が利く。

「絃上・宛」

琵琶の名手・藤原師長(孝弥)は更に奥儀をと渡唐を企て、従者(ワキ勝久ワキツレ正樹)を伴い、名残りに須磨の月を愛でんと西下。此処にまた曰くありげな塩漬の老夫婦(シテ満次郎ツレ大二郎)、シテは田子舞を担げ、前後を手練つて持ち、舞台へ入ると手を弛め正面へ、田子二つ同時に舞台外から鮮やかに汲む。塩屋に帰り、一度は断るが師長一行に宿をし、従者が自慢する師長の琵琶を聴聞することに。床几を下りた師長は階段近く出て下居、弾き出すが、途中で止めてしまう原因が板庇を打つ雨音と聞くと、苦を尊く態が上々。いわゆる調律の見事に老夫婦が凡俗ではないと悟る師長は、逆に演奏を乞い、その力量を知って愕然たる思い、床几を立ち密かに去ろうとする。一方、シテは越天楽に事寄せ、梅が枝にこそ鶯は果をく(日本にこそ貴方は居場所を造られよ)と師長の渡唐を断念させ、舞台が締った。(58分)

「呂蓮」

誰しも他人の職業は良くみえるもの、泊めた僧(シテ菊次郎)が「都へ上る」と聞き羨やむ

茶屋(アド友彦)のこのまま後生大事に、と説かれても通世の意志は固く、僧は危ぶみ案するが、諒解を明かし消える老夫婦、前場が惹きつける。アヒは大龍王ノ眷属(靖造)、末社ノ神の立出で面武悪が如何にもそれ。琵琶の名器・獅子丸のことも爽やかに立シヤベリして退くと後場。

「二人静・立出之一声」

何事もなく出る菜摘女(ツレ猶義)、笛前に控えると、名宣笛(六郎兵衛)で太刀持(アヒ)を従え、勝手社(弓矢の守護神という)の神職(ワキ勝久)、七草の節句で若菜を神前へ供えるため、ツレを遣わすようアヒに命じる。ツレに用を伝え切戸へ退くアヒ、ツレは常座で後見から手籠を取り、見渡せば、と長閑かな早春の景の中に、そこへ呼掛で現われる里女(シテ吉之丞)、問答に素姓も明かさず、一日経の回向を乞い、疑う人あらばあなたに憑くことで身の上を明らかにすると、舞台へは入らず三ノ松で小廻り、すつと消える。卒直なツレと感情を殺したようなシテの問答がミステリアスで惹きつけ、それ故に戻ったツレがワキに件の経緯を話して不審を口にした途端「なに真しからずとや」と逸るツレの口調に先の里女が取り憑き、今や人格は菜摘女ではないこと納得させられる(一種のサイボーグ)。ワキとの問答

に里女は静御前(ノ霊)と明かさず、ば、舞を所望されて後見座で物着になる。唐織を赤地縫箔腰巻に、ワキから渡された静折鳥帽子・紫長絹(枝垂桜・金扇・銀杏・流水文)を着ける。ワキが舞の見物をも勧め、いま三吉野の川の名の、とツレの「セいで幕が上がると、同装のシテが、菜摘女と思ふなよ、と諷いながら出、川流近き山陰の香も懐かしき袂かな、と一ノ松でツレを見込み、へさても義経……の不運を述べるサシの連吟はピッタリ合いつに聞える素晴らしい。サシ切へ科なかりしも、で共にシヨリ、へさる程に、と判官吉野落の景を述べるクセになると、シテは一ノ松で床几に掛かり、独り舞う己れが悪い自分身を眺める。上ゲ端はツレだけが語った。

「卒都婆小町」

下ろしていた老女(シテ幸江)を見始め、上洛途次の高野山の僧(ワキ和幸ワキツレ浩史)は気負って教化しようとするが、逆に論破され愕伏する。シテは襟白二・着付・着付ハ古色ノ付キ夕白地露芝文摺箔・銀地露芝二飛燕文縫箔腰巻・黒縷水衣・女笠・杖の姿、面は品のよい老女、きりつと良く着いた装束に先づ雲囲気があり残人の色香も。卒都婆に腰を下ろすところは下居でなく後見が出す床几に。事前に床几を出して置くこともあるが此の方には安全。非を打つ若い僧の氣勢を受け、逆にじつくり論ずるに反論する印象の、攻守自在の卒都婆問答が見事で小気味よく、相手が降参すればつい兆す驕慢は僧への皮肉。床几(卒都婆)を立ち、杖に纏るよう正中下居に素姓明かせば、一代の才媛小野小町と知る僧。シテは現在の境遇に思いを致せば身じろぎも出来ず、へ百歳に一歳足らぬ、で漸く僧へアシラフト、へ影恥かしき、と面を背けて笠で隠す含羞。それに追い打ちをかけるように乞食姿の一々を説き明かさず、へ狂乱の心憑きて、と杖を手放すと、突如狂乱する。以下、深草少将ノ怨霊が小町に取憑き、百夜通いの様を見せることに。物着で黒縷水衣を白地露芝文長絹に替え、風折烏帽子を着ければ、深草少将が小町へ通う恋路。へ九十九夜、と左手の指を折り、へあらず目まひや、と扇を胸に当てるところ(写真)、報われなかつた恋の怨み憫々と、型通り胸を打たれる。キリは憑いている怨霊から解放され、へ花を佛に手向けつつ、と扇を左手に捧げて出、常座で合掌、留拍子は踏まなかつた。老女物は老女に扮するものではなく、老体その人が演ずるもの、と聞くが正にその通りで、披キともあって幸江慎重神妙に勤め、老小町の気位、心持ちを巧妙に描写して好演だった。地頭は文蔵、囃子は六郎兵衛・富司忠・鏡一。(1時間35分・6月22日・幸謡会)



幸謡会能楽「卒都婆小町」近藤幸江 (杉浦賢次氏撮影)

「卒都婆小町」 気付かず腰を下ろしていた老女(シテ幸江)を見始め、上洛途次の高野山の僧(ワキ和幸ワキツレ浩史)は気負って教化しようとするが、逆に論破され愕伏する。シテは襟白二・着付・着付ハ古色ノ付キ夕白地露芝文摺箔・銀地露芝二飛燕文縫箔腰巻・黒縷水衣・女笠・杖の姿、面は品のよい老女、きりつと良く着いた装束に先づ雲囲気があり残人の色香も。卒都婆に腰を下ろすところは下居でなく後見が出す床几に。事前に床几を出して置くこともあるが此の方には安全。非を打つ若い僧の氣勢を受け、逆にじつくり論ずるに反論する印象の、攻守自在の卒都婆問答が見事で小気味よく、相手が降参すればつい兆す驕慢は僧への皮肉。床几(卒都婆)を立ち、杖に纏るよう正中下居に素姓明かせば、一代の才媛小野小町と知る僧。シテは現在の境遇に思いを致せば身じろぎも出来ず、へ百歳に一歳足らぬ、で漸く僧へアシラフト、へ影恥かしき、と面を背けて笠で隠す含羞。それに追い打ちをかけるように乞食姿の一々を説き明かさず、へ狂乱の心憑きて、と杖を手放すと、突如狂乱する。以下、深草少将ノ怨霊が小町に取憑き、百夜通いの様を見せることに。物着で黒縷水衣を白地露芝文長絹に替え、風折烏帽子を着ければ、深草少将が小町へ通う恋路。へ九十九夜、と左手の指を折り、へあらず目まひや、と扇を胸に当てるところ(写真)、報われなかつた恋の怨み憫々と、型通り胸を打たれる。キリは憑いている怨霊から解放され、へ花を佛に手向けつつ、と扇を左手に捧げて出、常座で合掌、留拍子は踏まなかつた。老女物は老女に扮するものではなく、老体その人が演ずるもの、と聞くが正にその通りで、披キともあって幸江慎重神妙に勤め、老小町の気位、心持ちを巧妙に描写して好演だった。地頭は文蔵、囃子は六郎兵衛・富司忠・鏡一。(1時間35分・6月22日・幸謡会)

発行能楽の友社

名古屋市中区千種区千種2丁目18-18
(郵便番号 464-0858)
電話 (052) 731-7984
FAX (052) 733-2837
振替口座 00800-6-36393

購読料 1年 1100円
郵送の場合 1年 1800円
一部 100円

NHK放送予定(平成20年10月~11月)

●NHK-FMラジオ能楽鑑賞(毎週日曜日7時15分~8時)
10月26日 素謡「巴」(再)宝生流 中村孝太郎ほか
11月2日 素謡「紅葉狩」親世流 津村礼次郎ほか
11月9日 素謡「龍田」宝生流 大坪喜美雄ほか
11月16日 素謡「野宮」金剛流 今井清隆ほか
11月23日 素謡「葵上」(再)親世流 遠藤六郎ほか
11月30日 狂言「鈍太郎」「竹生島詣」和泉流
野村小三郎、井上菊次郎ほか

●NHK教育テレビ

11月8日(土) 15:00~17:00
狂言小舞「海道下り」和泉流
仕舞「三山」宝生流
能「井筒」宝生流
11月27日(木) 14:00~14:30
芸能花舞台「伝統の至芸」親世寿夫

能楽の友

豊田御洒落狂言会

11月9日 豊田市能楽堂

四日市市まちづくり振興事業団
文化振興グループ主催により、12月5日(金)、四日市能として能「道成寺」が上演される。午後6時30分開演。共催・能と狂言に親

四日市能「道成寺」
12月5日午後6時30分開演
四日市市文化会館

しむ会四日市研究会。
会場は四日市市文化会館、入場料(全席指定)六八〇〇円。
前売は四日市市文化会館(TEL 059-354-4501)、インターネット予約url: www.yonbu.or.jp

演能カレンダー

名古屋能楽堂

(能・狂言演能関係)
(TEL 052-231-0088)

[10月]

25日(土) 第29回名古屋金春会 (有料)
26日(日) 三交會大会 (有料)
30日(木) 松謡會 (無料)(番組①面)
31日(金) 名古屋能楽堂10月定例公演 (有料)

[11月]

1日(土) 茂山狂言会名古屋公演 (有料)(番組①面)
2日(日) 名古屋親世会定例公演 (有料)(番組①面)
15日(土) 名古屋喜謡會 (無料)(番組①面)
16日(日) 名古屋宝生会定式能 (有料)(番組②面)
19日(水) 名匠狂言會 (有料)(番組②面)
23日(日) 久田親正會 (無料)(番組②面)
24日(月・祝) 名古屋猶會大会 (無料)(番組②面)
30日(日) 郁謡會大会 (無料)

豊田市能楽堂
開館10周年記念
能「船弁慶」

12月6日 狂言「文蔵」

豊田市能楽堂では、開館10周年を記念する「十二月特別公演」として、12月6日豊田市能楽堂で、能「船弁慶」真之伝、狂言「文蔵」を上演する。午後2時開演。番組は次のとおり。解説：柳沢新治(豊田市能楽堂企画運営委員)

ナディア狂言

11月24日 中区制100年

名古屋市中区制100周年記念事業として、11月24日(祝・月)ナディアパーク11Fの「アートピアホール」で第10回ナディア狂言が催される。番組は「縄綱」「伯母ケ酒」「骨皮」。入場料前売2500円、当日3000円。チケットはナディアパークプレイガイ

松謡會

十月三十日(木) 午前九時三十分始
名古屋能楽堂

発声 四海波 全員
連吟 龍田 シテ 進藤 玲子
素謡 三輪 前シテ 阿部 彦俊
熊坂 後シテ 岩本 英隆
天鼓 前シテ 服部 守博
吉野天人 後シテ 森 一
鞍馬天狗 後シテ 田中 横一
吉野天人 寺尾 道子
船弁慶 菊本 壽雄
連吟 頼政 シテ 横井 嘉子
舞踊子 草子洗小町 土屋まり子
船弁慶 武山実枝子
素謡 三井寺 子方 山田 絃子
吉野天人 白鳥 茂代
班女 中島 康子
胡蝶 河合 正子
素謡 砧 フレ 新井 佳子
独吟 井筒 シテ 橋本 鏡子
舞踊子 草子洗小町 深沢 清子
連吟 杜若 シテ 安田 浩
舞踊子 雲林院 橋本 鏡子
連吟 清経 シテ 大山 和久
素謡 葵上 フレ 中島 福子
附祝言 主催 松山幸親

三世千作二十三回忌追善
茂山狂言会名古屋公演

十一月一日(土) 午後二時開演
名古屋能楽堂

狂言 二千石 主人 茂山千之丞 太郎冠者 茂山 千作
狂言 通圓 通圓 茂山千五郎 旅の僧 茂山七五三
狂言 木六駄 太郎冠者 茂山 正邦 茶屋 茂山 宗彦
「チケット」(全席指定)
S席8000円、A席5000円
B席3000円、学生2000円
チケットぴあ0570-022-9999
Pコード388-3002
茂山狂言会事務局075-221-8371

名古屋親世会定例公演能

十一月二日(日) 十二時半開演
名古屋能楽堂

能 実盛 梅田 邦久 杉江 元
飯富 雅介 河村真之介
後藤 嘉津幸 鹿取 希世
狂言 昆布売 昆布売 野村小三郎 何某 松田 高義
仕舞 遊行柳 片山九郎右衛門 地謡 伴野 俊彦
能 定家 親世鏡之丞
高安 勝久 河村鏡一郎
柳原富司忠
附祝言 主催 名古屋親世会
(当日券)
六〇〇〇円(自由席)
(枚数制限あり)
事務所 名古屋市中区昭和区台町2-16-15
電話/FAX 052-841-4632

名古屋喜謡會

十一月十五日(土) 正午始
名古屋能楽堂

番外仕舞 龍田 親世 喜之
春日龍神 親世 喜正
舞踊子 鞍馬天狗 早川 満博
市原 博信
庄子 玄
能 井筒 飯富 雅介 河村真之介
柳原富司忠 鹿取 希世
仕舞 鶴亀 宮内 一明
羽衣 早川 満博
仕舞 砧之段 深見 一枝
舞踊子 天鼓 深見 しげ 河村真之介
柳原富司忠 竹市 学
素謡 披山 坂 真太郎
後藤 登久雄 親世 喜正
披山 遠藤 喜久
山田 貞子 駒瀬 直也
遊行柳 林 政興 親世 喜正
班女 中野 理恵 中所 宜夫

五色の会 能「紅葉狩」上演

12月23日 岡崎朋の会主催

金剛流・花朋会歌舞台、朋の会では、「五色の会」第十回能を観る。催しを来る12月23日（火・祝）花朋会歌舞台（岡崎市大西町奥長入47-4）で開演する。

「五色の会」を観る（主宰羽多野良子師）は今回で十回目を迎える。歴史の街・岡崎に幽玄の境地をくりひろげ、毎回多数の愛好者が鑑賞している。補佐宇高通成師。後援：岡崎市教育委員会。午後2時始曲、入場料前売五〇〇〇円、当日五五〇〇円、高校生以下三〇〇〇円。お問い合わせ：朋の会事務局（岡崎市中町5-12-15）、電話/FAX0564-23-4364（波多野方）

能組は次のとおり。

仕舞「弱法師」宇野通成、地謡 廣田幸稔、宇高通成、竹市幸司、宇高徳成

狂言「井杭」算置・野村小三郎、何某・松田高義、井杭・野村信朗、後見・伴野俊彦

能「紅葉狩」シテ波多野良子、ツレ大川磨美、田中春奈、ワキ高

大槻文蔵の会

11月15日 能「烏帽子折」

大槻文蔵の会では、11月15日（土）大槻能楽堂で「第14回大槻文蔵の会」を開催する。

演能は、能「烏帽子折」、狂言「川上」ほか。入場料（全席指定）前売一般9000円（当日10000円）、学生6000円。開演午後2時、チケットは大槻能楽堂（06-6761-8055）、ローンシナケット。能組は次のとおり。

一調一管「芭蕉」謡・大槻文蔵、笛・藤田六郎兵衛、小鼓・幸清次郎。

一調「土蜘蛛」謡 宝生閑、太鼓。

能「三輪」大会

山本能楽会は、山本能楽堂定期能「たちまち能」として、12月7日（日）、能「三輪」、能「大会」の二番、狂言、仕舞を上演する。開演午後1時、能組は次のとおり。

能「三輪」（シテ山下麻乃、ワキ森本幸治、アイ小笠原匡、笛・左鴻雅義、小鼓・久田舜一郎、大

能「三輪」大会

山本能楽会は、山本能楽堂定期能「たちまち能」として、12月7日（日）、能「三輪」、能「大会」の二番、狂言、仕舞を上演する。開演午後1時、能組は次のとおり。

能「三輪」（シテ山下麻乃、ワキ森本幸治、アイ小笠原匡、笛・左鴻雅義、小鼓・久田舜一郎、大

当地の各流派・流派・結社・社中の消息を辿る

（熱田神宮能楽殿を中心として）

昭和三〇年（一九五五）十一月六日、戦後一〇年にして熱田神宮能楽殿が竣工、翌日、シテ方四流の宗家を迎えて祝賀の大能が催されて以来四四年、平成九年（一九九七）九月一日、一億五千万円が投じられたという大々的な改修竣工式が行なわれ、これからのという矢先、同年一〇月二三日、僅か一ヶ月半余りで閉館のお別れ公演（一〇月二六日まで四日間、社中会がある）という今もってその原因、理由が当事者はいざ知らず、見所には不可解のうちに有耶無耶になつてしまつてすつきりしない。本

竹尾 邦太郎

来なら閉館に至る経緯、仔細書き留めた「熱田神宮能楽殿、終焉の記」といったような冊子が編まれてもよいと思うのだが、幸いと言ふべきか、昭和六〇年（一九八五）三月一〇日、「熱田神宮能楽殿創立三〇周年記念能」の題で、小冊子が熱田神宮能楽殿運営委員会（委員長・長谷晴男権宮司）と能楽協会名古屋支部（支部長・内藤泰二）のもと、能楽の友社（加野昭二郎）の編集で刊行されている。内容は当日の三〇周年記念能の番組に加え、舞台披き・一〇周年、二〇周年の記念番組、初代能楽殿

名匠狂言会

十一月十九日（水）午後六時三十分始

名匠狂言会 名古屋能楽堂

佐渡狐 奏者 茂山 千作 後見 松本 薫

（1）面名古屋喜誦会番組（つき）

子方 筒井 俊貴 飯富 雅介 幸 河村総一郎 加藤 洋輝

能海 若山弥栄子 橋本 幸 後藤嘉津幸 竹市 学

クツロギ 飯富 正樹 佐藤 友彦

附祝言

主催 名古屋喜誦会

出演 名古屋喜誦会

観世喜楽会

観世喜正

御来場歓迎

問い合わせ先：のうの事務所 03-3366-1020

名古屋宝生会定式能（第42期）

十一月十六日（日）午後一時始

名古屋能楽堂

番組

ツレ内藤 飛能 河村真之介 鹿取 希世

子方 小林 陸 後藤嘉津幸

玉井 博祐 津田 節武 稲川 壽一

後見 竹内 澄子 地謡 平田 正文 辰巳満次郎

衣斐 愛 久野 幸三 和久莊太郎

狂言 薩摩守 旅僧 野村小三郎 基屋 藤浪 徹

後見 渡守 松田 高義 後見 伴野 俊彦

休息十五分

花月 衣斐 愛 内藤 飛能

葵上 佐藤 耕司 地謡 石黒 孝

藤戸 辰巳満次郎 地謡 辰巳大二郎

和久莊太郎 杉江 元 寛 敏一 鬼頭 義命

高安 勝久 後藤孝一郎 竹市 学

相元 正樹 後藤孝一郎 竹市 学

野村小三郎 鈴木久仁七 稲川 壽一

後見 辰巳満次郎 柴田 憲治 石黒 孝

佐藤 耕司 加賀山 憲治 内藤 飛能

後見 辰巳大二郎 辰巳大二郎 内藤 飛能

附祝言

主催 名古屋宝生会

「鑑賞券」五千元

問い合わせは出演楽師 または下記へ

名古屋市中区白区高田2-13001

TEL052-803-7372

FAX052-825-5303

久田観正会大会

十一月二十三日（日）午前九時半開演

名古屋能楽堂

連吟 天鼓 高木 敏男 井澤 雅夫

連吟 経正 佐藤 隆男 今井五百子 加藤 利幸 近藤 貴久 平澤 貴久

仕舞 花月 堀 賢太郎 羽衣 堀口 矩光

三輪 山田 澄江 笹之段 伊藤 晏義

半蔀 岩田フミ子 堤 賢太郎 善知鳥 佐野 安男

井筒 加藤 文子 紅葉狩 山田 和子

草子洗小町 須賀 玲子

池野 章 町田 耀子 伊藤 敬

池野 章 高原千枝子 伊藤 敬

素謡 玄象 町田 耀子 伊藤 敬

仕舞 玉之段 三浦 敏晴 久田 勘助

素謡 求塚 前川 幸子 久田 勘助

名譽師範披露 岡田 信道 河村総一郎 柳原富司忠 鹿取 希世

一度之次第 相元 正樹 柳原富司忠

能 辛都婆小町 高安 勝久 河村総一郎 柳原富司忠 鹿取 希世

舞囃子 班女 岡 佳代子 小塩 仲村 スミ

雨夜之伝

能 菊慈童 高安 勝久 河村総一郎 柳原富司忠 竹市 学

遊舞之楽

舞囃子 衣 大竹富三 野宮 池野 章

和合之舞

番外仕舞 屋島 久田三津子 久田 勘助

隅田川 久田 勘助

船弁慶 久田勘吉郎

附祝言

主催 久田観正会

ご来場歓迎（入場無料）

久田 勘助

（和泉流） 長光 すっぱ 井上菊次郎 田舎者 佐藤 友彦

（和泉流） 狂言 武悪 主 野村 万作 太郎冠者 石田 幸雄

後見 野村 萬作 後見 井上 靖浩

主催 中日新聞社

入場料（全席指定）

S席8500円、A席7500円

B席6500円

取扱い：中日新聞コンサートデスク

052-320-9199

052-320-9199

チケットぴあ 0570-02-9999

0570-02-9999

0570-02-9999

名古屋能楽堂 052-231-0088

名匠狂言会

十一月十九日（水）午後六時三十分始

名古屋能楽堂

佐渡狐 奏者 茂山 千作 後見 松本 薫

久田観正会大会

十一月二十三日（日）午前九時半開演

名古屋能楽堂

連吟 天鼓 高木 敏男 井澤 雅夫

連吟 経正 佐藤 隆男 今井五百子 加藤 利幸 近藤 貴久 平澤 貴久

仕舞 花月 堀 賢太郎 羽衣 堀口 矩光

三輪 山田 澄江 笹之段 伊藤 晏義

半蔀 岩田フミ子 堤 賢太郎 善知鳥 佐野 安男

井筒 加藤 文子 紅葉狩 山田 和子

草子洗小町 須賀 玲子

池野 章 町田 耀子 伊藤 敬

池野 章 高原千枝子 伊藤 敬

素謡 玄象 町田 耀子 伊藤 敬

仕舞 玉之段 三浦 敏晴 久田 勘助

素謡 求塚 前川 幸子 久田 勘助

名譽師範披露 岡田 信道 河村総一郎 柳原富司忠 鹿取 希世

一度之次第 相元 正樹 柳原富司忠

能 辛都婆小町 高安 勝久 河村総一郎 柳原富司忠 鹿取 希世

舞囃子 班女 岡 佳代子 小塩 仲村 スミ

雨夜之伝

能 菊慈童 高安 勝久 河村総一郎 柳原富司忠 竹市 学

遊舞之楽

舞囃子 衣 大竹富三 野宮 池野 章

和合之舞

番外仕舞 屋島 久田三津子 久田 勘助

隅田川 久田 勘助

船弁慶 久田勘吉郎

附祝言

主催 久田観正会

ご来場歓迎（入場無料）

久田 勘助

名匠狂言会

十一月十九日（水）午後六時三十分始

名古屋能楽堂

佐渡狐 奏者 茂山 千作 後見 松本 薫

②面当地の消息(つづき)
化地帯に場所を得たのです。(後略)と「熱田能楽殿三十周年記念に当りて」と稿を寄せる。筆者も「創立三十周年に寄せて」次のように書いた。

神域には不釣合とも見えた斬新な建物も、いつしか神宮の森に融け込み、しつとりとした佇まいを見せて四季の移ろいの中に数々の名舞台を創り出してきました。ともあれ三十年です。三十代の気鋭が六十代の練達の名手に育ち得る時間です。しかし現状は決して楽観を許しません。一見催会の多さは能・狂言の隆盛を思わせませんが、その内容はどうでしょうか。

さて、熱田神宮能楽殿を軸に活動してきた結社、社中、戦前から今日までの数々の催会の中、一つを述べるとすれば、中京と謳われる名古屋のみならず東西の能楽界にも大きな影響を及ぼした田鍋惣太郎の主宰する名古屋能楽鑑賞会の「名匠鑑賞能」を挙げるのに異論はなからう。先づ結社の消息をここからたづねる。

一、「名匠鑑賞能」
番組にはつきり名匠鑑賞能を謳ったのは第七回から、田鍋惣太郎は自著「小鼓談話」の中で「昭和三十三年、十月廿六日には名古屋商工会議所特設舞台を使用して、戦後初めて名匠鑑賞能を主催し、松風(観世華雪)を動機しましたが、こ

の名匠鑑賞能は私が戦前既に七回に亘って行ってまいり、戦中で中断しておりましたが、再びこの時から毎年春秋二回之を開催出来る様になったのであります。昭和四十四年四月五日には名古屋に喜多一門を招き鑑賞能を行い、私は隅田川(喜多六平太)を動機しました」と述べているが、七回は五回の誤りに当るので記憶違いであろう。正確に回数を書いたのは第十回から、七回と九回は名匠鑑賞能とあるのみで、それ以外は催名が異なり、田鍋惣太郎、名古屋能楽鑑賞会主催のもの名匠鑑賞能に直したものである。(一・二・三・五回だけ田鍋惣太郎との共催)。

光隆が来演。
因に九三日間のこの連続公演、主催した田鍋惣太郎はこれを日加寿能と称し、日加寿能という言葉は私がこの時初めて作り出したが、これは日数能の意味であり「す」と自著に言う。その後、この目度命命名は他所でも使われていた。更に続けて「勿論旧幕時代には勧進能といつて十日以上も能を演じた記録がありますが、維新以後の名古屋で三日間の能の連続はこの時が初めてであります。終了後座談会を開きましたが、この時は当時の有名な能評家である坂元雪鳥、山崎楽堂、松野奏風、柳沢英樹の諸氏等が出席されて大変盛況でありました。その後私は昭和十二年五月先常照院十三回忌追善能として再び日加寿能を行いました。この後は戦争の為に日加寿能を催す機会もありませんでしたが、戦後昭和三十年五月松坂屋舞台で五日間に亘って日加寿能を行った事は皆御承知の事でありました。何しろ忙しい時世になりましたので能も連日の演奏はどうかとお考えの方もありますが、各流の名匠の芸を同時に比較鑑賞出来るという点では非常に役に立つと思う次第であります」と言う。

来るという点では非常に役に立つと思う次第であります」と言う。
第四回と第五回の名匠鑑賞能はこの先常照院の追善能が直ったもの、正しくは「霞会 先常照院十三回忌追善能」が催名。霞会とは田鍋惣太郎の主宰する幸流小鼓の社中名。廿一日と廿二日の二日間で番組は能「海人・懐中之舞」野口兼資・西村弘敬、狂言「二石」山本東次郎、正木辰雄、囃子「遊行柳」梅若万三郎、独吟「放舟」長尾庸造、「善知鳥」岡田好司郎、連吟「熊野」林恩蔵・村瀬声文、能「朝長・懺法」梅若万三郎、宝生新・一噌又六郎、田鍋惣太郎、川崎利吉、金春右衛門、仕舞「笠之段」山田仁三郎、「網之段」柴田初太郎、「鶴之段」飯田親忠、「笠之段」内藤進一、「船弁慶」辰巳孝一郎、「勸進帳」幸次郎、野口兼資(謡)、狂言「泣尼」正木辰雄、柳田巖吉、山本東次郎、能「張良」金剛能楽堂、中村弥三郎、なお「朝長・懺法」は太鼓方の重い習事、この時より五十四年ぶり、平成三年九月七日、太鼓方観世流の鬼頭喜太郎が舞台生活六十周年記念能で披露している。

第五回の番組は能「清経・披講」金剛能楽堂・種田嘉一・高安滋男、藤田豊二郎(笛)、狂言「宗論」井上新三郎、河村丘造、歌村彦四郎、仕舞四番「経政」小田井愛三郎、「女郎花」斎藤安次郎、「花籠」平野清、「藤戸」片野東四郎、連吟「松風」飯尾保太郎、早川輝吉、能「碓」梅若万三郎、梅若猶義、中村弥三郎、狂言「棒縛」山本東次郎、柳田巖吉、正木辰雄、独吟「弱法師」桐谷正治、一調「松虫」田鍋惣太郎、梅若万三郎(謡)、仕舞「誓願時」手塚貞三、囃子「融」桜間金太郎、能「望月」野口兼資、辰巳孝一郎、辰巳清、宝生新、山本東次郎、両日に亘り囃子方に一噌又六郎、一噌鏡二、森田光風、幸次郎、川崎利吉、川崎之靖、前川光隆が来演。

第六回は「秋の文化祭協賛能 観世流三大能楽大会」これが田鍋惣太郎の自著で言う「戦後初めて名匠鑑賞能を主催し」というもの。昭和三十三年十月廿六日、名古屋商工会議所特設舞台で二部制。第一部は能「小袖曾我」永島誠二、小島芳雄、囃子「二人静」観世喜之、観世華雪、狂言「栗焼」歌村彦四郎、佐藤卯三郎、仕舞二番「清経」橋岡久馬、鐘之段「橋岡久太郎、能「融・思立之出・鏡」観世清寿、高安滋男。第二部は囃子「龍虎」永島誠二、小島芳雄、能「松風・戯之舞」観世華雪、観世清寿、西村弘敬、仕舞二番「歌占」橋岡久馬、「藤戸」橋岡久太郎、狂言「靱猿」井上礼之助、井上松次郎、河村丘造、井上祐一(小猿)、一調「女郎花」田鍋惣一郎、観世清寿(謡)、能「安達原・黒頭・急進之出」観世喜之、高安滋男、大鼓の山本東次郎が来演。

第七回名匠鑑賞能は昭和四十四年四月五日、能「小鍛冶」白頭、和島富太郎、高安滋男、西村欽也、狂言「文荷」佐藤卯三郎、河村丘造、歌村彦四郎、一調「勸進帳」田鍋惣一郎、喜多実(謡)、仕舞三番「田村」栗谷菊生「羽衣」喜多節世「殺生石」喜多長世、能「隅田川」喜多六平太、長尾庸造(子方)、西村弘敬、囃子「船弁慶」観世喜之、能「望月」喜多実、伊藤千六、長尾庸造(子方)、高安滋男、井上松次郎、囃子方に亀井俊雄、小寺金七が来演する。以下次号。

コ天皇の御意を得、振り売り業界を司る認可を取得したと言え、負けじと酷売もスイコ天皇の、と互いに「辛い」「酔い」の軽妙な洒落を駆使して宮中に参内する経緯を語って譲らず、ならば、と秀句を言い合いつつ勝つた方が業界の司となることに決する。
少なくとも此の狂言の時代から昭和十年代まで、業種は次第に減り、はしても、市井に振り売り(荷を提げ、又は声をあげながら売り歩くこと。ほてふり)はまだ存在していた。その空気を知る忠三郎、伸元、洗練された京焼でなく野趣のある信楽焼、骨太の古風な味が旨かった。そこから醸される騒動たる雰囲気の中、さて、其方はいかい上手ぢや」と互いの頓智に共鳴、和やかに笑ひ留になるまで、当時の庶民の言葉遊びの高尚さは当時のテレビ芸人には考えられないこと、痛感させられた。(15分)

赤づくめの装束の中で、重折の唐織は、へ理や白菊の著せ綿を温めて、の詞章を象徴するような紅地小菊文様。嘗て先代宗家が乱・広蓋之式を勤めた折、見た物と同じで懐しかった。これは坂戸金剛、二三世右京氏慧明(昭一)が賀陽宮(旧宮家の一)から拝領した品で、「狸々」専用(かも知れない)の金剛家の名物唐織になっていゝるのでは、と思われ。子々

「夏」の舞台から(その三)
「金剛能楽堂開館五周年記念公演」と「名古屋能楽堂七月定期公演」第九回御洒落名匠狂言会「名古屋観世普及公演」
竹尾邦太郎
「安宅・瀧流延年之舞」武蔵坊弁慶(シテ水鏡)の一行が置山伏ではないかと疑う関守・富樫(ワキ)茂十郎、真樫を確めるため出し抜けに勸進帳を認めと弁慶に迫る。緊迫した雰囲気にも落ち着き払った弁慶は、巻物にした往来手形を取り出すと、それらしく朗々と独吟し出す度胸。何となく氣を感に駆られ、生死長夜の長き夢、で颯と弁慶に寄る。ならじとばかり同山の一人が割って入り、左腕を突き出し進めれば、富樫は疑いを重ねるはしたない行動を恥じるかに直ぐ退くと、弁慶の朗吟を頭を垂れて聴聞の殊勝。その気配

「乱」シテ龍譚、披キ。若々しく清々しい狸々だった。へ蘆の葉

名古屋 猶調会秋の大会
十一月二十四日(祝)午前九時三十分始
名古屋能楽堂
素謡 道成寺 菊池 敏子 梅若吉之丞 梅若猶義
立花香寿子 飯富 雅介 後藤孝一郎 藤田六郎兵衛
能 碓 河合 敦子
素謡 山姥 井戸 良祐 梅若猶義
素謡 高砂 小浜 恵子 梅若猶義
舞囃子 松風 河合紀代美 吉野天人 水谷 雅代
班女 城 碩子 絵馬 政木美貴子
船弁慶 日下すみ子 融 中村 明美
天鼓 安井 薫子
主催 猶調会
主催 梅若吉之丞 梅若猶義
(終了予定 十八時頃)



定例公演「因幡堂」左より松田高義・藤波徹



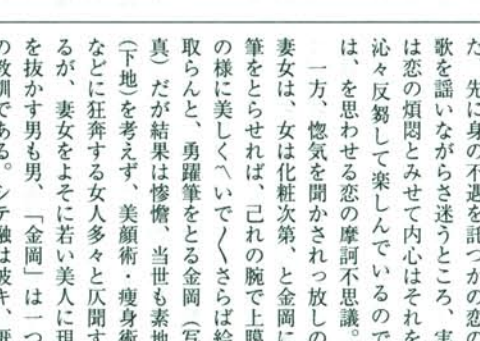
定例公演「船弁慶・真之伝」左より長田駿・園田光輝(子方) (杉浦賢次氏撮影)



御洒落名匠狂言会「磁石」 三宅右近・三宅右矩



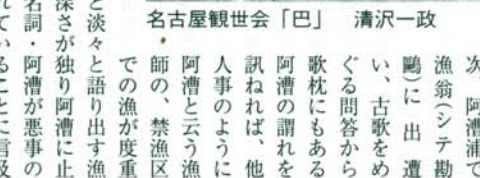
御洒落名匠狂言会「惣八」大蔵彌太郎・大蔵吉次郎 (杉浦賢次氏撮影)



名古屋観世会「千鳥」佐藤融・佐藤友彦



観世会「阿漕」久田勘助 (杉浦賢次氏撮影)



次、阿漕浦で魚翁(シテ勘助)に出遭い、古歌をめぐる問答から阿漕の謂れを訊ねれば、他人事のように阿漕と云う漁師の、禁漁区での漁が度重



御洒落名匠狂言会「小猿」井上靖浩・井上蒼大 (杉浦賢次氏撮影)

の初段、正中で佇立に判官を見詰めるところ、万感の思いが籠り、二段目には脇正から判官を見て佇立のま、暫しシヨル。一ノ松へ行き下居にシヨル観世流より見映えはしないと思うが、判官の意を汲むように、舟子ども、と判官から向き直ると、促すような月ノ扇から「はややととくとくと」と、の返シ句のうちに一ノ松へ立つて行き、判官を見返ると、「静は泣く、とシヨリのまま戻ると常座に下居、閑かに烏帽子を脱ぐ風情、しゅんとさせられる。中人は船頭(アヒ小三郎)の慰めの詞のうちに送り込み。



御洒落名匠狂言会「金岡」佐藤融・鹿島俊裕 (杉浦賢次氏撮影)

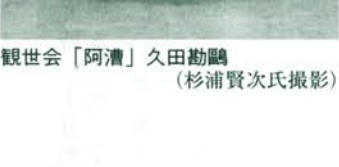
「磁石」能で誘拐に合うのは「百万」「三井寺」「隅田川」など子供だが、狂言では心直ぐにない人商人シテ右近が田舎者(アド右矩)とみて纏わり付き(写真)、



名古屋観世会「千鳥」佐藤融・佐藤友彦



観世会「阿漕」久田勘助 (杉浦賢次氏撮影)



観世会「阿漕」久田勘助 (杉浦賢次氏撮影)

「船弁慶・真之伝」判官に同行したい静(シテ駿、小面・襟白赤露芝文白摺着付・枝垂桜二蝶文赤地唐織)を思い留ませるため赴く弁慶(ワキ雅介、沙門・白大口・縮水衣)が判官の意向を伝えれば、「あら何ともなや候、とシヨル静。諸否の返事を求める弁慶は、自ら君に御供の上でと煮え切らない静に「あら事々しや」と強く残留を勧めるが、弁慶の独断を信じる静は、君に直接と拘泥る。「それは兎も角もにて候」とむっとする思ひの弁慶は、めそめそすると思えば頑なな静に、勝手に「かと思えば頑なな静に、勝手にしろ」と一種投げやりな気分がみえ、シテ・ワキ問答の絡み具合が巧妙。残留が君の御説と分り、愁嘆は「御舞ひ候へ」の勧めに、やととシヨリを解き、物着に静折烏帽子をつけ、「その時静は、と立ち上がる。クセから序之舞へ、舞

刀を首枷の様にして両手を掛け、きりりと小廻りしながら橋懸まで行き、そこから地(彬・呻二ら)を残して走り込んだ。(1時間31分・7月6日・名古屋能楽堂七月定例公演)

裏世界に通じる宿屋(小アド祐介)に押しつける。この構図、安く求め高く売って差額を稼ぐ。何やら当今の派遣社会に似ないか、形を変え人身売買は今も感。シテの大髭が珍しく和泉流三宅派だけか、威力をみせ恐れ入れさせずためであらう。しかし侮れないのは田舎者の地方、裏をかくて商人商人に渡る金子三百疋を許取すれば、押取り刀で追う商人。観念して大手を掲げ「呑まう」と白刃に立ち向かう田舎者に一瞬戸惑う商人、たちろぐ気配を見逃さず更に「呑まう」と迫る田舎者。磁石ノ精だと欺かれ、田舎者の凄まじい気魄に呑まれてしまふ商人、右近、右矩、親子競演の熱演。(24分)

「惣八」転載は当世の習いのよきだが、直接狼鬼に怒声を浴びせるのでなく、太郎冠者に言わせるところにまだ人間味の欠けらぬ。小猿を打つなら諸共に、とまで哀願する狼鬼の、心情にほだされて涙腺まで緩み、「物の哀れを知らぬは木石にも劣る」などと細細胞な大名の、あつからんとした変り身の早さが厭味なく上々。心身共に解放された狼鬼が感謝の気持で小猿に芸をさせるところ(写真)、小猿は幼い程可愛く、目に入れても痛くないといった狼鬼の表情もさもありなん。菊次郎・靖浩・蒼大、井上家三代で勤める目出度である。(38分)

「磁石」能で誘拐に合うのは「百万」「三井寺」「隅田川」など子供だが、狂言では心直ぐにない人商人シテ右近が田舎者(アド右矩)とみて纏わり付き(写真)、

「阿漕」ワキは旅人でなく旅僧(雅介)、参宮の途

「阿漕」ワキは旅人でなく旅僧(雅介)、参宮の途

発行能楽の友社

名古屋千種区千種2丁目18-18 (郵便番号 464-0858) 電話 (052) 731-7984 FAX (052) 733-2837 振替口座 00800-6-36393

購読料 1年 1100円 郵送の場合 1年 1800円

NHK放送予定(平成20年11月~12月)

11月30日 NHK-FMラジオ能楽鑑賞(毎週日曜日7時15分~8時) 狂言「鈍太郎」「竹生島詣」和泉流、野村小三郎、井上菊次郎

能楽の友

名古屋城本丸御殿 復元着工記念 新春謡初め 1月2日 名古屋能楽堂

名古屋城本丸御殿復元着工を記念して、新春1月2日(金)名古屋能楽堂で「新春謡初め」が行われ

紫綬褒章 一噌仙幸氏 塩津哲生氏

政府は11月2日付で2008年秋の褒章受章者を発表。芸術、学問、スポーツで功績を残した人に贈られる紫綬褒章に一噌流笛方・一噌仙幸氏(六八)喜多流シテ方・塩津哲生氏(六三)が受章した。

文化功労者 野村萬氏受賞

政府は文化勲章8人、文化功労者16人の受賞を決定。能楽界から文化功労者として、狂言方(和泉流)野村萬氏が受賞した。顕彰式は11月4日、東京・虎ノ門ホテル

演能カレンダー

名古屋能楽堂

(能・狂言演能関係) (TEL 052-231-0088)

Calendar table listing performances from 11/23 to 12/20. Includes dates, titles like '久田観正会', and prices.

シテ方宝生流の第二十代宗家と

宝生流第二十代 宗家継承披露能 1月25日 名古屋能楽堂

愛知県知事表彰 福井四郎兵衛氏 愛知県は、産業、教育文化などの分野で功績があった個人、団体を県条例に基づき知事表彰を決

して宝生和英氏(ほうしょうかずふさ)が継承。この宗家継承披露能が1月25日(日)名古屋能楽堂で開演される。当日は、平成21年度名古屋宝生会定式能の初会の上演で、演能は「翁」一調「難波」仕舞「嵐山」など6番、独吟「高砂」

愛知県知事表彰 福井四郎兵衛氏 愛知県は、産業、教育文化などの分野で功績があった個人、団体を県条例に基づき知事表彰を決

れる。主催は名古屋市文化振興事業団(名古屋能楽堂)、能楽協会名古屋支部。入場無料。江戸時代、幕府の式楽であった能。毎年正月には藩主の前で謡初めが行われた。新年1月2日には、当時謡われた「四海波」を始めてとして、舞囃子、連吟、狂言小舞で五流派がそろって新年の謡初めを催す。曲目は次のとおり。

舞囃子「八鳥」(金剛流) 竹市幸司、笛・竹市学、小鼓・後藤孝一郎、太鼓・河村総一郎 連吟「鉢木」(金春流) 前田茂穂、前田登 狂言小舞「雪山」(和泉流) 井上菊次郎 舞囃子「羽衣」(観世流) 泉嘉夫、藤田六郎兵衛、小鼓・船戸昭弘、大鼓・河村眞之介、太鼓・鬼頭義命 舞囃子「狸々」(宝生流) 竹内澄子、笛・大野誠、小鼓・福井四郎兵衛、大鼓・寛敏一、太鼓・加藤洋輝 協力 名古屋城管理事務局 問い合わせ 名古屋能楽堂(TEL 052-231-0088)

福井氏は平成十七年春の叙勲で旭日双光章を受章、名古屋芸術特賞を受賞、名古屋三百二十年の家名・四郎兵衛を襲名、能楽協会名古屋支部長を歴任、海外公演も多く能楽文化の発展に貢献。

Table listing performers for various plays like '須磨源氏', '道明寺', '松浦佐用姫'.

Table listing performers for '郁詠会大会' (November 30th).

演能案内 東京芸術大学音楽学部邦楽科卒業、社団法人宝生会理事、社団法人能楽協会会員。(宗家継承披露能の番組②)面掲載。

豊春会秋の能 10月19日 金剛能楽堂 金剛流・豊春会(豊嶋三千春師主宰)は、10月19日京都・金剛能楽堂で「秋の会」を開催した。「源氏物語千年紀」では、京都を中心に各種のイベントが開催されているが、豊春会では「芸術文化振興基金」と京都府の後援により「野宮」・「淀潜」が上演された。なお、平成21年度予定として、豊春会春の能は、5月17日(日)、能「雪」(豊嶋三千春)・能「石橋」(豊嶋見嗣)、秋の能は10月18日(日)能「烏帽子折」(豊嶋幸洋)「乱」(豊嶋三千春)の上演。いずれも金剛能楽堂で開演される。

Table listing performers for '青陽会定式能(第352期)'. Includes dates and names.

Table listing performers for '青陽会定式能(第352期)'. Includes dates and names.

Table listing performers for '青陽会定式能(第352期)'. Includes dates and names.

平成21年度(第53期) 名古屋宝生会定式能初会

宝生流 第20代 宗家継承披露能
平成二十一年一月二十五日(日)正午開演
名古屋能楽堂

- 能 翁
- 宝生 和英
 - 面箱 今枝 郁雄
 - 三番 井上 靖浩
 - 千歳 朝倉 俊樹
 - 河村総一郎
 - 幸 正昭
 - 藤田六郎兵衛
 - 福井聡介
- 一調 難波 辰巳満次郎
- 仕舞 嵐山 衣斐 愛
- 右近 鬼頭 京子
- 弓八幡 和久莊太郎
- 草紙洗 内藤 飛龍

当地の各流儀・流派・結社・社中の消息を辿る

竹尾 邦太郎

「名匠鑑賞能」

承前

「隅田川」を勤めた喜多六平太は当時七五歳、当地初演は明治三八年(一九〇五)三月二六日、愛知能楽会第23回、那古野神社舞台で「羽衣・霞留」と「望月」の二番を勤める、三二歳。「望月」の小鼓は六平太より一〇歳年少の田鍋惣太郎、愛知能楽会については自著「小鼓芸話」に次の記述がある。

明治三三年四月、那古野神社に本格的な能舞台(戦災をまぬかれ現存)が出来た頃から名古屋の財閥である伊藤・岡谷・関戸等の諸氏が九日会という会を組織して毎月九日に河文(料亭)に集って謡を研究しておられたが、この九日会の発案で内田健之丞・野崎久兵衛の二人が骨を折って、愛知能楽会という会が出来ました。そしてその第一回の演能を三四年四月博物館舞台で行っており、この愛知能楽会は其後の隆盛を来す第一歩でありましたが、三

明治	
年	月
34	1
35	2
36	3
37	4
38	5
39	6
40	7
41	8
42	9
43	10
44	11

第一回の博物館舞台以外は全て那古野神社舞台

欠番組	
三	二八三
六	一六八
九	一〇二
四	一〇二

愛知能楽会 値年次詳細

九一年二月頃で一応中絶した様であります。

なお那古野神社舞台は昭和二九年四月二五日に保能会主催の汎社中会による五流奉納謡曲会が記録に残るだけで、久しく本格的な演能はされていなかったが、昭和五九年(一九八四)六月二日、観世九皇会による奉納新能が行われ主宰の観世喜之が「羽衣」を勤め、以後、六一年六月七日「狸々」、六三年六月一日「葵上」、平成元年五月二八日「経正」、三年六

- 独吟 高砂 岩船 東北 玉井 博祐 竹内 澄子 稲川 寿一
- 能 鶴 亀 飯富 雅介 寛 鉦一 鬼頭 義命 後藤孝一郎 大野 誠
- 能 柑子 佐藤 友彦 佐藤 融
- 仕舞 西行桜 倉本 雅
- 能 船弁慶 高安 勝久 柳原富司忠 藤田六郎兵衛
- 子方 坂口 信 河村真之介 加藤 洋輝 衣斐 正宜 高安 勝久 藤原富司忠 藤田六郎兵衛
- 後出 名所 井上菊次郎
- 主催 名古屋宝生会

月一日「小袖曾我」喜之・喜正、と続くかと思えたが平成四年一月三日、天皇訪中、国連平和維持活動(PKO)協力法に基づき陸上自衛隊のカンボジア派遣部隊が航空自衛隊小牧基地を出発するの反対する過激派の、世間の耳目を集めんとする卑劣、浅ましいゲリラ活動の標的の一つとなつて同日、まさに草木も睡るという丑三つ頃、時限爆破装置により焼失する。由緒ある貴重な能舞台に何と阿呆なことをしたのか、怒りは治まらず、実行犯逮捕の報を聞かない。

博物館舞台については内藤泰二(一九一七―一九九一、宝生流職分・元能楽協会名古屋支部長)の著した「眼・名古屋から」私家版・昭和六三年九月一日「雲雲」に刊の「名古屋の能舞台の沿革」に詳しいが、抄録すると明治一一年

愛知能楽会は明治三四年から四〇年までの七十年間に三三公演を持つが番組の散佚で詳細は不明。別表参照。

第一回の博物館内舞台以外は全て那古野神社舞台

愛知能楽会 催年次詳細

さて、喜多六平太の名古屋出勤はさほど多くなく大正四・六・八・一・一二年と昭和二年、呉服町能楽倶楽部舞台の主として名古屋能楽会、昭和一〇・一六・一七年の名古屋能楽会(布池)での喜多会、戦後は中区大池町(現千代田二丁目)に在った名古屋商工会議所ホール特別舞台での第七回名匠鑑賞能(先月号既出)と、最後の出勤となった昭和三十一年一〇

(3面へつづく)

名古屋能楽堂12月定例公演

十二月七日(日)午前十時三十分始 名古屋能楽堂

- ツレ 大川 磨美
- 能 加茂 杉江 元 河村真之介 加藤 洋輝 高安 勝久 船戸 昭弘 大野 誠 相元 正樹 丹原美千代 西脇 和子 後見 宇高 通成 地謡 田中 春奈 加藤 かつる 百々 康治 吉岡 美紀 羽多野 良子
- 仕舞 安宅 鬼頭 尚久 前田 登 小島 芳樹 廣瀬 雅弘 加藤 英昭
- 能 鉢木 飯富 雅介 河村総一郎 大野 誠 橋本 幸 後藤孝一郎
- 狂言 鏡男 男 鹿島 俊裕 鏡屋 井上 靖浩 後見 井上菊次郎
- 仕舞 富士太鼓 長田 曉 地謡 長谷川多美也 和谷 衡市 伊藤 英毅
- 子方 上田静会 梅田 邦久 地謡 梅田 嘉宏 祖父江修一
- 能 海士 杉江 元 寛 鉦一 鬼頭 義命 相元 正樹 柳原富司忠 鹿取 希世 佐藤 友彦 本田 山 松山 幸親 古橋 正邦 武田 大志 久田 勘助 梅田 嘉宏 祖父江修一

名古屋御前能

十二月十二日(金) 昼の部午後一時開演 夜の部午後五時開演 名古屋能楽堂

- 清元 花月 旅僧 西川 右近 門前の者 西川 千雅 花月 藤間勘十郎
- 末広かり 果報者 野村 萬斎 太郎冠者 石田 幸雄 すっぱ 野村万之介
- 石橋 赤獅子 角当 直隆 赤獅子 田茂井廣道 白獅子 梅若 六郎 寂昭法師 宝生 閑 山本 哲也 助川 学 大獅子 寂昭法師 宝生 閑 山本 哲也 助川 学
- 〔夜の部〕 善知鳥 河村 和重 浦田 保親
- 難波 山崎 正道
- 鶴 河村 和重 浦田 保親
- 安宅 山本 博道
- 狂言 縛 太郎冠者 野村 萬斎 次郎冠者 石田 幸雄 主 野村万之介
- 菊慈童 梅若 六郎 宝生 閑 高井 松男 梅村 昌巧 山本 孝 助川 学 大倉源次郎 竹市 学

〔有料(前売り)〕 指定四〇〇〇円 自由一般三五〇〇円 学生二〇〇〇円(当日券は五百円増)

前売取扱い 名古屋能楽堂 ☎052・231・0088 プレイガイド(楽プレ)052・265・2015 ナディアパーク7階PG(052・265・2015) チケットぴあ(0570・02・9999) お問い合わせ 名古屋能楽堂 ☎052・231・0088

主催 名古屋文化振興事業団 能楽協会名古屋支部

〔チケット料金〕 S席一五、〇〇〇円 SS席二、〇〇〇円 A席八、〇〇〇円 B席四、〇〇〇円

〔チケット発売所〕 チケットぴあ ☎0570・02・9999 (Pコード387・422) ローソンチケット ☎0570・084・004 ほかに有名プレイガイド

主催 中京テレビ放送、中京テレビ事業 名古屋市中区錦3-15-15 有楽河合ビル6F TEL052・957・3333

②面よりつづき
月六日、熱田神宮能楽殿に於ける第二回中日五流能「景清」である。因みに喜多六平太の当地多出曲は「湯谷」四、「隅田川」「景清」各三。

第八回の催名は「名古屋能楽鑑賞会・能と踊」の鑑賞。第八回一とあり、名古屋邦楽協会が後援者として名を連ねているので、その分野での出演があったものと思われ。観世流片山九郎右衛門一門に杉浦義朗・林喜右衛門の京都勢に神戸から藤井久雄が加わる。

能は「葵上・梓之出」九郎右衛門・高安滋男、狂言は「縄ない」茂山千五郎・七五三・千之丞。他に番囃子と舞囃子、一調各二番があり、大鼓赤尾保、太鼓前川光隆が来演。

第九回は宝生大会で能三番「蟬丸」宝生九郎・野口禄久・高安滋男、「碓」野口兼資・辰巳孝・西村弘敬、「紅葉狩」宝生英雄・辰巳清・高安滋男、狂言は「石神」佐藤卯三郎・井上松次郎・河村丘造、舞囃子・一調各一番、仕舞三番、金沢から大鼓飯島佐六。

第十回は金春と観世の混成で能三番「田村」桜間金太郎・高安滋男、「蟬丸」観世喜之・桜間金太郎・西村弘敬、「土蜘蛛」観世喜之・本多秀男(頼光)五木田武計(胡蝶)・高安滋男、狂言「悪太郎」佐藤卯三郎・井上松次郎・河村丘造、舞囃子・一調各一。能二番は当時物語を醸していた所謂異流共演、主催者の田鍋惣太郎は「流儀の異なるこの様な能が問題になったので、私は上京して能楽協合理事会や宗家会で説明、賛同

を得ましたが、前にも述べた通り私は二流で競演するという意味でもこの様な能は大いにやった方がよいと思うのであります。」と自著で述べている。

第一回は東西から観世流の幹部が来演。能三番「花月」杉浦義朗・松井武夫、「花籠」笹之伝・大返シ・片山九郎右衛門・博太郎・福王茂十郎、「小鍛冶」黒頭・観世喜之・福王茂十郎、番囃子「俊寛」井上嘉介、舞囃子「卒都婆小町」橋岡久太郎、狂言「吹取」河村丘造・河村鉦二・歌村彦四郎。大鼓に山本敬一郎、ワキの全てに福王流が珍しい。

第六回以降、演能場所は中区大池町の名古屋商工会議所ホール特設舞台であったが、第二回からは中区南大津町(当時)松坂屋ホール特別舞台となり、第二回回

を得ましたが、前にも述べた通り私は二流で競演するという意味でもこの様な能は大いにやった方がよいと思うのであります。」と自著で述べている。

で使われる。

第二回は昭和二十六年三月一日、宝生大会で能三番「鉢木」黒頭・宝生九郎・辰巳孝・西村弘敬、「熊野」野口兼資・禄久・高安滋男、「葵上」宝生英雄・畑富藤卯三郎、別習一調を勤めた田鍋惣太郎は自著で「夜討曾我」の調は私には初演(67)でありました。野口氏(72)も子息禄久氏(40)が助吟せられました。兼資氏の調は誠に気合鋭く思わず手に汗を握るといふ緊迫した調で、小鼓の手もこれに応じた変化のある音を出す事に非常に苦心致しました。この夜討曾我の一調は本来大倉流のもので幸清流にはなかつたものだけに、流シの手も大倉流では五色流シといつて非常に音の変化の多い手を打つわけです。」と述べている。(括弧内・筆者注)

日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
昭和10										
12										
23										
24										
25										
26										
27										
28										
29										
30										

夏から秋の舞台

「豊田市能楽堂開館10周年記念ろうそく能」と「青陽会」名古屋能楽堂定例公演・初秋能「第11回ござる乃座」

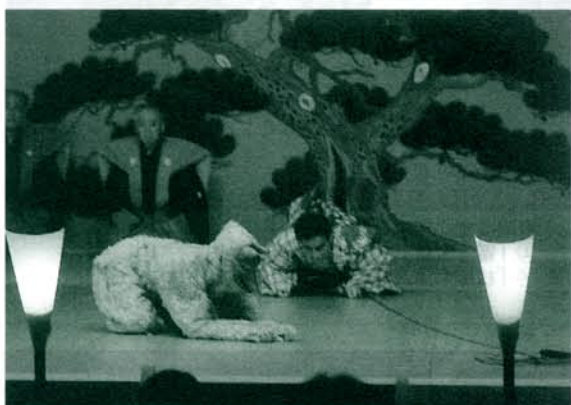
竹尾邦太郎

「釣狐」眷属が釣られ、わが身も標的にある老狐(シテ友彦)・狐師(アド融)の伯父・白蔵主に変身し、脅えながらも狐師を訪ね、妖狐・玉藻前の怪奇譚に狐の執念の怖さを説き、まんまと罟を捨てさせたと思いきや……

前場、白蔵主に成り得たと水鏡に己れを見る満足も束の間、犬の遠吠えに驚愕、「よい肝を潰いた」と怖気づく。「犬の声がする」は引きつれた声を文字通りの悲鳴に聞く。説法の場合は一抹の不安がありながらも次第に熱を帯びてくる。是が非でも罟を捨てさせんの気迫充分。普段の伯父は果たしてこのよう忠告を、の疑念ありそうな狐師もまた表面は緊張の面持ち。一件落着とみて小歌気分帰途につく白蔵主、仕掛けられた捨て罟の餌に強く惹かれ、

後場、身ぐるみ脱いで本性を現わし、身軽になりはしたが警戒心は怠らず、の老狐、喉を鳴らすような眩きなど巧妙。遂に罟にかかるところの狐師との呼吸もよかつた。一時間二五分の長丁場に六六歳のシテ友彦、声の掠れ無きにもだが先づは立派な老狐だった。

「善知鳥」シテは六郎が病氣のため代動は靖記。前場、老翁が片袖を旅僧(ワキ常好)に託すところ、引き千切る手際も美しく、立ち別れて行く哀感は一入。後場、陸奥に下り、先年身罷つたと聞く狐師の妻子(ツレ近晶、子方千代童・美和音)を尋ねる旅僧、老翁から依頼されていた蓑笠に経を手向けると、現われる狐師



①「釣狐」佐藤友彦・佐藤融
②「善知鳥」梅若晋夫
(杉浦賢次氏撮影)

の亡霊(後シテ)。その姿を眼前に「泣くばかり、とシヨリ座り込む妻。千代童が髪を、と大きく空を撫で、懐しや、と迫る亡霊を怖がるように退る千代童、劇的な出会いが惹きつける。善知鳥を追い、橋懸からそれを正先に見つけ、追い詰める心に肉迫し、打ち落とすカケリの狂躁に、「親は空にて血の涙を、見上げるところ」(写真)や以下の型所もきびく鮮やかに極めて見事。たゞ鮮やかに過ぎるきらい無きにも、凄味はあるも背景にある暗い重苦しさ

はあまり感じられない。7月21日・豊田市能楽堂開館10周年記念ろうそく能

「富士太鼓」管絃の会に召された太鼓の名手・浅間、その役を望む富士だが、虫の知らせに上京する富士の妻子(シテ美和、子方娘・尚史)は臣下(ワキ勝久)から夫が浅間に討たれたことを知り、遺品の装束を手にとると、亡夫に訴えるクドキ。「御身は勲なしに、と無謀を諫めるも無視して上京、と無念の胸中も細やかに、しんみり聞かせる儂げな風情がとてつよい。形見の装束を手にとり、至らぬを歎き、亡夫を追慕する思いは、物着の後見座でなくその場(正中)でするのも、せめて夫の移り

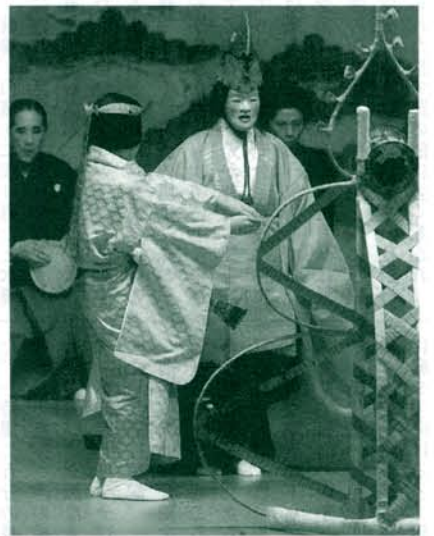
香なりと、の逸る心か。装束を着けるや「あら恨めしや」と俄の狂乱、「あれに夫の敵の」と羯鼓台に迫れば、娘に遮られるところ(写真)、息もびたりと合つて上々。夫の死は太鼓が因、ならば敵は太鼓、とシテ(母)と子方(娘)の掛合が素晴らしい、へもどかしと、シテが子方から撥を取り上げて打つ返りも気持ちよく替え三段を舞上げると「持ちたる撥をば剣と定め、と以下の型所を極め、溜飲を下げたか、恨みを晴らせば、と膝をつきシヨルと、キリは「これまでなりや人々よ、の返シ句に扇を懐かし、鳥兜・舞衣を脱ぎ、笠取つて立つと、「また立ち帰り、と羯鼓台を見込み、常座で笠を差し上げ名残り惜しげに

浦から塩屋に戻るまでのシテ・ツレ連吟が良く揃い、長身の二人の立ち姿も品がよい。素姓明かし行平との出会いと別れを言うクドキも聞かせる。クセは「取れば面影に立ち増り、でがばと長袖を強く揺き抱くシテの激情は物着あと、へあら嬉しやあれに行平の、と松立木に迫る勢いに、「浅ましや、とツレに止められる(写真)が、幽かに身震いしているかに見た。「立ち別れ、とシテはツレと互いにシヨリ、入り違つて二ノ松に行き、一気に戻り舞になる。舞上げると興奮未だ醒めやらずの風情は、左袖返シへ磯馴松の、と松

トメた。儂げにみえて動い母を美和好演、子方・尚史君の巧みさも。(1時間14分)

「松風」西下の旅僧(ワキ宰)、途次、昔、須磨に流竊の身だった行平朝臣の寵を受けた海女、松風・村雨姉妹(シテ一政・ツレ嘉宏)の旧跡の松を引、塩屋に宿を借り、住人の素姓を問えば姉妹の幽霊。今も行平に恋慕止み難い松風は別離のありし日を偲ぶうち、形見の装束も今は仇、捨て置かれず身に着ければ、松に行平の幻影を見、弥増す狂おしさに舞ううち旅僧の一夜の夢が醒める。

清謡会 番組	十二月十三日(土) 午前十時始	名古屋能楽堂
連吟 小鍛治	半場フミエ 小島 恵子 古沢ひさ子 小林 知子 矢根 敬子	山内 志げ
小 督	高島 順子 服部 直代 久松 直代	樋口あけみ 小栗知津子 高見かね子 奥村 小浪 三輪八重子
紅葉狩	堀尾 智子 富田 芳子	宮地 滋子 中野ひろみ 猪子 陽子 石川 華子
安達原	近藤富士雄	保谷 鏡一 神谷 録一 川瀬 弘道 大竹 国雄 金井 邦夫
仕舞 田村	村ヶセ 村ヶセ	猪子 陽子 塚尾 滋子 宮地 滋子 富田 芳子 石川 華子
仕舞 田村	村ヶセ 村ヶセ	猪子 陽子 塚尾 滋子 宮地 滋子 富田 芳子 石川 華子
仕舞 三輪	小林美和子 清水 慶蔵	平松 宗顕 地謡 伊佐次修治
仕舞 兼上	三輪八重子 小栗知津子	高島 順子 樋口あけみ
素謡 東 北	織田 敏男 鬼頭みゆき	河村総一郎 福井四郎兵衛 福井四郎兵衛 鹿取 希世
素謡 山 姥	西野 志保 野田 峰芳	不破 峰子 鹿取 希世
素謡 龍 天	清沢 一政 梅田 邦久	主催 清 沢 一 政 電話 〇五六四一五二一九〇九



（③面よりつづき）

な都雄の個性（今風ならキヤラ）が旨く絡む。（23分）

【「国栖」】壬申の侍臣（ワキ元）らと

立木に寄って抱きつくと、破之舞は小書「戯之舞」の時と同様、松木立の後ろを通り抜けるのも鮮やかだった。終始、慎ましく控え目のツレの好演と相俟ち、緊張して動めたシテの充実した舞台だった。（1時間41分）

吉野へ逃れる君（子方・上田嶺貴）を止し事無き貴人と察した川漁師の老夫婦（シテ幸親・ツレ路子）は国栖川の鮎を供して持て成し、そのお下がりを頂戴するところ、いわゆる鮎之段（写真）の、さっと放った鮎の流れに目で追うきびくした動きが爽快。早鼓に追手（アヒ友彦・靖浩）が掛かる

ては勢威をみせた。（1時間10分・8月17日・青陽会）青陽会この度の能三番、狂乱に母は娘に、姉は妹に、追手は漁翁に（これも一種の狂気）、間を遮られる構図が妙。

男（後にシテと判明する）を薦める（寅さんの映阿売あきもの）。人間、落ちる処まで落ちると精神は解放されるものか、カケリは遊狂の気分。が、今の境遇を自嘲する心が萌して居るところ、ワキに訊ねられる葦（よし） 蘆（あし）問答に、そんなことよりも、（この市に出づる）足数におおし添へて召されよや、と挟声を突きつけるのが、直面の生真面目な表情だけに皮肉めいた諧謔味が面白い。

【「葵上・空之祈」】番組の記載は無いが小書「梓之出」も。アツサの囃子（総一郎・孝一郎）で幕が上がリ、御息所ノ生霊（シテ邦弘）は幕内でアツサを聞き、三ノ松でシラルと巫女（ツレ孝充）の「天清浄……」のうちにシラルの「ま、一ノ松へ出、三つの車に、面泥眼・襟白二・白地鱗箔着付・黒地紋尺縫箔腰巻・赤地七宝文唐織道折の姿。小書で次第・サシ・下歌・上歌を省き直ぐ「梓の弓の音は何処ぞ、なる。姿無ければ、と一ノ松勾欄に右手で先レシラルのを、巫女は葵上に憑く生霊だろうか、と臣下（ワキツレ正樹）と推量のうちに舞台へ入り、下居、出小袖（病臥の葵上）を見てシラル。クドキに御息所ノ怨霊と名乗れば、臣下は案の定で御息所ノ御語り口に、身沁々明かす御息所の語り口に、身につまされる心の巫女と臣下、沈鬱な空気が淀む。後妻打の振舞いを諷める巫女に「いや」でなく口物は語気強く「いいや」と左袖アシラヒ拒絶、掛合に巫女とのせめぎ合いも、思ひ知れ、と胸指シ扇の憤怒に踏む足拍子一ツが利く。枕之段は、へ枕に立てる、と出小

【「鬼瓦」】 当時も当今同様、訴訟が結審するのに時間が掛かったものとみえる。都で久しく結審を待っていた大名（シテ万作）、因幡楽師に折願通り「思ひのままに相叶ひ」帰国に際し太郎冠者（アド悠樹）を伴い暇乞に参詣する。大名はお楽師を徳とし、国元に堂を建て勧請することを独り納得、それを太郎冠者に晴れやかに語り掛ける。喜怒哀楽、如何にも情に脆い好人物の大名、この人物造形が後に引き、万作の巧みさが光る。堂の建立については、古、飛

【「泣尼」】 田舎在の施主（アド万之介）、親の追善に堂を建立、堂供養の説法を都の僧（シテ萬齋）に当たってみるが、僧は多忙を口実に一旦は断わり、他に当たって見てやる、と施主の気を惹き、お布施の額を聞き出すがこれぞ作戦。己れの説法が受け取れない、有難い、と涙を流して呉れる泣尼（幸雄）を桜に雇うつもりで出掛ければ、尼も多忙を口実に一

旦は断る強かさ。お布施を貰う約束を取り付けて尼が「田舎にも志の深い人が御座るかいなう」と双シラルをすれば、「泣き難いところを上手に泣く女ちゃん」と舌打ちせんばかりの僧。この辺り、僧と尼の駆け引きに互いの卑しさが旨く浮き彫りになる。結局、お布施の額を知った上は己が行かずは誰が、の僧の意気込み、先約があったが、と勿体をつけ説法に出向くことに。しゃあしゃあとしていた萬齋と、「恭うござる」と朴訥な施主・万之介が好対照。長衣に掛絡、と身なりを改めた僧の説法の際は、拙い、受けない、どころか立て板に水の流暢、却ってこれが眠気を誘うのか、泣くために雇った泣尼は説法が佳境に入るのを見計らったように居眠りをする。こと再三、僧が机を扇で叩き、咳払いに注意を喚起しても直ぐ舟を漕ぎ出す仕末。挙句、ごろんと横になる横着に憤懣する方ない僧。鈴の音で説法が終われば、途端に起き出しお布施をねだる尼に、約束を果たさないと上上げる必要はないと僧、取っ組み合いになる荒げなさは金欲の醜さを露骨にみせる。萬齋・幸雄のコンビが上々。「狂言不審紙」に「此狂言若に難動」と言うが、不惑を越えた萬齋、今や若に非ず益々元氣。（41分）

【「首引」】 豪勇で鳴る鎮西八郎為朝（アド博治）、鬼の首魁（シテ萬齋）に出遇うと、主魁は娘鬼（小アド和憲）に人間の食ひ初めをさせるという。ただ食われるのは、と拒み、何か勝負で負けたらと為朝。腕押しに勝ち、腹押しは流石に娘が恥しがり、脛押しとなつてこれも勝ち、首引となつて此の度は眷族（晴夫以下立衆五人）も加勢、「エイイサラサ、エイサラサ」の掛け声で引くが、頃合いをみて為朝に綱を外させると一同は総倒れ。メルヘンチックで賑やかに、運動会の綱引きに似て全員楽しんでやっていると、ところがよい。姫鬼は曲曲からも大人ではなく、子供の方が大きな為朝との対照で面白く、萬齋の息・裕基君だつたらと思わぬでもなかった。（23分・9月14日・第一一回ござる乃座）



青陽会定式能
①「富士太鼓」今沢美和・富田尚史
②「松風」清沢一政・梅田嘉宏

（杉浦賢次氏撮影）



名古屋能楽堂定例公演
④「芦刈」衣斐正宜・飯富雅介、⑤「膏葉煉」野村小三郎・藤浪徹、⑥「葵上空之祈」武田邦弘・杉江元

（杉浦賢次氏撮影）

【「因幡堂」】 大酒呑みの妻（アド融）を里帰り中に離縁、因幡楽師に申し妻をする男（シテ都雄）、まんまと御告げを得て連れ立つ女の、羞じらいの被衣をよいに、道すがら前妻の様子をあれこれ悪口雑言しては高笑いするところ（写真）、活き／＼して喜び振る舞うのも束の間、盃事になつても被衣を取らずに女が大蓋三杯を干せば、「女が酒に酔ふたは見苦しいものぢや」と洗面にならざるを得ない。四杯目を請求に及び、強引に盃を取り戻した男は一杯だけ。もどかしく女の被衣を剥ぐや、女はすつくと立ち、「いや、わ男」と恫喝する。怖いながらも「何ぢや」と抵抗をみせ、「こりやお楽師も聞えぬものぢや」と男。女物に巧みな融に軽妙

【「国栖」】 壬申の侍臣（ワキ元）らと吉野へ逃れる君（子方・上田嶺貴）を止し事無き貴人と察した川漁師の老夫婦（シテ幸親・ツレ路子）は国栖川の鮎を供して持て成し、そのお下がりを頂戴するところ、いわゆる鮎之段（写真）の、さっと放った鮎の流れに目で追うきびくした動きが爽快。早鼓に追手（アヒ友彦・靖浩）が掛かる

【「芦刈」】 零落した夫・日下左衛門（シテ正宜）と別れ都に住み込みの乳母となつた妻（ツレ飛能）、今は生計もたち、朋輩（ワキ雅介・ワキツレ幸）を伴って日下の里に夫の消息を尋ねさせるが、里人（アヒ高義）にも不明。ツレの無聊の慰めにワキは再度アヒに面白いことの有無を問えば、ふざけた口上可らしい声売る

【「膏葉煉」】 膏葉の優劣を較べんと鎌倉方の膏葉亮（アド徹）と都方の膏葉亮（シテ小三郎）、先づは系図自慢に始まり、次いで互いの膏葉の荒唐無稽・奇想天外な薬種・処方種明かし、最後に膏

【「葵上・空之祈」】 番組の記載は無いが小書「梓之出」も。アツサの囃子（総一郎・孝一郎）で幕が上がリ、御息所ノ生霊（シテ邦弘）は幕内でアツサを聞き、三ノ松でシラルと巫女（ツレ孝充）の「天清浄……」のうちにシラルの「ま、一ノ松へ出、三つの車に、面泥眼・襟白二・白地鱗箔着付・黒地紋尺縫箔腰巻・赤地七宝文唐織道折の姿。小書で次第・サシ・下歌・上歌を省き直ぐ「梓の弓の音は何処ぞ、なる。姿無ければ、と一ノ松勾欄に右手で先レシラルのを、巫女は葵上に憑く生霊だろうか、と臣下（ワキツレ正樹）と推量のうちに舞台へ入り、下居、出小袖（病臥の葵上）を見てシラル。クドキに御息所ノ怨霊と名乗れば、臣下は案の定で御息所ノ御語り口に、身沁々明かす御息所の語り口に、身につまされる心の巫女と臣下、沈鬱な空気が淀む。後妻打の振舞いを諷める巫女に「いや」でなく口物は語気強く「いいや」と左袖アシラヒ拒絶、掛合に巫女とのせめぎ合いも、思ひ知れ、と胸指シ扇の憤怒に踏む足拍子一ツが利く。枕之段は、へ枕に立てる、と出小

【「鬼瓦」】 当時も当今同様、訴訟が結審するのに時間が掛かったものとみえる。都で久しく結審を待っていた大名（シテ万作）、因幡楽師に折願通り「思ひのままに相叶ひ」帰国に際し太郎冠者（アド悠樹）を伴い暇乞に参詣する。大名はお楽師を徳とし、国元に堂を建て勧請することを独り納得、それを太郎冠者に晴れやかに語り掛ける。喜怒哀楽、如何にも情に脆い好人物の大名、この人物造形が後に引き、万作の巧みさが光る。堂の建立については、古、飛

【「泣尼」】 田舎在の施主（アド万之介）、親の追善に堂を建立、堂供養の説法を都の僧（シテ萬齋）に当たってみるが、僧は多忙を口実に一旦は断わり、他に当たって見てやる、と施主の気を惹き、お布施の額を聞き出すがこれぞ作戦。己れの説法が受け取れない、有難い、と涙を流して呉れる泣尼（幸雄）を桜に雇うつもりで出掛ければ、尼も多忙を口実に一

【「首引」】 豪勇で鳴る鎮西八郎為朝（アド博治）、鬼の首魁（シテ萬齋）に出遇うと、主魁は娘鬼（小アド和憲）に人間の食ひ初めをさせるという。ただ食われるのは、と拒み、何か勝負で負けたらと為朝。腕押しに勝ち、腹押しは流石に娘が恥しがり、脛押しとなつてこれも勝ち、首引となつて此の度は眷族（晴夫以下立衆五人）も加勢、「エイイサラサ、エイサラサ」の掛け声で引くが、頃合いをみて為朝に綱を外させると一同は総倒れ。メルヘンチックで賑やかに、運動会の綱引きに似て全員楽しんでやっていると、ところがよい。姫鬼は曲曲からも大人ではなく、子供の方が大きな為朝との対照で面白く、萬齋の息・裕基君だつたらと思わぬでもなかった。（23分・9月14日・第一一回ござる乃座）



青陽会定式能
①「因幡堂」今枝郁雄・佐藤融
②「国栖」松山幸親・星野路子

（杉浦賢次氏撮影）



演能カレンダー

名古屋能楽堂

(能・狂言演能関係) (TEL 052-231-0088)

[平成20年12月]

- 20日(土) 名大観世会第12回定期自演能 (無料)
[平成21年1月]
2日(金) 名古屋能楽堂新春謡初め (無料)
3日(土) 名古屋能楽堂定例公演 (有料)
10日(土) 名古屋学生能楽連盟 学生能狂言の会 (無料)
12日(祝) 名古屋清韻会 (無料)
18日(日) 第50回記念「鳳の会」 (有料)
24日(土) 第11回万作を観る会 (有料)
25日(日) 名古屋宝生会定式能初回 (有料)
31日(土) 名古屋城本丸御殿復元祝賀能 (有料)

NHK放送予定(平成20年12月~平成21年1月)

- 12月21日 能「郎那」 喜多流 粟谷能夫ほか
12月28日 藤田大五郎さんの人と芸 山崎有一郎
1月4日 素謡「歌占」 観世流 観世鏡之丞ほか
1月11日 素謡「藤戸」 喜多流 香川靖嗣ほか
1月18日 素謡「雲林院」 観世流 片山九郎右衛門ほか
1月25日 素謡「鉢木」(再) 金春流 桜間金記ほか

NHKテレビ新春能狂言

- 1月1日 教育テレビ(7:00~8:00)
舞囃子「高砂」 観世流
能「橋弁慶」 観世清和ほか
1月2日 教育テレビ(7:00~8:00)
狂言「煎物」 大藏流 山本東次郎ほか
狂言「樋の酒」 和泉流 野村萬ほか
1月3日 教育テレビ(7:00~8:00)
能「白田村」 喜多流 友枝昭世ほか

NHK-FM新春謡曲狂言

- 1月1日 (NHK-FM 11:00~11:50)
素謡「神歌」「老松」 観世流 観世喜之ほか
1月2日 ((NHK-FM 11:00~11:50)
狂言「八句連歌」 和泉流 野村万作ほか
狂言小舞「田植」 和泉流 野村萬斎ほか
狂言「鬼瓦」 大藏流 茂山千作ほか
1月3日 (NHK-FM 11:00~11:50)
舞囃子「難波」 金剛流 金剛永護ほか

能 楽 の 友

発行能楽の友社

名古屋千種区千種2丁目18-18
(郵便番号 464-0858)
電話 (052) 731-7984
FAX (052) 733-2837
振替口座 00800-6-36393

購読料 1年 1100円
郵送の場合 1年 1800円

第50回記念

狂言 鳳の会公演

1月18日 名古屋能楽堂

名古屋は狂言和泉流の本拠地として、江戸時代より独自の芸風を今に伝えてきているが、名古屋の狂言を活性化するため、平成4年に林和利(名古屋女子大学教授)と和泉流狂言師井上菊次郎・佐藤友彦の3氏を同人として「鳳の会」を結成、年3回の定期公演や、年1回の特別セミナーを行ってこり、また終演後会場でも、井上菊次郎、佐藤友彦両氏を囲んで、演者と語ろうQ&Aを企画、観客の狂言に関する疑問・質問にこたえ

大槻能楽堂 自主公演

新春公演

1月3・4日 2日間

2009年大槻能楽堂の新春公演は、1月3日(土)、1月4日(日)の両日、大槻能楽堂で催される。毎年2日間連続で「翁」が上演されるのは、大槻能楽堂だけである。番組は次のとおり。
新春能 1月3日 午後2時始
「翁」翁・野村四郎、三番三・茂山茂、千歳・野村昌司、面箱・井口竜也
笛・野口伝之輔、小鼓頭取・大

2000円、鳳の会鑑賞会員A席4000円、同B席2500円。
鳳の会鑑賞会員は、年3回公演の入場料会員割引、特別セミナーへの無料招待など特典があり、入会は4月1日から3月31日まで1年間有効、年会費2000円。
後援・愛知県、名古屋市、名古屋市文化振興事業団、愛知芸術文化協会、中日新聞社。チケット取り扱い「チケットぴあ」TEL052・320・9999(コード3901354)。
名古屋能楽堂TEL052・231・0088、文化振興事業団プレイガイド(ナディアパーク7階)TEL052・265・2015、井上菊次郎方・FAX052・834・8607。

名古屋能楽堂演能案内

名古屋能楽堂定例公演

尾張の殿様が観た能・演じた能 四代・徳川吉通
平成二十一年一月三日(土) 午後二時始

名古屋能楽堂

能 翁

翁 祖父江修一 三番 今枝 郁雄
後ツレ 武田 大志
後ツレ 清沢 一政
前ツレ 松山 幸親
梅田 邦久

能 嵐山

飯富 雅介 河村総一郎 加藤 洋輝
橋本 正樹 福井 聡介 大野 誠
橋本 幸 柳原富司忠
後藤嘉津幸 狂言後見 佐藤 友彦
後見 八神 孝充 狂言後見 大野 弘之
泉 嘉夫

狂言 猿 聾

シテ 井上菊次郎

アド 井上 靖浩
井上 弾喜
佐藤 友彦
大野 弘之
今枝 政行
今枝 郁雄
鹿島 俊裕
今枝 靖雄
葛 加賀 敏彦
久田 勘助
武田 邦弘
高橋 瞭一
須部 南

能 道成寺

主権 名古屋文化振興事業団 (名古屋能楽堂)
能楽協会名古屋支部
(午後四時三十分頃終了予定)

入場料 前売指定 五〇〇〇円(当日五五〇〇円)
前売一般 四五〇〇円(当日二五〇〇円)
学生前売 二〇〇〇円(当日一五〇〇円)
取り扱い所 名古屋能楽堂(052・231・0088)
チケットぴあ(0570・231・9999)
市内プレイガイド、ナディアパーク7階P.G.(052・265・2015)

名古屋清韻会

平成二十一年一月十二日(祝) 午前十時始

名古屋能楽堂

善知鳥

富田 郁子 筑瀬 和子 山口たき子
伊藤 朋子 富田 貞子
久保田和代 伊藤 貞子
岩田 正子 田中 文子
浅井 庸子

通 盛

佐藤 尚雄 中原 基夫

花 筐

岩田 正子 榎本 圭子
浅井 庸子

仕舞 桜

川ヶセ 鶴飼 良久
安井美智子

班 丸

渡辺 紗里

玉 嬋

森 たすこ

葛 三井寺

馬場 英子 寛 鉦一
柳原富司忠

生田敦盛

川崎あきこ 寛 鉦一
柳原富司忠

融

山本 淳子 寛 鉦一
柳原富司忠

仕舞 富士太鼓

谷口 寛子 井上菊次郎

遊 行 柳

御牧 紀代 河村真之介
後藤嘉津幸

卷 絹

桑原 信夫 河村真之介
柳原富司忠

木 賊

古井 幸子 河村真之介
後藤嘉津幸

連吟 野宮

河野カズエ 後藤嘉津幸
長瀬ミホ子 藤田六郎兵衛

舞囃子 安

宝生 閑 河村総一郎
後藤嘉津幸

舞囃子 紅葉狩

杉浦 壽康 河村真之介
後藤嘉津幸

熊 山 坂

福間 克彦 河村真之介
後藤嘉津幸

(番組②面へつづく)

新春公演 京舞と能

1月18日 豊田市能楽堂

豊田市能楽堂では、明春1月18日(日)「新春を寿ぐ京舞と能」のテーマで、五世井上八千代氏と親世流・片山清司氏により新春公演を行う。

出演の井上八千代氏と片山清司氏は、祖母井上愛子(四世井上八千代)と父九世片山九郎右衛門はいずれも人間国宝ならびに芸術院会員という姉弟の競演で、今に生きる伝統を体現する上演として注目される。

番組は次のとおり。

解説 石淵文栄(豊田市能楽堂企画運営委員)

京舞 地唄「七草」舞・井上八千代、歌・三絃・菊原光治

能(親世流)「小鍛冶」黒頭

前シテ・後シテ片山清司
ワキ・宝生欣哉、アイ・野村小三郎
笛・藤田六郎兵衛、小鼓・吉阪一郎、大鼓・河村総一郎、太鼓・前川光長
後見・片山九郎右衛門、青木道喜、河村博重
地謡 梅田邦久、武田邦弘、古橋正邦、味方玄、分林道治、味方團、梅田嘉宏、清沢一政
午後一時三十分開場、午後二時開演。
入場料/全席指定(税込) 正面

席六〇〇〇円、脇・中正面席四〇〇〇円、学生半額。
チケットは豊田市能楽堂・インターネット予約 <http://www.1-culture.jp/>
チケットぴあ(TEL0570-02-9999、Pコード3901754)
主催/豊田市能楽堂(豊田市西町一丁目200番地、TEL0565-36-8200)。豊田市文化振興財団、豊田市、豊田市教育委員会。

当地の各流儀・流派・結社・社中の消息を辿る

竹尾 邦太郎

「名匠鑑賞能」

承前

第一三回は同二六年七月一日、京都の親世流一行。能二番「清経」杉浦義朗・上田照也・高安滋男、「碓」片山九郎右衛門・博太郎・西村弘敬、舞囃子「三笑」井上嘉久・片山慶次郎・上田照也、番囃子「藤戸」片山九郎右衛門・井上嘉久、一調「女郎花」田鍋惣太郎・井上嘉久(謡)、狂言「糺ない」井上松次郎・井上新三郎。歌村彦四郎、神戸から上田照也のほか藤井久雄も。なお、附祝言のあと、休憩後、井上八千代の京舞「芦刈」「越後獅子」のあるのが珍しい。

第一四回も同年一〇月二七日、喜多と親世の合同。能三番「小督・替装束」親世流之丞・西村欽也、「松風・見留」粟谷益三郎・新太郎・高安滋男、「安達原・黒頭・急進之出」親世喜之・高安滋男、舞囃子「加茂」和島富太郎、仕舞二番「松虫」五木田武計「八島」粟谷翁生、一調「三井寺」田鍋惣太郎・親世流之丞(謡)、狂言「栗焼」井上松次郎・井上新三郎。粟谷益三郎(一八九〇―一九五七)の来名は十指に満たないが、この時が最後に昭和三年九

月一六日、六七歳で死去する。因に初来名は明治三八年三月二六日、那古野神社舞台での第二三回・愛知能楽会での「小袖曾我」のシテを一五歳で勤めていた。

第一五回は二七年三月一六日。恒例となった宝生大会。能三番「小袖曾我」宝生英雄・野口緑久、「杜若」野口兼資・西村弘敬、「景清」宝生九郎・朝倉泰太郎・辰巳孝(トモ)高安滋郎、舞囃子「高砂」佐野安彦、仕舞「舟弁慶」宝生九郎、一調「成陽宮」田鍋惣太郎・野口兼資(謡)、狂言「寝音曲」井上新三郎・歌村彦四郎、金沢から大鼓の飯島佐六が来演。

第一六回は二七年七月六日、京阪神の親世流。舞囃子「龍虎」上田照也・山本勝一、番囃子「田村」井上嘉久・藤井久雄、能「通小町・雨夜之伝」杉浦義朗・片山博太郎・西村弘敬、狂言「素袍落」井上新三郎・歌村彦四郎・井上松次郎、一調「鳥追船」田鍋惣太郎・井上嘉久(謡)、仕舞二番「三輪くせ」片山慶次郎(班女)井上嘉久、「融・思立之出・今古返・酌之舞」片山九郎右衛門・高安滋郎、京都の囃子方・谷口喜代三と前川光隆が来演。なお「融」を勤めた田鍋惣太郎は自著で当地



井上礼之助著「祖父・父を憶ふ」より転載
◎より大蔵弥太郎・井上新三郎・茂山弥五郎・茂山忠一郎

シテの喜之、一向かまわず進めた。シテ自身軽妙の中に遊狂の心持は充分見えて、殊に小歌になってからは氏の本領を發揮したといえよう。「水車」や

〔入場料〕全席指定
A席 五〇〇〇円、B席 三三〇〇円
学生 二〇〇〇円
チケット扱い 〇五二・三二〇・九九九
名古屋能楽堂 〇五二・二三一・〇〇八
文化振興事業団プレイガイド
〇五二・二六五・二〇一五

★「博奕十王」の装束着付実演

博奕十王 博奕打 佐藤 友彦
大野 弘之 大鼓 寛 敏一 太鼓 加藤 洋輝
井上 靖浩 小鼓 後藤孝一郎 竹市 学
今枝 郁雄

素袍落 太郎冠者 井上 靖浩
後見 今枝 郁雄
主人 今枝 郁雄
後見 鹿島 俊裕

夷毘沙門 今枝 靖雄 大鼓 寛 敏一 太鼓 加藤 洋輝
井上 靖浩 小鼓 後藤孝一郎 竹市 学
鹿島 俊裕

鳳の会 第五十回記念公演
一月十八日(日)午後一時三十分始
名古屋能楽堂
解説 名古屋女子大学教授 林 和利

野守 加藤 千一 河村真之介 加藤 洋輝
後藤嘉津幸 大野 誠
仕舞 花 月 大槻 文蔵
主催 大槻 清韻 会
〔御来場歓迎〕

第十一回 万作を観る会
一月二十四日(土)午後二時開演
名古屋能楽堂

越後聲 野村 萬斎 男 石田 幸雄
野村 萬斎 太郎冠者 高野 和憲
野村 萬斎 勾当 野村 小三郎
地謡 月崎 晴夫 大鼓 河村真之介 太鼓 加藤 洋輝
加藤 聡 小鼓 後藤嘉津幸 笛 藤田六郎兵衛

鐘の音 太郎冠者 野村 万作 男 野村 萬斎
野村 万作 田舎者 深田 博樹
すっぱ 野村万之丞 すっぱ 仲間 高野 和憲
六地藏 すっぱ 野村万之丞 すっぱ 仲間 月崎 晴夫

〔入場料〕S席八〇〇〇円、A席七〇〇〇円、B席六〇〇〇円
発売/電子チケットぴあTEL0570-02-9999
柴プレチカ92(旧名古屋三越プレイガイド)
お問い合わせ/万作の会TEL03-3997-8778

主催 なごや万作の会

第53期・第1回名古屋宝生会定式能
宝生流 宗家継承披露能
第二十代
一月二十五日(日)正午始
名古屋能楽堂

番組
シテ 宝生 和英 河村總一郎
三番 井上 靖浩 幸 正昭
千歳 朝倉 俊樹 福井 聡介 藤田六郎兵衛

後見 寺井 良雄 久野 幸三 衣斐 正宜
辰巳 満次郎 地謡 内藤 飛能 佐野 幸三
狂言後見 井上 菊次郎 地謡 内藤 飛能 水上 輝和
大野 弘之 福川 壽一 石黒 孝

一調 難波 辰巳 満次郎 小鼓 福井四郎兵衛

仕舞 嵐 近山 衣斐 愛 藤田 光子
右 近山 鬼頭 京子 倉本 澄子
草紙洗 和久 莊太郎 地謡 藤田 光子
内藤 飛能 寺井 良雄 玉井 博祐
岩 北 竹内 澄子 地謡 藤田 光子
東 北 竹内 澄子 地謡 藤田 光子
独吟 高 砂 福川 壽一

仕舞 鶴亀 飯富 雅介 幸 敏一 鬼頭 義命
後見 辰巳 満次郎 地謡 後藤孝一郎 大野 誠
辰巳 大二郎 加賀山 憲治 和久 莊太郎

仕舞 柑子 太郎冠者 佐藤 友彦 後見 今枝 郁雄
仕舞 西行桜 倉本 雅 地謡 石黒 孝
子方 坂口 信 河村總一郎 加藤 洋輝
シテ 衣斐 正宜 柳原富司忠 藤田六郎兵衛
後ノ出 杉江 元

附祝言 前売二〇〇〇円
当日一五〇〇円
お問い合わせ 名古屋宝生会 佐藤耕司方
名古屋市天白区島田2-301
島田橋住宅2-1310
電話 052-803-7372

〔鑑賞券〕前売二〇〇〇円
当日一五〇〇円
お問い合わせ 名古屋宝生会 佐藤耕司方
名古屋市天白区島田2-301
島田橋住宅2-1310
電話 052-803-7372

〔鑑賞券〕前売二〇〇〇円
当日一五〇〇円
お問い合わせ 名古屋宝生会 佐藤耕司方
名古屋市天白区島田2-301
島田橋住宅2-1310
電話 052-803-7372

(2)面よりつづき
 「こきりこ」の拍子も面白かった。
 能の流儀を否定したこの試みは、明らかに失敗であった。人の割り振りから役を決めたというならば、能楽への冒険である。また、このようなことは当地能楽界多年の宿弊でもあり、そうした行き方を改めるべきではなからうか。ましてやこの日は名匠鑑賞能であるのだ。正しき、よき能を見せてもらいたい。

とまれ観能態度は見所各人それぞれ、見解・視点の相違は様々であらうが、とかく陽の当たりにくい小さな流儀の金春・金剛・喜多など下掛り三流に活躍の舞台を提供しようという、能楽界を大所高所から俯瞰する名匠鑑賞能の主宰・田鍋惣太郎の顧慮の表われ、と想像するに難くないだろう。因みに昭和二〇年代後半から三〇年代に於ける異流共演の記事を列記する。

昭和二五年五月、同一曲を異流の演者で共演する可否を宗家・会で審議。反対四・賛成三。条件つき賛成一、保留五、届出制として各自宗家の責任で善処することとなる。(「能楽思潮」四〇・四一「能楽戦後二〇年史」に拠る)。

昭和二六年五月二四日、第二回京都新能で金剛流・豊嶋弥左衛門シテの「土蜘蛛」に金春流・桜間龍馬が頼光で共演。

昭和二七年一月二四日、御園座に於ける中部日本新聞社主催の名古屋能楽堂建設基金造成・五流宗家並びに代表楽師大演能(のちに第一回中日五流能に直る)で「素袍落」をシテ太郎冠者を和泉流・井上新三郎、アト伯父を大蔵流・茂山弥五郎・主を茂山忠一郎で共演。後見は大蔵宗家弥太郎。井上新三郎の嗣子・礼之助は後年、自著「祖父・父を憶ふ」私家版・平成七年二月二二日刊、の中で次のように述べている。「新三郎はこの時の舞台を大変光栄、誇りにしていたようだが、後年承れば、文字通り異例の異流共演と言ふことで、殊に大蔵御宗家に

は関係方面の御了解を得るため格別のお骨折りをいただいたようである。そんな周囲の実現のための努力を知ってか知らずか、新三郎一人、大いに喜んでいたのである」と。
 昭和二八年六月一九日、冠者会(野村太良を激励し芸の育成をはかるため、師父・万蔵の肝入りにより昭和二一年一月発会)で大蔵流・山本東次郎のシテ武恵に和泉流・野村万蔵の主、万作の太郎冠者で「武恵」の共演。
 昭和三三年三月五日、能楽協会内に異例の能への出演の可否を決める(能楽審議会)誕生。構成は五流宗家・各地支部長・金春惣右衛門・松本謙三・吉見嘉樹・野村万蔵・三宅襄。第三者側から土岐善磨・齊藤太郎・福原麟太郎・宮沢俊義・笠信太郎・古川久。(大河内俊輝著「昭和の能」昭和四〇年五月四日・わんやんに「能楽審議会への疑問」の記事有)。
 昭和三五年、能楽協会は新作狂言における異流共演を条件つきで認める。
 昭和三六年六月一日、京都平安神宮の薪能で「この会の林喜右衛門・桜間龍馬の異流共演を能楽協会は問題視し、今回に限り特別に許可」とする。協会の声明によると三五年四月の理事会で、異流共演を全面的禁止、を決議しているというが、(三五年四月の楽師寺の百華能では観世喜之・桜間龍馬共演の「蟬丸」が演能不能となる)京都能楽会理事長片山博通の声明によれば協会の議事録には記載がなく宗家会預けとして未解決のままという(「能楽思潮」四〇・四一「能楽戦後二〇年史」に拠る。また、大河内俊輝著「昭和の能」に「異流共演をめぐる」の記事がある)。
 昭和三七年三月一六日、東京能楽鑑賞会で茂山五郎(主)野村万蔵(武恵)茂山圭五郎(太郎冠者)の「武恵」。(「昭和の能」に「至芸を生んだ背景」の記事)。
 第一八回は昭和二八年三月一五

日、例によって春の宝生大会。舞囃子「志賀」佐野安彦、能「田村」宝生英雄・高安次郎、仕舞「桜川」宝生九郎、能「求塚」野口兼資・緑久・畑富次・西村弘敬、狂言「悪太郎」井上新三郎、歌村彦四郎・井上松次郎、一調「勸進帳」田鍋惣太郎・野口兼資、能「黒塚・白頭」宝生九郎・高安次郎、地謡に辰巳孝・辰巳清・朝倉兼太郎、大鼓の飯島佐六が

来演。
 第九回は同年一月一八日、金春と観世の合同。舞囃子「枕草子」本田秀男、能「景清・小返」観世喜之・山中信義・信之(トモ)、高安次郎、能「三井寺」桜間弓川・伏原愛子(子方)西村弘敬、狂言「狐塚」井上新三郎・井上松次郎・河村丘造、仕舞三番「龍虎」山中信之・信義「玉之段」片山慶次郎「昭君」桜間龍

馬、一調「花籠」青木恒治・杉浦義明、能「恋重荷」片山九郎右衛門・博太郎・西村欽也、大鼓・山本敬一郎が来演。
 第二〇回は昭和二九年三月七日、宝生大会。舞囃子「安宅」辰巳孝、能「放下僧」宝生英雄・野口兼資・西村欽也、能「弱法師」宝生九郎・西村弘敬、狂言「墨塗」佐藤卯三郎・井上松次郎・佐藤秀雄、一調「笠之段」田鍋惣一

郎・宝生英雄、能「綾鼓」宝生九郎・畑富次・西村弘敬、なお春の宝生大会には金沢から殆んど毎回大鼓の飯島佐六が来演して能二番を勤める。
 第二一回は同年七月三日、名古屋狂言共同社との共催で当地の和泉流に大蔵流の名手・俊英を招聘、空前絶後とも言える大曲揃いの狂言六番が庄巻。番組は先づ柴田初太郎の舞囃子「養老」に始ま

り、キリを観世喜之・武雄の半能「石橋・大獅子」。そのあいだに田鍋惣太郎の一調「勸進帳」(謡・観世喜之)を挟む狂言尽くし。「末廣」河村丘造・佐藤卯三郎・歌村彦四郎、「狐塚・小唄入」茂山七五三・千之丞・千五郎、「武恵」茂山忠三郎・弥五郎(主)倅一(太郎冠者)、「鈍太郎」茂山千五郎・七五三(本妻)千之丞(美目よし)、小舞「御田」大蔵

弥太郎・地謡茂山忠三郎・千五郎・七五三・千之丞・倅一、一調(既出)、「月見座頭」茂山弥五郎・大蔵弥太郎、「止動方角」井上新三郎(太郎冠者)井上松次郎(主)井上礼之助(伯父)佐藤秀雄(馬)。
 以下次号

◆秋の舞台から◆

「名古屋観世会」と「名古屋観世九皇会」

「十五世福王茂十郎三十三回忌追善能」

「第四九回・鳳の会」

竹尾邦太郎

「通盛」一の谷の戦で討死した平通盛。海上に逃れるも世をはかなみ乳母を振り切り鳴戸の沖に入水して果てた小宰相ノ局、源平合戦の哀史の一齣。

前場、亡魂は漁翁(シテ貴弘)と妻女(ツレ嘉宏)の幽霊となり、鳴戸の巖頭に平家一門を弔う夏安居の僧(ワキ勝久・ワキツレ正樹)の誦経の声を慕い、小舟を寄せる。日没の暗夜、舟の灯を頼りに経を誦すワキに、合掌するシテは立つと、篝火の影を吹き立て、更に明るい光を扇で煽ぐ配慮(写真)。再び下居すると、へなほなほお経遊ばせ、と供養をせがむ心は、ワキに左手指す辺り、気持ちが入る。ワキに問わ

れる俣、平家の敗走から小宰相ノ局の入水に至る語りの、シテとツレの掛合・同吟は運びも良く哀感も。へ主従泣く、でシテとツレは立ち、ツレは右手、シテは左手でシテ、地(邦久・邦弘ら)となると、袖に取り付く乳母の心にシテが肩に掛けた手を、振り切るように舟を出、膝をつき入水の態をみせるツレが美しかった。
 後場、ワキ・ワキツレの誦経に惹かれ現われる武者姿のシテ、ツレと共に前世の素姓(通盛と小宰相ノ局)明かすと、焦眉の急の戦の前夜からツレとの暇乞いを述べるクセ

へ。地の哀調と相俟ち、へ通盛、とシテ自からツレへ酌に立つところ印象的。へさらばとて、と立ち、戦場へ打って出る心にカケリとなる一ノ松へ。戻って木村ノ重章との斬り合いの場は偉丈夫・貴弘の太刀捌きの豪快、鮮やかだった。(1時間23分)。
 「太子手鉢」主の許し無く都やら寺社詣に出掛け叱責される所謂「抜参物」の一。
 さて、太郎冠者(シテ高義)、二・三日前に帰宅はしても雨続きで雨漏りを止めるのに追われ、と出仕の遅れた釈明。主(アド小三郎)の手討を免れはしても、漏れを止める道具の太子手鉢とやらを見せよと言われ、主命には逆らえず、そこは才知の太郎冠者、抜け目なく勿体をつけて槍を括りつけた竹竿を恭しく見せて主に気を持たせ、鈍の由緒を得々として語り、更に使い方の実演に及べば(写真)誦掛りにはしゃぎ過ぎて



名古屋観世会定式能「松風」武田志房、武田友志 (杉浦賢次氏撮影)

主を苛立たせ、叱り留めに。高義、活き／＼立ちまわり精彩、小品ながら味をみせる。
 太子手鉢とは往時仏教の受容を巡り聖徳太子が反対する物部守屋を手鉢(長柄の武器の一。柄短く片刃で、形は後世の薙刀に似る)で刺し止めた、即ち漏屋を止めた洒落。(19分)。
 「松風・戯之舞」行平へのただならぬ恋慕は形見の鳥帽子・狩衣をへ捨てても置かれず、抱きかかえれば、移り香に心を奪われ、こみ上げる思いの丈に耐えられず、へ伏し沈む(事ぞ悲しき)、と膝をつくところ、クモル面に松風(シテ志房)の恋の苦惱まざく。物着に行平の姿となれば俄に憑依、彼我の判別がつかず、へあれに行平の、と松に迫るをへ浅ましや、と村雨(ツレ友志)に止められるところ(写真)、面の表情が一種放心したようなのが妙。小書で舞のトメに袖被き面に扇を翳し松の後ろを通り抜け、短冊を取り、へ立ち別れ、と和歌を誦い破之舞は抜く。へ磯馴松の、の松に寄り添い両袖返し抱く型も申しなく品がよかった。(1時間33分・9月15日、名古屋観世会)



名古屋観世会定式能④「通盛」上田貴弘・梅田嘉宏 ⑤「太子手鉢」松田高義・野村小三郎 (杉浦賢次氏撮影)

「巴」粟津の原の戦の旧跡、祠に詣でる里女(シテ喜之)の涙に不審する木曾の僧(ワキ雅介)に、女は祠が僧も縁の義仲を祀ると教え、誦経して霊を慰めるようにと言いつつ消える前場、不審さされてシテが行教和尚の故事を引き、涙の所以を説くワキとの問答が確りと歯切れよく説得力。
 後場はワキの弔いに現われた女武者シテ巴(の幽霊)が自刃に及ぶ義仲の最期に殉死を許されず、血路を開き、遺体に別れを告げ、形見を携えて一人木曾へ落ちるまでの合戦譚。
 シテの面は前の孫次郎の艶麗から一転、十寸髪の険しさ。襟白赤・白摺箔は同断、緋大口・色入七宝繁文唐織重折、小太刀を佩き長刀。瀕死の義仲を残す苦しさは、涙に咽ぶばかり、のシテも、へかくて御前を、と意を決して立てば、へあれは巴か女武者、と長刀とつて幕へ敵を見込む勢いは、へ一戦嬉しやと、踏む数拍子に武者震いを見せ、長刀捌きも豪快に一ノ松先へ。へ後も遙かに、と幕へ敵を見遣るところ、胸が透く。へ今は是迄、と戻り長刀は後見、扇に替えて出ると義仲の遺骸を見る心に、この松が根に(伏し給ひ)、と膝をつくや、がっくり腰を落とすと、痛嘆一入、キリに遺品の小太刀を衣に隠すところも哀惜措くあたわずの風情をみせ、余情惘々、好舞台だった。(1時間12分)。
 「杭か人か」主(アド高義)が留守とみればサボリ抜け出す太郎冠者(シテ小三郎)、薄々察知している主は外出とみせて留守居をきつく命じ様子を窺う。所在無く目を塞いで居れば盲想・盲念にとりつかれる太郎冠者、槍を持ち



名古屋観世会「巴」観世喜之 (杉浦賢次氏撮影)

(4)面へつづく

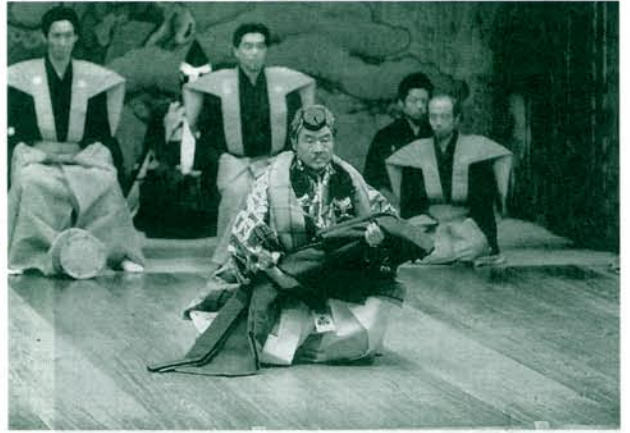


名古屋観世九草会
④「杭か人か」野村小三郎・松田高義
⑤「西行桜」高橋謙一
(杉浦賢次氏撮影)

〔③面よりつづき〕
「御要心く」と夜回りに出れば杭が人に見える臆病。「杭か人か」と誰かすれば、「杭」の返答に寸時、安堵する返り、暢気な表情が可笑しい。(14分)
「西行桜」 遙々の花見客、喧騒は厭うも花を愛でる優しさに庭を開放する隠棲の西行(ワキ雅介)。「花見んと群れつづ人の来るのみぞあたら桜の科にはありける」と西行が一首を微吟する空気の、家路忘れて、の地(三郎直也)で花見客(ワキツレ元・宰・正樹)が切戸へ退くと、作物の引廻しが下るされ、面皺尉・白垂・風折鳥帽子・淡黄茶大口・薄単色銀糸ノ枝垂桜文単狩衣の老翁(シテ歌一)が端然と床几に居る。西行の一首の花の科にこだわると西行との問答は、シテが詰問する心に「桜の科は」と西行にアキラへば「いやこれは」と弁解する西行から直ルのが、正にぶいと横を向いてしまふように見え、シテが再び西行に「花に浮世の」とアキラフや否や「科はあらじ」と直ルのは、きっぱり断言する心、面白い。つい、はしたない言い掛りを「恥かしくや老木の」と述べ、(花も少なく) 枝朽ちてあたら桜の、と床几を立ち作物を出て常座へ、皆成佛の御法、と立った俣で西行に合掌した。桜の名所尽しの舞グセは老桜ノ精の悠揚迫らぬ大きな舞が良かったが、序之舞の二段で右袖巻き上げたが

被いて欲しかった。へ待て暫し、と招き扇、花の枕の、は左袖を内へ巻き上げ安座、手枕のようにし、夢は覚めにけり、と立ち六ツ拍子踏むのが如何にも眠りの夢から覚める趣だった。ワキ雅介、西行の品位に器量。(1時間15分・10月5日・名古屋観世九草会)
「鷲」 神泉苑に行幸の帝(ツレ智久)、一羽の鷲に目を留め捕獲を命ずれば、蔵人(ワキ知登)が任に当たり、帝の威光に恭順する鷲(シテ文蔵)を無事手中に収めて御感を得、鷲ともく五位を賜わるといふ。
立衆は大匠(ワキツレ順三)以下、輿昇まで七人の盛観、福王流の本提、関西の流勢盛んをみる。シテは直前、具わる気品が白鷲に相応しい。ワキ知登は披き、緊張感をもって橋懸へ鷲を追うところ、膝をつき捕らんとするを鷲はするりと躲し、ふわり逃げるのが如何にも軽やか、五位の位を授かり嬉しげに舞う鷲は、左右の膝を高く上げる抜キ足、水面を蹴るような乱足、腰を屈め沈むような姿、に鷲の生息も鮮やかに舞上げると、(心嬉しく)と指してねざらう帝の御意を得、再び放たれば、(心嬉しく)飛び上がるのと暗れくユウケン扇、三ノ松と指シ込ヒラキ、留メ拍子踏む。ワキ知登、帝と百官御相の許、終始謹直に勤め立派な披キだった。(45分)

〔武悪〕 無奉公者の無悪(七五三)を討つてこいと主(千之丞)に命じられて出向く太郎冠者(忠一郎)、しかし、幼少からの朋輩である上、相手は黒面(猛々しい顔)を見知られた手だれ、容易ではない、と騙し討ちを企む過程で優柔不断な態度に終始、主ではなく自身が武悪の怨みを買ってしまう。斬られる覚悟を決め双シヨリの武悪、太刀を振りかぶるも一気には昂る惻隱の情に泣き出す太郎冠者。忠一郎、弱腰の太郎冠者を機微濃やかに好演。結局、討ち果たすことなく主に嘘をつき、それを繕うのにも亦苦慮する太郎冠者。主は気紛れの佛心か、武悪の死を弔うと東山、一方、命拾いの武悪はお札に清水観音へ。其処で主の姿を目にして狼狽する武悪、はてと疑心暗鬼の主、嘘が露見するのを恐れる太郎冠者、三者三様の内面が美事に描写される。又しても試される太郎冠者の決断、幽霊に仕立て上げられた武悪が、怖がる主の弱味につけ込み、はらへ見守る太郎冠者の不安をよそに、普段の鬱憤を晴らす



十五世福王茂十郎 33回忌追善能
④「鷲」シテ 大槻文蔵 ⑤「檀風」福王茂十郎
(大槻能楽堂) 写真・福王茂十郎氏提供 撮影・牛窓正勝氏

ように脅かすところ、くどい味がよく利く。善竹家の頭領と茂山千五郎家の頭領、配役の妙が出色の「武悪」だった。(53分)
「檀風」 ワキ方の極く重い習。元弘の乱に取材。
政変で佐渡に流滴の身の日野中納言資朝(シテ六郎)を預かる本間三郎(重ワキツレ和幸)の許へ都から帥ノ阿闍利(ワキ茂十郎)が資朝の子・梅若(子方・赤松裕一)を伴い来島、対面を申し入れるが、本間の計らいあるにかかわらず、資朝は累が家に及ぶのを危惧して子の存在を否定。この由を伝える本間に、果たして伝言が相手資朝に届いたかを疑う阿闍利、この問答、互いに強々と緊迫する。今は詮無しと梅若、空間を隔て資朝・梅若の親子がそれく胸の内を吐露する掛合は哀愁を唆り、連吟は同じ思いの符合、共にシヨルのも切ない。資朝、脇座の床几を立つと奥に入り、刑場へ赴く心に正中に安座、今際の際に梅若は実子と本間に明かし、後を頼む資朝、これも問答大いに聞かせる。六郎・和幸の名調。もはや後顧の憂い無く断罪に臨む資朝、御首は前に、と掛絡を外し、豊んで前へ置くと、斬首された心に切戸へ退く。首級の代りの掛絡、能の象徴性如実。
次いで後見は切戸より屍に擬した小袖を持ち出し、「葵上」の出

小袖とは逆方向、いわゆる死者の北枕に横たえ、先の掛絡(首級)を小袖の肩の辺りの下に入れる。死体を引き取り供養をするとして阿闍利は水衣の肩を取り死者に對面、膝をつき、上から下へ沁々眺めると、袖を折返して下から首級(掛絡)を取り上げ、沈痛な面持ちでそれを見、袖に包み込む様に置くと、左手小袖の下に差し入れ、右手で裾を持ち、静かに抱き上げる。細心にして心情溢れ、厳肅な気持ちにさせられた。
斬首を眼前にした梅若、敵を討つと息巻くのを、真の敵は北条高時、と諷める阿闍利も「命は失ふとも」の梅若の覚悟に同意、本間の館に乗り込むという逸る梅若と沈着な阿闍利との問答(子方が旨く立派)も雰囲気よく出る。
本懐遂げ脱出のころは、出航寸前、呼び掛けて乗船を乞い、船を出してしまえば祈り戻す、と阿闍利、船頭(ワキツレ敬三)との問答も亦、力が入る。阿闍利が数珠を揉みつつ退るにつれ、船はその分引き戻される心、船頭が切戸へ退くと、早笛(啓三・皓祐・哲也・悟)で後シテ熊野権現(六郎)の顕現。阿闍利を代弁する地(文蔵・完治ら)との掛合に奇麗な説き、キリは、索の繩を、で梅若に寄る阿闍利、肩に手を遣ると橋懸へ退いてゆき、熊野権現が招き扇に見送りトメた。ワキ方の詞



第49回鳳の会
⑥「弓矢太郎」井上菊次郎、佐藤友彦
⑦「栗焼」佐藤友彦
(杉浦賢次氏撮影)

が有つ力強さが再三の問答の場面に良く発揮され、話の展開もきびく快調、素晴らしい。太刀持は千三郎、早打は隆平。(1時間30分・10月13日・十五世福王茂十郎三十三回忌追善能・大槻能楽堂)
「雷」 「鎌倉に住ま居る薬師(くすし・医者)と名乗り、敵と言われないのが利口そうな薬師(アド融)、武蔵野に差し掛かると一天俄に曇り、「ビツカリ、グアラ〜」と稲妻、雷鳴と共に雲を踏み外した雷(シテ菊次郎)が降ってくる。そこに居合わせたのが災難、薬師と知って療治を頼む雷に、見立ては中風だが「先づ卒中では御座りませぬ」と安心させ、脈をみるのも頭脈(すみやく)など奇想天外。薬を与えるが、手足が萎えているにしては受け取る左手がすつと出た。一刻も早く痛みを止めんとする思い、薬師は鍼治療が得手らしく、ハツシ、ハツシと鍼を打ち込めば(写真)、痛い痛いと言いつつながら身体を振る雷が効き目は観面、「さばやがて天上するぞ」と帰りかけるのを、慌てて治療費を請求する薬師。天上に在って生得大らかな雷と、世俗に在って細くならざるを得ない薬師の対照が可笑し

く、メルヘンチックな話はキリもほのぼのと、治療費に代えて五穀に好い天候を約束し、雷は「ビツカリ、グアラ〜」と帰って行く。(36分)
「栗焼」 到来の栗が四十粒、主(アド俊裕)は此れをどのようにしたらよいか、太郎冠者(シテ友彦)に相談を持ちかけた上、やはり焼栗がよかるうということになり、それを任せ、炬燵で栗を焼く一々の描写が細かく軽妙で友彦熟練の味。焼き上げて、主に風味を問われて返事が出来なくて、と味見に一粒口にするや、次々と後をひき、残るは虫食いを除けば僅か三粒、止められない止まらない、という当今のスナック菓子のコマーシャルソングを思



第49回鳳の会
「雷」井上菊次郎・佐藤融
(杉浦賢次氏撮影)

◆新春能面展◆ 能面研究会・面紹社(保田紹雲氏主宰)は1月6日から名古屋市鶴舞中央図書館で新春能面展を開催する。2月8日(日)まで。出展は能面16点。能絵約16点。